洲本市五色町

鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡

県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う発掘調査

2011(平成23)年

兵 庫 県 教 育 委 員 会

鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡

兵庫県文化財調査報告 第401冊

兵庫県教育委員会

22教①1－029 A4

洲本市五色町

鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡

県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う発掘調査

2011(平成23)年

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は、兵庫県洲本市五色町鳥飼中ほかに所在する、鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴い、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の委託により、兵庫県教育委員会が2005（平成17）年度に実施した。また整理業務は、同事務所の委託により、2009（平成21）年度・2010（平成22）年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。

3．本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時）の山本三郎、久保弘幸が担当したが、鳥飼中瀬遺跡１区・北山遺跡については久保が、同２区については山本が主に調査をおこなった。また本発掘調査に先立って実施した分布調査、確認調査の概要については、本文中に記載している。

4．整理事業は久保が担当して実施した。なお整理事業に携わった職員については、本文中に記載している。

5．本発掘調査においては、㈱日建技術コンサルタントに委託して、空中写真撮影・測量を実施した。

6．整理事業とともに、放射性炭素14による年代測定を、㈱加速器分析研究所に委託して実施した。その成果については、本書中に収録している。

7．調査中に現地指導をいただいた、立命館大学講師、青木哲哉氏には、本遺跡周辺の微地形分析結果について玉稿を頂戴している。

8．その他の項目に関しては、久保が執筆し、あわせて全体の編集をおこなった。

9．本発掘調査および本書に関連する図面・写真・出土遺物は、すべて兵庫県立考古博物館において保管している。

10. 本発掘調査の期間、および本書の執筆・編集にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい（順不同・敬称略）。

青木哲哉（立命館大学講師）・森内秀造・岡田章一・渡辺　昇・山田清朝・池田征弘（以上兵庫県立考古博物館）・浦上雅史（洲本市教育委員会）・伊藤宏幸（淡路市教育委員会）

凡　　例

1．本書で示した標高は、東京湾平均海水準を用いている。

2．本書中の図で示した方位および座標値は、特に記載しないかぎり、世界測地系（第Ⅴ系）によるものである。

3．本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によっている。

4．本発掘調査に際しては、調査地区ごとに、遺構種別にかかわらず検出順に連続する番号を与えた。従って、遺構番号は、遺構種別ごとに１番から開始されるものではない。ただし鳥飼中瀬遺跡２区では、１区との混同を避けるため、遺構番号は1001番から連続する番号を与えている。

5．本文および挿図中では、記載の便宜のため下記のとおり遺構の略称を使用している。

ＳＡ：柵　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　ＳＲ：旧河道　ＳＸ：不明遺構

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1．地理的環境 …… 1

2．歴史的環境 …… 2

Ⅱ　調査の概要

1．調査に至る経緯 …… 5

2．発掘調査の概要 …… 5

3．整理事業の概要 …… 6

Ⅲ　遺構と遺物

1．鳥飼中瀬遺跡１区 …… 9

(1) 概要

(2) 遺構と遺物

(3) 小結

2．鳥飼中瀬遺跡２区 …… 59

(1) 概要

(2) 遺構と遺物

(3) 小結

3．北山遺跡 …… 69

(1) 概要

(2) 遺構と遺物

(3) 小結

Ⅳ　自然科学的分析

1．鳥飼中瀬遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）㈱加速器分析研究所 …… 93

2．北山遺跡および鳥飼中瀬遺跡の地形環境（青木哲哉） …… 96

Ⅴ　結語 …… 106

報告書抄録

挿図目次

Ⅰ

第１図　遺跡の位置 …… 1

第２図　調査区付近地形横断面図 …… 2

第３図　周辺の遺跡分布 …… 3

Ⅱ

第４図　確認調査トレンチ配置図 …… 6

第５図　本発掘調査区配置図 …… 7

Ⅲ

第６図　鳥飼中瀬遺跡１区平面図 …… 9

第７図　１区南壁断面図 …… 10

第８図　１区掘立柱建物跡位置図 …… 11

第９図　１区掘立柱建物跡１・２ …… 12

第10図　１区掘立柱建物跡１～３出土の遺物 … 13

第11図　１区掘立柱建物跡３・４ …… 14

第12図　１区掘立柱建物跡５ …… 15

第13図　１区柵１および出土遺物 …… 16

第14図　１区掘立柱建物跡６・７ …… 17

第15図　１区掘立柱建物跡７出土の遺物 …… 17

第16図　１区柵２および出土遺物 …… 19

第17図　１区掘立柱建物跡８～11 …… 20

第18図　１区掘立柱建物跡８～11出土の遺物 … 21

第19図　１区掘立柱建物跡12～14 …… 22

第20図　１区掘立柱建物跡14･15出土の遺物 … 24

第21図　１区掘立柱建物跡15・16 …… 24

第22図　１区掘立柱建物跡16出土の遺物 …… 26

第23図　掘立柱建物跡外掲載柱穴の位置 …… 27

第24図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(1)…… 28

第25図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(2)…… 29

第26図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(3)…… 30

第27図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(4)…… 31

第28図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(5)…… 32

第29図　１区土坑位置図 …… 33

第30図　１区土坑(1)…… 34

第31図　１区土坑(2)…… 35

第32図　１区土坑出土遺物(1)…… 36

第33図　１区土坑出土遺物(2)…… 38

第34図　土坑278および出土遺物 …… 38

第35図　１区溝断面(1)…… 40

第36図　１区溝平面(折込) …… 41

第37図　１区溝出土遺物(1)…… 45

第38図　１区溝出土遺物(2)…… 46

第39図　１区溝断面(2)…… 53

第40図　１区包含層出土の遺物(1)…… 55

第41図　１区包含層出土の遺物(2)…… 56

第42図　１区包含層出土の遺物(3)…… 57

第43図　２区平面図 …… 59

第44図　２区掘立柱建物跡１・２ …… 60

第45図　２区掘立柱建物跡３ …… 61

第46図　２区掘立柱建物跡１～３出土の遺物 … 61

第47図　２区土坑1019 …… 63

第48図　２区土坑1019出土の遺物 …… 63

第49図　２区土坑1023～1025 …… 64

第50図　２区土坑1088 …… 64

第51図　２区溝平面・断面(1)…… 66

第52図　２区溝出土の遺物 …… 67

第53図　２区溝平面・断面(2)…… 68

第54図　北山遺跡平面図 …… 69

第55図　北山遺跡地層断面図 …… 70

第56図　北山遺跡掘立柱建物跡1 …… 70

第57図　遺物(1)…… 71

第58図　北山遺跡掘立柱建物跡出土遺物(2)… 72

第59図　北山遺跡掘立柱建物跡２ …… 72

第60図　北山遺跡掘立柱建物跡３・４ …… 73

第61図　北山遺跡柱穴23および出土遺物 …… 75

第62図　北山遺跡掘立柱建物跡外柱穴出土遺物 … 75

第63図　北山遺跡土坑 …… 76

第64図　北山遺跡溝平面図 …… 77

第65図　北山遺跡溝断面図 …… 78

第66図　北山遺跡溝出土の遺物 …… 79

第67図　北山遺跡旧河道断面 …… 82

第68図　北山遺跡旧河道･包含層出土の遺物(1) … 83

第69図　北山遺跡旧河道出土の遺物(2)…… 83

第70図　地質トレンチ出土縄文土器 …… 84

第71図　［参考］暦年較正年代グラフ …… 95

第72図　鳥飼川下流部の地形分類図 …… 97

第73図　調査区付近における完新世段丘Ⅰの微地形 … 98

第74図　北山遺跡の調査区におけるトレンチ断面図 … 100
第75図　鳥飼中瀬遺跡１区におけるトレンチ断面図 … 101
第76図　鳥飼中瀬遺跡２区におけるトレンチ断面図 … 103

表 目 次

第１表　鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う
鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡調査一覧 … 5
第２表　確認調査トレンチ成果一覧 …… 8
第３表　整理事業の工程 …… 8
第３表　掘立柱建物跡一覧表 …… 85
第４表　掲載土器観察表（鳥飼中瀬遺跡１区）… 86
第５表　掲載土器観察表（鳥飼中瀬遺跡２区）… 90
第６表　掲載土器観察表（北山遺跡）…… 91
第７表　金属器・石製遺物計測表 …… 92
第８表　試料および測定結果 …… 94
第９表　暦年較正年代 …… 95

写真図版目次

図版１　鳥飼中瀬遺跡１区・２区・北山遺跡
（空中写真）
図版２　上　調査地空中写真（東から）
下　調査地空中写真（西から）
図版３　上　鳥飼中瀬遺跡１区（空中写真北から）
下　鳥飼中瀬遺跡１区（空中写真北から）
図版４　上　鳥飼中瀬遺跡２区（空中写真北から）
下　北山遺跡（空中写真南から）
図版５　上　鳥飼中瀬遺跡２区（空中写真南から）
下　北山遺跡（空中写真北から）
図版６　上　鳥飼中瀬遺跡１区土坑７
下　鳥飼中瀬遺跡１区土坑278
図版７　上　鳥飼中瀬遺跡１区東半（西から）
下　鳥飼中瀬遺跡１区全景（西から）
図版８　上　鳥飼中瀬遺跡１区西半（東から）
下　鳥飼中瀬遺跡１区掘立柱建物跡６
（北東から）
図版９　上　鳥飼中瀬遺跡１区
第１・２群掘立柱建物跡群（西から）
中　鳥飼中瀬遺跡1区
第１・２群掘立柱建物跡（東から）
下　鳥飼中瀬遺跡１区
第１・２群掘立柱建物跡群（北西から）
図版10　上　鳥飼中瀬遺跡１区
第４群掘立柱建物跡群（西から）
中　鳥飼中瀬遺跡１区
第４群掘立柱建物跡群と土坑278
（東から）
下　左右　鳥飼中瀬遺跡1区土坑278遺物
出土状況
図版11　上　鳥飼中瀬遺跡２区全景（東から）
下　鳥飼中瀬遺跡２区全景（西から）
図版12　上　鳥飼中瀬遺跡２区掘立柱建物跡1
中　鳥飼中瀬遺跡２区掘立柱建物跡2
下　鳥飼中瀬遺跡２区掘立柱建物跡3
図版13　上　北山遺跡東半（西から）
中　北山遺跡中央（東から）
下　北山遺跡２区西半（東から）
図版14　上　北山遺跡掘立柱建物跡１（西から）
中　北山遺跡掘立柱建物跡２（南から）
下　北山遺跡掘立柱建物跡３・４
（東から）
図版15　1　鳥飼中瀬遺跡１区溝１断面
（調査区東壁西から）
2　鳥飼中瀬遺跡１区土坑271断面
3　鳥飼中瀬遺跡１区土坑7断面
4　鳥飼中瀬遺跡１区土坑7遺物出土状況
5　鳥飼中瀬遺跡１区土坑53断面
6　鳥飼中瀬遺跡１区土坑63断面
7　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴50遺物出土状況
8　鳥飼中瀬遺跡1区柱穴54遺物出土状況
図版16　1　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴123遺物出土状況
2　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴124遺物出土状況
3　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴125遺物出土状況
4　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴
5　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴381遺物出土状況

6　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴382遺物出土状況
7　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴429遺物出土状況
8　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴241遺物出土状況
図版17　1　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴445遺物出土状況
2　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴54断面
3　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴368断面
4　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴101遺物出土状況
5　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴368礎盤石
6　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴358礎盤石
7　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴390礎盤石
8　鳥飼中瀬遺跡１区柱穴365礎盤石
図版18　1　鳥飼中瀬遺跡２区調査区南壁断面
2　鳥飼中瀬遺跡２区土坑1023断面
3　鳥飼中瀬遺跡２区柱穴1075遺物出土状況
4　鳥飼中瀬遺跡２区土坑1025完掘状況
5　鳥飼中瀬遺跡２区柱穴1020遺物出土状況
6　鳥飼中瀬遺跡２区柱穴1022遺物出土状況
7　鳥飼中瀬遺跡２区柱穴1042遺物出土状況
8　鳥飼中瀬遺跡２区柱穴1047遺物出土状況
図版19　1　北山遺跡溝27断面
2　北山遺跡柱穴58断面
3　北山遺跡柱穴23遺物出土状況(1)
4　北山遺跡柱穴23遺物出土状況(2)
5　北山遺跡柱穴23遺物出土状況(3)
6　北山遺跡柱穴26遺物出土状況
7　北山遺跡柱穴35遺物出土状況
8　北山遺跡柱穴174遺物出土状況
図版20　1　鳥飼中瀬遺跡１区
地質トレンチ１断面（南から）
2　鳥飼中瀬遺跡１区
地質トレンチ２断面（南から）
3　鳥飼中瀬遺跡１区
地質トレンチ３断面（南から）
4　鳥飼中瀬遺跡
２区地質トレンチ断面（南から）
5　鳥飼中瀬遺跡
２区地質トレンチ断面（南から）
6　北山遺跡地質トレンチ２断面
（北東から）
7　北山遺跡地質トレンチ２断面
（北西から）
8　北山遺跡旧河道断面（調査区南壁）
図版21　1　調査地遠景（南から）
2　調査前の状況
3　確認調査（機械掘削）
4　確認調査（人力掘削）
5　本発掘調査
6　遺構図化作業
7　地質トレンチ調査
8　鳥飼小学校見学
図版22　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(1)
図版23　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(2)
図版24　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(3)
図版25　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(4)
図版26　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(5)
図版27　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(6)
図版28　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(7)
図版29　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(8)
図版30　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(9)
図版31　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(10)
図版32　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(11)
図版33　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(12)
図版34　鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(13)
図版35　鳥飼中瀬遺跡２区出土遺物(1)
図版36　鳥飼中瀬遺跡２区出土遺物(2)
図版37　北山遺跡出土遺物(1)
図版38　北山遺跡出土遺物(2)
図版39　北山遺跡出土遺物(3)

Ⅰ　遺跡の位置と環境

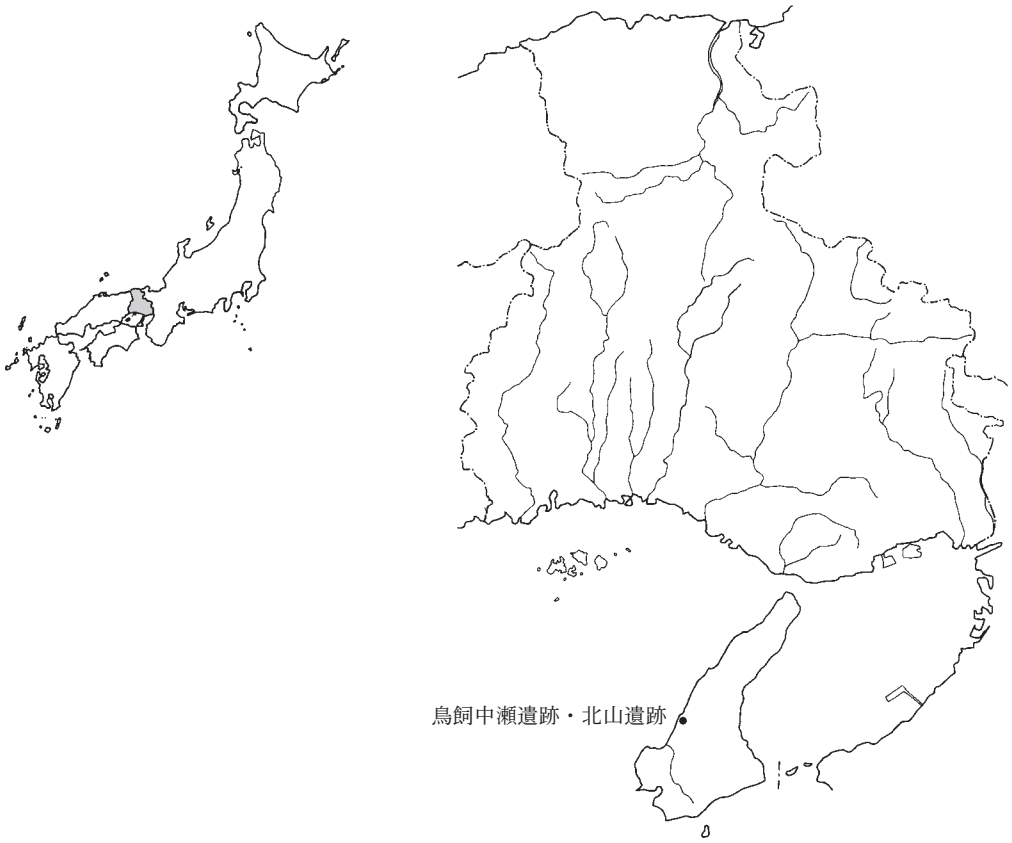
１．地理的環境

鳥飼中瀬遺跡および北山遺跡は、淡路島西岸の中部よりもやや南寄りの、兵庫県洲本市五色町鳥飼中に所在する（第１図）。遺跡は、淡路島の脊梁山地に発し、西流して瀬戸内海に注ぐ鳥飼川の、右岸に発達した段丘上にあって、調査地付近の標高は８m前後を測る。遺跡が立地する段丘面は、大略、東→西および北→南に下るゆるやかな傾斜をもっており、その間に数条の埋没谷が存在する。鳥飼中瀬遺跡、北山遺跡をはじめとする鳥飼川北岸の遺跡群は、このような埋没谷を境界として立地している。

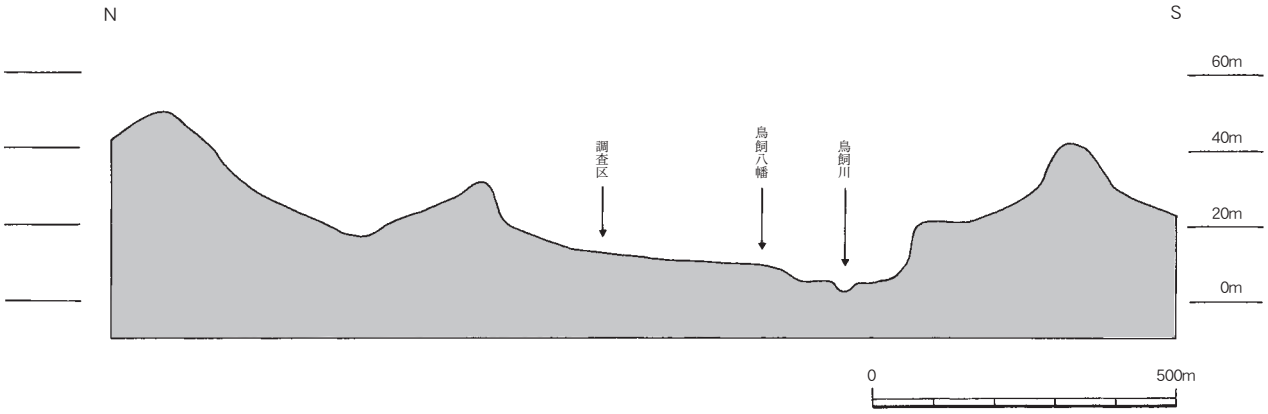
段丘面の背後（北側）には、標高50mほどの丘陵地が広がり、その西端は海岸線に達して急峻な崖面を形成している。また丘陵地に刻まれた開析谷の多くには、農業用水池が造営されている。

一方段丘面の南側は、鳥飼中付近で南へ半島状に突出し、ここで鳥飼川も大きく蛇行している。この半島状に突出する段丘の基部には、鳥飼八幡神社がある。段丘面と鳥飼川河床には数メートルの比高差があり、明瞭な段丘崖が見られる。一方、鳥飼川を挟んで南側には、北側と同様の段丘面とその背後の丘陵が広がっている（第２図）。

調査地付近から鳥飼川に沿って遡上すると、大きな峠を経由せずに島の東岸（淡路市津名町）に至ることができる。また、支谷を東へたどれば峠を経由して洲本方面へ、南下すれば倭文川を経て三原平野方面への経路となる。



第１図　遺跡の位置



第２図　調査区付近地形横断面図

２．歴史的環境

鳥飼中瀬遺跡、北山遺跡の周辺では、これまで後期旧石器時代の遺跡は知られていない。

縄文時代の遺跡としては、有茎尖頭器が採集された中島遺跡（42）、中期の土器が採集された奥の下遺跡（34）が知られている。このほか石出遺跡（33）・外ヶ鼻遺跡（13）なども縄文時代の遺跡とされているが、その実体は明らかではない（兵庫県教育委員会　2004）。しかし今回の調査でも、鳥飼中瀬遺跡の１区で縄文土器片が出土していることから、鳥飼川流域に縄文時代の遺跡が存在することは確実であり、今後の調査に期待したい。

弥生時代の遺物は、今回調査した鳥飼中瀬遺跡、前掲の石出遺跡のほか、肥余遺跡（5）、鳥飼八幡宮遺跡（4）などで出土しているが、やはり集落などの実体は不明である。

鳥飼川流域では、弥生時代の遺跡が知られているにもかかわらず、古墳時代の遺跡はきわめて希薄で、わずかに河口の南側にある石出遺跡が古墳時代の遺跡として知られるにすぎない。古墳そのものも、前期～中期の古墳は見られず、後期になってようやく７基が知られるようになる（五色町教育印会　1994）。調査地より南の丘陵地帯に所在する愛宕山１～３号墳は、横穴式石室（１・２号墳）、竪穴式石室（３号墳）をもち、金環・馬具などが出土しているが、地形上、これらは鳥飼川流域に含めることはできない。このように、古墳時代以前の遺跡が総じて希薄な印象を与えるのに対し、平安時代～中世にかけての状況は一変する。

調査地周辺には、平安時代後期～室町時代中期に石清水八幡宮の荘園（鳥飼荘）が置かれていたことが、文献等により知られている。『日本荘園大辞典（阿部猛・佐藤和彦編（1997））によれば、鳥飼荘は成立年代こそ不詳であるものの、「源頼朝が元暦元年（1184）に、八幡宮領に対する武士による年貢押領の停止を求めた荘園の一つとして見える」とされ、その規模については、貞応２年（1223）の大田文によれば、「貞応２年の大田文によると、田三十町、畠、浦一所から成る」という。また、文安２年（1445）の『兵庫北関入船納帳』にも鳥飼荘に関する記述がある[1]。これらのことから鳥飼荘は、少なくとも12世紀後半から15世紀半ばまでは、荘園として機能していたと推察される。

鳥飼荘については、考古学的に明らかにされたとは言い難いが、鳥飼川流域の平安時代～中世の遺跡分布を見てみると、鳥飼川河口に近い場所から1.8kmほど上流部まで、左右両岸に、今回報告する鳥飼中瀬遺跡（1）・北山遺跡（2）をはじめ、竹の鼻遺跡（6）・肥余遺跡（5）・白池遺跡（8）・隅田遺跡（7）など、平安時代～中世後期の遺跡が高密度に分布しており、これらの遺跡が鳥飼荘と関連する可能性が推測できる。またこれまでに鳥飼八幡神社周辺地域で実施された発掘調査によって、同神社周辺に中世の遺構が、濃密に分布することも知られるようになった。

一方、小田東遺跡（10）から上流は、700mほどにわたって周知の遺跡が見られない領域があり、さ

1 鳥飼中瀬遺跡	**2 北山遺跡**	3 ダイソヲ遺跡	4 鳥飼八幡宮遺跡	5 肥余遺跡	6 竹ノ鼻遺跡
7 隅田遺跡	8 白池遺跡	9 小田西遺跡	10 小田東遺跡	11 居内遺跡	12 才ノ神遺跡
13 外ヶ鼻遺跡	14 五反田遺跡	15 井出ノ上遺跡	16 喜住西遺跡	17 喜住遺跡	18 飛谷遺跡
19 藤谷A遺跡	20 藤谷B遺跡	21 岡田城跡	22 寺谷遺跡	23 岡田中瀬遺跡	24 高丸城跡
25 松光寺遺跡	26 森延遺跡	27 弐斗代遺跡	28 家の東遺跡	29 下川遺跡	30 ハリノキウ遺跡
31 鳥飼代遺跡	32 宗田原遺跡	33 石出遺跡	34 奥ノ下遺跡	35 天郷遺跡	36 殿熊遺跡
37 ゴカン遺跡	38 市城跡	39 大崩遺跡	40 岡坊遺跡	41 倉谷遺跡	42 中島遺跡
43 石池ノ西遺跡					

第３図　周辺の遺跡分布（国土地理院１／25000「都志」より作成）

らに上流部に至ると、再び喜住遺跡（17)、喜住西遺跡（16)、大崩遺跡（39）などの弥生時代遺跡、居内遺跡（11)、才ノ神遺跡（12)、五反田遺跡（14)、外ヶ鼻遺跡（13)、岡坊遺跡（40）などの中世遺跡が群集する。

こうした遺跡分布状況から想像をたくましくすると、鳥飼川河口寄りに連続する平安時代末〜鎌倉時代の遺跡群が、成立期の鳥飼荘の領域を示している可能性が想起される。この推測の当否はともかく、他の時代と比較して圧倒的多数の遺跡が、この時期に鳥飼川周辺で成立していることから、この地域の開発が、鳥飼荘の成立と前後して急速に展開したことは間違いないだろう。

今後は、これまで鳥飼川流域で行われてきた発掘調査の成果を総合的に分析し、鳥飼荘の成立と、平安時代後期〜中世における本地域の開発の展開過程を描き出すことが重要な課題である。

注

1．『兵庫北関入船納帳』には、「淡路鳥飼年貢石清水八幡宮」として「米二十七石五斗」が北関を通過した旨の記述がある（阿部・佐藤前出)。

参考文献

兵庫県教育委員会　2004　『兵庫県遺跡分布地図』
五色町教育委員会　1994　『五色町遺跡分布図－町内遺跡詳細分布調査報告書－』
阿部猛・佐藤和彦　1997　『日本荘園大辞典』　東京堂出版

Ⅱ　調査の概要

1．調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所が実施した、県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に先立つものである。当該事業地は、本書に収録した鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡をはじめ、隅田遺跡・白池遺跡・竹ノ鼻遺跡等の周知の遺跡を含んでいたことから、兵庫県教育委員会では、平成16年度に事業対象地全域を対象として確認調査を実施した。鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡の本発掘調査は、その成果に基づいて実施したものである。

2．発掘調査の概要

(1) 確認調査

【調査の体制】

確認調査の体制は下のとおりである。

発掘調査主体：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

発掘調査担当者：調査第１班　吉田　昇・鐵　英記

【調査の方法と成果の概要】

調査は県道路線計画図に基づき、対象となる事業地の総延長700mについて、概ね30mおきに２m×５mのトレンチ（Ｔ２～Ｔ24）を配置して実施した（第４図)。調査は、重機（バックホー）により表土を除去した後、人力により遺構検出作業を実施するという方法で実施した。その結果は、第２表に示したとおりである。本発掘調査の範囲は、この成果に基づいて設定されたものである。

調査年度	調査番号	調査種別	調 査 期 間	担　当　者	調査面積
2004	2004233	確認調査	2005.2.3 ～ 2005.3.9	吉田　昇・鐵　英記	230㎡
2005	2005196	本発掘調査	2006.1.23 ～ 2006.3.24	山本三郎・久保弘幸	2,027㎡
2005	2005197	本発掘調査		山本三郎・久保弘幸	1,360㎡

第１表　鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡調査一覧

(2) 本発掘調査

本発掘調査は、鳥飼中瀬遺跡および北山遺跡の、合計3,387㎡を対象として、2006年１月23日に開始し、同３月24日に終了した。

【調査の体制】

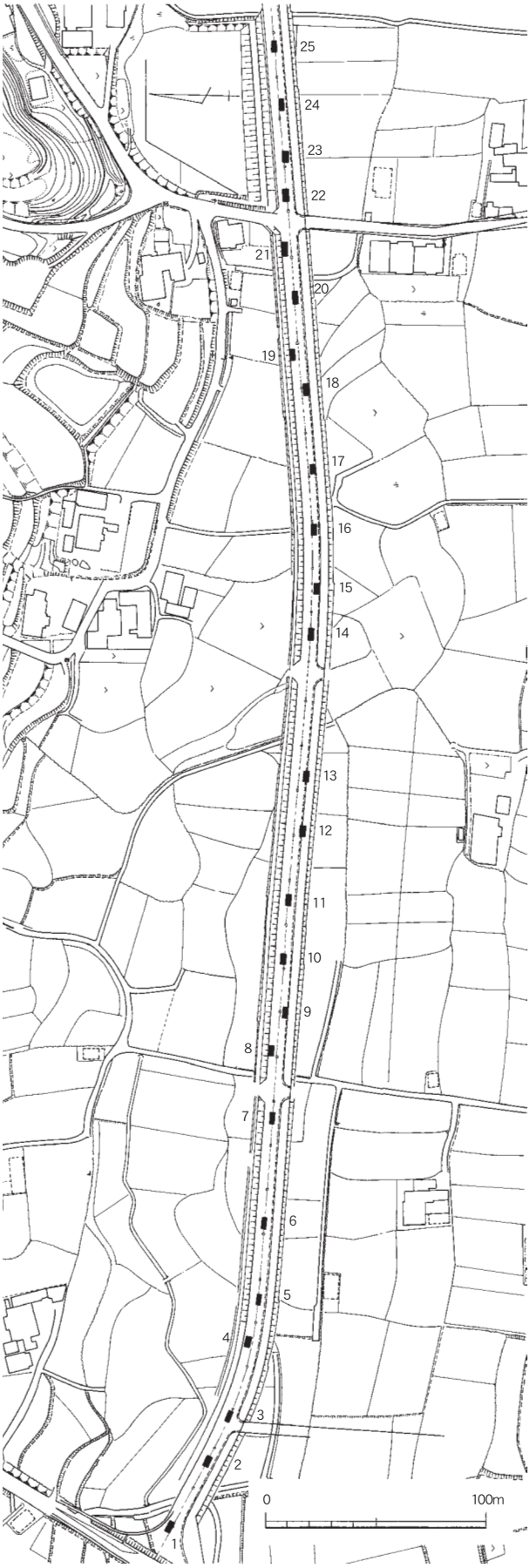
本発掘調査の体制は下のとおりである。

発掘調査主体：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

発掘調査担当者：調査第２班　山本三郎・久保弘幸

【調査の方法と成果の概要】

事業予定地内はほぼ東西に延びており、幅は平均９mである。この中で確認調査によって遺構の存在が認められた範囲について調査を実施した。調査区は事業地を横断する農道を除外しており、鳥飼中瀬



第４図　確認調査トレンチ配置図

遺跡１・２区および北山遺跡の、合計３地区に分かれている。

いずれの地区においても、重機（バックホー）により表土を除去した後、人力掘削・遺構検出作業を実施した。

遺構面の図化は、㈱日建技術コンサルタントに委託し、空中写真測量によっておこなった。ただし、遺構の部分図および地層断面については、調査員および補助員が図化を実施した。なお、図化記録は世界測地系（第Ⅴ系）を基準として実施している。

遺構面の調査終了後、遺跡が立地する地形面の形成過程とその年代を明らかにするため、重機によって深掘トレンチを合計６か所掘削し、その地層断面については立命館大学講師青木哲哉氏（地理学）の現地指導をいただいて記録をおこなった。

調査の結果、平安時代後期～鎌倉時代にわたる遺構・遺物を中心に、一部で奈良時代に遡る遺構・遺物が検出された。平安時代後期～鎌倉時代の遺構は、主に掘立柱建物跡群を中心として構成されており、当該期、調査区を含む鳥飼一帯に営まれた「鳥飼荘」に属する可能性が高いものと思われる。また、少数ながら縄文土器・石棒等も出土しており、調査地周辺に縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。

３．整理事業の概要

整理事業は、平成21・22年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。その工程は、第３表のとおりである。整理事業は久保の担当の下、考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存班がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。金属器の保存処理については、すべて考古博物館において実施した。また、本書に収録した遺物写真については、タニグチ・フォトに委託して撮

第５図　本発掘調査区配置図

影を実施した。

本発掘調査時に、遺跡内で採取した材、土壌等の試料については、㈱加速器分析研究所に放射性炭素年代測定を委託し、その成果は本報告書に収録している。また、本発掘調査時に現地指導をいただいた、立命館大学講師青木哲哉氏からは、遺跡周辺の微地形発達についての玉稿を頂戴し、本書に掲載している。

整理作業を担当した非常勤嘱託員は、下記のとおりである（順不同）。

八木和子・高橋朋子・真子ふさ恵

三好綾子・奥野政子

トレンチ	遺　構	遺　物	トレンチ	遺　構	遺　物
2			14	旧河道？	土師器・須恵器・陶器
3			15	溝・土坑	土師器・瓦器・須恵器・白磁・古式土師器
4		土師器			
5		土師器・須恵器・陶器	16	柱穴	土師器・陶器
6	流路？		17	柱穴	土師器・須恵器
7	遺構面あり		18	柱穴	土師器・瓦器須恵器
8	溝・柱穴	土師器・黒色土器	19	溝	土師器
9	溝・柱穴	土師器・黒色土器	20	溝	土師器・陶器
10	溝	土師器・須恵器	21	遺構面あり	
11	遺構面あり	須恵器	22	柱穴	土師器・須恵器
12	溝・柱穴	土師器・須恵器・白磁	23	落ち込み	土師器・陶器
13	溝・柱穴	土師器・瓦器・須恵器	24	遺構面あり	土師器・須恵

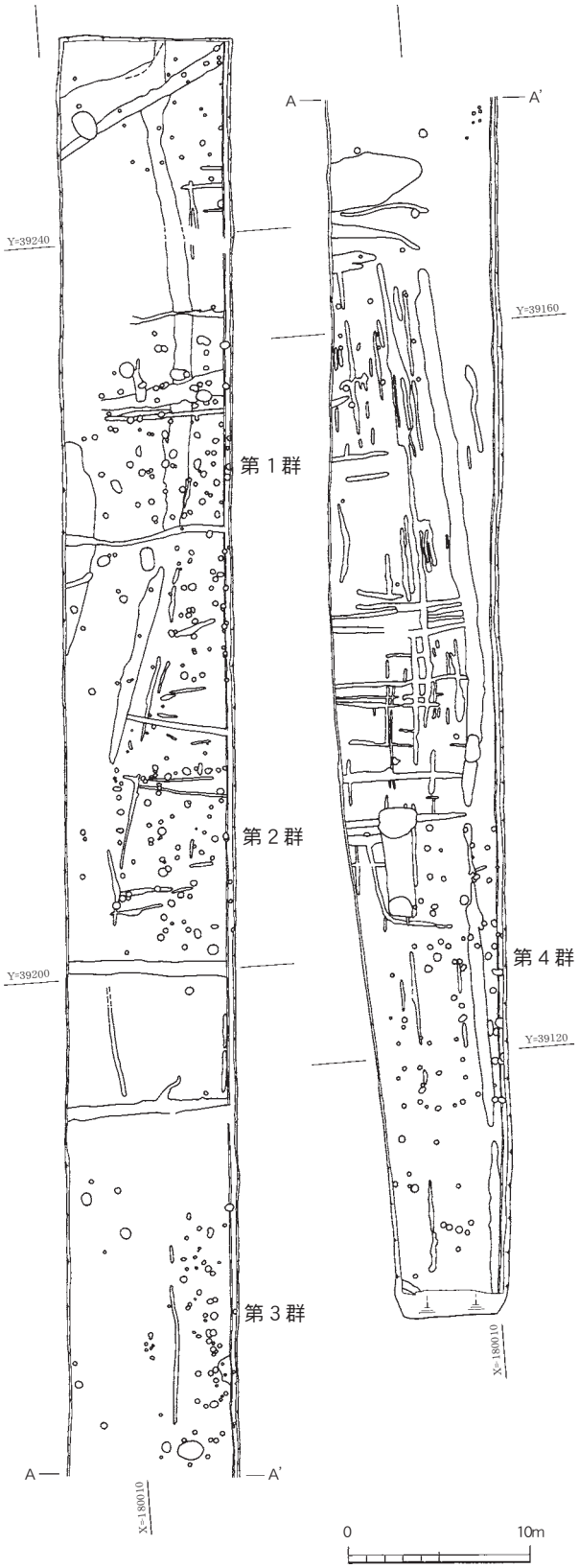
第 2 表　確認調査トレンチ成果一覧

年度	水洗い	ネーミング	接合・補強	実測・拓本	復元	写真撮影	写真整理	図面補正	トレース	レイアウト	分析鑑定	保存処理	報告書刊行
2008	■	■	■										
2009				■	■	■	■				■	■	
2010								■	■	■			■

第 3 表　整理事業の工程

Ⅲ　遺構と遺物

1．鳥飼中瀬遺跡１区



第６図　鳥飼中瀬遺跡１区平面図

(1) 概要

鳥飼中瀬遺跡の調査区は、間に町道を挟み、総延長約250mにおよぶ。現町道部分は調査対象外であったため、調査区は二分割され、東側を１区、西側を２区と呼称した。以下、調査区ごとに記述を進める。

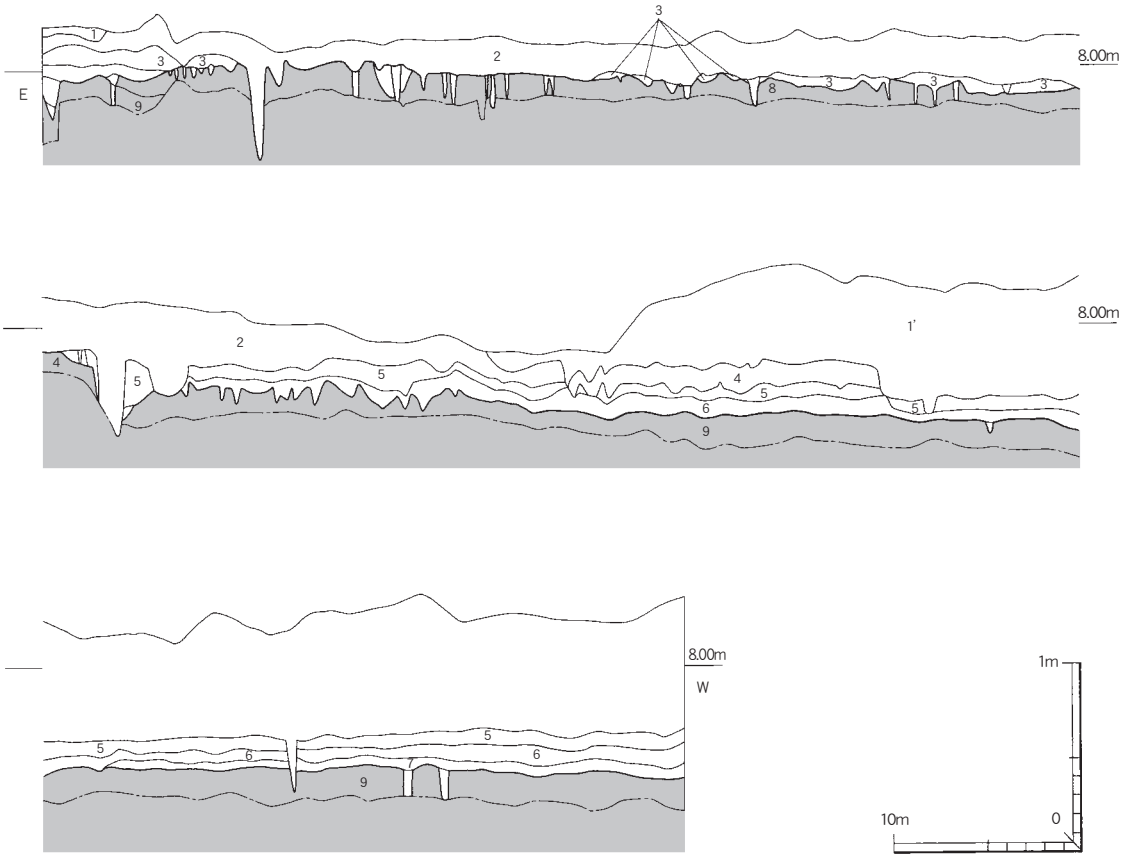
【調査区内の遺構分布】

１区では、掘立柱建物跡16棟を含む柱穴、土坑、溝が検出された。遺構の分布密度は高く、特に調査区東部では密集する。掘立柱建物跡・柵・柱穴は、大別４群の明瞭な集中分布が識別され、その間には密度の低い空間が見られたため、東から順に第１群～第４群と呼称した（第６図）。土坑については、遺構集中部に位置するものとそうでないものが見られる。また溝については、大部分が遺構集中部とは無関係の分布を見せており、掘立柱建物跡群とは時期を違えるものと思われる。

以下、掘立柱建物跡および柵・柱穴については第１～４の群単位で、その他の遺構については遺構番号順に記載を進める。

【調査区内の地層】

１区においては、にぶい黄褐色砂質シルトが段丘上を被覆しており、これが遺構検出面を形成する、いわゆる「地山」となっている（第７図８層）。調査区東部では、その上位に細粒の黄灰色砂が堆積しており、これが遺物包含層（古土壌層）である（３層）。ただし３層は、さらにその上位に、遺物包含層の二次的撹乱層と思われる２層と表土層（現代の耕作土）が続く。２層は、ある時期において３層が耕作等による人為的な撹乱を受けたものと思われるが、このため３層は大きく損なわれており、層厚が



1. 表土（耕土）
2. 5Y5/3　灰オリーブ色細砂～中砂　中世の遺物を含むが二次的包含層
3. 2.5Y4/1　黄灰色極細砂～細砂　中世の遺物を含む古土壌層
4. 2.5Y5/4　黄褐色砂　極細砂～細砂主体　2.Y3/2　黒褐色粗砂のブロックを含む
5. 5Y5/2　灰オリーブ色砂　極細砂～細砂主体
6. 2.5Y5/2　暗灰黄色細砂
7. 2.5Y4/2　暗灰黄色細砂
8. 10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト　地山
9. 2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質砂
＊その他は遺構埋土

第７図　１区南壁断面図

10㎝に満たない部分がほとんどである。８層は、西に向かって下る緩やかな傾斜を見せており、調査区中央付近の段差を境界に、それより西では、マンガンの集積が著しい暗褐色砂質シルト（９層）へと層相を変化させる。９層上位には暗灰黄色砂（６層）が堆積しており、これが遺物包含層である。

(2) 遺構と遺物

１．掘立柱建物跡および柵・柱穴群

《第１群》

調査区東部に位置する一群であり、今回の調査区内では、最も柱穴の密度が高い。南北は調査区幅（約９ｍ）、東西は約20ｍにわたって柱穴が密集し、少なくとも掘立柱建物跡５棟、柵１条から成る。

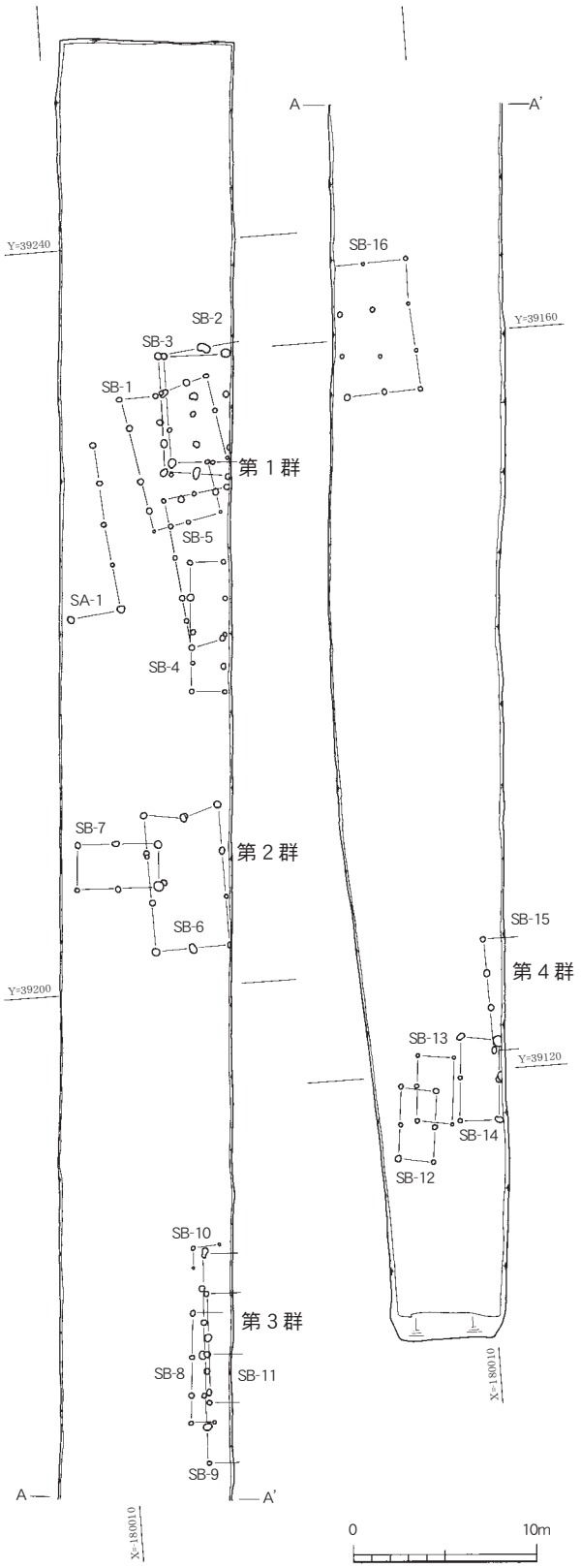
【掘立柱建物跡１】

遺構（第９図）

２間×３間の総柱式の建物跡であるが、西辺および南辺に軒を支持する柱列を伴う。柱間は、梁行きが1.60m～2.04mである。桁行きは、建物跡中央部が2.68m～2.92mであるのに対し、その東西では1.48m～1.88mと半分程度しかない。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径20㎝～44㎝を測る。床面積は約23.7㎡である。柱穴152と柱穴468を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N79.0°Eである。

出土遺物（第10図）

１は、西辺中央に位置する柱穴101より出土した、柱状高台をもつ土師器皿である。高台は高さ２㎝



第８図　１区掘立柱建物跡位置図

の、中実の平高台で、底面はヘラ切り無調整である。見込み部は一段深く成形されており、托と呼称される器種に相当する。

第26図Ｓ２は砥石である。相対する２面を整形し、片面を研磨面として使用している。

このほか、図示はできなかったが、柱穴48より尾上による編年（尾上　実　1983）のⅢ－１期に相当すると思われる和泉型瓦器椀が出土している。

時期

土師器の柱状高台皿は、淡路地域では報告されていないが、皿部が大型化し、高台の高さを増した柱状高台皿は、12世紀末～13世紀初頭に出現する（八峠　興　2001）とされており、柱穴48出土の瓦器椀の時期とも矛盾しない。

【掘立柱建物跡２】

遺構（第９図）

調査区内では３間×１間分が検出された、側柱式の建物跡である。柱間は、梁行きが2.20m～2.30m、桁行きが1.80m～2.04mである。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径28㎝～52㎝を測る。柱穴58と柱穴84を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N89.5°Ｅである。

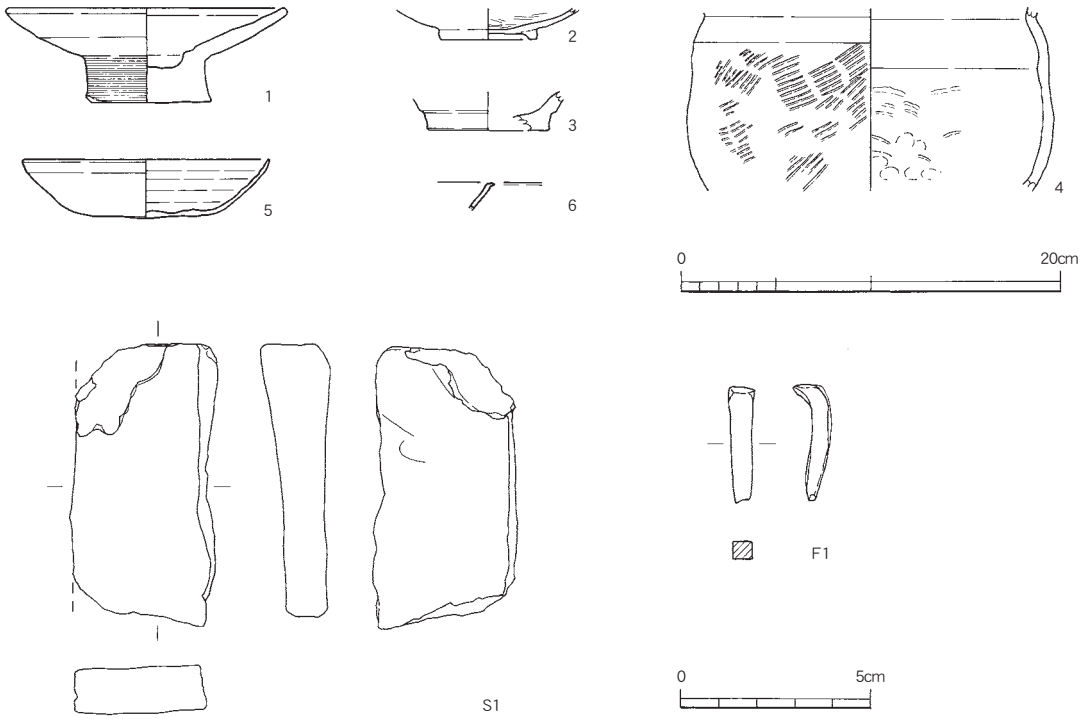
出土遺物（第10図）

２は柱穴45より出土した和泉型瓦器椀底部である。底部は、逆台形状の輪高台を貼り付ける。見込み部には、粗い平行のヘラミガキを施す。尾上編年のⅢ期に属するものであろう。

３は柱穴93より出土した土師器皿である。厚みのある平高台をもち、高台と口縁部の間は段をなす。

Ｓ１は柱穴45・46のいずれに属するか不明の砥石である。研ぎ面は、使用きわめて平滑である。器表面は風化のため乳白色を呈するが、破断面は暗褐色～赤褐色を呈し、強い火熱を受けたものと思われる。石材は、石英の微細な結晶を含むものであるが同定には至らなかった。

第９図　１区掘立柱建物跡１・２



第10図　1区掘立柱建物跡1～3出土の遺物

このほか、柱穴84より、Ⅲ期－1ないし2と思われる和泉型瓦器椀の破片が出土している。

時期

和泉型瓦器椀のⅢ－1ないし2期に相当すると思われる。

【掘立柱建物跡3】

遺構（第11図）

調査区内では3間×2間分が検出された、総柱式の建物跡である。柱間は、梁行きが1.72m～1.80mである。桁行きは、建物跡中央部が2.60m～2.88mであるのに対し、その西では1.52m～1.60m、東では2.00m～2.30mと明らかに小さい。この形式は、掘立柱建物跡1でも見られる。柱穴は不整円形ないし不整楕円形を呈し、長径32㎝～64㎝を測る。柱穴59と柱穴87を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N88.5°Wである。

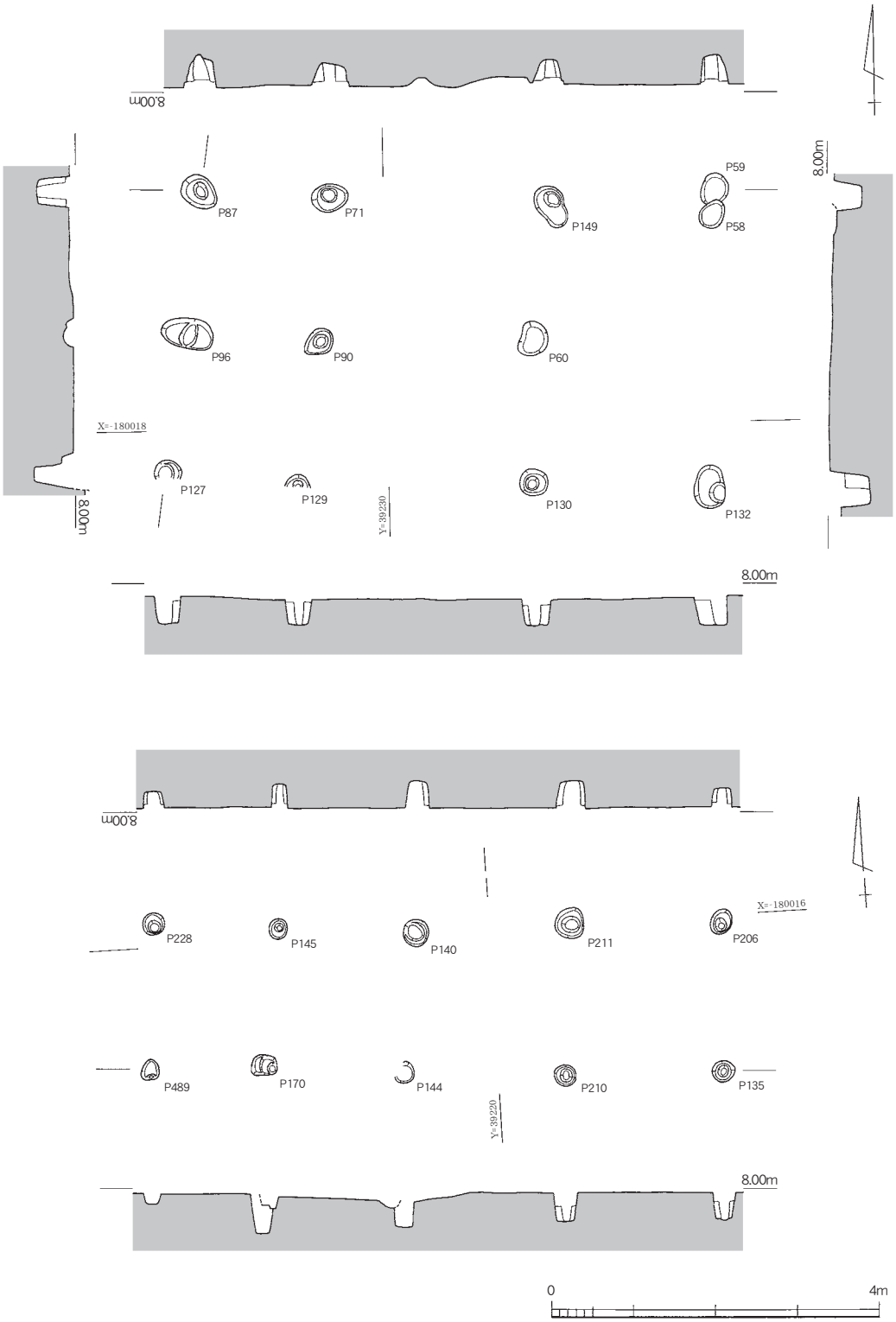
出土遺物（第10図）

4は柱穴59より出土した土師器鍋である。口縁部と底部を欠く。外面は斜め方向のタタキが施される。外面全体にススが付着しており、その一部は厚く焦げ付いた状況を呈する。

5は、柱穴60より出土した土師器椀である。体部は、平坦な底部から丸みをもって立ち上がる。底部は回転糸切りである。

6は、柱穴87より出土した白磁碗の口縁部である。口縁端部を外方へつまみ出し、上面にやや内傾した面を作り出している。横田・森田による分類のⅤ－3類に相当するものであろうか。

F1は、柱穴59より出土した鉄釘である。断面は方形を呈し、頭部は薄く、身に対してほぼ直角に折り曲げられている。先端部を欠損しており、全体に緩やかな曲がりを見せる。

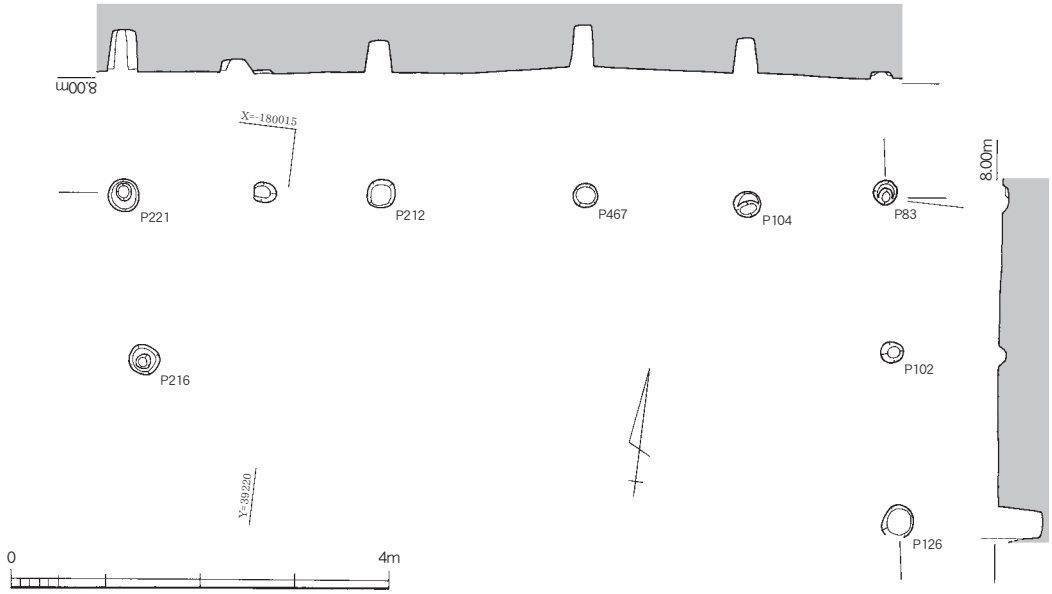


第11図　1区掘立柱建物跡3・4

このほか図示できなかったが、柱穴60より土師器の厚い柱状高台が、柱穴90から回転ヘラ切りの底部を見せる土師器皿が出土している。

時期

13世紀初頭以前に相当するものと思われる。



第12図　1区掘立柱建物跡5

【掘立柱建物跡4】

遺構（第11図）

調査区内では4間×1間分が検出された、総柱式の建物跡である。柱間は、梁行きが1.72m～1.76m、桁行きが1.48m～2.00mである。柱穴は円形、不整円形ないし隅丸方形を呈し、長径28㎝～40㎝を測る。柱穴206と柱穴228を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N87.0°Wである。

出土遺物

土師器・瓦器等の細片が出土しているが、図示可能なものは出土しなかった。

時期

推定する資料に乏しいが、他の掘立柱建物跡と大きな時期的懸隔はないものと思われる。

【掘立柱建物跡5】

遺構（第12図）

調査区内では5間×2間分が検出された、側柱式の建物跡である。柱間は、梁行きが1.64m～1.80mである。桁行きは、建物跡中央部が2.12mであるのに対し、建物跡の東西では1.44mとなる。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径24㎝～36㎝を測る。柱穴83と柱穴221を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N83.6°Eである。

出土遺物

土師器・瓦器等の細片が出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。

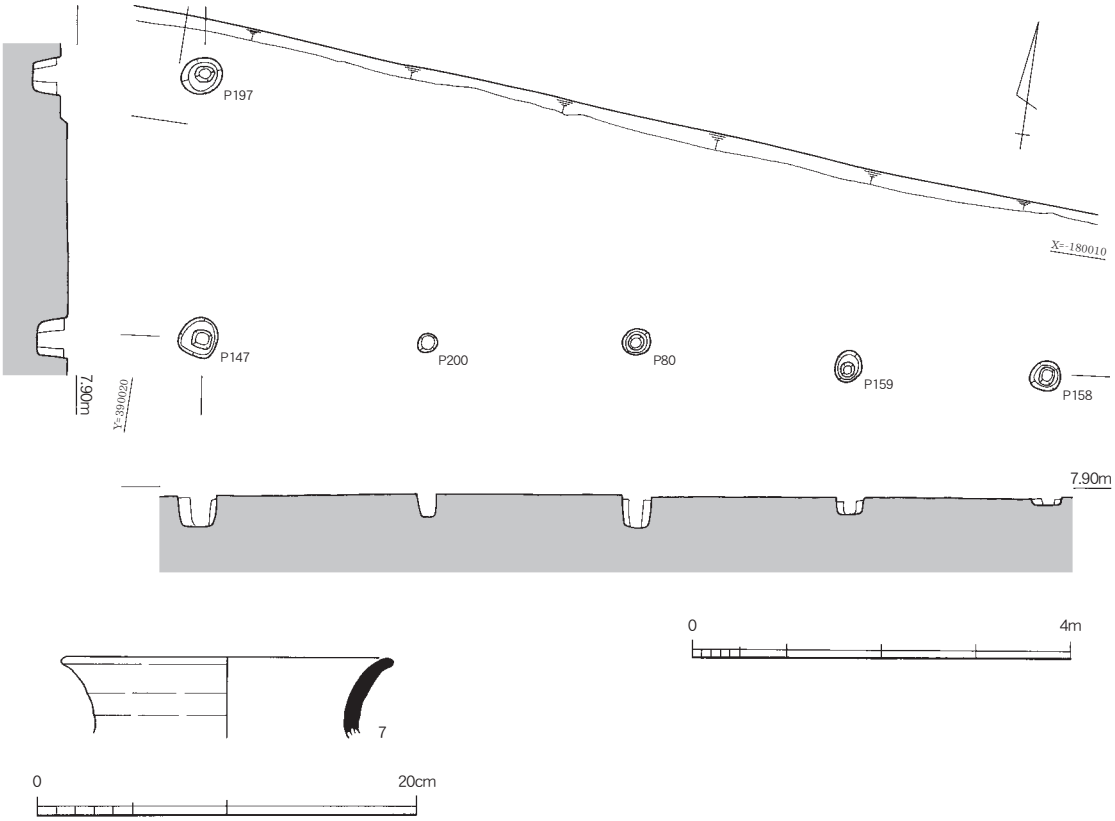
時期

推定する資料に乏しいが、他の掘立柱建物跡と大きな時期的懸隔はないものと思われる。

【柵1】

遺構（第13図）

調査区の北辺に沿うようにのび、ほぼ直角に1間分折れるところまでが確認できた。柱穴6基からなり、総延長は11.7mを測る。柱間は2.12m～2.80mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径22㎝



第13図　１区柵１および出土遺物

～46㎝を測る。柱穴147と柱穴156を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N84.2°Eである。

出土遺物（第13図）

７は、柱穴147より出土した須恵器甕の口縁部である。ほかに土師器・瓦器等の細片が出土している。

時期

推定する資料に乏しいが、他の掘立柱建物跡と大きな時期的懸隔はないものと思われる。

《第２群》

第１群の西に位置し、第１群との間に５ｍほどの、柱穴の分布しない空間がある。調査区幅（約９ｍ）、延長10mにわたって柱穴が密集し、少なくとも掘立柱建物跡２棟、柵１条から成る。

【掘立柱建物跡６】

遺構（第14図）

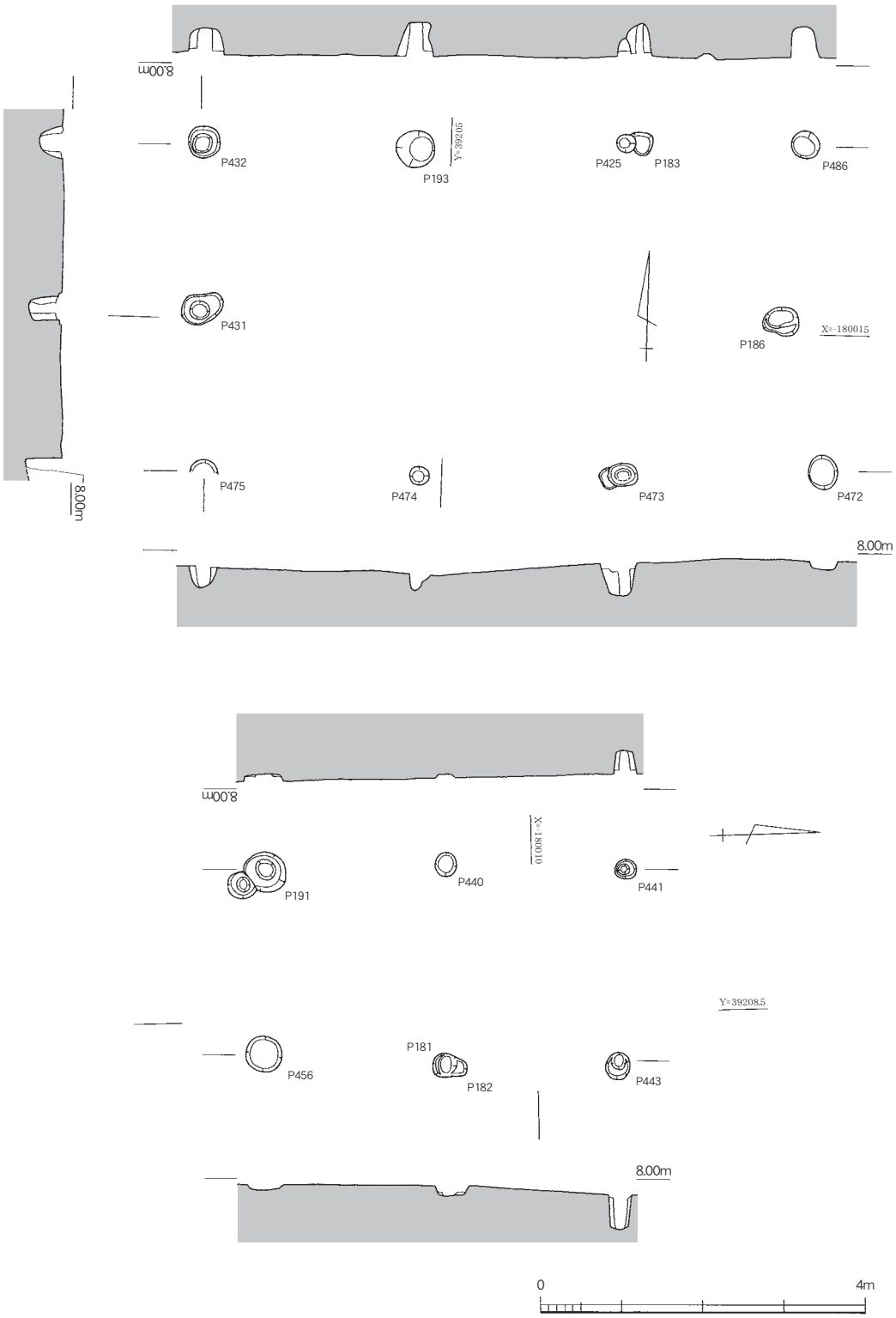
２間×３間の側柱式の建物跡である。柱間は、梁行きが2.00m～2.12m、桁行きは2.20m～2.68mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径24㎝～48㎝を測る。床面積は30.7㎡を測る。柱穴432と柱穴486を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N88.5°Eである。

出土遺物

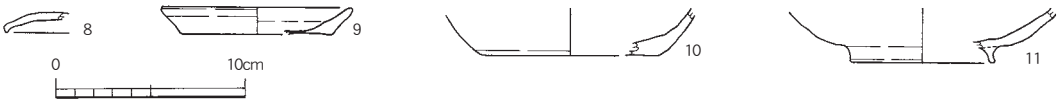
図示可能な遺物は出土しなかったが、土師器・瓦器等の細片が出土している。

時期

推定する資料に乏しいが、他の掘立柱建物跡と大きな時期的懸隔はないものと思われる。



第14図　1区掘立柱建物跡6・7



第15図　1区掘立柱建物跡7出土の遺物

【掘立柱建物跡７】

遺構（第14図）

１間×２間の側柱式の建物跡である。柱間は2.12m～2.32mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径28㎝～52㎝を測る。床面積は10.1㎡を測る。柱穴443と柱穴456を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N2.5°Eである。

出土遺物（第15図）

８は、柱穴191より出土した土師器の小破片である。端部を下方に突出させることから、蓋と判断した。内面には指頭圧痕が残る。

９～11は、柱穴456より出土した。

９は土師器皿である。底面が剥離して著しく薄くなり、底部の切り離し痕は明らかではない。外方へ直線的にのびる口縁部を見せる。

10は、土師器の杯であろうか。底部は回転糸切りである。

11は、土師器の高台付椀である。高台は薄い逆台形状を呈し、丁寧に整形される。

このほか、小破片のため図示できなかったが、柱穴191より口縁部内面に沈線を巡らせる瓦器椀が出土しており、Ⅲ期の楠葉型瓦器椀と推定される。また柱穴456より土師器皿が出土している。

時期

楠葉型瓦器椀のⅢ期に相当する時期と推定される。

【柵２】

遺構（第16図）

Ｌ字形に折れ曲がる柵で、総延長は9.4mを測る。少なくとも16基の柱穴で構成されており、柱間は不規則で柱穴の形態、大きさも多様である。柱間は広い場所で1.0m前後である。Ｐ447とＰ465を結ぶ線上で測定した方位は、N2.3°Eである。

出土遺物（第16図）

柱穴54、176、179・452、445より遺物が出土している。

12は、柱穴54より出土した土師器杯である。断面図で底部が上げ底状になっているのは、底部の粘土板が剥離したためであり、本来の形態ではない。底部から口縁部へは、ふくらみをもって立ち上がる。

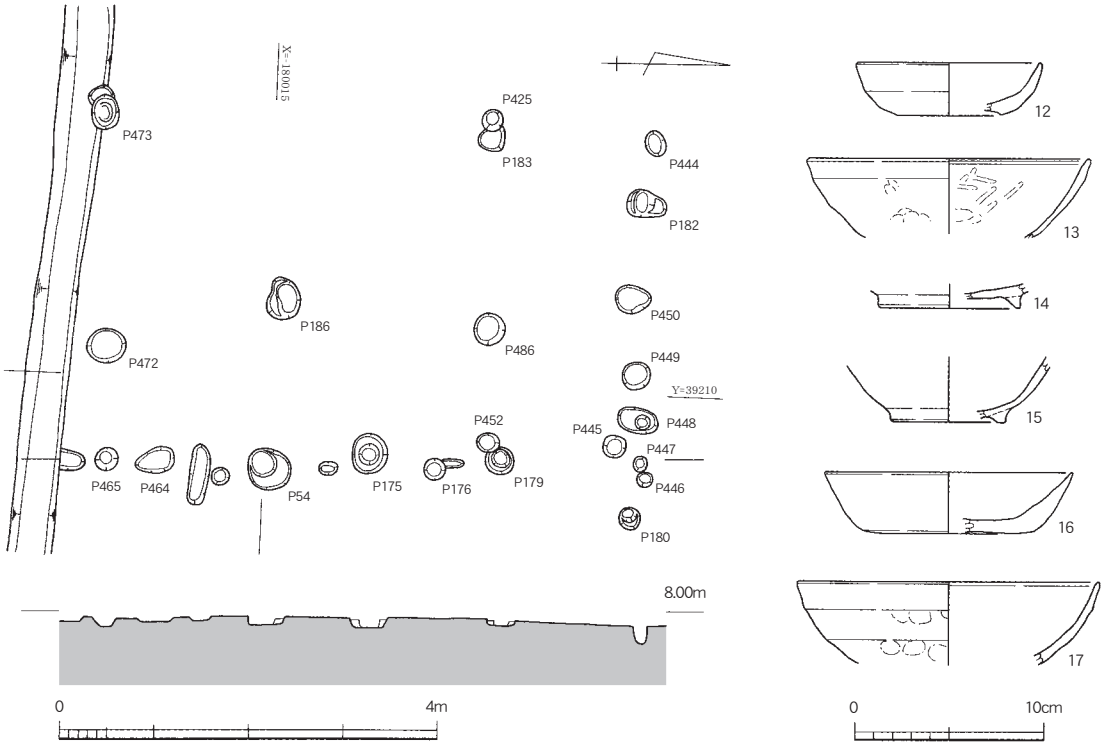
13は、柱穴54より出土した瓦器椀である。外面には指頭圧痕のみが認められ、内面のヘラミガキもごく粗く施されるのみである。口縁端部内面に痕跡程度の弱い沈線が認められることから、本資料については、和泉型ではなく楠葉型である可能性を指摘しておきたい。

14は柱穴176より出土した。土師器椀の底部であろう。逆三角形状の輪高台を貼り付ける。

15は、重複する柱穴179・452から出土しており、いずれの遺物か判断できなかったものである。瓦器椀の底部であるが、体部の立ち上がりが急斜度で、本遺跡で出土した他の瓦器椀とは異なる特徴をもつ。高台は扁平な逆台形状を呈する。内外面ともに摩耗が進行しており、ヘラミガキの痕跡は識別できなかった。

16は、柱穴445より出土した土師器杯である。口縁部は、厚く平坦な底部から急激に厚さを減じつつ立ち上がる。底部は回転ヘラ切りである。

17は、柱穴445より出土した土師器椀である。外面には指頭圧痕が散見されるが、内面は平滑に仕上げられている。口縁部から外面の底部近くにかけて、液状のものが垂れたように見えるスス状の付着物が見られる。



第16図　1区柵2および出土遺物

時期

13の瓦器椀は、楠葉型のⅢ期後半に相当するものと思われる。

《第3群》

調査区中央部に位置し、調査区南側の幅3m、延長13mにわたって柱穴が集中する。少なくとも掘立柱建物跡4棟から成ると思われるが、建物跡はいずれも調査区南へ続くものであり、調査区内では建物跡の北辺のみがとらえられたにすぎない。従って、以下に報告する復元案の正当性については問題を残している。また溝234は、掘立柱建物跡8～11の柱穴群に平行し、柱穴群の範囲に相当するのびを見せることから、掘立柱建物跡に伴うものとして記載しておく。

【掘立柱建物跡8】

遺構（第17図）

調査区内では3間分の柱列が検出された。柱間は1.52m～2.40mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径28㎝～36㎝を測る。P246とP380を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N85.0°Wである。

出土遺物（第18図）

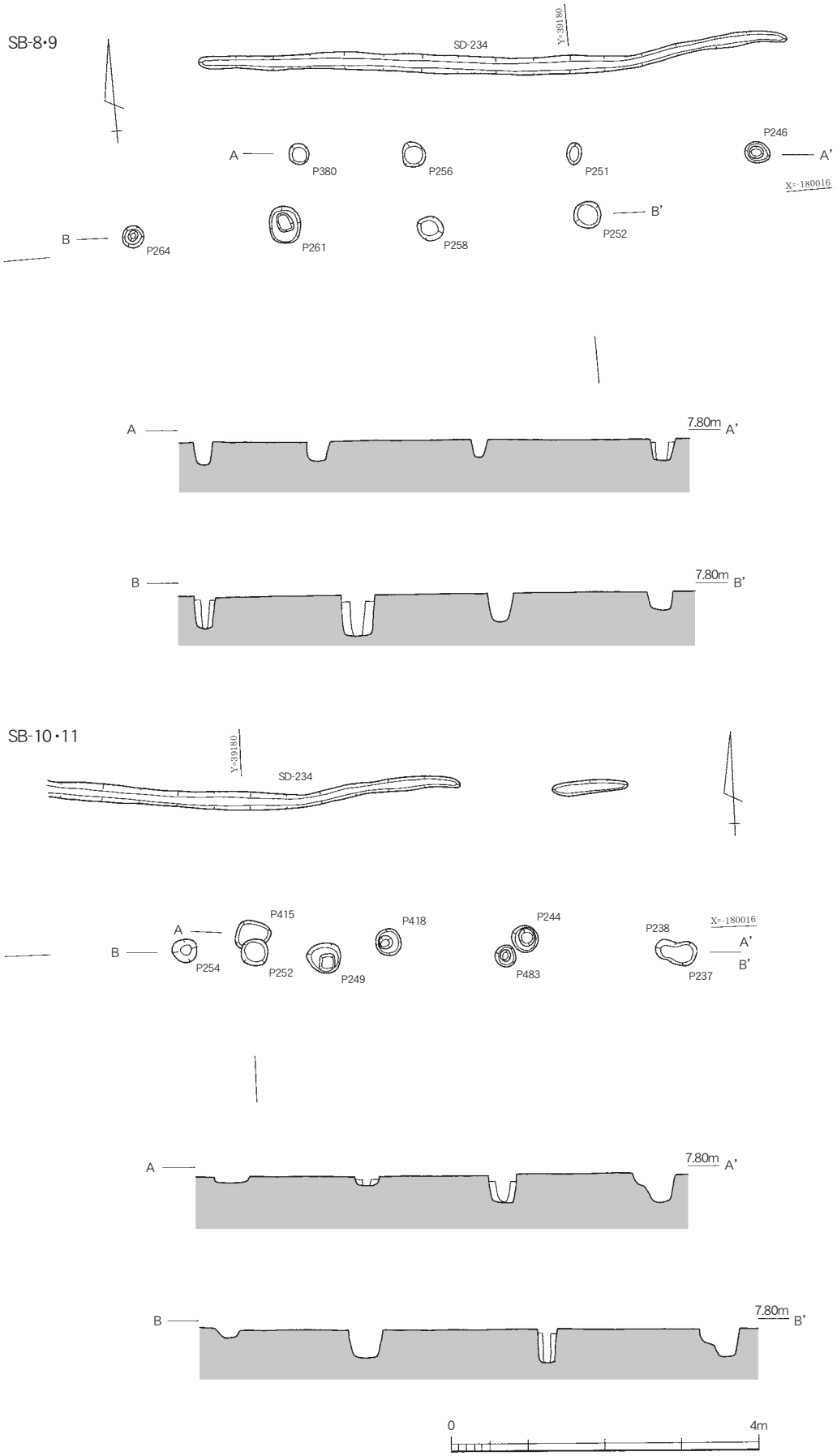
柱穴251よりまとまって遺物が出土している。18～21は土師器皿、23は瓦器椀である。

18は、口縁部が底部から屈折するように立ち上がり、ほぼ直線的に外上方にのびる。底部は回転ヘラ切りである。

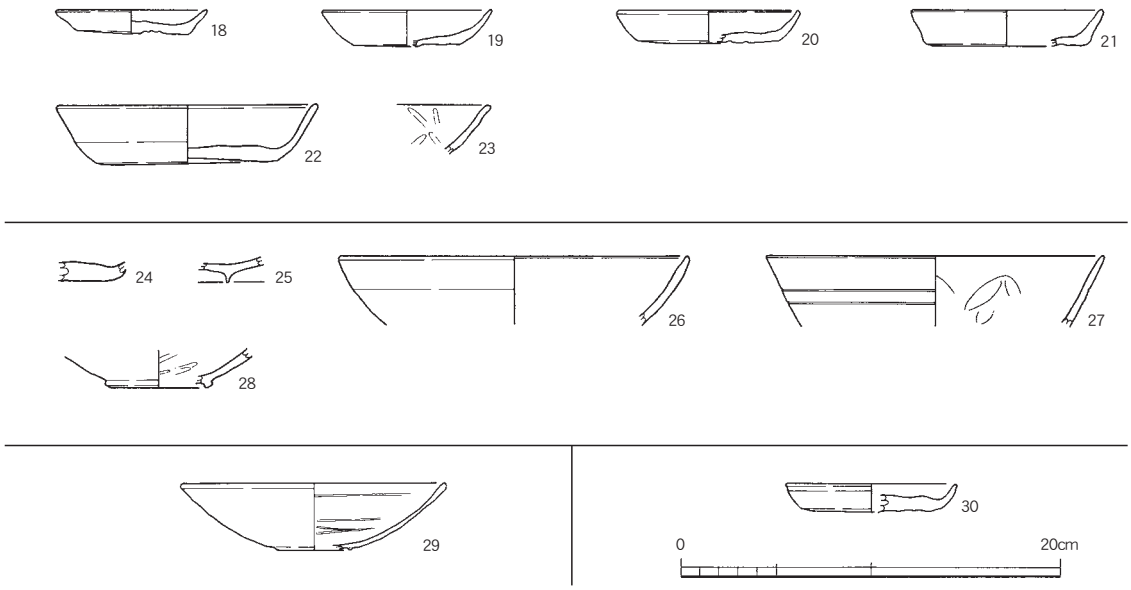
19は、口縁部が底部から丸みをもって立ち上がり、膨らみをもちつつ外上方にのびる。底部は回転ヘラ切りである。

20は、口縁部が底部から丸みをもって立ち上がり、膨らみをもちつつ外上方にのびる。底部は回転糸切りである。器表面は荒れた状態である。

21は、口縁部が底部から屈折するように立ち上がり、外反気味に外上方にのびる。



第17図　1区掘立柱建物跡8～11



第18図　1区掘立柱建物跡8～11出土の遺物

22は、土師器杯である。縁部が底部から丸みをもって立ち上がり、ほぼ直線的に外上方にのびる。底部は回転ヘラ切りである。

23は瓦器椀の口縁部のみの小破片である。内面に、かすかにヘラミガキの痕跡が残る。

時期

土師器皿の形態・技術からは、中世前半期と思われる。

【掘立柱建物跡9】

遺構（第17図）

調査区内では3間分の柱列が検出された。柱間は1.92m～2.00mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径26㎝～48㎝を測る。P252とP264を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N88.7°Wである。

出土遺物（第18図）

24～26は柱穴252より出土した。

24は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。

25は、和泉型瓦器椀の底部である。鋭い逆三角形状の輪高台を貼り付ける。内面は摩耗が著しく、器面調整は観察できない。

26は、和泉型瓦器椀である。内外面ともに摩耗が進行しており、器面調整は観察できない。

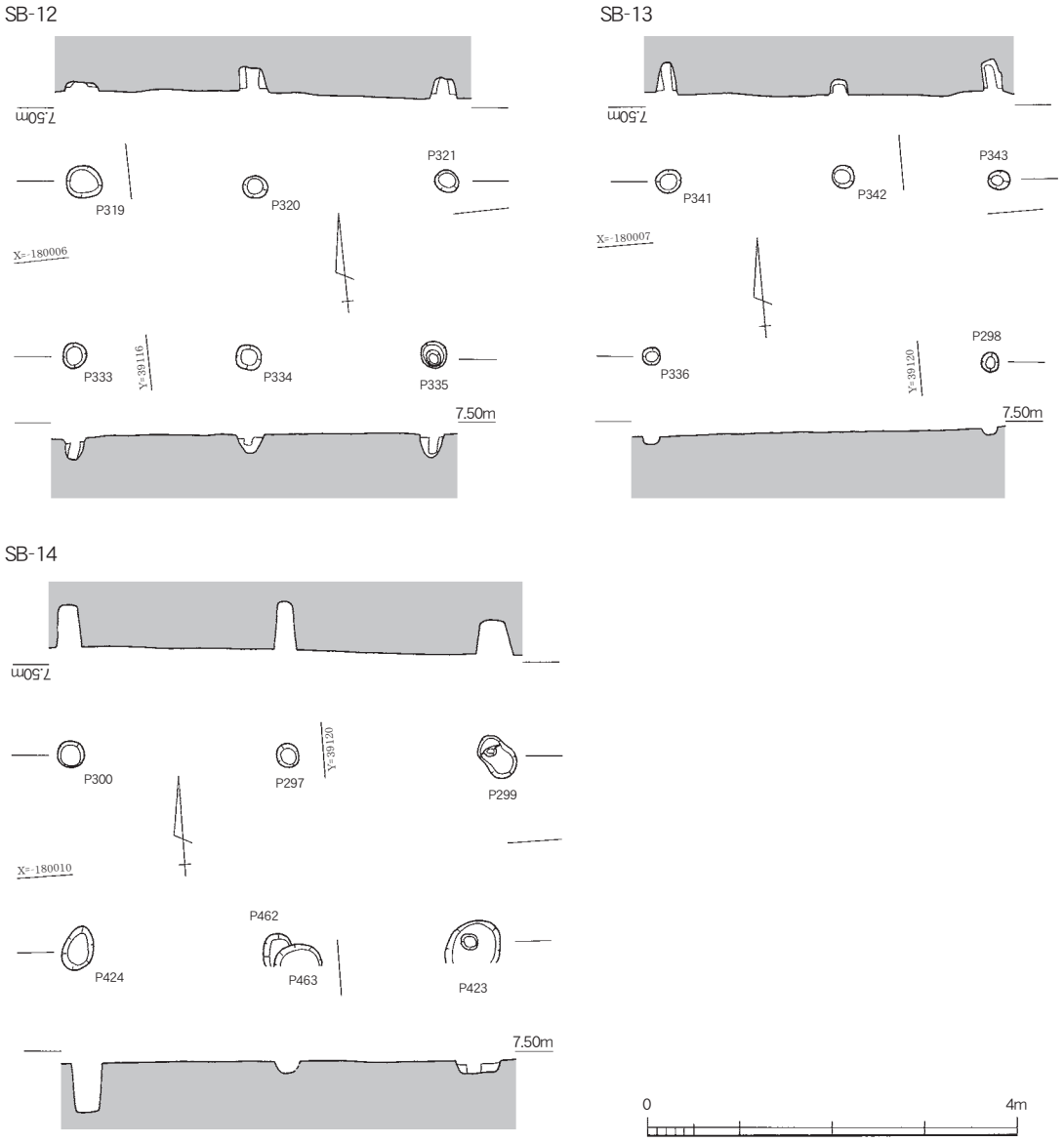
27は、柱穴258より出土した竜泉窯系青磁碗である。体部はほぼ直線的に外上方へ開き、外面には2条の沈線、内面には彫りの浅い蓮弁文を描く。釉薬は暗黄緑色を呈する。

28は、柱穴264より出土した瓦器椀底部である。高台は断面が方形を呈し、外方へ張り出す。内面は摩耗が著しく、ヘラミガキの方向は不鮮明である。

このほか図示はできなかったが、柱穴252より、扁平化した逆三角形の高台をもつ和泉型瓦器椀底部が、柱穴258より須恵器鉢（？）の底部が出土している。

時期

出土した青磁、瓦器椀の特徴などから、13世紀末を前後する時期に相当すると思われる。



第19図　1区掘立柱建物跡12～14

【掘立柱建物跡10】

遺構（第17図）

調査区内では3間分の柱列が検出された。柱間は1.76m～1.84mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径36㎝～44㎝を測る。P238とP415を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N2.5°Eと、ほぼ正しく東西方向を向く。

出土遺物（第18図）

29は、柱穴244より出土した和泉型瓦器椀である。高台は痕跡程度の鈍い逆三角形を呈する。体部外面には指頭圧痕が顕著に見られ、内面のヘラミガキはごく散漫である。尾上編年のⅢ期末ないしⅣ期初頭にあたるものと思われる。

このほか土師器・瓦器等の細片が出土しているが、図示可能なものは出土しなかった。

時期

和泉型瓦器椀の編年のⅢ期末ないしⅣ期初頭の年代と推定される。

【掘立柱建物跡11】

遺構（第17図）

調査区内では３間分の柱列が検出された。柱間は1.84m～2.32mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径28㎝～48㎝を測る。Ｐ237とＰ254を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N87.5°Ｗである。

出土遺物（第18図）

30は、柱穴249より出土した土師器皿である。底部は回転ヘラ切りで、口縁部は底部から丸みをもって立ち上がる。

このほか土師器・瓦器等の細片が出土しているが、図示可能なものは出土しなかった。

時期

推定する資料に乏しいが、土師器皿などからは、他の掘立柱建物跡と大きな時期的懸隔はないものと思われる。

《第４群》

調査区西部に位置する群で、集中度はやや低いが、調査区幅（９ｍ）、延長18mにわたって、柱穴が分布している。少なくとも掘立柱建物跡４棟から成る。

【掘立柱建物跡12】

遺構（第19図）

１間×２間の建物跡である。柱間は、1.84m～2.00mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径28㎝～40㎝を測る。床面積は7.5㎡を測る。Ｐ319とＰ321を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N83.5°Ｗである。

出土遺物

土師器・瓦器等の細片が出土しているが、図示可能なものは出土しなかった。

時期

推定する資料に乏しいが、他の掘立柱建物跡と大きな時期的懸隔はないものと思われる。

【掘立柱建物跡13】

遺構（第19図）

１間×２間の建物跡であるが、南辺中央の柱穴を欠く。柱間は、1.72m～2.00mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径20㎝～28㎝を測る。床面積は6.9㎡を測る。Ｐ341とＰ343を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N85.0°Ｗである。

出土遺物

土師器・瓦器等の細片が出土しているが、図示可能なものは出土しなかった。

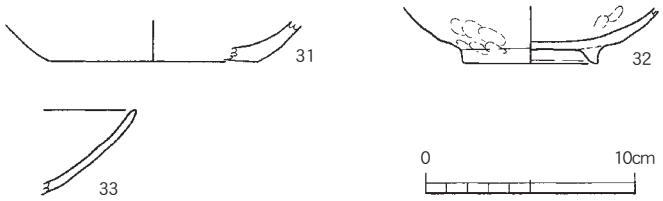
時期

推定する資料に乏しいが、他の掘立柱建物跡と大きな時期的懸隔はないものと思われる。

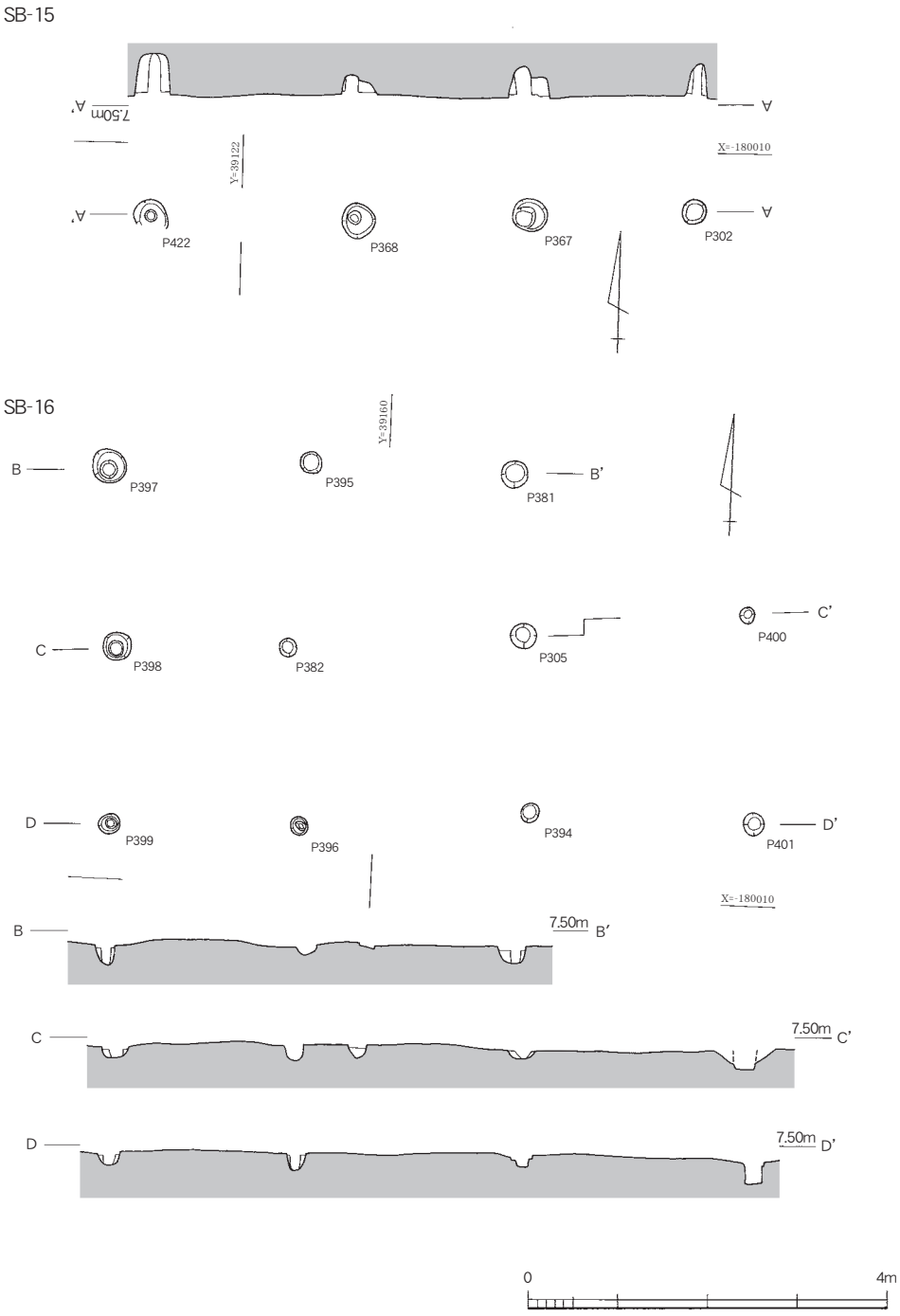
【掘立柱建物跡14】

遺構（第19図）

掘立柱建物跡12・13同様の、１間×２間の建物跡と判断したが、調査区南側へ広がる可能性もある。柱間は、2.00m～2.32mを測る。柱穴は円形ないし不整楕円形を呈し、長径28㎝～56㎝を測る。１間×



第20図　1区掘立柱建物跡14・15出土の遺物



第21図　1区掘立柱建物跡15・16

２間と考えた場合の床面積は、9.5㎡である。Ｐ299とＰ300を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N85.5°Ｗである。

出土遺物（第20図）

31は、柱穴297から出土した土師器杯である。底部は回転ヘラ切りである。

32は、柱穴424から出土した土師器椀である。内面はヘラミガキが施されるが、磨滅により単位を識別できない。外面には指頭圧痕とナデ調整痕が見られる。輪高台は断面がやや歪んだ逆台形状を呈し、外面はほぼ直立する。

時期

中世前半期に属すると思われる。

【掘立柱建物跡15】

遺構（第21図）

調査区内では３間分の柱列が検出されたのみであるが、柱穴の規模から掘立柱建物跡と推定している。柱間は1.84m～2.24mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径28㎝～40㎝を測る。Ｐ302とＰ422を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N88.2°Ｅである。

出土遺物（第20図・26図）

33は、柱穴302から出土した瓦器椀であるが、器表面の摩耗が著しくヘラミガキ等は観察できない。

第26図Ｓ４は、Ｐ367より出土した砂岩製砥石である。

時期

推定する資料に乏しいが、瓦器椀の出土から中世前半期に属すると思われる。

《群外の建物跡》

【掘立柱建物跡16】

上述の「群」中に分類されない建物跡で、第３・４群間の調査区北寄りに位置する。

遺構（第21図）

２間×３間の総柱式の建物跡と考えるが、北側が調査区外へ広がる可能性もある。柱間は、梁行きが2.00m～2.40m、桁行きは2.00m～2.64mを測る。柱穴は概ね円形を呈し、長径20㎝～36㎝を測る。２間×３間の総柱式の建物跡とした場合の床面積は、28.5㎡である。Ｐ399とＰ401を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N87.6°Ｅである。

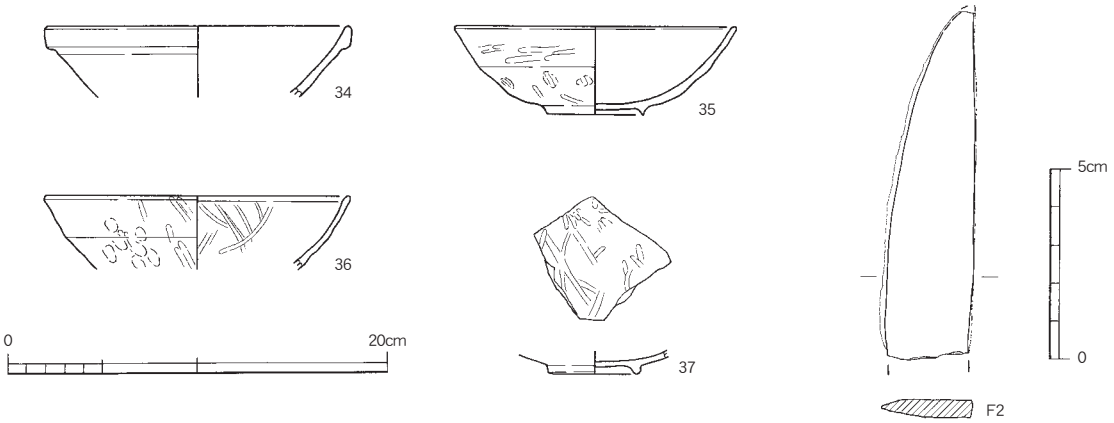
出土遺物（第22図）

34は、柱穴305より出土した白磁碗である。発達した玉縁の口縁部をもち、横田・森田による分類の第Ⅳ類に相当する。

35～37は柱穴381より出土した。35は和泉型瓦器椀である。高台は逆三角形状を呈する。内面は使用によると思われる摩耗が著しく、器表面の観察はほとんど不可能である。外面上半はヨコナデの後、横方向の粗いヘラミガキが施され、下半には指圧痕が顕著であるが、その凸部に弱いミガキの痕跡が見られる。尾上編年のⅡ－３期に相当すると思われる。

36も和泉型瓦器椀である。内面にはヘラミガキが散漫に施され、外面にもごく散漫にヘラミガキが見られる。こうした特徴は、尾上編年によるⅢ－１期に相当すると考えられる。

37は和泉型瓦器椀の底部である。高台は稜線が鈍く、低い逆台形状を呈し、見込部のヘラミガキは粗



第22図　1区掘立柱建物跡16出土の遺物

い格子状である。尾上編年のⅡ－3期に相当するものであろうか。

F2は、柱穴381より出土した鉄製刀子である。下半部を失い、先端もわずかに欠くが、鉄地金の遺存状況は良好である。刃部は緩やかな弧を描き、背は厚みをもつしっかりとした作りとなっている。器表面の付着物等は認められない。

このほか柱穴382より、竈の断片が出土している。

時期

出土した和泉型瓦器椀からは、12世紀末～13世紀初頭を前後する時期が考慮される。これは、34の白磁から推定される時期とも齟齬はない。

掘立柱建物跡以外の柱穴（第23図）

掘立柱建物跡に復元できなかった柱穴からも、遺物の出土が見られた。それらのうち、図化可能な遺物について、建物跡・柵と同様に、第1～4の群単位で記載をおこなう。なお時期の記載については、小結において各群単位で記述する。

《第1群》（第24図・第25図）

【柱穴14】

38は土師器皿である。口縁部は、平坦な底部から屈折して立ち上がり、膨らみをもちつつ外方へ開く。底部と口縁部の境界は明瞭である。

【柱穴15】

39は和泉型瓦器椀である。高台は扁平で痕跡的であり、口径に対する高さの比率も小さいため、器形も扁平な印象を与える。内面には粗くヘラミガキが施されているが、外面にはヘラミガキは認められない。尾上編年のⅢ－3期ないしⅣ－1期に属するものである。

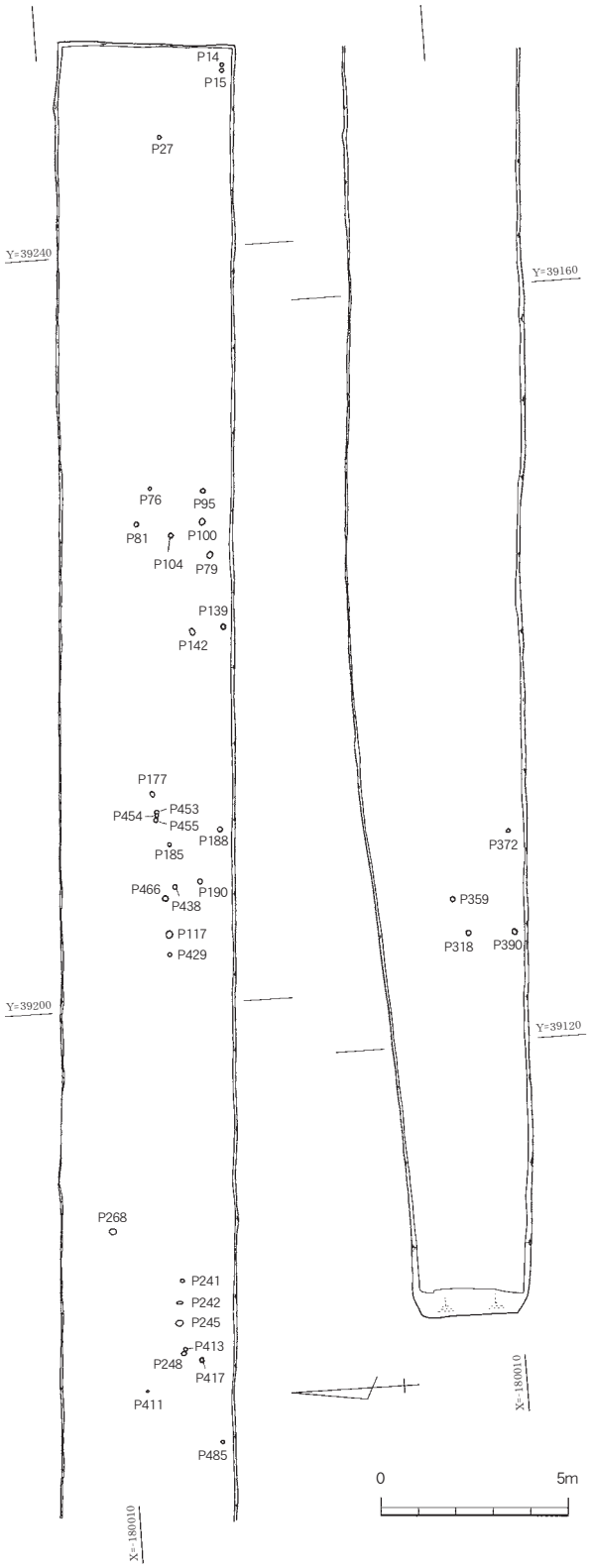
【柱穴27】

40は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。平坦な底部から屈折して、ほぼ直線的に開く口縁部を見せる。

41も土師器皿である。底部は回転ヘラ切りと思われる。口縁部は、わずかに膨らみつつ立ち上がる。底部と口縁部との境界はやや丸みをおびる。

【柱穴76】

42は土師器皿であろう。底部は回転ヘラ切りである。体部は急激に厚みを減じる。底部と体部の境界



第23図　掘立柱建物跡外掲載柱穴の位置

は、段状を呈する。

【柱穴79】

43は土師器椀であろう。底部は回転糸切りである。平坦な底部から、外反しつつ立ち上がる体部を見せる。

44は底部が回転ヘラ切りの土師器である。

45は土師器杯の底部であろう。底部は回転糸切りである。平坦な底部からやや外反気味に立ち上がる体部を見せる。

【柱穴81】

46は白磁碗である。器表全体に釉薬が施され、灰白色を呈している。体部は緩やかな膨らみを見せ、口縁部は弱く外反する。横田・森田による分類の、第Ⅴ類に属する

【柱穴95】

図示できない資料であるが、石鍋の破片が出土している（写真図版25左下）。

【柱穴100】

47は須恵器鉢の口縁部である。口縁端部は、外傾する平坦面となっている。

【柱穴104】

鉄滓が出土している（写真図版25）

【柱穴139】

第26図Ｓ３は砂岩製ハンマーストーンである。図下端部に敲打痕が認められる。

【柱穴142】

48は瓦器椀破片である。内外面とも摩耗が顕著で、器面調整は不明である。

第25図Ｆ３は鉄釘である。断面形はほぼ正方形を呈し、頭部は扁平に打ち出され、鈍角に折り曲げられている。

【柱穴485】

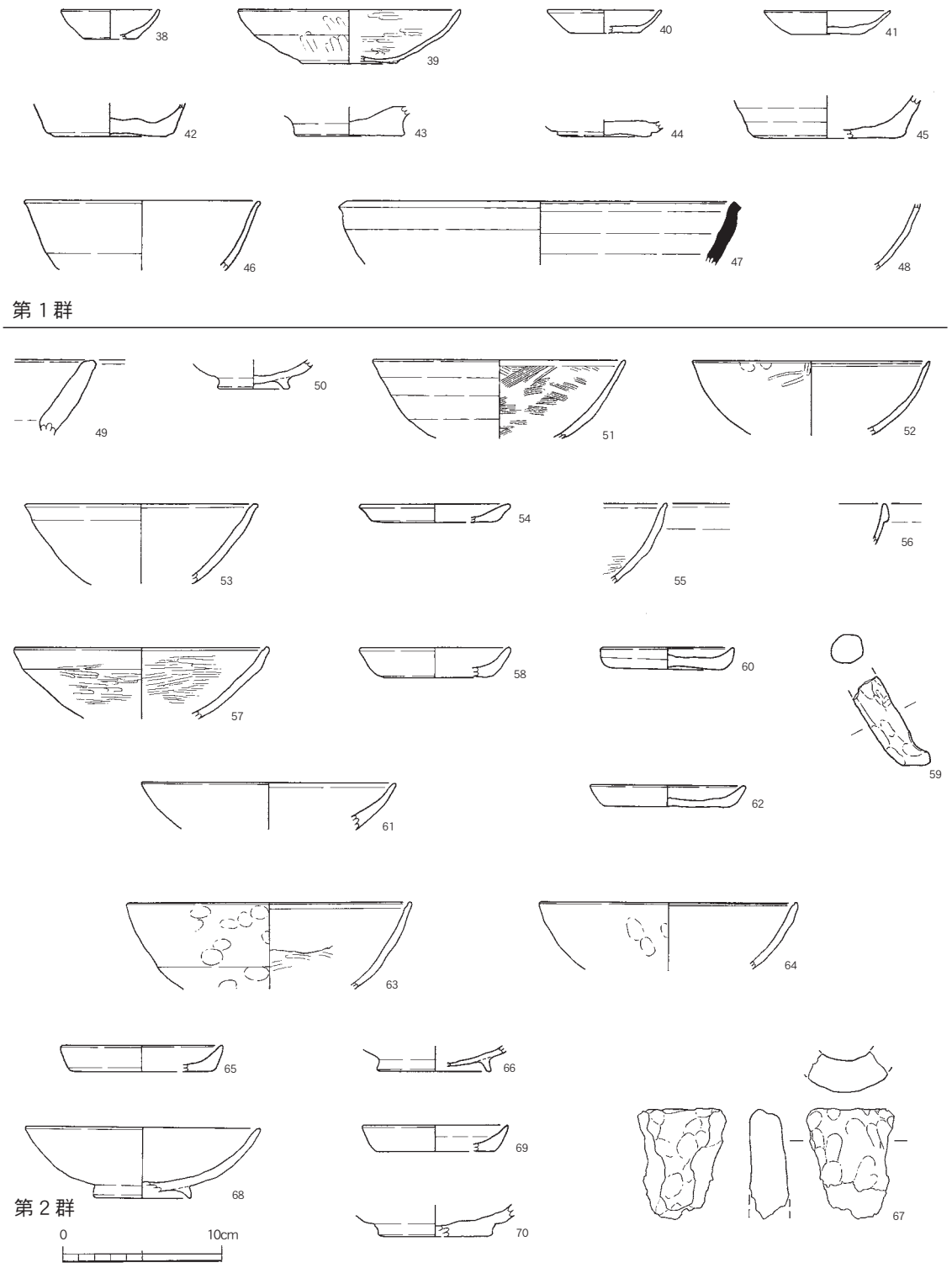
第25図Ｆ４は鉄釘である。断面形は長方形を呈し、頭部と先端部を欠損する。

《第２群》（第24図）

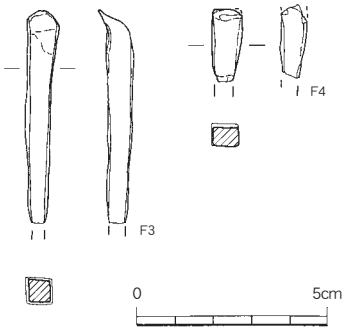
【柱穴117】

49は土師器椀ないし鉢であろうか。摩耗のため器面調整は観察できない。厚く、膨らみに乏しい体部から、平坦面をなす口縁部に至る。

50は土師器椀の底部である。高台は断面が逆台形状を呈し、外方へ開く。内外面ともナデ調整が施さ



第24図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(1)



第25図
掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(2)

れている。

51は土師器椀である。緩やかに膨らむ体部を見せる。内面はハケ調整が施され、口縁部には仕上げナデが認められる。

52は楠葉型瓦器椀である。丸みを持つ体部を見せ、口縁部内面には１条の沈線が施される。内外面ともにヘラミガキが施されるが、摩耗のため単位は明瞭ではない。

【柱穴177】

53は瓦器椀である。摩耗のためヘラミガキの単位は観察できない。厚みがあり膨らみに乏しい体部から、平坦面をなす口縁部に至る。口縁部内面はわずかに凹面をなし、沈線の痕跡と推定される。楠葉型瓦器椀と思われる。

【柱穴185】

54は土師器皿である。平坦な底部から外反しつつ開く、短い口縁部を見せる。

55は瓦器椀である。内面にはヘラミガキが施されるが、外面はユビオサエによる整形の後、ナデ調整が施されるのみである。口縁部内面に１条の沈線が施されており、楠葉型瓦器椀と考えられる。

56は白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈する。横田・森田による分類の第Ⅳ類に属する。

【柱穴188】

57は楠葉型瓦器椀である。内外面ともにヘラミガキが施され、口縁部には仕上げナデが施される。口縁部内面には１条の沈線が施されている。

【柱穴190】

58は土師器皿である。底部と口縁部の境界は丸みをおびる。

【柱穴411】

59は土師器羽釜の脚である。ユビオサエによる成形が施される。脚端部は外方へ屈折する。

【柱穴429】

60は土師器皿である。底部は回転糸切りである。底部と口縁部の境界は丸く、そこからごく短い口縁部が立ち上がる。口縁端部は急激に厚みを減じる。

61は土師器椀である。立ち上がりはやや扁平な印象を与える。内外面ともナデ調整が施される。

【柱穴438】

62は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。底部と体部の境界は丸みをおびる。

【柱穴453・454】

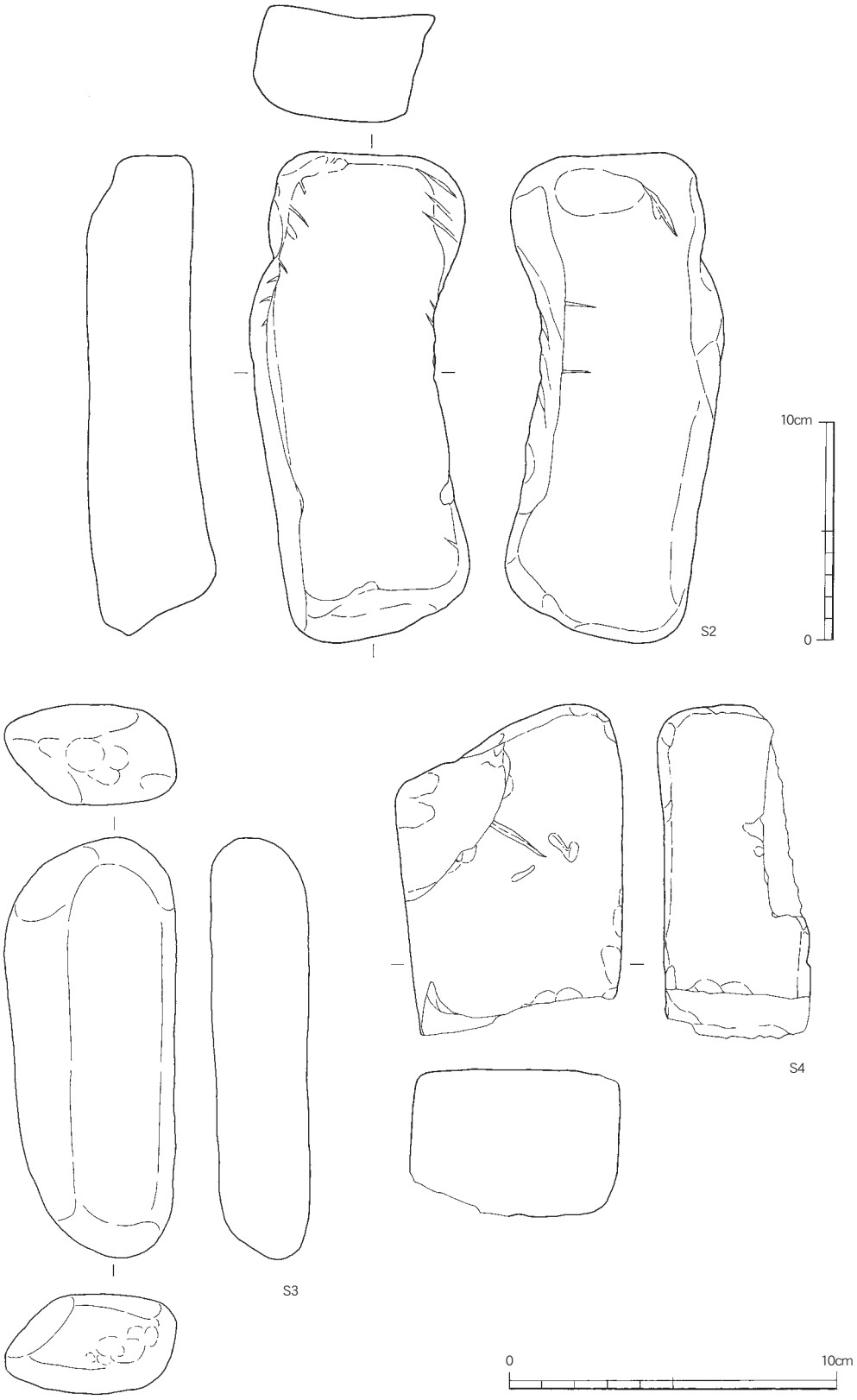
柱穴453と454は重複しており、その先後関係は不明瞭であった。出土遺物については、いずれに属するか判断できないものがあった。従ってここでは、両者を一括して記述する。

63は453より出土した楠葉型瓦器椀である。内外面ともに摩耗のため、ヘラミガキの単位は確認できない。外面には指頭圧痕が認められる。口縁部内面には、１条の沈線が施されている。

64も453より出土した楠葉型瓦器椀である。やはり内外面の摩耗のため、ヘラミガキの単位が確認できない。口縁部内面には、１条の沈線が施されている。

65は、453・454いずれに属するか判断できなかった土師器皿である。平坦な底部から屈折して、急斜度に立ち上がる口縁部を見せる。底部は回転ヘラ切りと思われる。

66も453・454いずれに属するか判断できなかった土師器椀底部である。高台は断面が長方形状を呈し、外方に開く。

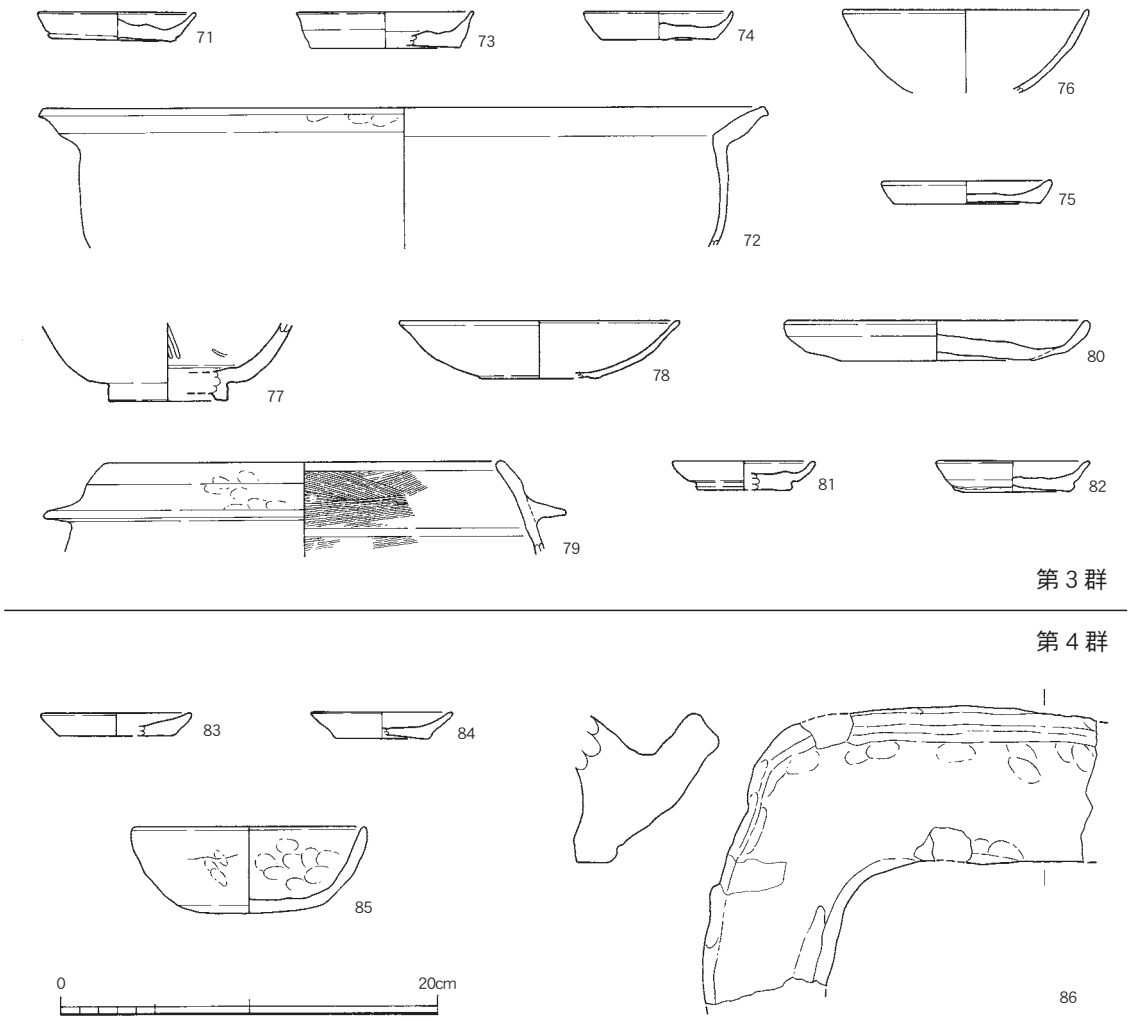


第26図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(3)

67は454より出土した鞴の羽口である。全体に指頭圧痕が密集している。

【柱穴455】

68は土師器椀である。口径に対する器高の比率が小さく、扁平な印象を受ける。高台は鈍い逆三角形状を呈する。



第27図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(4)

【柱穴466】

69は土師器皿である。平坦な底部から屈折して立ち上がり、急激に厚みを減じて断面三角形状を呈する口縁部を見せる。

70は土師器椀の底部であろう。低い平高台と、そこから大きく外方に屈折した後、膨らみを持ちつつ立ち上がる体部を見せる。

《 第３群 》（第27図）

【柱穴241】

71は土師器皿である。底部はヘラ切りで、底部と口縁部の境界は丸みをおびる。内面は凹凸が著しい。

72は土師器鍋である。体部上半はほぼ直立し、そこから屈曲して開く口縁部を見せる。口縁部は中程で厚みを増す。口縁端部には面を形成され、端部下端はわずかに下方へ拡張される。

このほかに、図示できない資料として土師器鍋の破片が出土している。

【柱穴242】

73は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。平坦な底部から、屈折して急斜度に立ち上がる口縁部を見せる。口縁部は急激に厚みを減じる。

74は土師器皿である。形状および製作技法は、概ね73と同一である。

【柱穴245】

75は土師器皿である。底部は静止糸切りと思われる。底部と口縁部の境界は明瞭な稜をなし、口縁部はごく短く立ち上がる。

76は土師器椀である。膨らみをもつ体部は、全体にナデ調整が施されている。

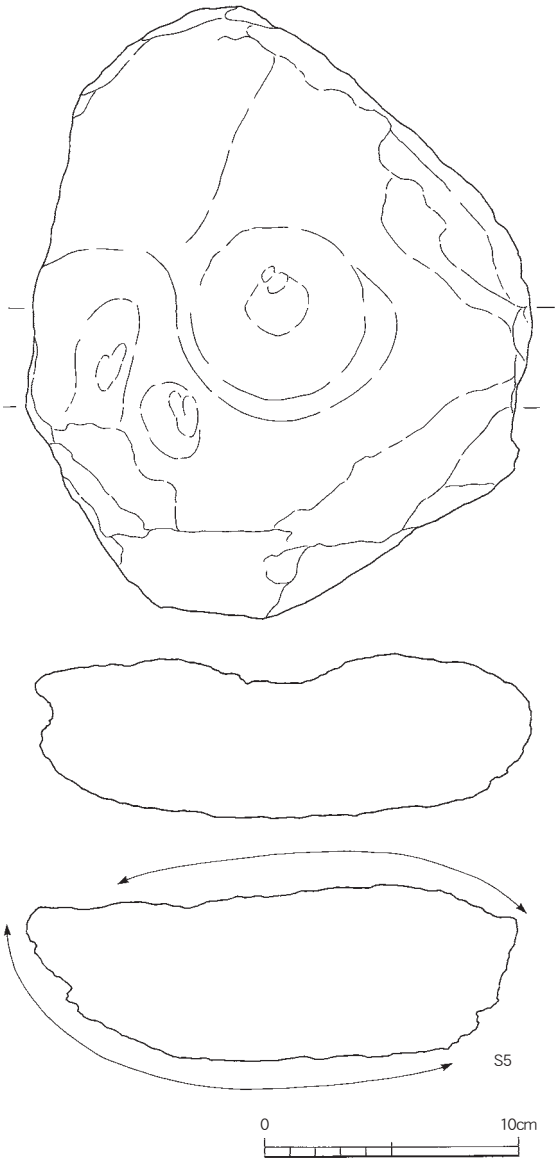
【柱穴248・413】

柱穴248と413は重複しており、その先後関係は不明瞭であった。出土遺物については、いずれに属するか判断できないものがあった。従ってここでは、両者を一括して記述する。

77は竜泉窯系青磁碗である。高台畳付部から内面は露胎である。内面には草花文が片彫りされている。釉薬は、淡くやや濁った青緑色を呈する。

78は和泉型瓦器椀である。きわめて扁平な形状を呈し、高台は痕跡的なものにすぎない。ヘラミガキは観察できない。尾上編年のⅣ－１期に属するものであろう。

79は土師器羽釜である。内傾する口縁部を見せ、鍔は断面が逆三角形状を呈する。内面は横方向のハケ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。



第28図　掘立柱建物跡外柱穴出土遺物(5)

【柱穴268】

80は土師器皿である。底部外面には粘土紐の継ぎ目が、同心円状に認められる。底部から口縁部へは緩やかに曲がりながら続く。口縁端部はやや肥厚する。

【柱穴417】

81は土師器皿である。底部はヘラ切りごナデ調整が施される。平高台状を呈する底部から、外方へ水平に張り出した後、外上方へ開く口縁部を見せる。

82は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。底部の粘土板は、口縁部と底部の接点よりも外側まで残されている。

《第４群》（第27・28図）

【柱穴318】

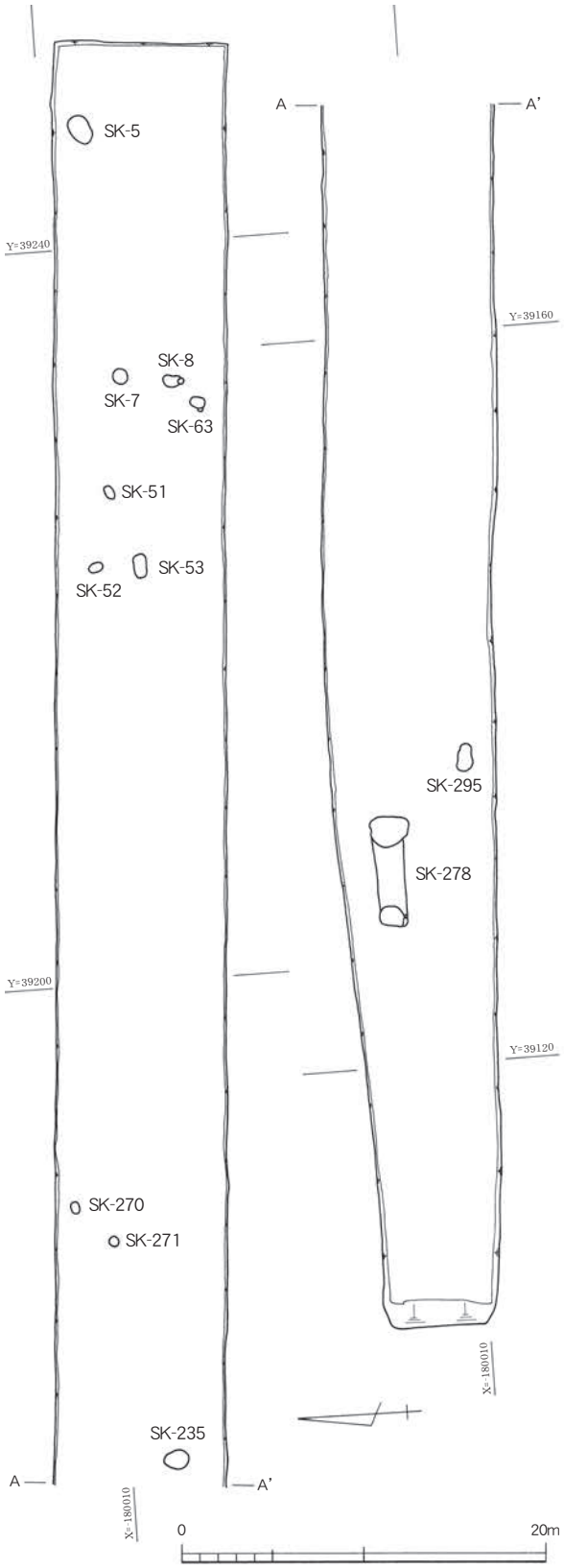
83は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。底部と口縁部の境界は明瞭な稜をなし、口縁部はごく短く立ち上がる。

【柱穴359】

84は土師器皿である。底部は、切り離し後にナデ調整が施されており、切り離し方法は不明である。底部と口縁部の境界は明瞭である。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がる。

【柱穴372】

85は土師器椀である。内外面ともに指頭圧痕



第29図　１区土坑位置図

が認められ、またヨコナデ調整が施されている。底部は弱い膨らみをもつ。

【柱穴390】

86は竈の焚き口の庇部分である。

第28図Ｓ５は、礎盤石である。長径24.5㎝、短径19.5㎝、厚さ7.1㎝を測る片岩の板状礫の中央に、直径７㎝のくぼみを穿っており、この部分が柱の基底部にあたるものと考えられる。

２．土坑

土坑は、土坑５が調査区東端に位置する他は、第１群に６基、第３群とその周辺に３基、第４群周辺に２基が位置しており、概ね柱穴の群構成に沿った分布を見せている（第29図）。

【土坑５】

遺構（第30図）

やや歪んだ卵形を呈し、長径160㎝、短径108㎝、深さ28㎝を測る。土坑底面はやや凹凸のある皿状の凹みをみせる。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。

出土遺物

図化可能な遺物は出土しなかったが、外面に羽状タタキを施す瓦質の甕の体部破片、扁平化した輪高台を瓦器椀の破片等が出土している。

時期

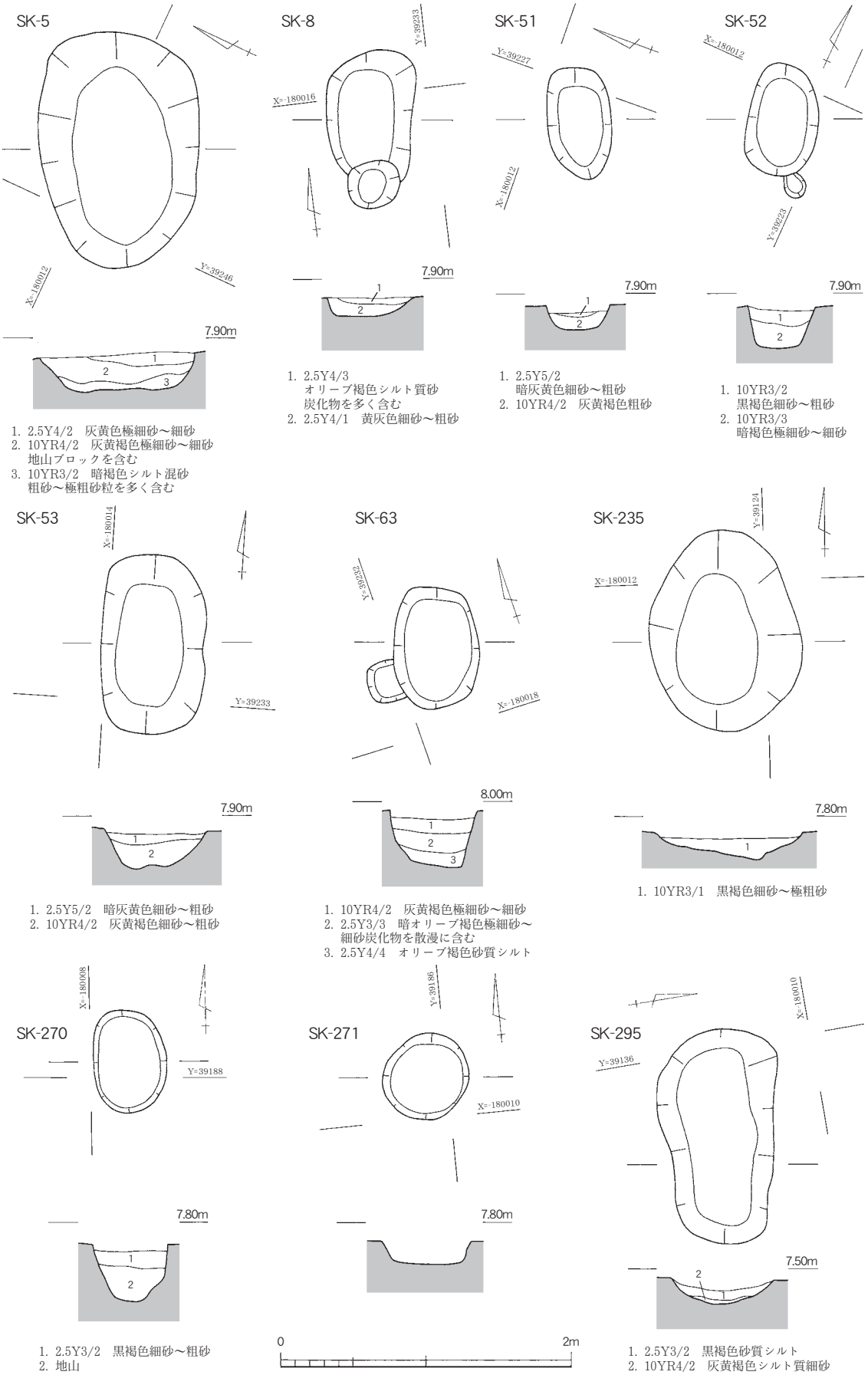
13世紀後半を前後する時期と推定される。

《第１群》

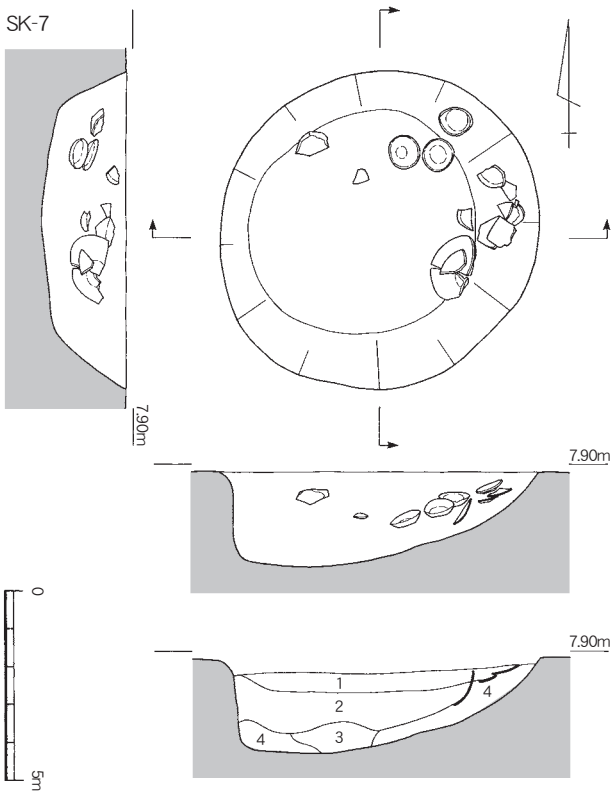
【土坑7】

遺構（第31図）

ほぼ円形を呈する土坑で、直径84㎝、深さ24㎝を測る。土坑底面は、南北断面が緩やかな皿状を呈するのに対し、東西断面では東側が緩やかな掘方、西側は急斜度の掘り込みを見せ、明らかに偏った形状を呈している。土坑内は、細粒の砂またはシルトで順次埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。


SK-5
X=-180012
Y=39246
7.90m
1. 2.5Y4/2　灰黄色極細砂～細砂
2. 10YR4/2　灰黄褐色極細砂～細砂
地山ブロックを含む
3. 10YR3/2　暗褐色シルト混砂
粗砂～極粗砂粒を多く含む
SK-8
Y=39233
X=-180016
7.90m
1. 2.5Y4/3
オリーブ褐色シルト質砂
炭化物を多く含む
2. 2.5Y4/1　黄灰色細砂～粗砂
SK-51
Y=39227
X=-180012
7.90m
1. 2.5Y5/2
暗灰黄色細砂～粗砂
2. 10YR4/2　灰黄褐色粗砂
SK-52
X=-180012
Y=39223
7.90m
1. 10YR3/2
黒褐色細砂～粗砂
2. 10YR3/3
暗褐色極細砂～細砂
SK-53
X=-180014
Y=39233
7.90m
1. 2.5Y5/2　暗灰黄色細砂～粗砂
2. 10YR4/2　灰黄褐色細砂～粗砂
SK-63
Y=39232
X=-180018
8.00m
1. 10YR4/2　灰黄褐色極細砂～細砂
2. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色極細砂～
細砂炭化物を散漫に含む
3. 2.5Y4/4　オリーブ褐色砂質シルト
SK-235
Y=39124
X=-180012
7.80m
1. 10YR3/1　黒褐色細砂～極粗砂
SK-270
X=-180008
Y=39188
7.80m
1. 2.5Y3/2　黒褐色細砂～粗砂
2. 地山
SK-271
Y=39186
X=-180010
7.80m
SK-295
X=-180010
Y=39136
7.50m
1. 2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト
2. 10YR4/2　灰黄褐色シルト質細砂
0
2m

第30図　1区土坑(1)



1. 10YR3/2　黒褐色極細砂～細砂　3. 2.5Y3/2　黒褐色細砂～粗砂
2. 10YR3/1　黒褐色シルト質砂　4. 10YR3/4　暗褐色シルト質砂

第31図　1区土坑(2)

4層の堆積時に、完形の土師器皿を含む土器類が、北東側から流入ないしは投棄されている。

出土遺物（第32図）

87～90は土師器皿である。

87・88は、いずれも回転ヘラ切りの平坦な底部を見せる。底部の縁辺よりやや内側から口縁部が立ち上がるため、口縁部基部より底部が張り出す。口縁部は直線的に立ち上がる。形態上きわめて近似した資料である。

89は、回転ヘラ切りの平坦な底部から、直線的に開く口縁部が立ち上がる。底部と口縁部の境界は明瞭である。

90は、回転ヘラ切りの平坦な底部から、急激に厚みを減じつつ、直線的に開く口縁部が立ち上がる。底部と口縁部の境界は明瞭である。

91は土師器の脚である。高さ3㎝に達する高台は、緩やかに外反しつつ広がる。上部がどのような形態かは不明であるが、脚との接合部付近が急斜度に開く形状を見せる点からは、椀形になる可能性が高いように思われる。

92～94は和泉系瓦器椀である。

92は摩耗が著しいため、ヘラミガキの観察は困難である。高台は断面が逆台形状を呈し、短く外方へ張り出す。

93は内外面にヘラミガキを施す。内面のヘラミガキはやや粗く、回転方向に対してやや斜めに施されている。見込み部には、平行線状のミガキが施されている。体部外面にも、指頭圧痕とともに粗い不規則なヘラミガキが観察される。口縁部はナデ仕上げが施されている。高台は長方形状を呈し、92よりもやや長く外方へ張り出す。尾上編年のⅡ－2期に相当するものであろう。

94は瓦器椀底部である。見込み部のヘラミガキは、不定方向に施される。高台は歪んだ長方形を呈し、強く外方へ張り出す。93同様、尾上編年のⅡ期に属する可能性が高い。

95は須恵器鉢である。平坦な底部から、直線的に立ち上がる体部を見せる。内面は光沢を伴う顕著な摩耗を見せ、使用の結果と考えられる。

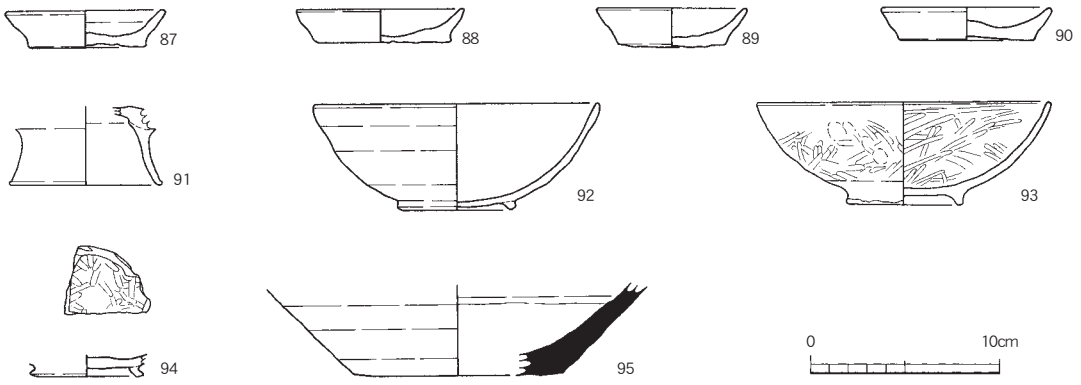
時期

瓦器椀の形態等から、　12世紀後半を前後する時期と考えられる。

【土坑8】

遺構（第30図）

歪んだ楕円形を呈する土坑で、長軸の一端を柱穴によって切られる。短径60㎝、深さ12㎝を測る。土



第32 図　1 区土坑出土遺物(1)

坑底面はやや凹凸のある皿状を呈する。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【土坑51】

遺構（第30図）

長軸の一端が尖り気味の楕円形を呈する土坑である。長径76㎝、短径44㎝、深さ18㎝を測る。土坑底面は緩やかな船底状を呈する。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかったが、土師器椀の破片が出土している。

時期

中世の前半期に属するものと思われる。

【土坑52】

遺構（第30図）

楕円形を呈する土坑で、長径80㎝、短径48㎝、深さ30㎝を測る。土坑底面はほぼ平坦である。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【土坑53】

遺構（第30図）

隅丸長方形を呈する土坑で、長径124㎝、短径72㎝、深さ30㎝を測る。土坑底面には緩やかな凹凸が見られる。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況から見るならば自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【土坑63】

遺構（第30図）

不整楕円形を呈する土坑で長径85㎝、短径59㎝、深さ38㎝を測る。土坑内は細粒の砂およびシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

《第３群》

【土坑235】

遺構（第30図）

卵形を呈する土坑で、長径140㎝、短径106㎝、深さ22㎝を測る。土坑底面は不整形な凹凸を見せる。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかったが、粗いヘラミガキが施された楠葉型瓦器椀の破片が出土している。

時期

12世紀末以降、13世紀代に属するものと思われる。

【土坑270】

遺構（第30図）

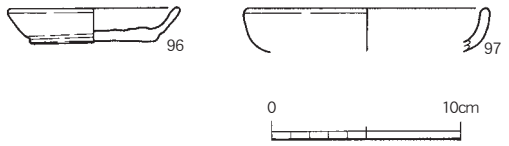
やや歪んだ楕円形を呈する土坑で、長径70㎝、短径52㎝、深さ40㎝を測る。土坑底面は歪んだ船底状を呈する。土坑内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。

出土遺物

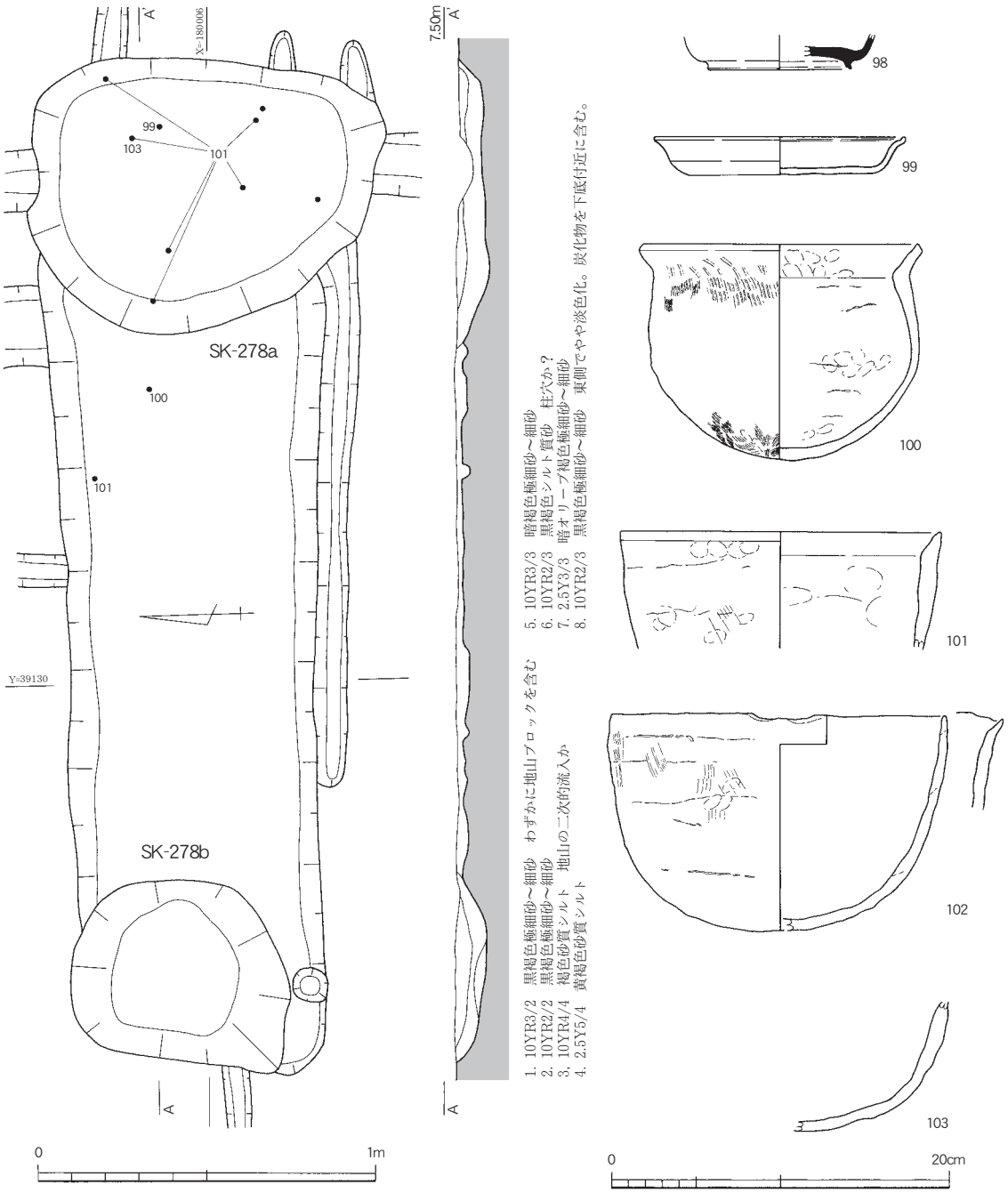
図示可能な遺物は出土しなかったが、粗いヘラミガキが施された瓦器椀の破片が出土している。

時期

12世紀末以降、13世紀代に属するものと思われる。



第33図　1区土坑出土遺物(2)



第34図　土坑278および出土遺物

【土坑271】

遺構（第30図）

円形を呈する土坑で、直径60㎝、深さ18㎝を測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物（第33図）

96は土師器皿である。底部は回転糸切りである。底部は一見平高台状に見えるが、これは切り離し位置がややいびつであったために生じた形態であろう。口縁部は、ほぼ直線的に開いて立ち上がり、底部との境界は明瞭である。

97は土師器皿である。体部と底部の境界は強い丸みをおびる。

時期

中世前半期に属するものと思われる。

《第４群》

【土坑278（a・b）】

遺構（第34図）

調査区西部に位置し、掘立柱建物跡15の北に隣接する。検出段階では、長さ３m、幅１mの長大な隅丸の短冊形の土坑と認識していたが、調査の結果、東西に歪んだ楕円形の土坑が検出され、その間が短冊形の浅い掘り込みでつながった状況であることが明らかになった。このため、東側の土坑を278a、西側を278bと呼称した。平面・断面の精査では、これらの間に重複関係は認められず、従ってこれらの埋没は概ね同時期であったと考えられる。

土坑278aは、長径106㎝、短径82㎝、深さ10㎝の不整楕円形を呈する。土坑内の堆積物は、細粒の砂を主体としており、堆積状況から自然埋没と推定される。土坑内からは、土器が散在して出土した。同一個体の土器片がまとまりを示すことから、これらは土坑内に廃棄されたものと思われる。

土坑278bは、長径65㎝、短径54㎝、深さ10㎝の不整隅丸多角形を呈する。土坑内の堆積物は、細粒の砂を主体としており、堆積状況から自然埋没と推定される。土坑内からは少量の土器が出土している。

278aと278bをつなぐ部分は、幅80㎝、深さ４㎝の短冊形を呈する。堆積物は278a・bと変わるところがなく、堆積順序からは、まずこの短冊形の部分が埋没し、その後278a・bが埋没している。

遺物（第34図）

土坑278aとその周辺よりまとまって出土したほかは、細片の土器がごく散漫に出土したのみである。

98は、須恵器杯Ｂ底部である。高台はやや外方に開き、畳付部は内傾する。丁寧な仕上げにより、高台の内外側面と畳付部との境界には、明瞭な稜線が形成される。

99は土師器皿である。平坦に作られた底部から、屈曲して立ち上がり外反する口縁部に至る。口縁部内面には１条の沈線を設ける。全体にユビオサエによる成形の後、ナデ調整を施す。

100は、土師器甕である。ほぼ球形の体部をもち、口縁部外面は平行タタキが施される。外面の広い範囲が二次的な被熱により赤色化しており、底部には直径10㎝ほどのススの付着が見られる。

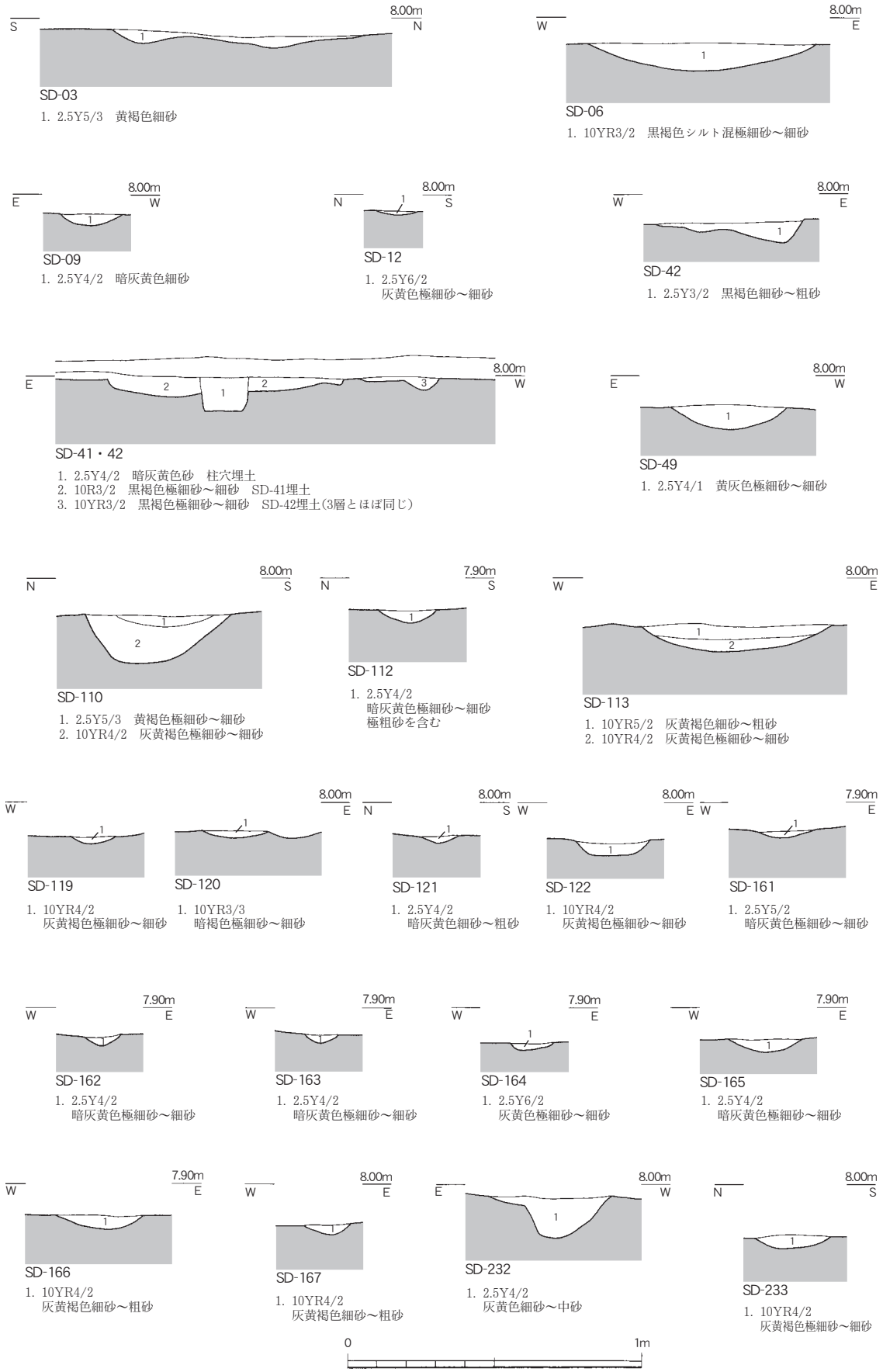
101は土師器鉢である。わずかに開き気味に立ち上がる口縁部を見せ、一端に片口を作る。

102は土師器鉢である。半球形の底部からやや内傾気味に口縁部に至る。体部は口縁部に向かって肥厚し、急に厚みを減じて口縁端部に至る。口縁部内面には傾斜する面を設ける。粘土紐の説接合痕が顕著な粗製土器で、内外面に指頭圧痕をとどめている。二次的に火熱を受けている。

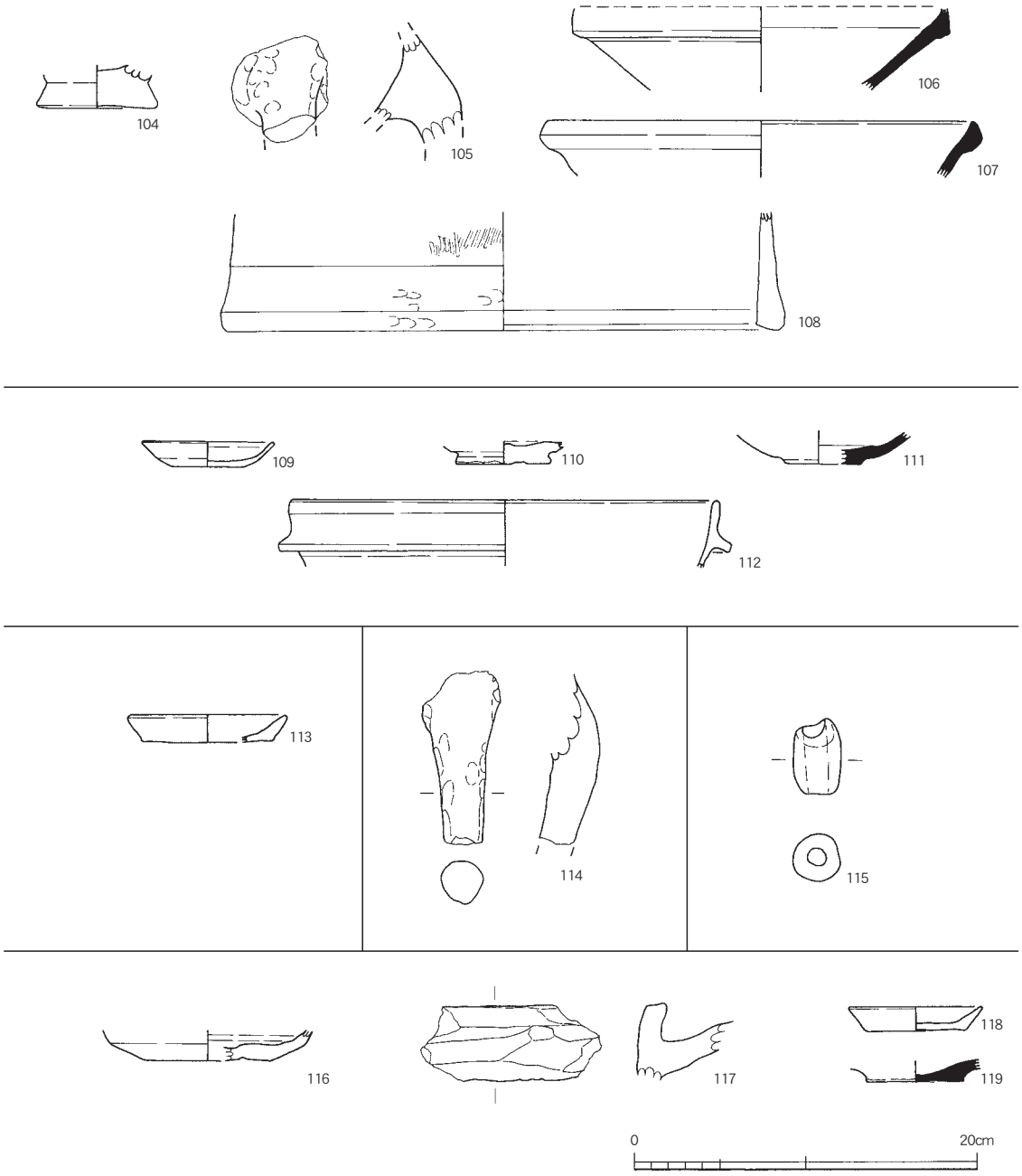
103はやはり粗製土器の体部破片である。101・102と類同の資料と思われる。

時期

須恵器杯Ｂおよび土師器皿の形態等から、奈良時代に属すると考えられる。


S
8.00m
N
SD-03
1. 2.5Y5/3　黄褐色細砂
W
8.00m
E
SD-06
1. 10YR3/2　黒褐色シルト混極細砂～細砂
E
8.00m
W
SD-09
1. 2.5Y4/2　暗灰黄色細砂
N
8.00m
S
SD-12
1. 2.5Y6/2
灰黄色極細砂～細砂
W
8.00m
E
SD-42
1. 2.5Y3/2　黒褐色細砂～粗砂
E
8.00m
W
SD-41・42
1. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂　柱穴埋土
2. 10R3/2　黒褐色極細砂～細砂　SD-41埋土
3. 10YR3/2　黒褐色極細砂～細砂　SD-42埋土(3層とほぼ同じ)
E
8.00m
W
SD-49
1. 2.5Y4/1　黄灰色極細砂～細砂
N
8.00m
S
SD-110
1. 2.5Y5/3　黄褐色極細砂～細砂
2. 10YR4/2　灰黄褐色極細砂～細砂
N
7.90m
S
SD-112
1. 2.5Y4/2
暗灰黄色極細砂～細砂
極粗砂を含む
W
8.00m
E
SD-113
1. 10YR5/2　灰黄褐色細砂～粗砂
2. 10YR4/2　灰黄褐色極細砂～細砂
W
8.00m
E
SD-119
1. 10YR4/2
灰黄褐色極細砂～細砂
SD-120
1. 10YR3/3
暗褐色極細砂～細砂
N
8.00m
S
SD-121
1. 2.5Y4/2
暗灰黄色細砂～粗砂
W
8.00m
E
SD-122
1. 10YR4/2
灰黄褐色極細砂～細砂
W
7.90m
E
SD-161
1. 2.5Y5/2
暗灰黄色極細砂～細砂
W
7.90m
E
SD-162
1. 2.5Y4/2
暗灰黄色極細砂～細砂
W
7.90m
E
SD-163
1. 2.5Y4/2
暗灰黄色極細砂～細砂
W
7.90m
E
SD-164
1. 2.5Y6/2
灰黄色極細砂～細砂
W
7.90m
E
SD-165
1. 2.5Y4/2
暗灰黄色極細砂～細砂
W
7.90m
E
SD-166
1. 10YR4/2
灰黄褐色細砂～粗砂
W
8.00m
E
SD-167
1. 10YR4/2
灰黄褐色細砂～粗砂
E
8.00m
W
SD-232
1. 2.5Y4/2
灰黄色細砂～中砂
N
8.00m
S
SD-233
1. 10YR4/2
灰黄褐色極細砂～細砂
0
1m

第35図　Ⅰ区溝断面(1)



第37図　1区溝出土遺物(1)

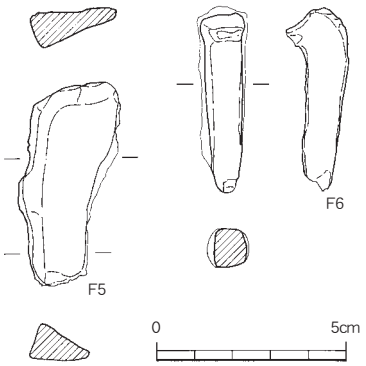
3．溝

今回の調査区で検出された溝は、単独で存在するものと、多数の溝が平行ないし直交する「溝群」の様相を呈するものとがある。溝の大部分は、重複関係、位置、方向などからみて掘立柱建物跡とは無関係に成立したものと考えられる。従って、掘立柱建物跡・柱穴等からみた遺構群集とは無関係のものとして、以下では遺構番号の若い順に記載をおこなう。ただしⅠ区中央付近に位置する溝群については、その性質上、一括して記載する。

【溝1・2】

遺構（第36図）

調査区東端に位置し、東半が調査区外にあるため幅は不明である。調査時に壁面が崩壊したため深さを確認することができず、地層断面を図化することもできなかったが、概ね礫混じりの砂ないしシルト



第38図　１区溝出土遺物(2)

質砂で埋積されていたことおよび規模などから、旧河道と推定される。溝２と命名したものは、溝１の西に沿って延びており、溝１の一部であったと思われることから、遺構図等では一括して示している。

出土遺物（第37図）

104は土師器底部である。断面が台形状を呈する柱状高台であるが、上部形態は不明である。全体に摩耗が著しい。

105は土師質釜の脚である。全体に指頭圧痕が顕著である。

106は東播系須恵器鉢である。口縁部は肥厚し外側に直立する面を作る。口縁端部は上方へ張り出す。

107も東播系須恵器鉢である。口縁部は肥厚して玉縁状を呈し、口縁端部は上方へ弱く張り出す。

108は鉢あるいは竈の基部であろうか。肥厚する端部を見せ、外面は平行タタキが施される。

第38図Ｆ５は、器種不明の鉄製品である。断面は三角形を呈し、器表面はわずかに凹面をなす。

時期

図示した遺物は、いずれも埋土中位からの出土であり、溝１の成立時期を示すものではないが、東播系須恵器鉢の形態から、溝埋没過程は12世紀末～13世紀前半の時期を含むものであろう。

【溝３】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、ゆるやかに曲がりながら東西方向にのびる。途中で一か所の断続があるが、総延長約38m、最大幅1.2mを測る。深さは５㎝前後と浅い。溝底は緩やかに起伏する。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかったが、粗いヘラミガキを施した和泉系瓦器椀が出土している。

時期

尾上編年のⅢ期ないしⅣ期に相当すると思われる。

【溝６】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、北北西－南南東方向に直線的にのびる。最大幅90㎝、深さは10㎝前後を測る。溝内はシルト混じりの砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（第37図）

109は土師器皿である。回転ヘラ切りの底部から、緩やかに開いて立ち上がる口縁部を見せる。口縁部と底部の境界は丸みをおびる。

110は土師器椀（？）の底部である。低い平高台状を呈する底部は、回転ヘラ切りである。

111は東播系須恵器椀である。低い平高台を見せ、底部は回転糸切りである。

112は土師器羽釜である。鍔は断面形が長方形を呈し、やや下向きに設けられている。口縁部より２㎝程度下から、ススの付着が認められる。

時期

東播系須恵器椀などから、12世紀末を前後する時期と考えられる。

【溝９】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、わずかに曲がりつつほぼ南北にのびる。最大幅35㎝、深さは５㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。溝10・13・42・49等と方向や規模が近似する。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝10】

遺構（第36図）

調査区東部に位置し、ほぼ南北にのびる。最大幅20㎝、深さ３㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。溝11・12・13と隣接し、埋土も類似することから、一群の溝群と認識される。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝11】

遺構（第36図）

調査区東部に位置し、溝12から分岐してほぼ東西にのびる。最大幅15㎝、深さは３㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。溝12とは明確な重複関係が見られず、同時存在と推定される。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝12】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、ほぼ東西にのびる。最大幅20㎝、深さは３㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。中央付近で溝11が分岐するほか、溝10と直交するが、いずれとも明確な重複関係が見られず、同時存在と推定される。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝13】

遺構（第36図）

調査区東部に位置し、ほぼ南北にのびる。最大幅15㎝、深さ３㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝41】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、次の溝42の東に接するように南北にのびる。最大幅130㎝、深さ15㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示できないが、東播系須恵器椀、断面が鋭い三角形を呈する高台をもつ瓦器椀が出土した。

時期

須恵器椀、瓦器椀等から、12世紀末～13世紀前半にあたるものと思われる。

【溝42】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、直線的に南北にのびる。掘立柱建物跡１・２などと重複する。最大幅25㎝、深さは８㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（第37図）

113は土師器皿である。平坦な底部から、開いて直線的に立ち上がる口縁部を見せる。

時期

中世前半期に属するものであろう。

【溝49】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、蛇行しながら南北にのびる。最大幅50㎝、深さは９㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝110】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置しほぼ東西にのびる短い溝で、溝41と直交してこれを切っている。延長2.2m最大幅55㎝、深さは17㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積され、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかったが、極めて薄手に作られた、底部糸切りの土師器皿が出土している。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝112】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、溝３に近接して東西にのびる短い溝である。延長1.9m、最大幅35㎝、深さは５㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝113】

遺構（第35・36図）

第２群の柱穴群の西に位置し、直線的に南北にのびる。最大幅80㎝、深さは10㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（第37図）

114は土師器羽釜の脚である。指頭圧痕が顕著に観察される。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝118】

遺構（第36図）

第２群の柱穴群の西に位置し、ＳＸ－111（遺物包含層の凹部）を切る溝である。溝113とほぼ同規模・同方位である。最大幅80㎝前後を測る。

遺物（第37図）

115は土師器土錘である。器表面は摩耗が著しい。このほかに顕著な出土遺物は見られなかった。ほかに、19世紀代と思われる磁器片が出土している。

時期

近世末以降に属する。

【溝119】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、南北にのびる短い溝である。延長1.9m、最大幅15㎝、深さは３㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかったが、瓦器椀の破片が出土している。

時期

中世前半期に属するものと思われる。

【溝120】

遺構（第35・36図）

溝119の北西に接する短い溝である。延長0.9m、最大幅22㎝、深さは３㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝121】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、東西にのびる短い溝である。延長1.7m、最大幅12㎝、深さは３㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝122】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、南北にのびる短い溝である。方向は溝119とほぼ同じである。延長2.2m、最大幅25㎝、深さは５㎝前後を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝160】

遺構（第36図）

調査区東部に位置し南北にのびる溝で、ＳＸ－78（包含層の凹部）を切る。最大幅30㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝161】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、南北にのびる短い溝である。延長95㎝、最大幅20㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝162】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、溝163に隣接して南北にのびる。北端は溝164に切られる。最大幅16㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝163】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、溝162に隣接して南北にのびる。北端は溝164に切られる。最大幅12㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝164】

遺構（第35・36図）

調査区東部に位置し、東南東－西北西にのびる。最大幅15㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されてお

り、堆積状況から自然埋没と考えられる。溝163を切る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝165～167】

遺構（第35・36図）

第２群内に位置し、相互に重複関係があることから、一括して記載する。溝165・166は南北方向、167は東西方向にのびて直交する。重複関係が識別できなかったことから、ほぼ同時期に成立した遺構群と考えられる。溝165の最大幅は25㎝、166は30㎝、167は15㎝を測る。いずれの溝内も細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかったが、ＳＤ－166より瓦器椀の破片が出土している。

時期

中世前半期に属するものであろう。

【溝232】

遺構（第35・36図）

第１群と第２群の間に位置し、南北に直線的にのびる。最大幅90㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝233】

遺構（第35・36図）

第２群の西に位置し、調査区南壁沿いに東西にのびる。最大幅25㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（第37図）

図示可能な遺物は出土しなかった。

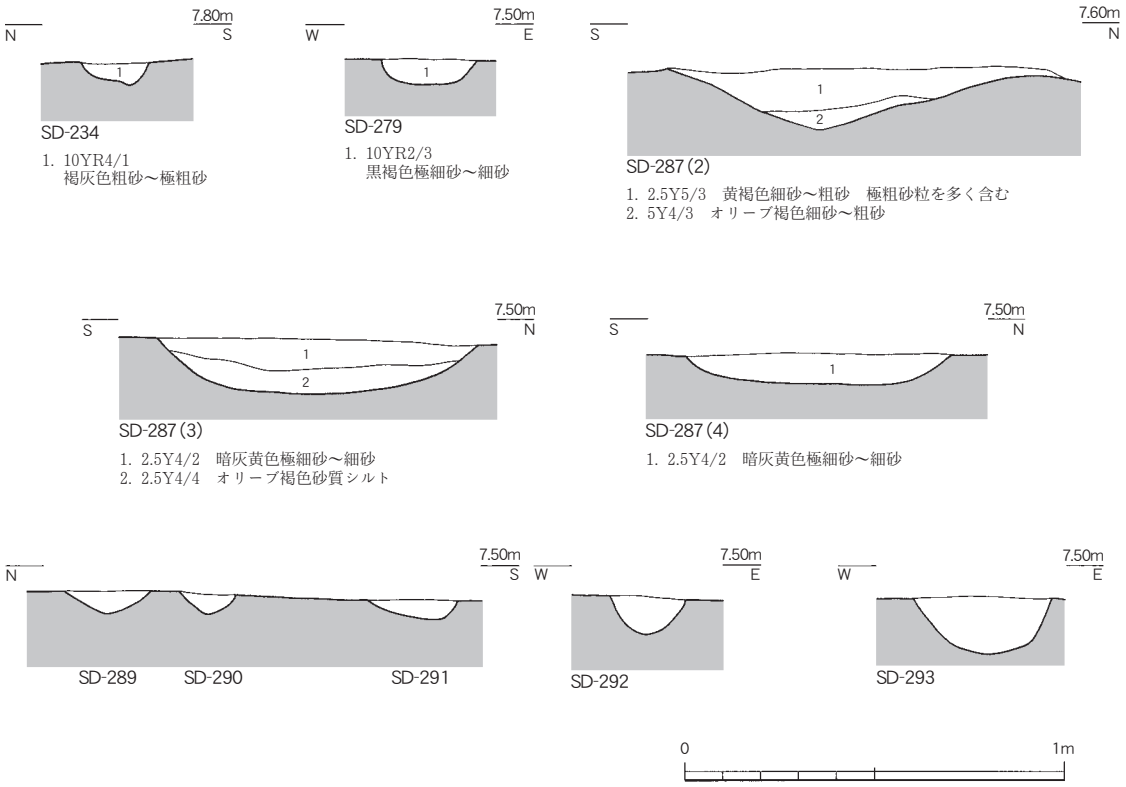
時期

時期を推定する資料に欠ける。

【溝234】

遺構（第39図）

第３群の北に接し、掘立柱建物跡８～11の柱穴列に平行することから（第17図）、いわゆる「雨落ち溝」ないしは建物敷地の区画溝と考えて大過ないだろう。検出された溝の中で、唯一、掘立柱建物跡と



第39図　1区溝断面(2)

の関係が推定される溝である。最大幅20㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（第37図）

116は土師器杯である。平坦な底部から一旦屈折して立ち上がる体部を見せる。全体に摩耗が著しい。内面は黒色を呈する。

時期

中世前半期に相当すると考えられ、これは掘立柱建物跡の推定時期とも矛盾しない。

【溝279】

遺構（第35・39図）

第4群の北に位置し、土坑278の西～北に接するように、屈折しながらのびる。溝282と交差するが、重複関係は認められなかった。また、東側を溝296に切られる。最大幅25㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（第37図）

117は竈の庇部分と考えられる破片である。

時期

推定する資料に欠けるが、中世前半期におさまるものと思われる。

【溝287】

遺構（第35・39図）

第3群の西、掘立柱建物跡16の南付近から、第4群を経て調査区西端に至るまでの間、緩やかに蛇行しながら東西にのびる。その形状は溝3に酷似している。溝287の北側には、多数の溝が交錯する「溝

群」があり、南側にはこれらの溝がまったくのびないことから、何らかの区画機能をもつ溝と考えられる。最大幅170㎝、深さ30㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

出土遺物（第37図）

118は土師器皿である。底部は回転糸切りで、そこからほぼ直線的に立ち上がる口縁部を見せる。

119は東播系須恵器椀である。底部は回転糸切りで、わずかに平高台状を呈する。

ほかに図示できなかったが、青磁碗の口縁部破片、平高台をもつ白磁皿の底部が出土している。

時期

12世紀末〜13世紀前半に相当すると考えられる。

《 溝群 》

遺構（第35・39図）

第３群と第４群との間、溝287の北側に、多数の溝が東西・南北方向に交錯している。これらの溝は、断面でも重複関係が看取されず、ほぼ同時に形成され埋没したものと判断された。その性状からいわゆる「鋤溝」と考えられる。個別に記載するのは煩雑であるため、一括して記載する。

溝群に属する、遺構番号を与えられた溝は、以下のとおりである。

溝280・281・282・285・286・289・290・291・292・293・294・296・304・306・307・308・309・310・311・312・313・314・315・317

溝は広いもので幅50㎝、狭いものでは10㎝ほどである。東西方向の溝は、溝287に沿うようにのびており、南北方向の溝は、溝311と282との間に集中する。

出土遺物

第38図　Ｆ６は、溝286より出土した鉄釘である（写真図版30）。このほか、溝286からは鉄滓が出土している。他の溝からは図示可能な遺物は出土しなかったが、下記の遺物が出土している。

溝280：底部回転ヘラ切りの土師器皿・土師器平高台破片　溝281：瓦器椀

溝282：東播系須恵器椀　溝291：瓦器椀　溝304：瓦器椀　溝308：外面下半部が露胎の白磁片

時期

以上のような出土遺物から、溝群については、12世紀末〜13世紀代におさまる耕作痕と思われる。

４．包含層出土の遺物（第40・41図）

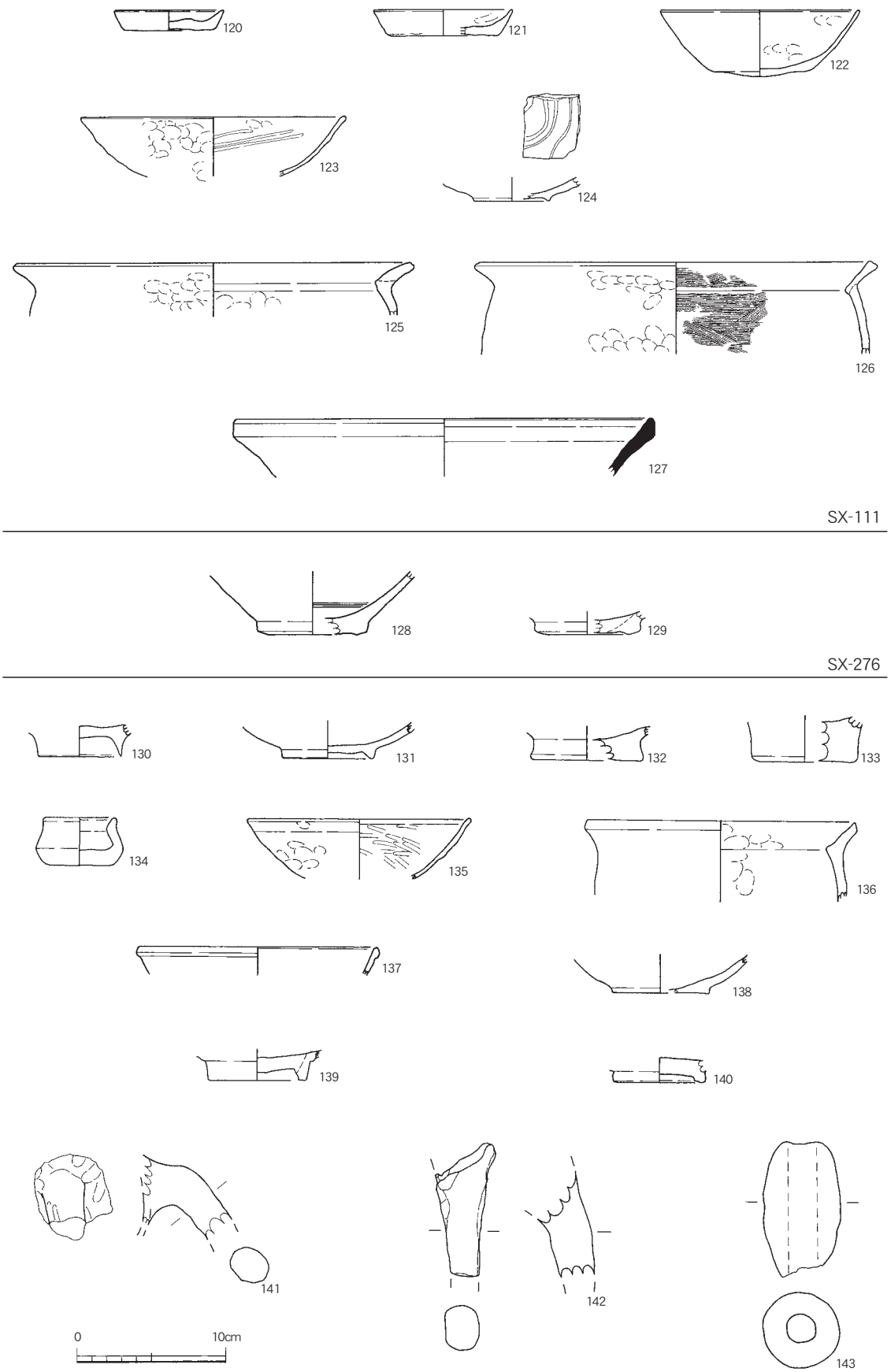
ここでは、本遺跡で広く見られた遺物包含層から出土した遺物、および、調査時に不明遺構（ＳＸ）として調査したものから出土した遺物のうち図化したものを掲載する。

当初不明遺構として調査したものは、いずれも地山の浅い凹地に遺物包含層が残り、遺構検出作業時に、一見、遺構のように識別されるものであった。ただし、ＳＸ番号をつけた場所から出土した遺物については、このＳＸ番号を単位としてそのまま報告する。これは、遺物の出土した領域が限定されることから、地点による遺物包含層の差異を念頭に置いたためである。

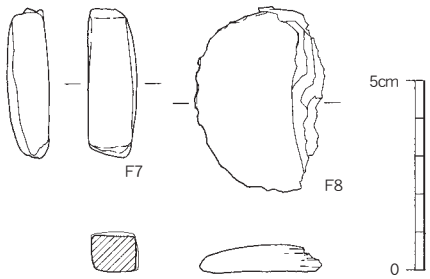
【ＳＸ－111出土の遺物】

120・121は土師器皿である。120は、平坦な底部から短く立ち上がる口縁部を見せる。121もほぼ類同の形態を示すが、立ち上がりはやや長い。

122は土師器椀である。底部は回転ヘラ切りであり、内面に指頭圧痕をとどめる。



第40図　1区包含層出土の遺物(1)



第41図　１区包含層出土の遺物(2)

123は瓦器椀である。内面は粗いヘラミガキが施されるが、外面は全体に指頭圧痕が残り、ヘラミガキは認められない。口縁部はやや外反する。和泉型瓦器椀の、Ⅲ－３ないしⅣ－１期に属する。

124は瓦器椀底部である。やや鈍い断面三角形の高台を見せ、見込み部には粗い圏線状のヘラミガキが施されている。

125は土師器鍋である。屈曲して開く短い口縁部を見せ、口縁端部には面を作る。

126は土師器鍋である。屈曲して開く口縁部を見せ、口縁端部はやや肥厚して端部に面を作る。内面は横方向のハケ調整が施される。

127は東播系須恵器鉢である。口縁端部は肥厚し、外側に面を設ける。

第42図Ｓ６は、大型の自然礫を用いた砂岩製砥石である。下半を失っている。片面を研磨面としており、緩やかな凹面をなす。

【ＳＸ－276出土の遺物】

128は白磁碗である。体部下半は露胎となる。見込み部には２条の沈線が巡る。

129は白磁碗の高台であるが、作りはやや鈍い。外面は露胎である。

【包含層出土の遺物】

130は土師器椀底部である。高台は断面形が高く鋭い三角形を呈する。

131は土師器椀である。断面形が鈍い三角形の高台をもつ。内面は暗色を呈する。

132は土師器の柱状高台である。上部は皿状に開くと思われる。底面の中心からやや偏った位置に、浅い孔が見られる。

133は土師器の柱状高台である。底面の切り離し等は確認できない。

134は土師器小壷である。底部は回転糸切りである。

135は和泉型瓦器椀である。内面のヘラミガキは粗く、外面にはヘラミガキは施されない。

136は土師器鍋であろうか。口縁部の屈折は弱い。口縁端部には面を設ける。

137は白磁碗である。小さな玉縁を作る。

138は緑釉陶器である。内面の釉薬は剥落が顕著である。底部は回転ヘラ切りである。

139は白磁碗である。高台は断面が高い台形を呈する。高台は露胎であるが、体部下端まで施釉されている。

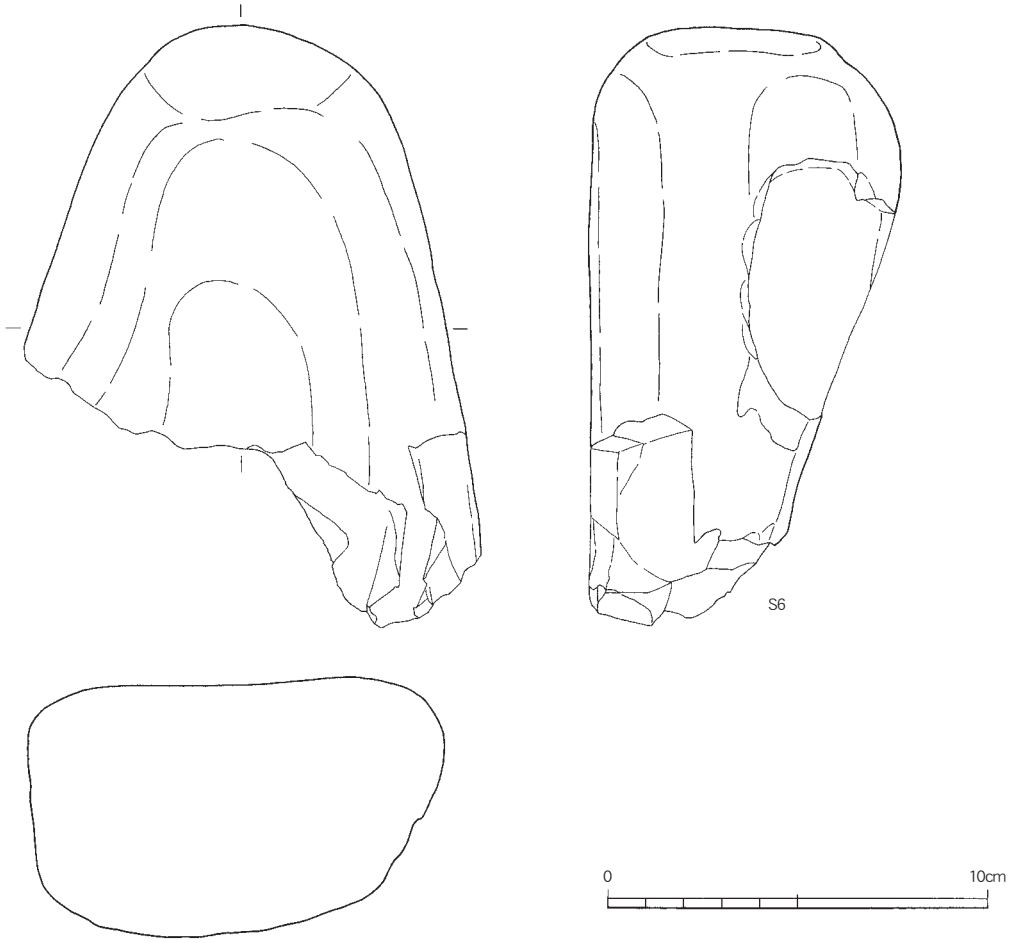
140は竜泉窯系青磁碗の底部である。高台内外面および畳付部にも施釉されており、高台内底面のみ露胎であることから、横田・森田による分類のⅡ類に相当するものと思われる。

141・142は土師器羽釜の脚である。外面には指頭圧痕が認められる。

143は土師質の土錘である。全体に摩耗が進行している。

第41図Ｆ７は鑿状の鉄器である。断面は長方形を呈し、下端は刃部状に厚みを減じる。

第41図Ｆ８は器種不明の円盤状鉄製品である。片面は平坦、他の面は凸面に作る。図右側面は破断面であるが、一見すると薄板を重ねたような構造に見える。



第42図　1区包含層出土の遺物(3)

(3) 小結

遺構の時期

鳥飼中瀬遺跡Ⅰ区で検出された遺構群は、土坑278が奈良時代～平安時代初頭に相当するほかは、12世紀後半以降、14世紀初頭の範囲におさまるものと思われる。調査範囲が、建物跡集中部の縁辺をかすめるような位置にあることから、時期ごとの詳細な建物跡の消長は示し得ないが、比較的限定された時期幅の中で集落が形成され、継続したことは間違いないだろう。

今少し細かく見るならば、第1群に位置する掘立柱建物跡では、1・3が12世紀末～13世紀初頭にあたる。また、同群中に位置する土坑7は、12世紀後半と推定される。しかし同群の柱穴には、13世紀末～14世紀初頭にあたる瓦器椀を出土したものもあることから、第1群の掘立柱建物跡・柱穴は、概ね12世紀後半～13世紀代に属するものと考えて大過ないだろう。

第2群では、掘立柱建物跡7が13世紀代と推定されるほかは、時期の決定に有力な資料が乏しい。

第3群では、掘立柱建物跡9・10がともに13世紀末を前後する時期と推定されるほか、柵2も13世紀後半代と考えられる。また同群中の柱穴にも、この時期に相当する遺物を出土したものが見られた。しかし同群中の土坑235・270では、12世紀末～13世紀初頭にあたる遺物が出土しており、若干の時期差が認められる。

第4群では、土坑278が奈良時代の遺物を出土しており、鳥飼中瀬遺跡では突出して古い時期にあた

る。このほかの遺構では、積極的に時期を推定する資料に欠けるが、掘立柱建物跡については、柱穴の形状・規模や建物の形式等から、他の群同様に中世前半期の中におさまるものと推定している。

周辺に柱穴群を伴わない掘立柱建物跡16は、12世紀末〜13世紀初頭に成立しており、付近の溝には切られている。

以上のような状況を総括するならば、鳥飼中瀬遺跡１区では、奈良時代にきわめて限定的な遺構形成があり、その後300年以上、遺構は空白の状況が続く。12世紀の後半〜末に、第１群と第３群の一部および掘立柱建物跡16などで掘立柱建物跡をはじめとする遺構群の形成が始まり、13世紀のおそらく後半に、第２・３群でも掘立柱建物跡が成立したようである。

溝の時期を確定するのは難しいが、多くの場合、掘立柱建物跡の時期と大差ない、12世紀末〜13世紀代の遺物を出土していることから、掘立柱建物跡に近接した時期のものと考えてよかろう。掘立柱建物跡16のように、溝群が明らかに建物跡の柱穴を切る例では、建物の廃絶後、速やかに耕地化が進行したことが考えられる。建物跡16周辺に柱穴群が伴わないことも、これを傍証するものである。

遺構の機能

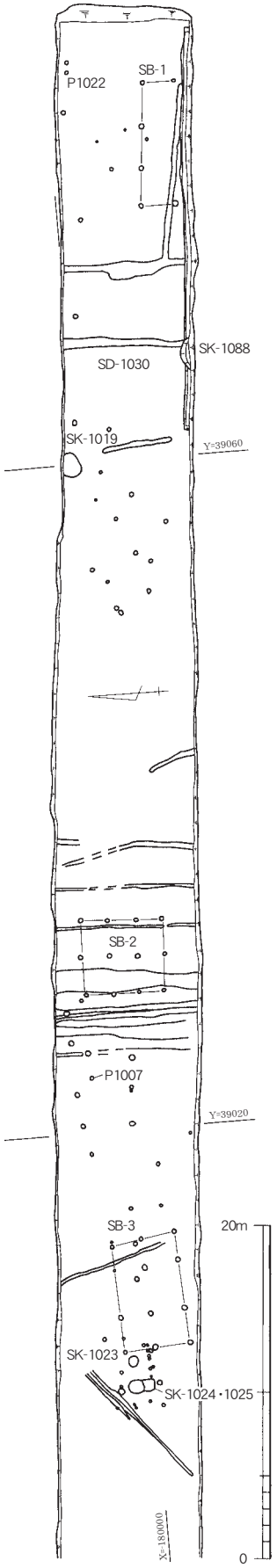
土坑278で出土した土師器甕・鉢類を観察すると、いずれもごく粗製の土器であり、二次的な火熱を受けていることから、これらはいずれも製塩土器と判断して大過ないだろう。

土坑壁そのものには被熱の痕跡がなく、製塩炉に見られるような礫の集積や焼けた礫も確認できなかったことから、調査地点そのものが製塩炉であったとは考えがたいが、当該時期に、何らかの製塩施設が、近傍に所在した可能性は高いと思われる。

貴船神社遺跡では、丸底Ⅱ式の製塩土器が明らかに奈良時代まで継続するとされており（渡辺　昇　2001)、 本遺跡の事例もこれに相当すると考えられる。

参考文献

渡辺　昇　2001　「製塩土器について」『貴船神社遺跡』　兵庫県教育委員会



第43図　2区平面図

2．鳥飼中瀬遺跡2区

(1) 概要

【調査区内の遺構分布】

2区では、掘立柱建物跡を含む柱穴、土坑、溝が検出された。遺構の分布密度は1区と比較して低いが、1区同様数群のまとまりを見せる（第43図）。調査区西端付近は旧地形の谷部にあたる。遺跡形成時には谷部はすでに埋没していたが、堆積物から見ると依然としてやや低湿な堆積環境にあったようで、この上面には遺構は分布していなかった。また、2区では概して遺物包含層の遺存状況が劣悪であった。

なお本地区の遺構には、1001からの通番を付している。

掘立柱建物跡は、調査区東端に建物跡1が位置するほか、調査区中央部～西部に2・3がある。建物跡に復元できなかった柱穴も、概ね建物跡の周辺に分布している。土坑は、掘立柱建物跡1の西側に、土坑1019と1088が位置するほか、調査区西部の掘立柱建物跡3の西側に、1023・1024・1025の3基がある。溝は、調査区中央部に顕著に集中する。溝1001～1005と1010～1012である。同じ領域に掘立柱建物跡2があるが、遺構の重複関係から、建物跡が溝よりも古いことが確認できる。

(2) 遺構と遺物

1．掘立柱建物跡・柱穴

【掘立柱建物跡1】

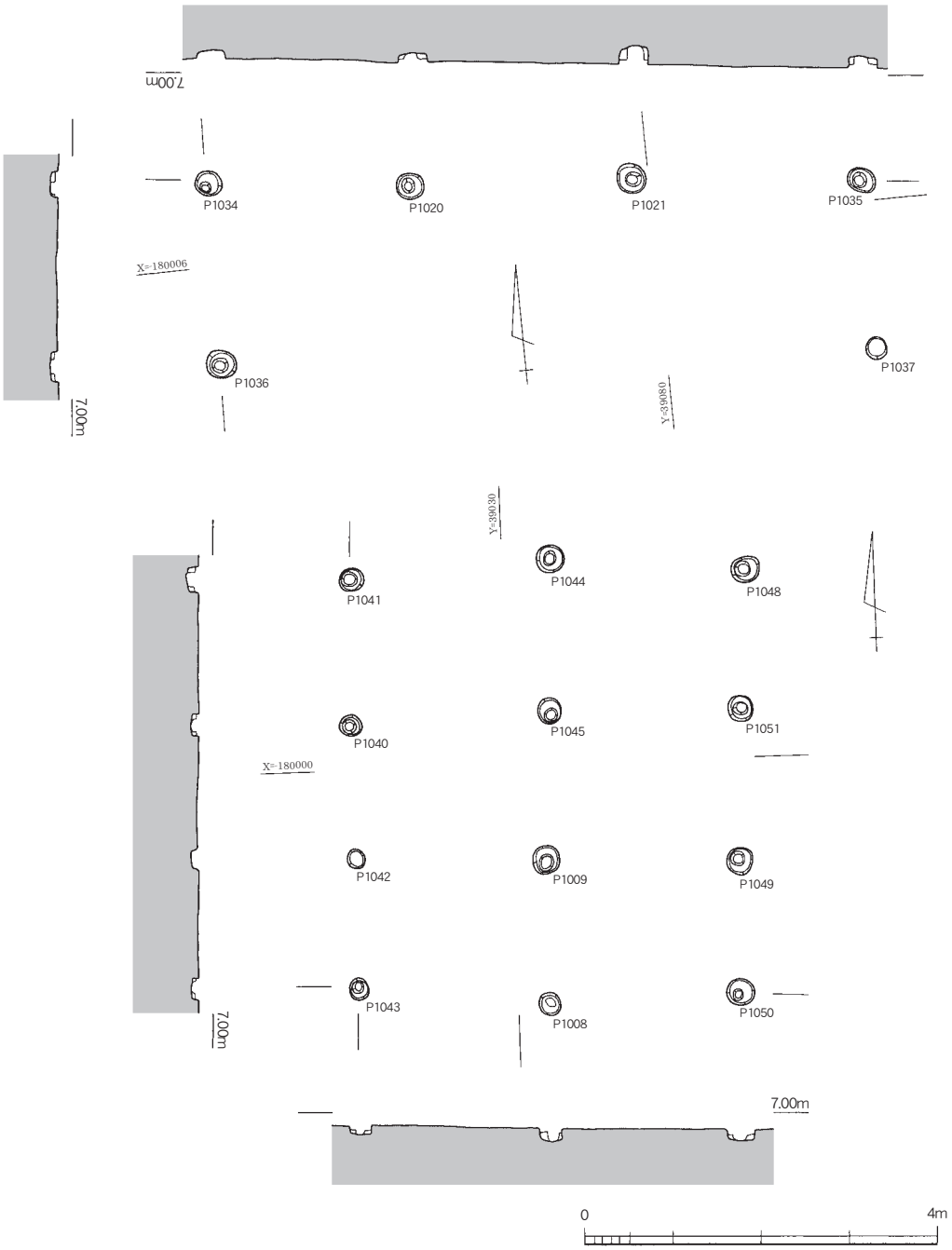
遺構（第44図）

調査区東端に位置する、側柱式の建物跡である。建物跡の北辺（3間）と、東西各辺1間分、合計6基の柱穴が検出されたが、建物跡の大部分は南側の調査区外に位置している。建物跡北辺の柱間は2.24m～2.64m、東および西辺の柱間は、それぞれ1.88mと2.00mである。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径26㎝～36㎝を測る。長軸の方位が南北にあるか東西にあるかは不明であるが、北辺の柱穴1034と柱穴1035を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N84.2°Wであり、ほぼ真南北（または東西）方向に軸線をもつと考えられる。

遺物（第45図）

144は、柱穴1020より出土した土師器皿である。全体に器厚が厚い。底部は回転ヘラ切りである。口縁部は、底部から直線的に開いて立ち上がる。底部と口縁部の境界は、比較的明瞭である。

145は、柱穴1020より出土した土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。底部と口縁部の境界はやや鈍く、口縁部は直線的に開いて立ち上がる。口縁端部は厚みを減じる。



第44図　2区掘立柱建物跡1・2

このほか図示できない遺物であるが、柱穴1021より土師器椀が出土している。

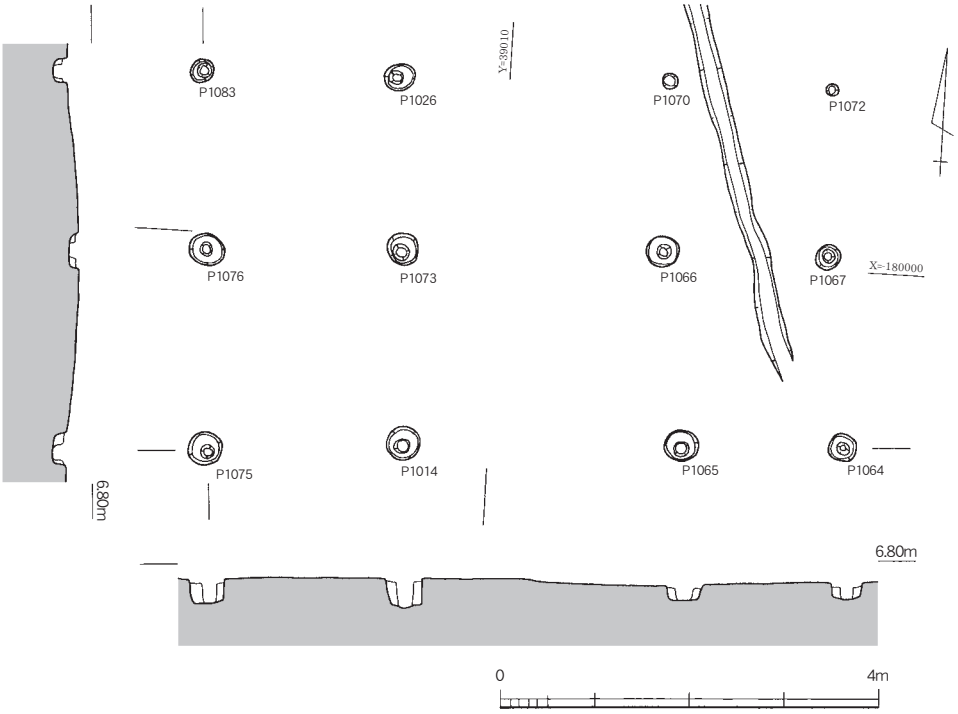
時期

中世前半期に属するものと思われる。

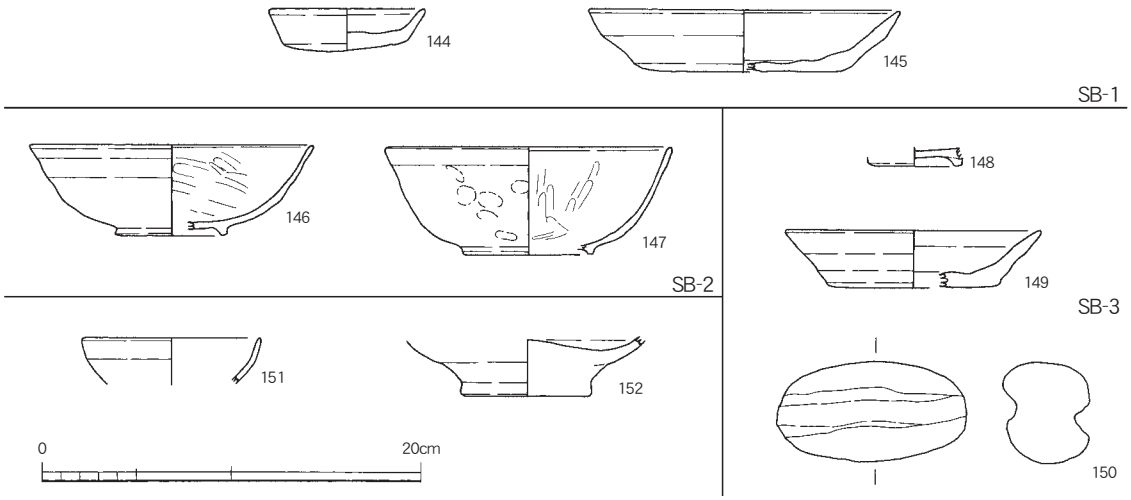
【掘立柱建物跡2】

遺構（第44図）

調査区中央部に位置する、東西2間×南北3間の総柱式の建物跡である。合計12基の柱穴が検出された。中央の柱列が、東西の柱列よりも南北にやや突出している。柱間は梁行きが2.08m～2.20mであるのに対し、桁行きは1.40m～1.72mを測る。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、長径22㎝～32㎝を測る。



第45図　2区掘立柱建物跡3



第46図　2区掘立柱建物跡1～3出土の遺物

床面積は20.7㎡を測る。柱穴1008と柱穴1044を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N2.0°Eで、ほぼ正しく南北棟であると考えていいだろう。

遺物（第46図）

146は、柱穴1008より出土した和泉型瓦器椀である。口縁下部はヨコナデによって外反気味に仕上げている。高台は断面が逆台形を呈し、外方に張り出す。内面にはやや散漫なヘラミガキが見られるが、外面のヘラミガキは不明瞭で、体部下半には指頭圧痕が残る。尾上編年のⅡ－3段階ないしⅢ－1段階に相当するものであろうか。

147は、柱穴1042より出土した和泉型瓦器椀である。体部はやや急斜度に立ち上がる。高台は断面が

方形を呈しほぼ直立する。やや低い高台ではあるが、稜線は明瞭である。摩耗が進んでおり、内面のヘラミガキは明瞭ではない。外面には指頭圧痕が残り、ヘラミガキは観察できない。148同様の段階に属すると考えられる。

このほか図示できない遺物であるが、柱穴1008より楠葉型瓦器椀の口縁部が出土している。

時期

瓦器椀の編年からは、12世紀末〜13世紀初頭に相当する時期と考えられる。

【掘立柱建物跡３】

遺構（第45図）

調査区西部に位置する総柱の建物跡である。調査区内では東西３間、南北２間が確認されたが、さらに南の調査区外へ広がっている可能性がある。合計12基の柱穴が検出された。

遺物（第46図）

148は、柱穴1064より出土した瓦器椀の底部である。高台は断面が逆台形状を呈し、外方へ張り出す。見込み部には平行線状のヘラミガキが認められる。

149は柱穴1014より出土した土師器杯である。底部は回転ヘラ切りである。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、底部と口縁部の境界は明瞭である。

150は、柱穴1075より出土した土師質の土錘である。俵形の錘の側面に紐かけ溝を作る。

時期

瓦器椀の特徴からは13世紀代の範囲で考慮すべきであろう。

掘立柱建物跡以外の柱穴（第43・46図）

掘立柱建物跡に復元できなかった柱穴からも、遺物の出土が見られた。それらのうち、図化可能な遺物について記載をおこなう。なお時期の記載については、小結において一括して記述する。

【柱穴1007】

151は瓦器椀である。口縁下部はヨコナデによって外反気味に仕上げている。小口径化が進行しており、編年上、新しい段階に属するものと思われる。ヘラミガキは観察できない。

【柱穴1022】

152は土師器の柱状高台としてよいだろう。体部の立ち上がりがわずかに残っており、上部は椀状であったと思われる。底部は回転糸切りである。高台はやや内傾して立ち上がり、その後屈曲して大きく開く体部へとつながる。

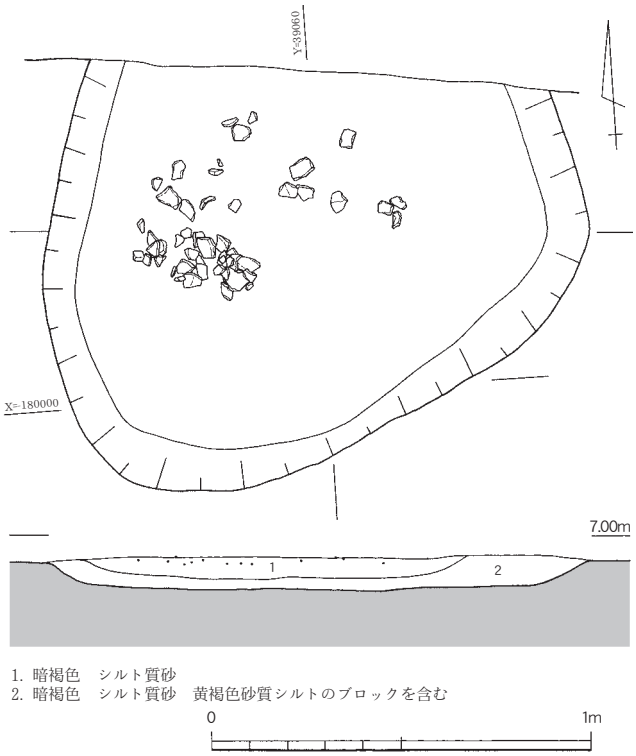
２．土坑

合計５基が検出された。土坑1019・1088は調査区東部に、1023・1024・1025は西部に位置する。

【土坑1019】

遺構（第47図）

調査区東部に位置する不整形な土坑である。北部が調査区外にあるため、規模は不明であるが、調査区内で検出された範囲は東西1.43m、検出面からの深さは10㎝を測る。土坑は断面皿状を呈し、底面は概ね平坦である。土坑内は自然堆積と思われる、２層の細粒の砂〜シルトで埋積されており、この上層にまとまって遺物が出土した。



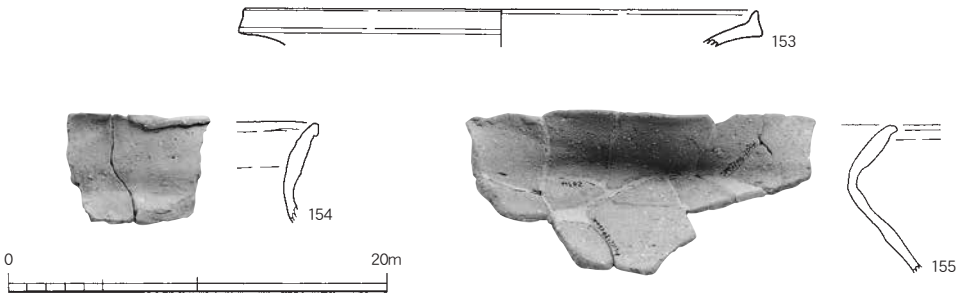
第47図　2区土坑1019

出土遺物（第48図）

153は土師器鍋の口縁部であろう。口縁部はやや肥厚して外側に凹面を設け、端部を上方へつまみ上げる。

154・155は、同一個体と思われる土師質の土器である。器表面の整形・調整が粗雑な点、器体に粘土紐の接合痕が明瞭に観察される点、器壁が脆弱で胎土に多くの砂粒を含む点などは、製塩土器に通ずる特徴である。

端部に平坦な面をもつ、明らかに口縁部と思われる部位があるものの、そこから続く器体は著しく不整形であり、器形を推定することすらできない。成形ないしは焼成時の歪みによるものか、あるいはきわめて特異な形態をもつ土器であるのか判断し難い。類似した事例を知らず、不明の点が多い。



第48図　2区土坑1019出土の遺物

時期

土師器鍋等から中世の前半期に属するものと思われる。

【土坑1023・1024・1025】

遺構（第49図）

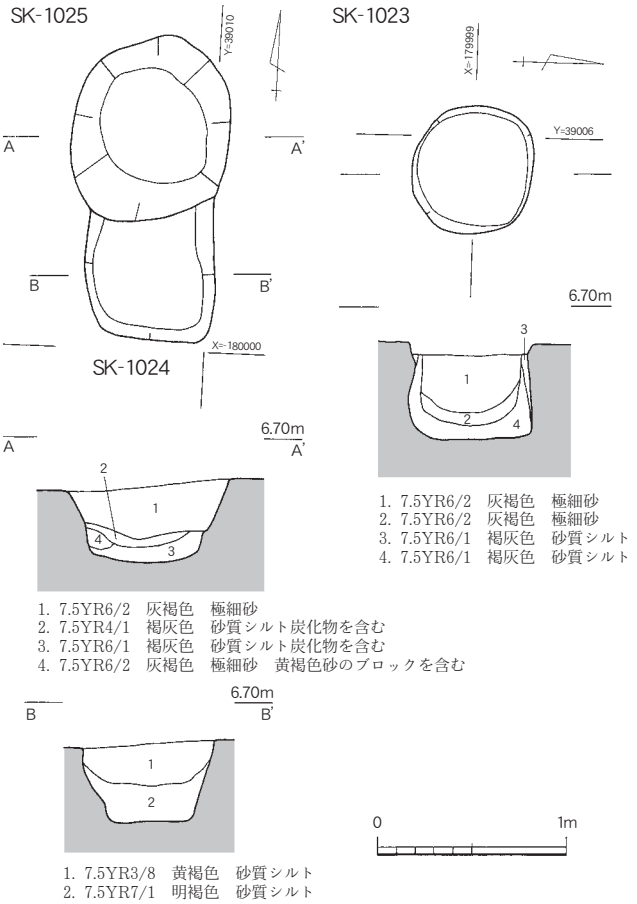
これら3基の土坑は掘立柱建物跡3の西側に位置し、相互に近接するのみならず、規模、形態、土坑内の堆積状況などに類似点が見られるため、一括して記述する。

土坑1023はやや歪んだ円形を呈し、断面形はわずかにフラスコ状を呈する。直径68㎝、深さ40㎝を測る。

土坑1024は隅丸長方形を呈し、長軸76㎝、深さ42㎝を測る。土坑1025に切られる。

土坑1025は不整円形を呈し、長径100㎝、深さ42㎝を測る。

これらの土坑内は、細粒の砂～シルトで埋積されており、自然埋没と考えられる。



第49図　2区土坑1023～1025

木質などが遺存していなかったため断定することはできないが、土坑1023は、断面の状況から桶状のものが土坑内に据えられていたものと思われる。

土坑1025では堆積状況は1023とやや異なるものの、堆積物の上層（1・2層）は1023に酷似している。掘立柱建物跡に隣接することから、建物跡に関連する施設であった可能性が想起される。

遺物

いずれの土坑からも目立った出土遺物は見られなかった。

時期

推定する資料に欠けるが、隣接する掘立柱建物跡との機能的な関係が推測される。

【土坑1088】

遺構（第50図）

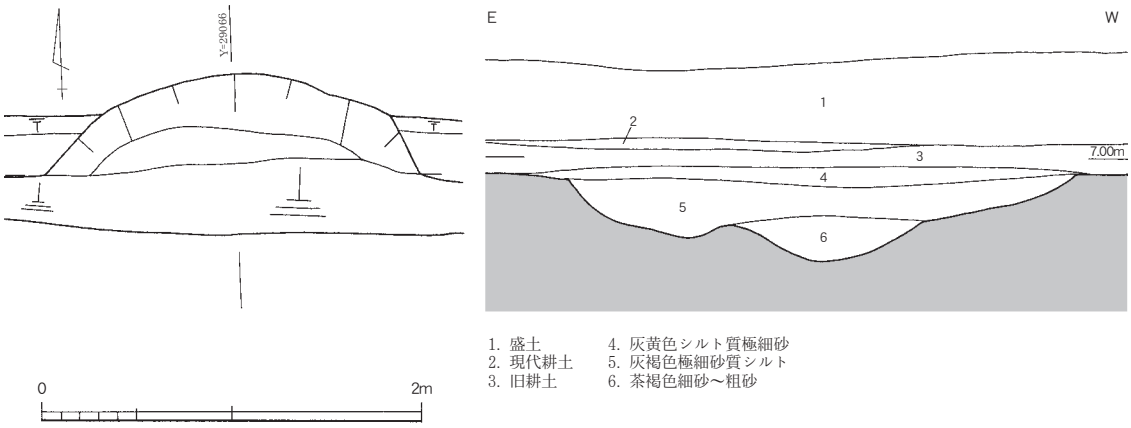
調査区東部に位置する土坑で、南側の過半が調査区外にあるため、全体像は不明である。調査区内では楕円形を呈し、長径は2.0m、深さは40㎝を測る。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。



第50図　2区土坑1088

3．溝

溝は9条が検出された。調査区の東部および西部に散漫に分布するほか、中央付近に同一方向の溝がまとまりを見せる。中央部にまとまって分布する溝のうち、1001・1010・1011・1012の4条は、ほぼ等間隔（2.2m～2.4m間隔）で平行する。また、溝1002と1005、1001と1004の間隔もこれとほぼ同じであることから、これらの溝群は、同時期に企画性をもって造られたものと考えてよかろう。以下、平面的なまとまりごとに記載を進める。

《 調査区中央部 》

【溝1001】

遺構（第51図）

ほぼ南北に直線的にのび、最大幅110㎝、深さ8㎝を測る。溝内は細粒の砂ないしシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【溝1002・1003】

遺構（第51図）

ほぼ接しながら南北に直線的にのびる溝である。検出面においても断面観察でも、両者の間に新旧の重複関係は認められなかった。いずれも最大幅40㎝、深さ10～12㎝を測る。溝内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【溝1004】

遺構（第51図）

ほぼ南北に直線的にのび、最大幅100㎝、深さ20㎝を測る。溝内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物（第52図）

156は土師器椀の底部である。高台は、断面形が鈍い逆台形状を呈し、外側面はほぼ直立する。全体に摩耗が進行している。

157は和泉型瓦器椀である。高台は断面が歪んだ四辺形を呈し、つぶれたように外方へ張り出す。内面のヘラミガキは、摩耗のため鮮明ではない。外面にはヘラミガキは施されず、指頭圧痕が目立つ。尾上編年の、Ⅲ期後半にあたるものと思われる。

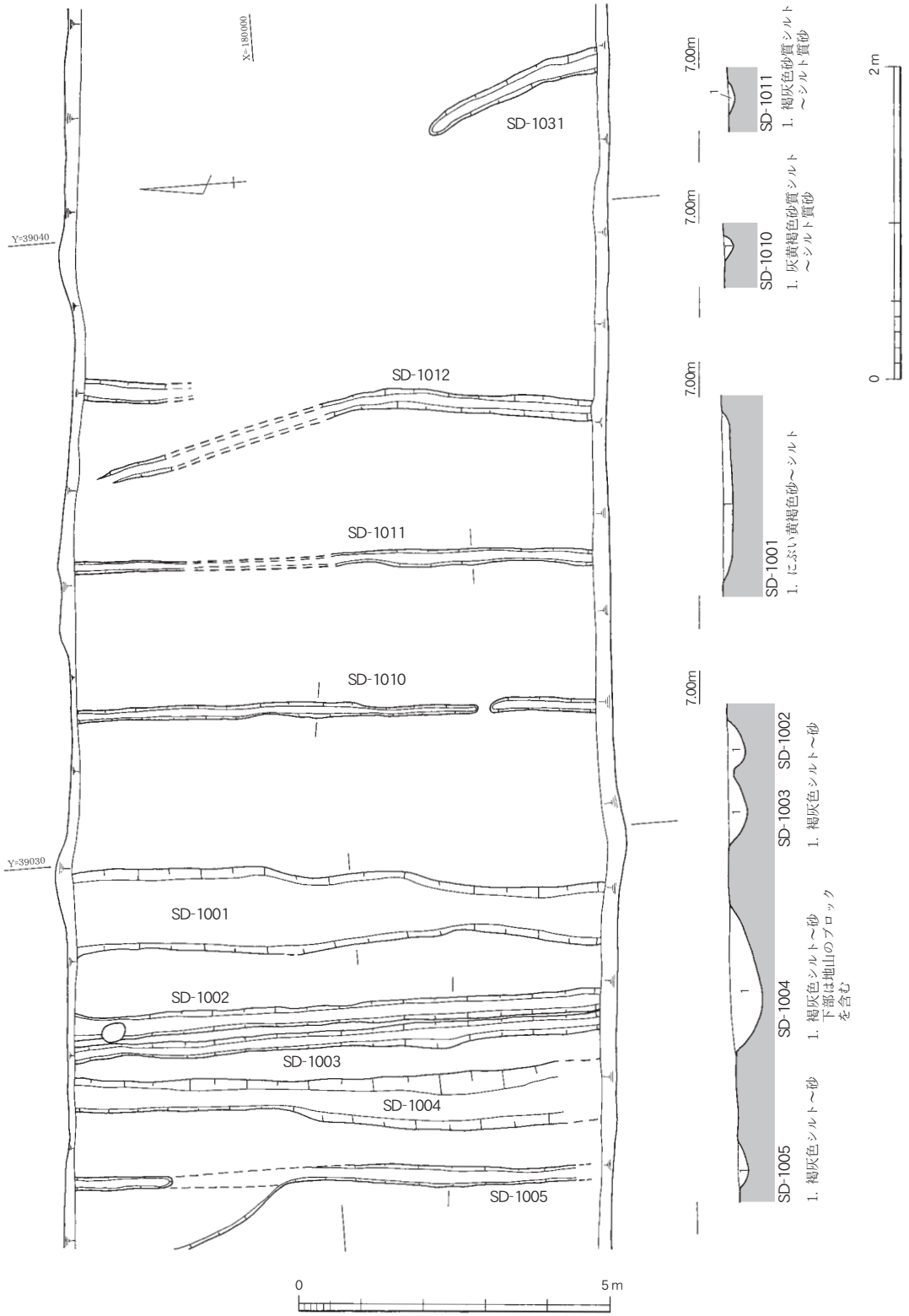
【溝1005】

遺構（第51図）

ほぼ南北に直線的にのびるが、北半の一部では、包含層の凹部と重複して掘方が不鮮明になっている。最大幅35㎝、深さ8㎝を測る。溝内は細粒の砂・シルトで埋積されており、自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

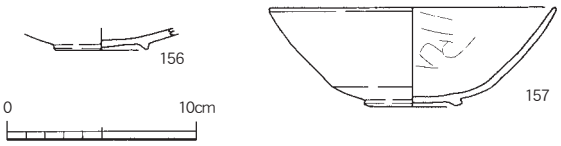


第51図　2区溝平面・断面(1)

【溝1010・1011・1012】

遺構（第51図）

ほぼ2.2mの等間隔で並ぶ、類同の規模の溝である。最大幅30㎝、深さ10㎝前後を測る。溝1012は、途中でやや西方へ曲がるが、その他の溝は直線的に南北にのびる。溝内は細粒の砂またはシルトで埋積



第52図　2区溝出土の遺物

されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【溝1031】

遺構（第51図）

やや曲がりながら北北西－南南東方向にのび、最大幅40㎝、深さ７㎝を測る。溝内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

《 調査区東部 》

【溝1030】

遺構（第43図）

直線的に南北にのびる溝で、最大幅60㎝、深さ5㎝を測る。溝内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と考えられる。東部では、溝1030の東で南北方向にのびる溝から東西方向の溝が分岐するものが検出されている。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

《 調査区西部 》

【溝1014・1018】

遺構（第53図）

隣接して、直線的に北東－南西方向にのび、いずれも最大幅30㎝、深さ５㎝前後を測る。北東端は撹乱によって破壊されている。溝内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

【溝1029】

遺構（第53図）

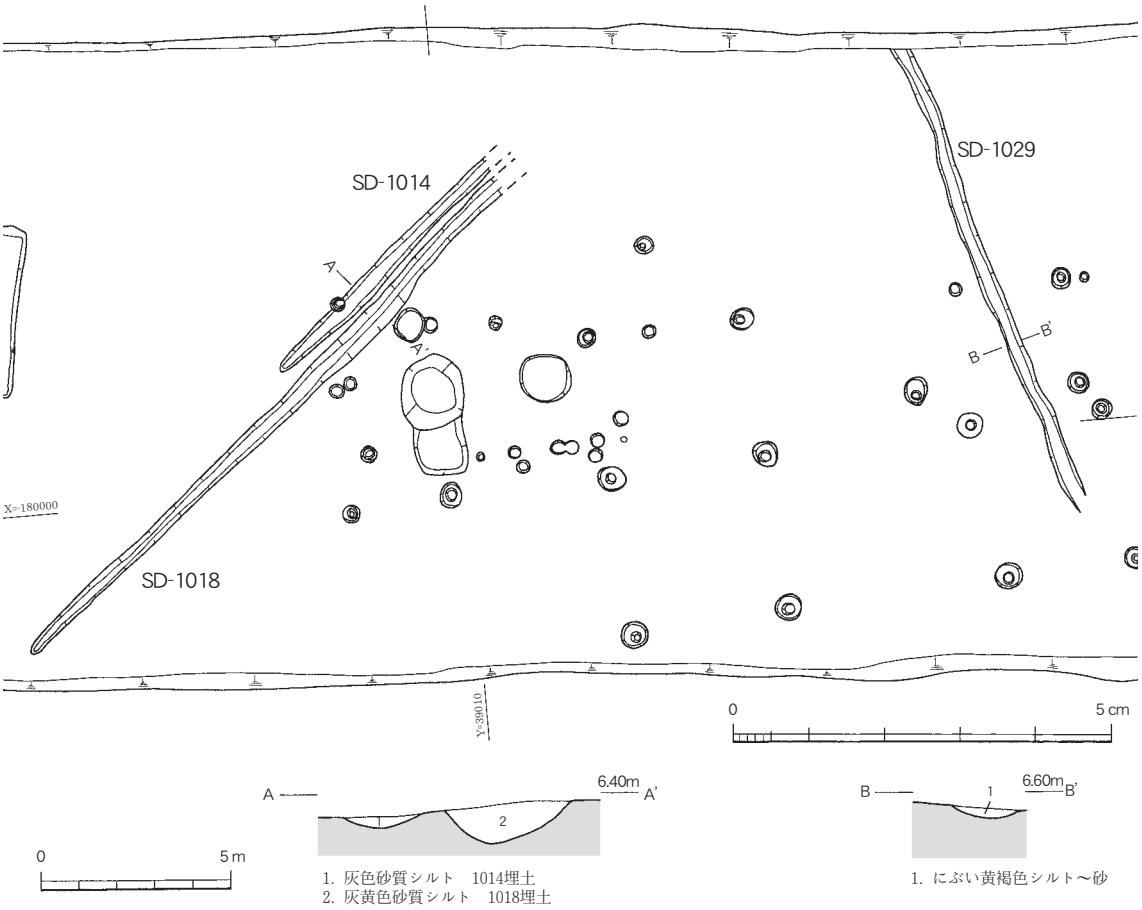
直線的に北北西－南南東方向にのび、最大幅25㎝、深さ５㎝前後を測る。溝内は細粒の砂またはシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

４．包含層出土の遺物

鳥飼中瀬遺跡２区では、包含層の遺存状況が１区と比較して劣悪であり、図示可能な遺物は出土しな



第53図　2区溝平面・断面(2)

かった。図示できない遺物には、土師器・須恵器・瓦器等が含まれており、概ね、中世前半期に属するものと思われる。

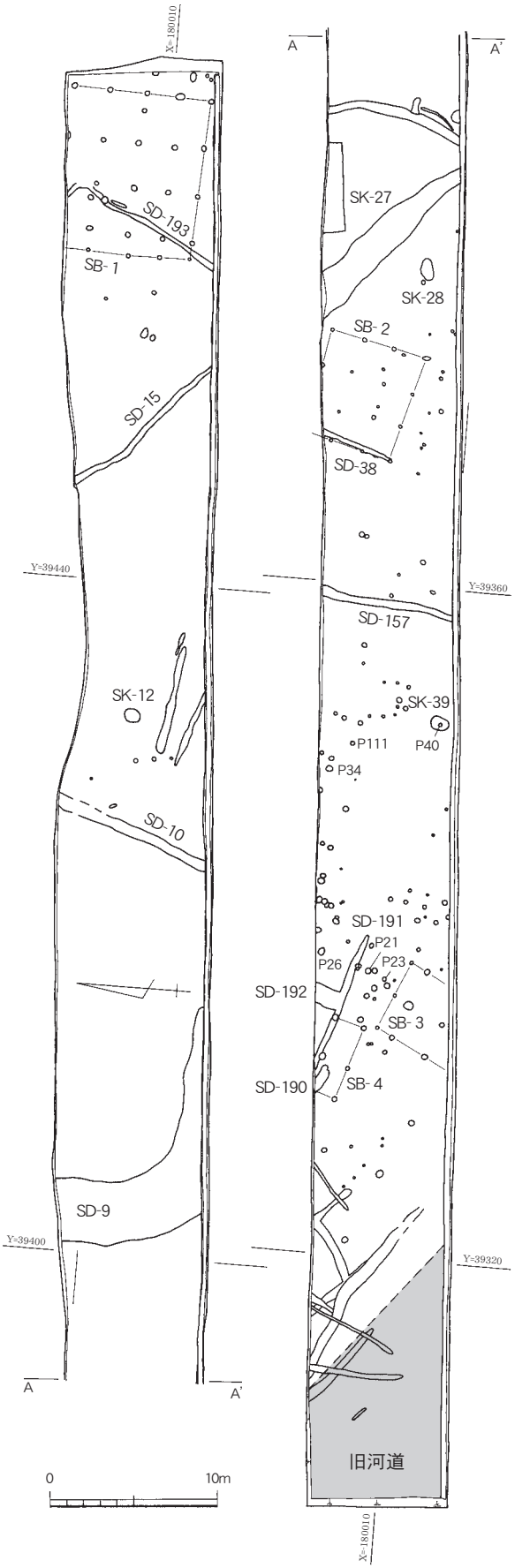
(3) 小結

鳥飼中瀬遺跡2区で検出された遺構群は、総じて時期を決定する資料に乏しい。その中で、掘立柱建物跡について見るならば、掘立柱建物跡2・3は12世紀末～13世紀に相当するものと思われ、掘立柱建物跡1についても、これと大きな時期的懸隔を考える要素はない。

今回復元された建物跡に属さない柱穴には、柱穴1007のように終末期と思われる瓦器椀を出土したものもあることから、集落の形成が14世紀後半代にも継続していた可能性は指摘できるものの、当該期の遺物が僅少であることは間違いない。

土坑では、時期を決定する資料に欠けるが、土坑1023～1025が位置関係からみて掘立柱建物跡3に関連して造られた可能性は捨象できない。

以上のような状況から、鳥飼中瀬遺跡2区では12世紀末に集落形成が開始され、その多くは13世紀代の中におさまるものと思われる。集落の断続については資料が決定的に不足しているが、14世紀代における集落は、遺物量から見ても大幅に後退していた可能性が高いだろう。



第54図　北山遺跡平面図

3．北山遺跡

(1) 概要

【調査区内の遺構分布】（第54図）

北山遺跡の調査区は、今回報告する中で最も東に位置しており、標高も3地区中最も高い位置にある。北山遺跡では、掘立柱建物跡、土坑、溝、旧河道（埋没谷）が検出された。他に、建物跡に復元できなかった柱穴がある。調査区内における遺構の分布は一様ではなく、かなり明瞭に偏在している。

掘立柱建物跡は、調査区の東端と、調査区中央から西寄りにあり、柱穴の大部分も掘立柱建物跡周辺に分布する。この両者の間には、柱穴がほとんど分布しない領域がある。

土坑は調査区中央付近に3基があるが、数が少ないこともあり、分布上では他の遺構との相関は看取されない。

溝は、調査区西部にややまとまりを見せるほかは、調査区全体に散漫に分布する。調査区中央には、規模の大きな溝9が位置する。調査区西端部は、調査上旧河道と呼称したが、その実体は埋没谷と考えられる。遺跡が形成された中世段階では、この谷はほぼ埋没して平坦化していたが、なおわずかな凹地となっていたようで、この領域には数条の溝があるのみで、顕著な遺構は存在しなかった。

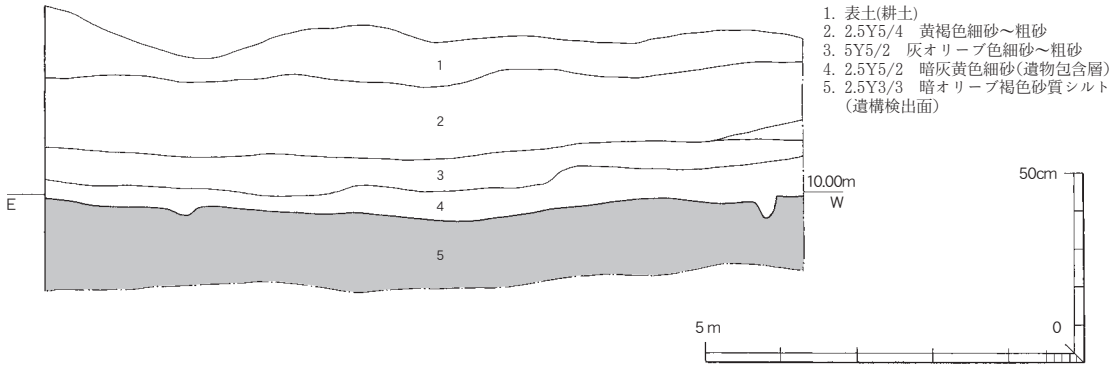
【調査区内の地層】（第55図）

北山遺跡では、現表土（耕土）下に3層に区分される細粒の砂層が堆積している。これらのうち第4層が、中世の古土壌（遺物包含層）に相当する。その下位には、暗い褐色を呈する砂質シルト層があり、これが遺構検出面をなす層（以下地山と記述）である。地山面は、西に向けて緩やかに下がる傾斜を見せる。

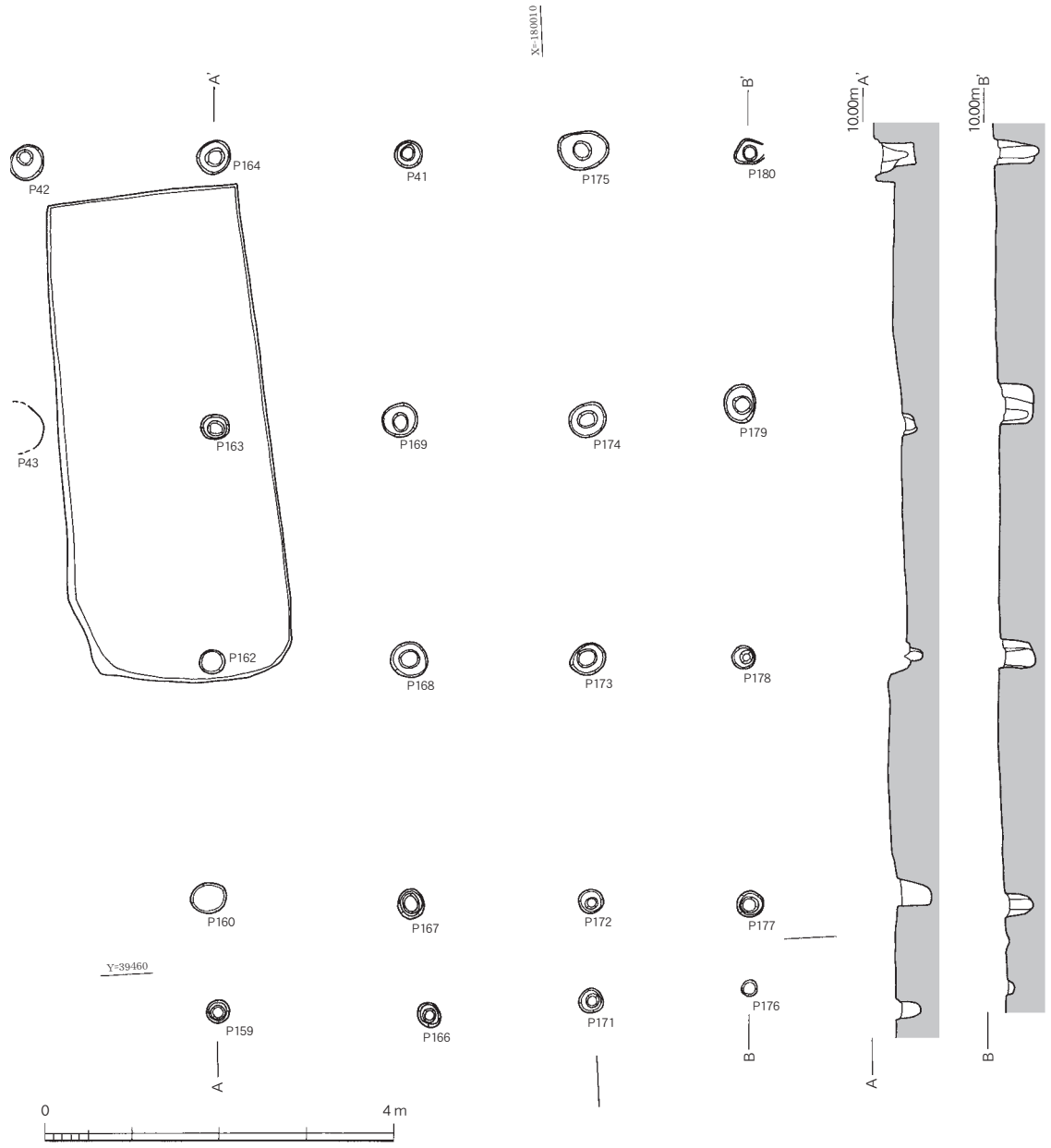
(2) 遺構と遺物

1．掘立柱建物跡・柱穴

掘立柱建物跡は、4棟が検出された。調査



第55図　北山遺跡地層断面図



第56図　北山遺跡掘立柱建物跡 1

区が道路幅に限定されており、調査区外への柱穴のつながりが確認できなかったため、実際の建物数は、復元された数よりかなり多いものと思われる。建物跡の形式、規模等は第３表に示したとおりである。

【掘立柱建物跡１】

遺構（第56図）

調査区東端に位置する総柱の建物跡で、調査区内では東西４間×南北４間までを確認できたが、南北と東は、なお調査区外へと広がりを持つ可能性が高い。建物西端の柱穴列は、いずれも他の柱穴よりも規模が小さく、東西方向柱間が他の東西方向柱間のおよそ１／３程度と小さいことから、西側１間分は庇であったと思われる。

柱穴は円形ないし不整円形を呈し、庇部分では直径20㎝～30㎝、主柱穴では28㎝～60㎝を測る。柱間は、主柱穴部分では東西（桁行き）で2.72m～3.04m、南北（梁行き）では1.80m～2.20mと、明らかに東西方向が長い。また庇部分と主柱穴の柱間は、0.92m～1.28mである。柱穴41と167を結ぶ線で測定した長軸方位は、N87.0°Wである。また、検出部分での床面積は76.9㎡である。

柱穴41・162・163・178などで柱材の基部が直立状態で残存していたことと、その他の柱穴の断面の状況から、柱の抜き取りはおこなわれなかったと判断された。

遺物（第58図）

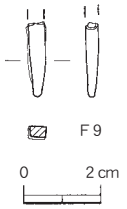
158は、柱穴169より出土した和泉型瓦器椀である。内面には粗雑なヘラミガキが施されるが、外面にはヘラミガキが見られない。口縁部には回転方向の仕上げナデが施される。

159は、柱穴174・181より出土した和泉型瓦器椀である。内面のヘラミガキはやや粗く、外面にはヘラミガキが見られない。口縁部には回転方向の仕上げナデが施される。

160は、柱穴159より出土した和泉型瓦器椀である。内面のヘラミガキはやや粗く、見込み部のミガキは平行線状に施されている。外面のヘラミガキは施されないが、口縁部下にヘラ描きと思われる沈線が１条巡る。口縁部には回転方向の仕上げナデが施される。高台は断面が低い逆台形状を呈する。158・159を含め、尾上編年のⅢ－２ないし３期に属すると思われる。

第57図Ｆ９は、柱穴42より出土した鉄釘の先端である。断面形は長方形をなす。

このほか、図化できない資料ではあるが、柱穴41から東播系須恵器椀、柱穴42から楠葉型と思われる瓦器椀が出土している。



第57図
遺物(1)

時期

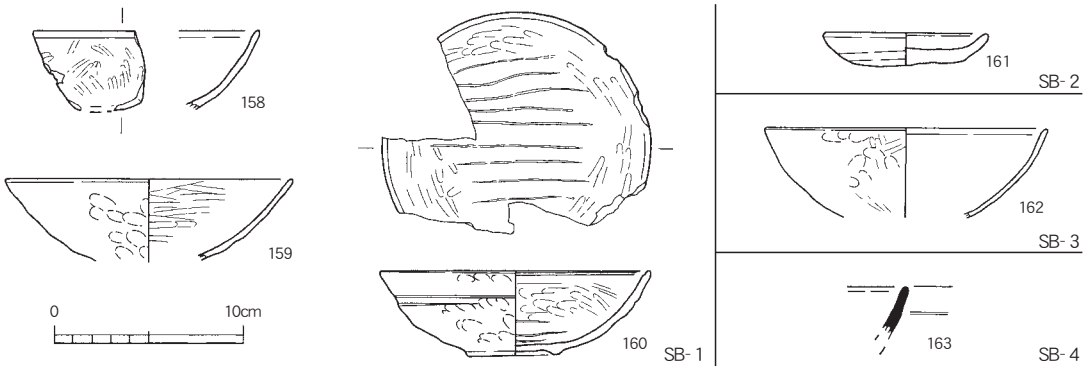
瓦器椀の編年から、13世紀中頃～後半に属するものと考えられる。

【掘立柱建物跡２】

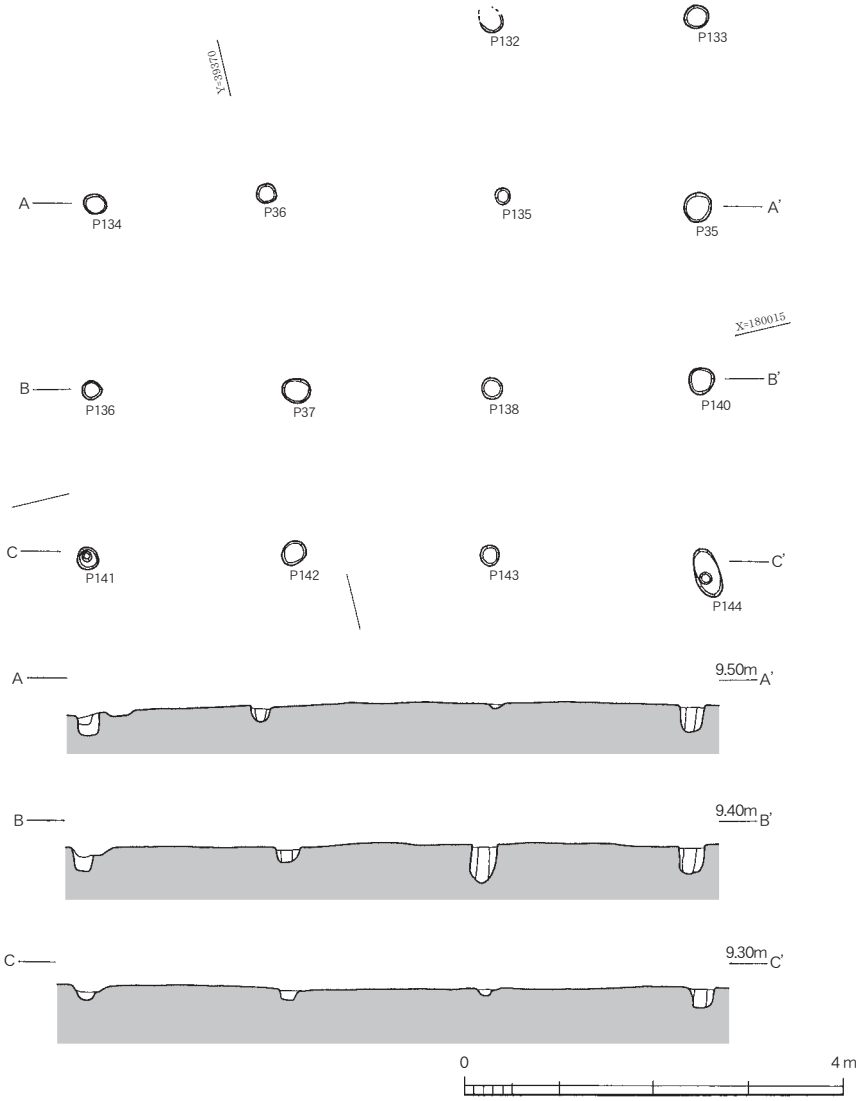
遺構（第59図）

調査区中央部に位置する総柱の建物跡で、調査区内では東西３間×南北３間までを確認できたが、北側は調査区外へ広がる。西辺の柱穴は溝（溝38）と重複しているが、溝は柱穴より後に掘削されたもので、建物跡との関連はない。この付近では、遺構検出面が北から南へ緩やかに傾斜しているが、本来の遺構面は、この傾斜が埋没し、平坦化したより上位の面であったと思われる。

柱穴は、この種の掘立柱建物跡の通例で、「田」の字の交点に位置するが、柱穴36のみ大きく位置がずれる。柱穴は円形ないし不整円形を呈し、直径20㎝～32㎝を測る。柱間は、東西（桁行き）で1.80m～2.48m、南北（梁行き）では1.68m～2.08mと、明らかに東西方向が長い。柱穴133と144を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N10.5°Eである。



第58図　北山遺跡掘立柱建物跡出土遺物(2)

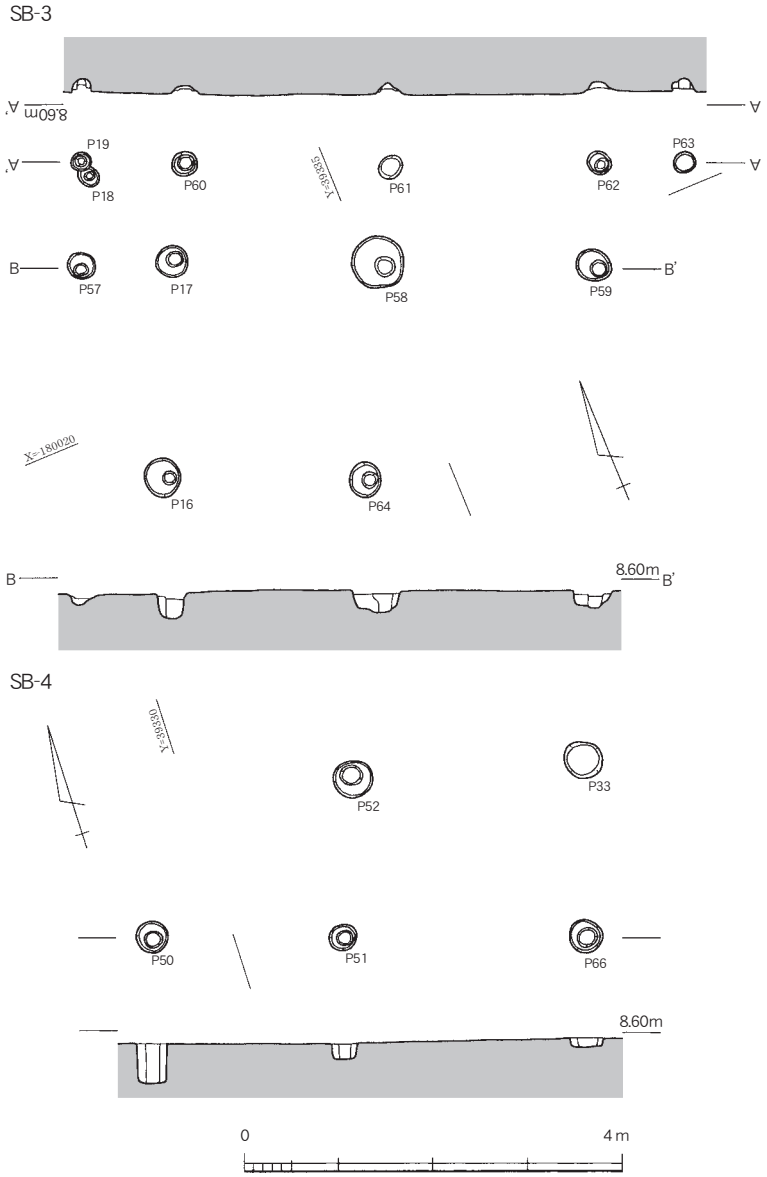


第59図　北山遺跡掘立柱建物跡 2

遺物（第58図）

161は、柱穴35より出土した土師器皿である。底部は静止状態でヘラ切りされたように見える。厚みのある底部から、やや膨らみをおびた口縁部が立ち上がる。底部と口縁部の境界は丸く作られており、不明瞭である。

このほか図示できない資料ではあるが、柱穴36より見込み部にヘラミガキを施さない瓦器椀底部（和



第60図　北山遺跡掘立柱建物跡３・４

泉型）が出土している。

時期

13世紀末ないしその前後に相当するものであろうか。

【掘立柱建物跡３】

遺構（第60図）

調査区西部に位置する総柱の建物跡で、調査区内では東西３間×南北２間までを確認できたが、南側と東側は調査区外へ広がる。

柱穴は円形ないし不整円形を呈し、底部で直径20㎝～30㎝、主柱穴で34㎝～56㎝を測る。柱間は、2.12m～2.28mを測るが、底部分では1.00m～1.08mである。柱穴61と64を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N26.4°Eである。

遺物（第58図）

162は、柱穴59より出土した和泉型瓦器椀である。内面は摩耗が顕著で調整痕を確認できないが、外

面にはまばらにヘラミガキが施される。尾上編年のⅢ期に属するものと思われる。

このほか図示できない資料ではあるが、柱穴17・18・59より土師器皿の破片が出土している。

時期

瓦器椀の編年からは、13世紀代の範疇で理解できるものである。

【掘立柱建物跡４】

遺構（第60図）

調査区西部に位置する総柱の建物跡で、調査区内では東西２間×南北１間までを確認できたが、北側と西側は調査区外へ広がる。

柱穴は円形ないし不整円形を呈し、底部で直径28㎝～44㎝を測る。柱間は東西方向が2.00m～2.52m、南北方向が1.72m～1.88mを測る。柱穴51と52を結ぶ辺で測定した長軸方位は、N20.8°Eである。

遺物（第58図）

163は東播系須恵器椀である。口縁部には回転方向の仕上げナデが施される、

時期

推定する資料に欠けるが、瓦器椀の出土から、北山遺跡で検出された他の掘立柱建物跡と、大きな時期的懸隔はないものと考えられる。

掘立柱建物跡以外の柱穴

【柱穴23】

遺構（第61図）

調査区中央部ある柱穴群中に位置し、堀方の直径36㎝、深さ20㎝、柱痕の直径18㎝という、小型の柱穴である。掘立柱建物跡３・４に隣接する位置にあるが、いずれの建物跡の軸線上にもなく、少なくとも主要な構造上は、掘立柱建物跡３・４には関連しないと判断される。

柱穴上部の柱痕内からは、完形もしくは完形に近い土師器・須恵器・黒色土器の皿計５点が出土した。これらは柱痕部の中位より上部から重なって出土しており、柱が抜き取られた後、人為的に埋設されたものと判断できる。

調査の時系列に沿って述べるならば、柱穴を検出し、柱痕部を数㎝掘り下げた時点で、まず須恵器皿164が出土した。その後柱穴の断ち割りを実施し、柱痕部を順次掘り下げたところ、164の下位４～５㎝より土師器皿165が出土し、その下位２㎝～３㎝から黒色土器皿166が出土し、以下密着して土師器皿167・168が出土した。最上位の須恵器皿164と、続く土師器皿165は一部欠損したものであるが、下位より出土した土師器皿167・168は完形を保っている。出土状況からみて、まず166～168が一括して埋設され、その後、わずかに土を埋め戻した時点で、164・165が埋設されたものである。

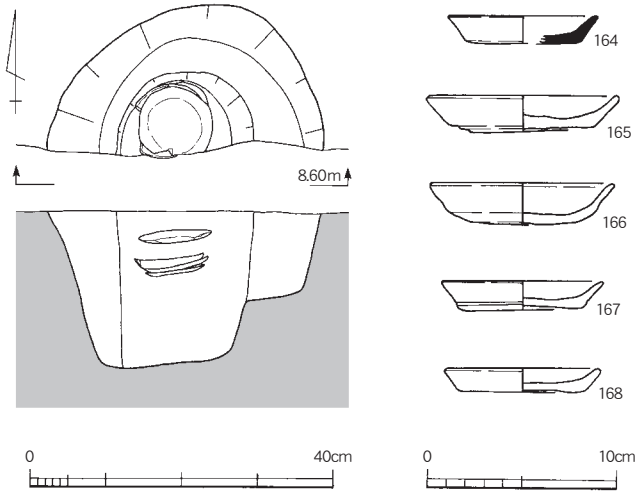
なお本柱穴については、調査の時間的制約から、現地で精密に図化することができなかった。第61図に示したものは、略測図であることをお断りしておく。

遺物（第61図）

164は東播系須恵器皿である。平坦な底部から、わずかに外反気味の口縁部が立ち上がる。

165は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。口縁部は直線的に立ち上がる。内面見込み部には、平行のナデが施される。

166は、黒色土器とした、内外面を黒色に焼成する皿である。底部は切り離し後にヘラケズリを施し、



第61図　北山遺跡柱穴23および出土遺物

その後ナデ調整を施すようである。底部と口縁部の境界は丸みをもち、口縁部は外反気味に作る。

167は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。口縁部は外反気味に立ち上がり、底部との境界は明瞭である。口縁部下部に、１条の沈線が巡るが、意図的なものか否か判断できない。

168は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。口縁部は厚みをもち、短かく立ち上がる。

【柱穴21】

第62図169は、土師器皿である。底部は切り離し後にナデ調整を施す。口縁部の一部に、スス状の付着物が見られる。

【柱穴26】

170は、土師器椀である。体部は膨らみをもちつつ立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。口縁部の一部に、スス状の付着物が見られる。

【柱穴34】

171は土師器鍋である。やや膨らみに乏しい体部から、屈曲して口縁部に至る。口縁端部には、面を作る。内面はハケ調整を施す。

【柱穴40】

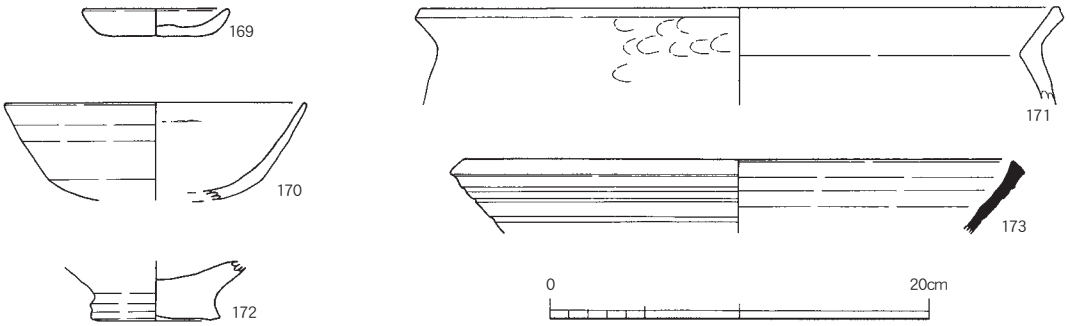
172は土師器の柱状高台椀であろう。上部は不明であるが、立ち上がりの角度からみて、椀の可能性が高い。底部は回転糸切りである。

【柱穴111】

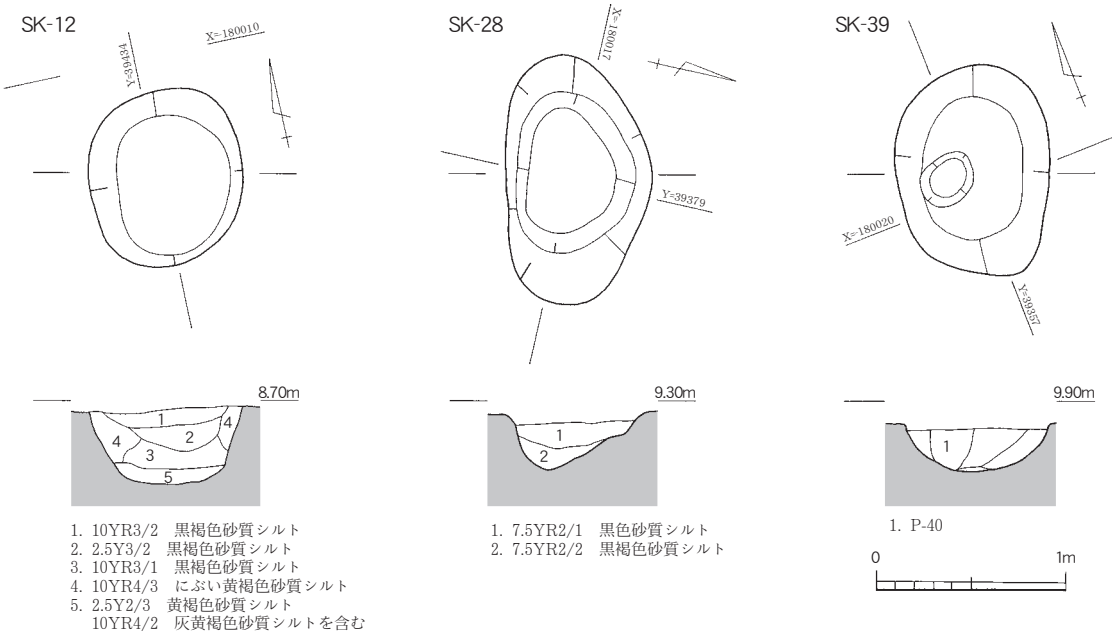
173は東播系須恵器鉢である。外面には、回転ナデによって形成された稜線が目立つ。口縁端部は外に傾斜する面を作る。

２．土坑

土坑は、12・28・39の３基が検出されたのみである。既述のように、その位置などに掘立柱建物跡との関連を想起させるものはない。



第62図　北山遺跡掘立柱建物跡外柱穴出土遺物



第63図　北山遺跡土坑

【土坑12】

遺構（第63図）

やや歪んだ円形を呈する土坑である。長径96㎝、短径82㎝、深さ40㎝を測る。急斜度のすり鉢状の掘り込みを見せ、土坑底は、わずかに凹面をなす。土坑内は細粒の砂およびシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【土坑28】

遺構（第63図）

歪んだ楕円形を呈する土坑である。長径132㎝、短径78㎝、深さ32㎝を測る。２段の掘り込みを見せ、土坑底は凹面をなす。土坑内は細粒の砂およびシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

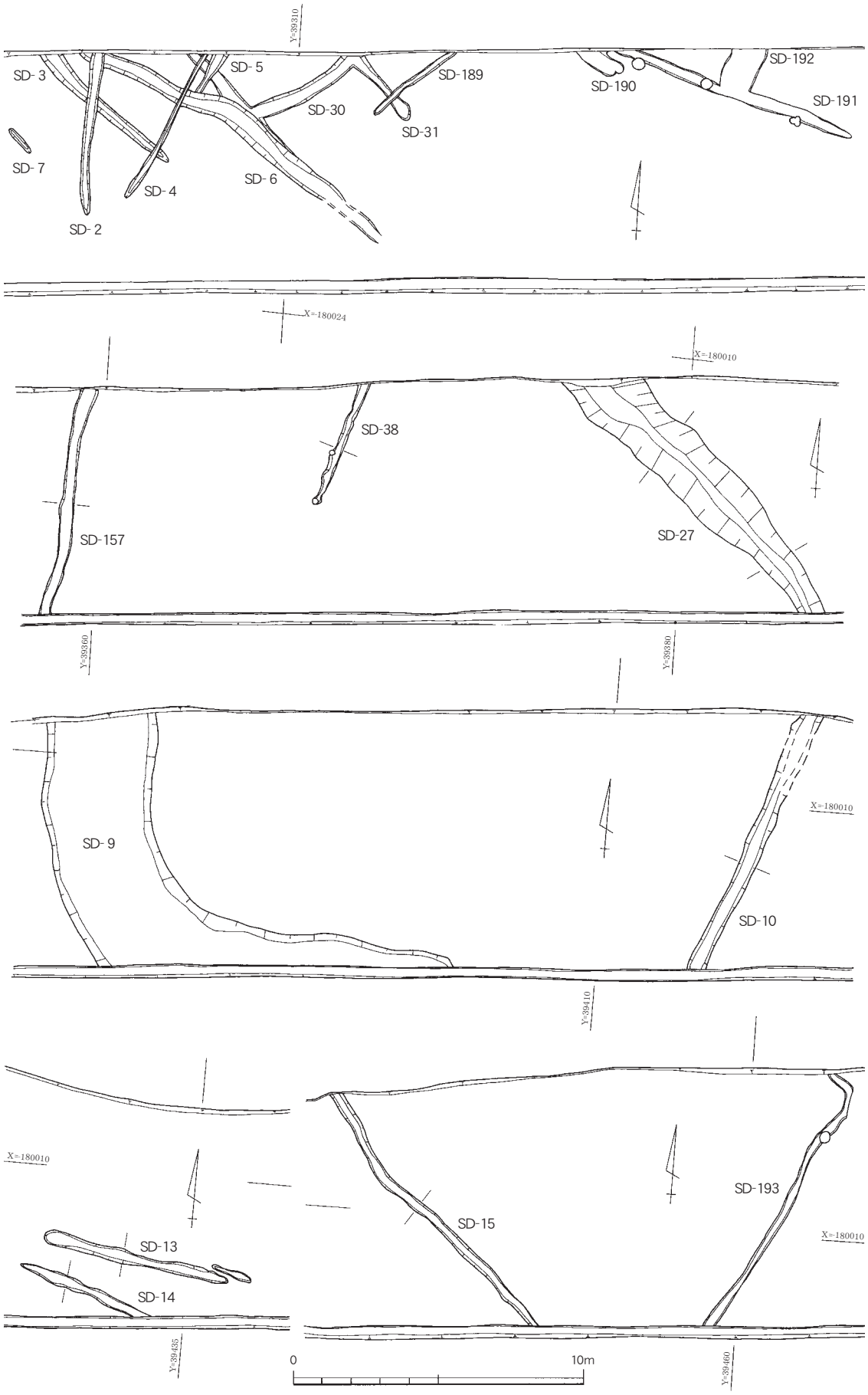
時期

推定する資料に欠ける。

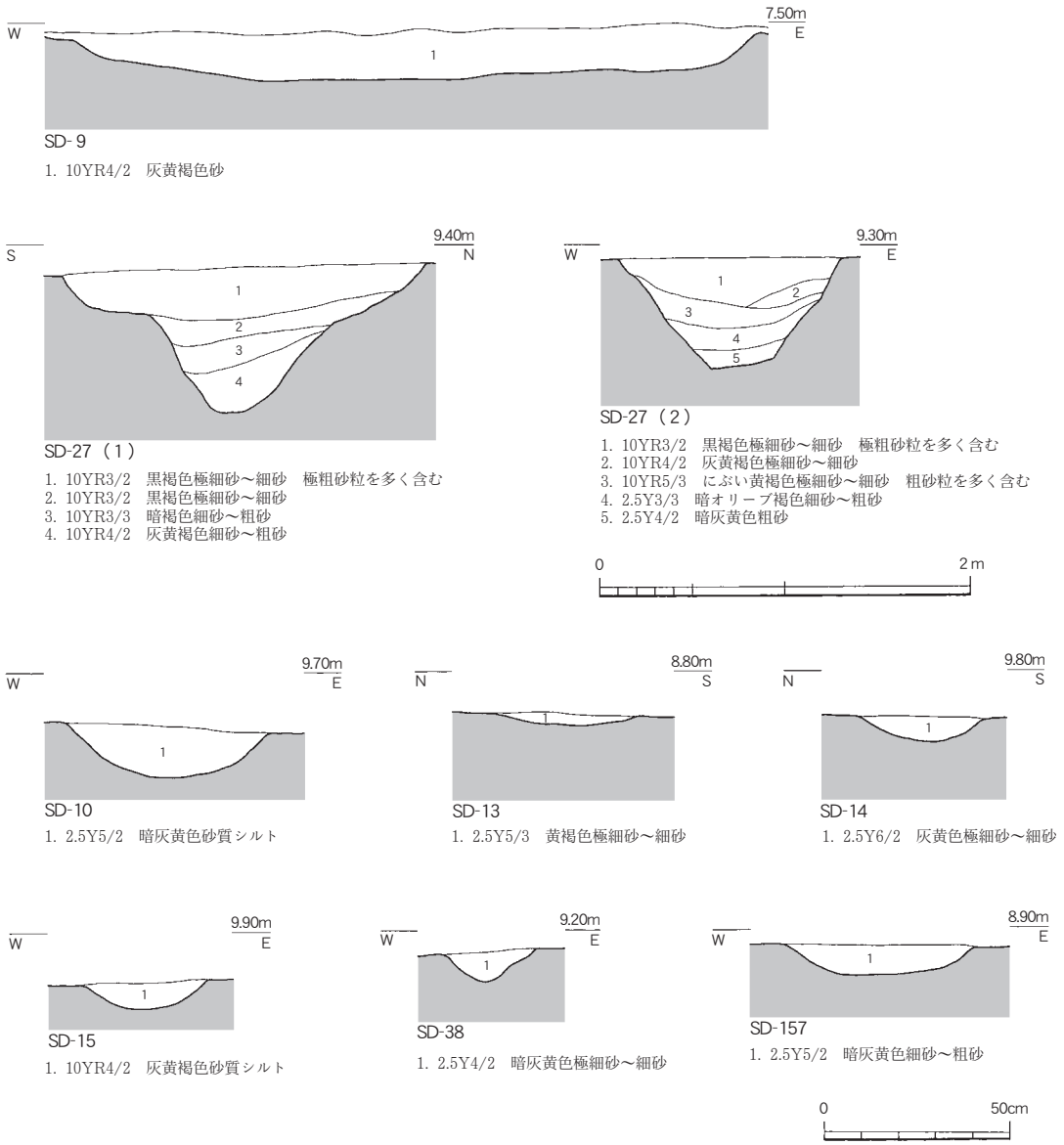
【土坑39】

遺構（第63図）

やや歪んだ楕円形を呈する土坑である。長径112㎝、短径82㎝、深さ30㎝を測る。まるい椀形の掘り込みを見せる。土坑内は細粒の砂およびシルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。また埋没後に、土坑上面から柱穴40が切っている。



第64図　北山遺跡溝平面図



第65図　北山遺跡溝断面図

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

3．溝

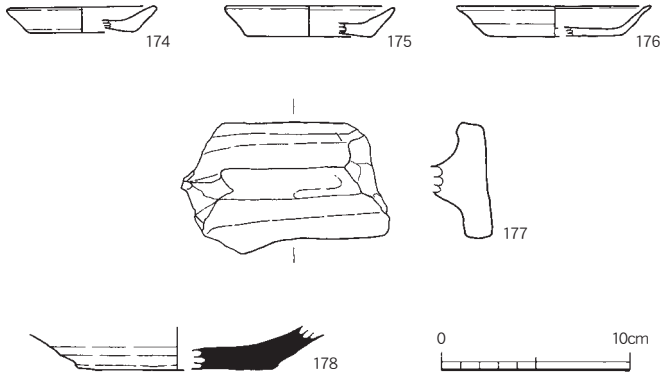
溝は、合計21条を検出した。いずれの溝も、掘立柱建物跡とは関係をもたないものである。なお、溝2～溝7は、旧河道の埋没後、その上面に造られた溝である。

記載は、原則として遺構番号の若い順におこなうが、既述上の便宜から、溝2～7・30・31・189および溝190～192については一括して記載する。

【溝2～7・30・31・189】

遺構（第64・65図）

これらの溝のうち、2～7は旧河道上面に造られており、2・4が3・6を切っている。また、溝30



第66図　北山遺跡溝出土の遺物

は31との間では重複関係を識別できず、4・5・6には切られている。溝31は189に切られている。この関係から、溝30・31が埋没した後に5が造られ、その後3・6→2・4の順に構築されたことがわかる。溝の走向に企画性を看取することは困難で、旧河道埋没後の微凹地に流入する溝、ないしは耕作に伴う溝であったものと思われる。これらのうち、溝6から図示可能な遺物が出土している。

溝内は細粒の砂およびシルトで埋積されており、堆積状況からは自然埋没と判断された。

遺物（第66図）

174～176は、いずれも溝6より出土した。

174は土師器皿である。口縁部は直線的に立ち上がり、底部との境界は明瞭である。内面の一部にススが付着している。

175は土師器皿である。形態は174に類似するが、口縁部は立ち上がりに従って、厚みを減じる。

176は土師器皿である。口縁部は、底部から丸みをもって立ち上がる。口縁端部は外反し、端部内面には、わずかに沈線状の段を設けている。

これらの他に、図示できない資料ではあるが、高台が退化して断面が鈍い逆三角形を呈する瓦器椀が溝3から出土している。

時期

溝3については、13世紀代の中で理解できるものと考えられ、他の溝もこれを前後する時期と推定される。

【溝9】

遺構（第64・65図）

調査区内で、東西方向から南北方向へ大きく曲がる溝である。幅3.9m、深さ30㎝を測り、浅く幅広い掘り込みを見せる。溝内は砂で埋積されており、自然堆積の可能性があるが断定には至らなかった。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝10】

遺構（第64・65図）

ほぼ直線的に北北東－南南西にのびる溝で、最大幅55㎝、深さ15㎝を測る。溝内は細粒の砂質シルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示できない遺物であるが、東播系須恵器鉢の底部が出土している。

時期

中世前半期の範囲に含まれるものであろう。

【溝13】

遺構（第64・65図）

ほぼ直線的に東西にのびる溝で、溝14と隣接する。延長6.3m、最大幅38㎝、深さ３㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝14】

遺構（第64・65図）

ほぼ直線的に東西にのびる溝で、溝13と隣接する。最大幅33㎝、深さ８㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝15】

遺構（第64・65図）

やや蛇行しつつ、北西－南東にのびる溝である。最大幅32㎝、深さ８㎝を測る。溝内は砂質シルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

【溝27】

遺構（第64・65図）

ほぼ直線的に北西－南東にのびる溝で、北側ほど幅を広げる。最大幅は1.96m、深さは80㎝を測る。断面形がV字形を呈することから、流水の影響を強く受けた水路で、流下方向は南東→北西と考えられる。溝内の下層は粗砂を主体とする堆積物で埋積されており、上層の堆積物では細粒の砂ないしはシルトが主体となる傾向を見せることから、自然埋没と考えられる。人為的に掘削された溝である可能性とともに、一時期の洪水によって形成された自然流路の可能性も考慮しておきたい。遺跡が立地する地形

面の、北側の凹地に流下するものであろうか。

遺物

177は竈の庇部と考えられる。図上端は平坦な面をなし、庇部へと続く。内面はナデ調整が施される。胎土は砂粒を多く含む。

このほか図示できない遺物であるが、土師器柱状高台（上部形態不明）の破片および底部ヘラ切りの土師器椀もしくは皿が出土している。

時期

中世前半期の範囲に含まれるものであろう。

【溝38】

遺構（第64図）

ほぼ直線的に北北東－南南西にのびる溝である。最大幅25㎝、深さ８㎝を測る。溝内は細粒の砂で埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

図示できない遺物であるが、近世以降の平瓦片が出土している。

時期

明確ではないが、江戸時代末ないしそれ以降に属するものと考えられる。

【溝157】

遺構（第64・65図）

わずかに蛇行しつつ南北方向にのびる溝で、最大幅42㎝、深さ16㎝を測る。溝内は砂質シルトで埋積されており、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物

178は東播系須恵器鉢の底部である。底部は回転糸切りである。体部の立ち上がりは緩斜度で、底部と体部の境界は鈍い。内面は使用による摩耗が顕著である。

時期

中世前半期の範囲に含まれるものであろう。

【溝190～192】

遺構（第64図）

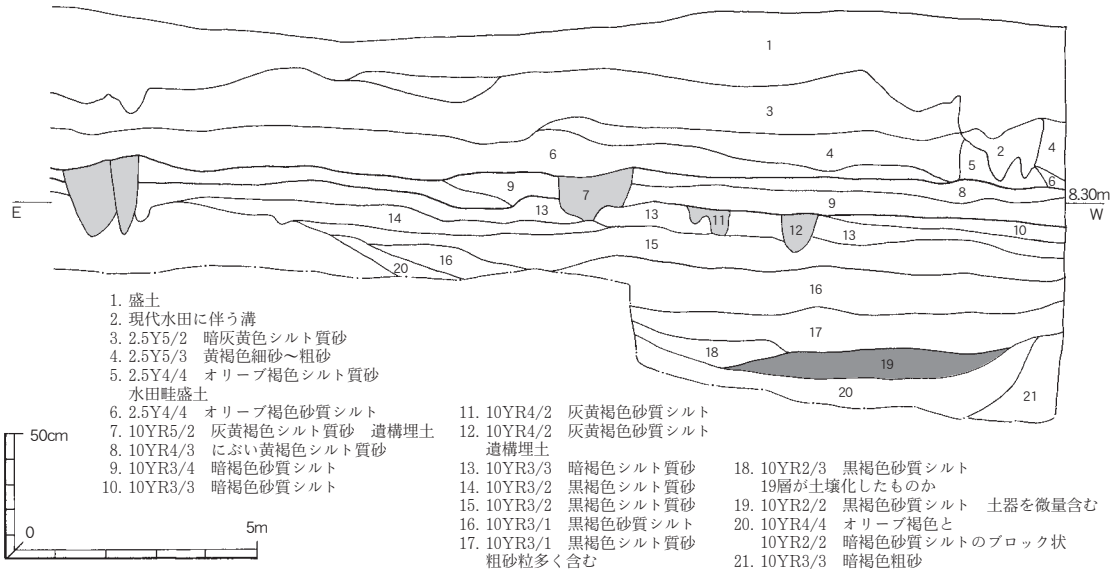
溝190・191は西北西－東南東にのび、溝192がこれに直交する方向にのびるが、これらの間に明瞭な重複関係は看取されなかった。溝190～192は、西に近接する溝２～７・30・31・189の状況に似る。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。



第67図　北山遺跡旧河道断面

【溝193】

遺構（第64図）

溝15と直交する方向（北東－南西）に、蛇行しつつのびるが、15との交点は調査区外であるため重複関係は不明である。最大幅20㎝、深さ８㎝を測る。

遺物

図示可能な遺物は出土しなかった。

時期

推定する資料に欠ける。

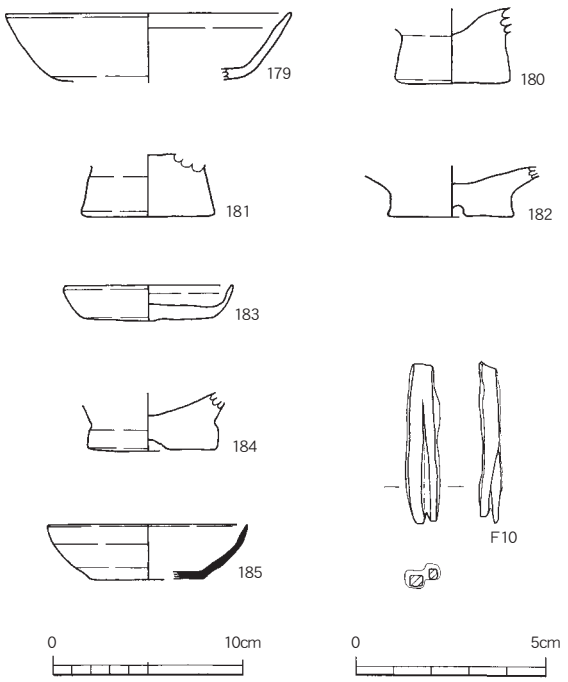
４．旧河道

遺構（第54・67図）

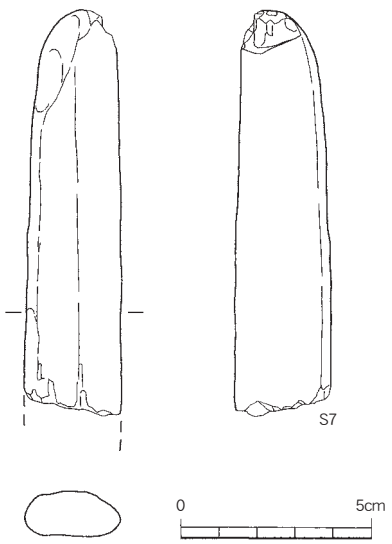
旧河道は調査区西端にあり、南東→北西方向に延びる。調査区内では、河道の東肩が検出されたのみで、少なくとも17m以上の幅をもつものであろう。人為的な遺構ではないことと、調査の時間的な制約から、河道全体を掘削することはできず、調査区南壁沿いに幅１mのトレンチを掘削し、河道内の堆積物と底とを確認するにとどめた。

確認調査の成果と圃場整備前の水田地割りから検討すると、北山遺跡の調査区西端付近は、南から張り出す段丘に入りこんだ谷部にあたることから、旧河道は、谷が埋没する最終段階の状況を示す可能性が高い。旧河道は、北山遺跡の主要な遺構群が成立した時点では、ほぼ埋没していたが、なお上部には若干の凹地が残されており、湿地の状況を保っていたものと思われる。この凹地を埋める河道上面の堆積物中からは、遺構内出土のものとほぼ同時期の遺物が出土している。また、旧河道上面の堆積物を切って、溝２～７が造られている。

これに対し河道内を埋める堆積物からは、19層を除き、遺物は出土しなかった。19層からは、極めて風化が進行し、細片化した土器がわずかに出土したが、所属時期や形態を明らかにできるものはない。同層中からは、石棒１点が出土していることから、土器片は縄文時代に属する可能性が高い。



第68図　旧河道・包含層出土の遺物(1)



第69図　旧河道出土の遺物(2)

遺物（第68・69図）

179は、土師器杯である。器表面の摩耗が著しく、調整痕等は識別できない。

180・181は、土師器柱状高台である。

180の高台は、円錐台状にやや開く形状を呈し、体部は大きく外方へ開く。

181の高台も類似した形態を示す。底部は回転糸切りである。

182は、やはり土師器柱状高台に含められるものであろう。厚い平高台状を呈し、底面には貫通しない１孔が見られる。このような貫通しない孔は、他の柱状高台にも散見されることから、製作技術に関連するものと思われる。

第69図Ｓ７は、石棒と判断した。淡緑灰色を呈する片岩の礫を用いたもので、先端部に欠落が見られるほか、一端は折れ面となっている。欠落部、折れ面ともに摩耗しており、破損後、ある程度転磨を受けたものであろう。

５．包含層出土の遺物（第68図）

包含層中からは、７世紀代・鎌倉時代の遺物が出土している。

183は、土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。口縁部は急斜度に立ち上がり、薄い。

184は、土師器柱状高台である。厚い平高台状を呈し、体部と底部の接合部は段をなす。底部は静止糸切りで、中央に貫通しない孔が認められる。

185は、須恵器杯身である。他の中世の遺物とは異なり、７世紀代に属するものと思われる。

Ｆ10は、不明鉄製品である。二股に分かれ、尖る端部を見せる。断面形は厚みのある長方形であるため、先端が分かれていても可動性はないと思われる。

第70図186は、北山遺跡の地質トレンチ２より出土した縄文土器である。出土したのは、中世の遺構検出面下1.5mの砂層中であり、原位置を保つ資料ではない。表面には細かな斜縄文が認められるが、摩耗により詳細を検討しえない。

(3) 小結

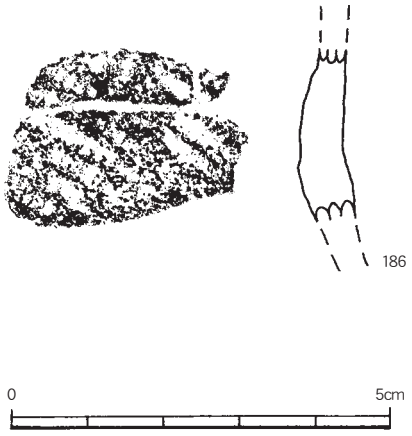
遺構群の時期

北山遺跡で検出された遺構群は、中世前半期の中におさまるものと思われる。細かく見るならば、掘立柱建物跡１が13世紀中頃～後半、同２が13世紀末を前後する時期、同３は13世紀代の中で理解できるだろう。

その他の遺構では、時期を決定する資料に欠けるが、溝２～７・30・31・189からなる溝群は、13世紀中頃に属するものであろう。時期の推定が可能なその他の遺構も、溝38（江戸時代）を除き、概ね中世前半期の中におさまるものと思われる。

縄文時代の遺物

調査区西端の旧河道からは、縄文時代の石棒が出土しているほか、風化の著しい土器の細片が出土している。また、本書Ⅳ－１で論及される北山遺跡の地質トレンチの調査では、洪水砂ないしは旧河道内の堆積物と考えられる砂層から、縄文土器の破片が出土している。こうしたことから、北山遺跡ないしはその周辺に、縄文時代の遺跡が存在したことはほぼ確実と言ってよかろう。ただし、今回の調査では、縄文時代の遺物包含層等は検出されておらず、将来に課題を残している。



第70図　地質トレンチ出土縄文土器

中瀬１区

番 号	形 式	規模(間×間)	床面積(㎡)	長軸方位	所属時期
ＳＢ１	総　柱	３×４	23.7	Ｎ79.0°　Ｅ	12世紀末～13世紀初頭
ＳＢ２	側　柱	３×■	－	Ｎ89.5°　Ｅ	12世紀末～13世紀前半
ＳＢ３	総　柱	３×■	－	Ｎ88.5°　Ｗ	13世紀初頭以前
ＳＢ４	総　柱	４×■	－	Ｎ87.0°　Ｗ	12世紀末～13世紀初頭
ＳＢ５	側　柱	５×■	－	Ｎ83.6°　Ｅ	
ＳＢ６	側　柱	２×３	30.7	Ｎ88.5°　Ｅ	
ＳＢ７		１×２	10.1	Ｎ　2.5°　Ｅ	
ＳＢ８	不　明	？×３	－	Ｎ85.0°　Ｗ	中世前半
ＳＢ９	不　明	？×３	－	Ｎ88.7°　Ｗ	13世紀末
ＳＢ10	不　明	？×３	－	Ｎ　2.5°　Ｅ	13世紀末～14世紀初頭
ＳＢ11	不　明	？×３	－	Ｎ87.5°　Ｗ	
ＳＢ12		１×２	7.5	Ｎ83.5°　Ｗ	
ＳＢ13		１×２	6.9	Ｎ85.0°　Ｗ	
ＳＢ14		１×２	9.5	Ｎ85.5°　Ｗ	中世前半？
ＳＢ15	不　明	？×３	－	Ｎ88.2°　Ｅ	中世前半？
ＳＢ16	総　柱	２×３	28.5	Ｎ87.6°　Ｅ	12世紀末～13世紀初頭
ＳＡ１	－	－	－	Ｎ84.2°　Ｅ	
ＳＡ２	－	－	－	Ｎ　2.3°　Ｅ	13世紀代

中瀬２区

建 物 番 号	形 式	規 模	規模(㎡)	長軸の方位	時 期
ＳＢ１	側　柱	■×３	－	Ｎ84.2°　Ｗ	中世前半
ＳＢ２	総　柱	２×３	20.7	Ｎ　2.0°　Ｅ	12世紀末～13世紀初頭
ＳＢ３	総　柱	■×３	－	－	13世紀代

北山遺跡

建 物 番 号	形 式	規 模	規模(㎡)	長軸の方位	時 期
ＳＢ１	総　柱	■×■	(76.9)	Ｎ87.0°　Ｗ	13世紀中頃～後半
ＳＢ２	総　柱	■×３	－	Ｎ10.5°　Ｅ	13世紀末
ＳＢ３	総　柱	■×■	－	Ｎ26.4°　Ｅ	13世紀代
ＳＢ４	総　柱	■×■	－	Ｎ20.8°　Ｅ	

第３表　掘立柱建物跡一覧表

遺　跡	掲載番号	挿図番号	種　別	器　種	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技術的特徴	備　考
鳥飼中瀬１区	1	10	土師器	柱状高台皿	ＳＢ－１　Ｐ101	15.0	6.4	5.0	底部ヘラ切り　高台外面は工具使用のナデ　皿部は内外面ナデ	
鳥飼中瀬１区	2	10	瓦器	椀	ＳＢ－２　Ｐ48	－	5.1	－	内面ヘラミガキ	
鳥飼中瀬１区	3	10	土師器	皿	ＳＢ－２　Ｐ93	－	6.5	－	底部ヘラ切り？　内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	4	10	土師器	鍋	ＳＢ－２　Ｐ59	－	－	－	外面平行タタキ　頸部ヨコナデ　内面ユビオサエおよび当て具痕	外面にはススが付着する
鳥飼中瀬１区	5	10	土師器	椀	ＳＢ－３　Ｐ60	13.0	6.4	3.1	底部回転糸切り　体部内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	6	10	白磁	碗	ＳＢ－３　Ｐ87	－	－	－	口縁端部を外反させ、上面に面を作る	
鳥飼中瀬１区	7	13	須恵器	甕	ＳＡ－１　Ｐ147	16.8	－	－	口縁部内面に自然釉がかかる	
鳥飼中瀬１区	8	15	土師器	蓋	ＳＢ－７　Ｐ191	－	－	－	内外面ともナデ	土師器杯Bの蓋
鳥飼中瀬１区	9	15	土師器	皿	ＳＢ－７　Ｐ456	9.9	8.0	1.4	口縁部回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	10	15	土師器	杯？	ＳＢ－７　Ｐ456	－	9.5	－	底部回転糸切り　体部内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	11	15	土師器	椀	ＳＢ－７　Ｐ436	－	7.6	－	外面回転ナデ　見込み部ナデ	
鳥飼中瀬１区	12	16	土師器	杯	ＳＡ－２　Ｐ54	9.7	4.5	2.5	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	13	16	瓦器	椀	ＳＡ－２　Ｐ54	14.9	－	－	内外面ヨコナデ　内面粗いヘラミガキ　口縁端部内面に痕跡的沈線	楠葉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	14	16	土師器	椀	ＳＡ－２　Ｐ176	－	7.5	－	内外面ナデ	
鳥飼中瀬１区	15	16	瓦器	椀	ＳＡ－２　Ｐ179・452	－	6.2	－	内外面ナデ	ヘラミガキの有無は不明
鳥飼中瀬１区	16	16	土師器	杯	ＳＡ－２　Ｐ445	13.1	9.0	3.3	底部ヘラ切り　内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	17	16	土師器	椀	ＳＡ－２　Ｐ445	15.9	－	－	内外面回転ナデ　口縁下外面に強いヨコナデ	外面の一部に濃いススが付着
鳥飼中瀬１区	18	18	土師器	皿	ＳＢ－８　Ｐ251	7.9	5.9	1.3	底部回転ヘラ切り　口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	19	18	土師器	皿	ＳＢ－８　Ｐ251	9.0	5.6	1.9	底部回転ヘラ切り　口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	20	18	土師器	皿	ＳＢ－８　Ｐ251	9.5	7.5	1.8	底部回転糸切り　口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	21	18	土師器	皿	ＳＢ－８　Ｐ251	10.0	8.5	1.9	口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	22	18	土師器	杯	ＳＢ－８　Ｐ251	13.7	9.7	3.1	底部回転ヘラ切り　口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	23	18	瓦器	椀	ＳＢ－８　Ｐ251	－	－	－	内面粗いヘラミガキ　外面ナデ	
鳥飼中瀬１区	24	18	土師器	皿	ＳＢ－９　Ｐ252	－	－	－	底部回転ヘラ切り	
鳥飼中瀬１区	25	18	瓦器	椀	ＳＢ－９　Ｐ252	－	－	－		和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	26	18	瓦器	椀	ＳＢ－９　Ｐ252	18.4	－	－	内外面とも摩耗が進む	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	27	18	青磁	碗	ＳＢ－９　Ｐ258	17.8	－	－	内面に蓮弁文　外面に沈線2条	竜泉窯系
鳥飼中瀬１区	28	18	瓦器	椀	ＳＢ－９　Ｐ264	－	5.6	－	内面にヘラミガキ（摩耗進行のため不鮮明）	
鳥飼中瀬１区	29	18	瓦器	椀	ＳＢ－10　Ｐ244	13.8	3.8	3.5	高台は痕跡的　内面に粗いヘラミガキ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	30	18	土師器	皿	ＳＢ－11　Ｐ249	8.9	7.4	1.2	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	31	20	土師器	杯	ＳＢ－14　Ｐ297	－	10.0	－	底部回転ヘラ切り　内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	32	20	土師器	椀	ＳＢ－14　Ｐ424	－	6.5	－	内外面とも摩耗が進む	
鳥飼中瀬１区	33	20	瓦器	椀	ＳＢ－14　Ｐ302	－	－	－	内外面ともナデ	
鳥飼中瀬１区	34	22	白磁	碗	ＳＢ－16　Ｐ305	15.9	－	－	口縁部は玉縁に作る	
鳥飼中瀬１区	35	22	瓦器	椀	ＳＢ－16　Ｐ381	14.8	5.2	4.7	内面は摩耗が著しい　外面上部に粗いヘラミガキ　下部はユビオサエ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	36	22	瓦器	椀	ＳＢ－16　Ｐ381	16.0	－	－	内面粗いヘラミガキ　外面は上部・下部ともわずかにヘラミガキ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	37	22	瓦器	椀	ＳＢ－16　Ｐ381	－	4.4	－	見込み部に粗い平行線状のヘラミガキ？	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	38	24	土師器	皿	Ｐ14	6.1	3.5	1.9	内面回転ナデ	

第４表－１　掲載土器観察表（鳥飼中瀬遺跡１区）

遺　跡	掲載番号	挿図番号	種　別	器　種	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技術的特徴	備　考
鳥飼中瀬１区	39	24	瓦器	椀	P15	13.9	6.0	3.4	内面粗いヘラミガキ　外面ユビオサエ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	40	24	土師器	皿	P27	7.2	4.6	1.5	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	41	24	土師器	皿	P27	7.9	4.6	1.5	口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	42	24	土師器	皿	P76	－	8.0	－	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	43	24	土師器	椀	P79	－	7.0	－	底部回転糸切り　内外面回転ナデ	平高台をもつ椀
鳥飼中瀬１区	44	24	土師器	？	P79	－	6.0	－	底部回転ヘラ切り後ナデ	
鳥飼中瀬１区	45	24	土師器	杯	P79	－	9.5	－	底部回転糸切り　内面回転ナデ　外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	46	24	白磁	碗	P81	14.6	－	－	釉に細かな貫入	
鳥飼中瀬１区	47	24	須恵器	鉢	P100	24.4	－	－	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	48	24	瓦器	椀	P142	－	－	－		
鳥飼中瀬１区	49	24	土師器	鉢？	P117	－	－	－		
鳥飼中瀬１区	50	24	土師器	椀	P117	－	4.5	－	外面ナデ	
鳥飼中瀬１区	51	24	土師器	椀	P117	15.8	－	－	外面回転ナデ　内面ハケ	
鳥飼中瀬１区	52	24	瓦器	椀	P117	14.8	－	－	外面上部粗いヘラミガキ　内面は摩耗が進行　口縁部内面に沈線１条	楠葉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	53	24	瓦器	椀	P177	14.7	－	－	内面ヘラミガキ（単位識別できず）　外面ユビオサエ 口縁部内面に沈線１条	楠葉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	54	24	土師器	皿	P185	9.4	8.0	1.2	口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	55	24	瓦器	椀	P185	－	－	－	内面ヘラミガキ　外面ユビオサエおよびナデ　口縁部内面に沈線１条	楠葉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	56	24	白磁	碗	P185	－	－	－	口縁部は玉縁に作る	
鳥飼中瀬１区	57	24	瓦器	椀	P188	16.0	－	－	内外面ヘラミガキ　口縁部内面に沈線１条	楠葉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	58	24	土師器	皿	P190	9.4	6.5	1.9	口縁部および内面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	59	24	土師器	羽釜脚	P411	－	－	－	外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	60	24	土師器	皿	P429	8.2	7.1	1.4	底部回転糸切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	61	24	土師器	椀	P429	16.0	－	－	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	62	24	土師器	皿	P438	9.6	8.0	1.4	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	63	24	瓦器	椀	P453	17.8	－	－	内外面とも摩耗が進む　外面ユビオサエ　口縁部内面に沈線１条	楠葉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	64	24	瓦器	椀	P453	16.0	－	－	内外面とも摩耗が進む　外面ユビオサエ　口縁部内面に沈線１条	楠葉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	65	24	土師器	皿	P453／454	10.1	9.0	1.7	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	66	24	土師器	椀	P453／454	－	7.0	－	内外面ナデ	
鳥飼中瀬１区	67	24	土師器	鞴羽口	P454	－	－	－	外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	68	24	土師器	椀	P455	14.7	6.0	4.5	内外面ナデ　外面の一部工具ナデ？	内面にスス付着
鳥飼中瀬１区	69	24	土師器	皿	P466	9.1	7.5	1.7	口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	70	24	土師器	椀	P466	－	7.0	－		器表の剥離が著しい
鳥飼中瀬１区	71	27	土師器	皿	P241	8.2	6.3	1.5	底部ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	72	27	土師器	鍋	P241	38.0	－	－	口縁部～内面ヨコナデ　頸部強いヨコナデ　体部外面ナデ？	
鳥飼中瀬１区	73	27	土師器	皿	P242	9.3	8.0	2.0	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	74	27	土師器	皿	P242	7.8	6.0	1.5	底部回転ヘラ切り？　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	75	27	土師器	皿	P245	8.8	7.8	1.2	底部静止糸切り　口縁部および内外面回転ナデ	

第４表－２　掲載土器観察表（鳥飼中瀬遺跡１区）

遺跡	掲載番号	挿図番号	種別	器種	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技術的特徴	備考
鳥飼中瀬１区	76	27	土師器	椀	Ｐ245	13.0	－	－	口縁部および内面回転ナデ　外面下部はユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	77	27	青磁	碗	Ｐ248／413	－	6.4	－	高台および高台内面は露胎　内面に草花文	
鳥飼中瀬１区	78	27	瓦器	椀	Ｐ248／413	14.9	6.0	3.1	高台は痕跡的 内外面ともヘラミガキなし 口縁外面下部に強いヨコナデ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	79	27	土師器	羽釜	Ｐ248／413	20.8	－	－	外面ユビオサエ　鍔部分はナデ　内面ハケ	
鳥飼中瀬１区	80	27	土師器	皿	Ｐ268	15.8	10.3	2.1	口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	81	27	土師器	皿	Ｐ417	7.4	5.0	1.6	底部ヘラ切り後ナデ？　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	82	27	土師器	皿	Ｐ417	8.0	5.4	1.7	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	83	27	土師器	皿	Ｐ318	7.6	6.0	1.2	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	84	27	土師器	皿	Ｐ359	7.4	5.0	1.4	底部切り離し後ナデ　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	85	27	土師器	椀	Ｐ372	12.2	7.7	4.6	内外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	86	27	土師器	竈	Ｐ391	－	－	－		庇部分
鳥飼中瀬１区	87	32	土師器	皿	ＳＫ７	8.3	5.9	2.0	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	88	32	土師器	皿	ＳＫ７	8.8	7.0	1.8	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	89	32	土師器	皿	ＳＫ７	8.0	5.7	2.1	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	90	32	土師器	皿	ＳＫ７	8.8	6.7	1.8	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	91	32	土師器	？	ＳＫ７	－	8.0	－	内外面回転ナデ	高台部分
鳥飼中瀬１区	92	32	瓦器	椀	ＳＫ７	15.0	5.7	5.7	内外面ともに摩耗が進行する　口縁部外面および内面ヨコナデ 外面下部はユビオサエ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	93	32	瓦器	椀	ＳＫ７	15.6	5.8	5.5	内外面ヘラミガキ 見込み部は平行線状のミガキ 口縁部外面はヨコナデ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	94	32	瓦器	椀	ＳＫ７	－	5.3	－	見込み部は不定方向のミガキ？	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	95	32	須恵器	鉢	ＳＫ７	－	11.2	－	底部はヘラケズリ？　内外面回転ナデ	内面は使用による摩耗が顕著
鳥飼中瀬１区	96	33	土師器	皿	ＳＫ271	9.0	6.6	1.8	底部回転糸切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	97	33	土師器	皿	ＳＫ271	12.6	－	－	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	98	34	須恵器	杯	ＳＫ278	－	8.5	－	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	99	34	土師器	皿	ＳＫ278	14.9	10.8	2.2	底部ユビオサエ後ナデ　口縁部内外面回転ナデ　見込み部ナデ 口縁部内面に沈線1条	
鳥飼中瀬１区	100	34	土師器	甕	ＳＫ278	16.4	－	12.8	外面タタキ　内面ユビオサエ　口縁部内外面回転ナデ	二次的に火を受ける 製塩土器か
鳥飼中瀬１区	101	34	土師器	鉢	ＳＫ278	18.7	－	－	外面粗いハケ　ユビオサエ　粘土紐の継ぎ目が顕著	二次的に火を受ける 製塩土器か
鳥飼中瀬１区	102	34	土師器	鉢	ＳＫ278	19.8	－	12.9	外面粗いハケ　ユビオサエ　粘土紐の継ぎ目が顕著	二次的に火を受ける 製塩土器か
鳥飼中瀬１区	103	34	土師器	鉢	ＳＫ278	－	－	－	粘土紐の継ぎ目が顕著	製塩土器か
鳥飼中瀬１区	104	37	土師器	柱状高台	ＳＤ１	－	7.1	－	外面回転ナデ	上部形態は不明
鳥飼中瀬１区	105	37	土師器	羽釜脚	ＳＤ１	－	－	－	外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	106	37	須恵器	鉢	ＳＤ１	－	－	－	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	107	37	須恵器	鉢	ＳＤ１	24.8	－	－	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	108	37	土師器	？	ＳＤ１	32.4	－	－	外面タタキ　内外面ヨコナデ・ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	109	37	土師器	皿	ＳＤ６	7.6	4.4	1.5	底部回転ヘラ切り　口縁部内外面回転ナデ　見込み部ナデ	
鳥飼中瀬１区	110	37	土師器	椀？	ＳＤ６	－	5.5	－	底部回転ヘラ切り　内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	111	37	須恵器	椀	ＳＤ６	－	5.0	－	底部回転糸切り　内外面回転ナデ	

第４表－３　掲載土器観察表（鳥飼中瀬遺跡１区）

遺　跡	掲載番号	挿図番号	種　別	器　種	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技術的特徴	備　考
鳥飼中瀬１区	112	37	土師器	羽釜	ＳＤ6	24.9	－	－	内外面回転ナデ	内面口縁下２㎝より下位にススト付着
鳥飼中瀬１区	113	37	土師器	皿	ＳＤ42	9.0	7.5	1.6	口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	114	37	土師器	羽釜脚	ＳＤ113	－	－	－	外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	115	37	土師器	土錘	ＳＤ118	4.5	2.3	2.7		数値は長さ・幅・厚さの順に表示
鳥飼中瀬１区	116	37	土師器	杯	ＳＤ234	－	7.5	－	底部回転ヘラ切り後ナデ　　内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	117	37	土師器	竈	ＳＤ279	－	－	－		庇部分
鳥飼中瀬１区	118	37	土師器	皿	ＳＤ287	7.8	6.2	1.5	底部回転糸切り　口縁部内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	119	37	須恵器	椀	ＳＤ287	－	5.7	－	底部回転糸切り　内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	120	40	土師器	皿	ＳＸ111	7.3	6.0	1.4	口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	121	40	土師器	皿	ＳＸ111	9.2	7.0	1.8	口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	122	40	土師器	椀	ＳＸ111	13.3	6.2	4.5	底部ヘラ切り　内外面ヨコナデ　内底面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	123	40	瓦器	椀	ＳＸ111	17.6	－	－	内面粗いヘラミガキ　外面ユビオサエ　口縁外面下ヨコナデ	和泉型瓦器椀　口径の復元に不確定要素
鳥飼中瀬１区	124	40	瓦器	椀	ＳＸ111	－	5.0	－	見込み部粗い渦状のヘラミガキ	
鳥飼中瀬１区	125	40	土師器	鍋	ＳＸ111	26.5	－	－	内外面ナデ　ユビオサエ	体部内面に炭化物付着
鳥飼中瀬１区	126	40	土師器	鍋	ＳＸ111	26.0	－	－	外面ユビオサエ　内面ハケ	
鳥飼中瀬１区	127	40	須恵器	鉢	ＳＸ111	28.0	－	－	内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	128	40	白磁	碗	ＳＸ276	－	7.4	－	体部下半～高台内外面は露胎　見込み部に沈線2条	
鳥飼中瀬１区	129	40	白磁	碗	ＳＸ276	－	5.5	－	高台内外面露胎	
鳥飼中瀬１区	130	40	土師器	椀	包含層	－	5.5	－	外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	131	40	土師器	椀	包含層	－	6.0	－	外面回転ナデ　内面ナデ	内面暗色
鳥飼中瀬１区	132	40	土師器	柱状高台	包含層	－	7.5	－	外面回転ナデ　内面ナデ　底面に貫通しない1孔	上部は皿か
鳥飼中瀬１区	133	40	土師器	柱状高台	包含層	－	7.0	－	外面回転ナデ　内面ナデ	上部形態不明
鳥飼中瀬１区	134	40	土師器	小壷	包含層	4.6	4.5	3.2	底部回転糸切り　内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬１区	135	40	瓦器	椀	包含層	14.8	－	－	内面粗いヘラミガキ　外面ユビオサエ　外面口縁下ヨコナデ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬１区	136	40	土師器	鍋？	包含層	18.0	－	－	外面～口縁部回転ナデ　内面ナデおよびユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	137	40	白磁	碗	包含層	16.0	－	－		
鳥飼中瀬１区	138	40	緑釉陶器	椀	包含層	－	6.6	－	底面は露胎	
鳥飼中瀬１区	139	40	白磁	碗	包含層	－	6.6	－	高台内外面は露胎　見込み部に沈線1条	
鳥飼中瀬１区	140	40	青磁	碗	包含層	－	6.2	－	高台内外面施釉　高台内底面のみ露胎	
鳥飼中瀬１区	141	40	土師器	羽釜脚	包含層	－	－	－	外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	142	40	土師器	羽釜脚	包含層	－	－	－	外面ユビオサエ	
鳥飼中瀬１区	143	40	土師器	土錘	包含層	9.0	5.2	5.2		数値は長さ・幅・厚さの順に表示

第４表－４　掲載土器観察表（鳥飼中瀬遺跡１区）

遺　跡	掲載番号	挿図番号	種　別	器　種	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技術的特徴	備　考
鳥飼中瀬２区	144	46	土師器	皿	ＳＢ－１　Ｐ1020	8.2	6.6	2.2	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬２区	145	46	土師器	皿	ＳＢ－１　Ｐ1020	16.4	10.5	3.3	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬２区	146	46	瓦器	椀	ＳＢ－２　Ｐ1008	15.0	5.8	4.8	内面は粗いヘラミガキ　外面はユビオサエおよびナデ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬２区	147	46	瓦器	椀	ＳＢ－２　Ｐ1042	15.0	7.0	5.7	内面は粗いヘラミガキ　外面はユビオサエおよびナデ	和泉型瓦器椀
鳥飼中瀬２区	148	46	瓦器	椀	ＳＢ－３　Ｐ1064	－	5.0	－	見込み部は粗い平行線のヘラミガキ	
鳥飼中瀬２区	149	46	土師器	杯	ＳＢ－３　Ｐ1014	13.4	9.2	3.1	底部は回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬２区	150	46	土師器	土錘	ＳＢ－３　Ｐ1075	5.3	10.0	4.6		数値は長さ・幅・厚さの順に表示
鳥飼中瀬２区	151	46	瓦器	椀	Ｐ1007	9.4	－	－	内外面ナデ　ヘラミガキは観察できない	
鳥飼中瀬２区	152	46	土師器	柱状高台	Ｐ1022	－	7.0	－	底部回転糸切り　外面回転ナデ　見込み部はナデ	上部形態は不明
鳥飼中瀬２区	153	48	土師器	鍋？	ＳＫ1019	27.0	－	－	口縁部内外面回転ナデ	
鳥飼中瀬２区	154	48	土師器	？	ＳＫ1019	－	－	－	内外面ナデ	器形不明　製塩土器か
鳥飼中瀬２区	155	48	土師器	？	ＳＫ1019	－	－	－	内外面ナデ	器形不明　製塩土器か
鳥飼中瀬２区	156	52	土師器	椀	ＳＤ1004	－	5.0	－	内外面ナデ	内面にスス付着
鳥飼中瀬２区	157	52	瓦器	椀	ＳＤ1004	15.1	5.0	5.2	外面ナデおよびユビオサエ　内面はヘラミガキを施すも摩耗が進行して不鮮明	和泉型瓦器椀

第５表　掲載土器観察表（鳥飼中瀬遺跡２区）

遺　跡	掲載番号	挿図番号	種　別	器　種	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技術的特徴	備　考
北　山	158	58	瓦器	椀	ＳＢ１　Ｐ169	－	－	－	内面粗いヘラミガキ　外面ユビオサエおよびナデ	和泉型瓦器椀
北　山	159	58	瓦器	椀	ＳＢ１　Ｐ174／181	15.1	－	－	内面粗いヘラミガキ　外面ユビオサエおよびナデ　口縁部ヨコナデ	和泉型瓦器椀
北　山	160	58	瓦器	椀	ＳＢ１　Ｐ174	14.2	4.9	4.5	内面ヘラミガキ　見込み部は粗い平行線のヘラミガキ 外面ユビオサエ及びナデ　口縁部ヨコナデ	和泉型瓦器椀
北　山	161	58	土師器	皿	ＳＢ２　Ｐ35	8.4	6.4	1.7	底部静止ヘラ切り？　口縁部および内外面回転ナデ	
北　山	162	58	瓦器	椀	ＳＢ３　Ｐ59	14.9	－	－	摩耗のため内面ヘラミガキは識別できない 外面粗いヘラミガキ及びユビオサエ	和泉型瓦器椀
北　山	163	58	須恵器	椀	ＳＢ４　Ｐ33	－	－	－	内外面回転ナデ	
北　山	164	61	須恵器	皿	Ｐ23	7.8	6.2	1.5	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
北　山	165	61	土師器	皿	Ｐ23	10.0	7.7	1.9	底部回転ヘラ切り　口縁部回転ナデ　見込み部は平行ナデ	
北　山	166	61	黒色土器？	皿	Ｐ23	9.6	7.7	2.2	底部ヘラケズリ？　口縁部および内外面回転ナデ	
北　山	167	61	土師器	皿	Ｐ23	8.5	6.7	1.5	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
北　山	168	61	土師器	皿	Ｐ23	8.1	6.7	1.3	底部静止糸切り（後ナデ？）　口縁部および内外面回転ナデ	
北　山	169	62	土師器	皿	Ｐ21	7.5	6.0	1.5	底部ナデ？　口縁部および内外面回転ナデ	口縁の一部にススト付着
北　山	170	62	土師器	椀	Ｐ26	15.8	－	－	内外面回転ナデ	口縁の一部にススト付着
北　山	171	62	土師器	鍋	Ｐ34	34.0	－	－	外面ナデおよびユビオサエ　内面ハケ　口縁部ナデ	
北　山	172	62	土師器	柱状高台椀	Ｐ40	－	6.9	－	底部回転糸切り　外面回転ナデ　見込み部ナデ	
北　山	173	62	須恵器	鉢	Ｐ111	29.3	－	－	内外面回転ナデ	
北　山	174	66	土師器	皿	ＳＤ6	6.7	5.5	1.4	底部ナデ　口縁部および内外面回転ナデ	内面にススト付着
北　山	175	66	土師器	皿	ＳＤ6	9.0	6.6	1.6	底部回転ヘラ切り　口縁部および内外面回転ナデ	
北　山	176	66	土師器	皿	ＳＤ6	10.1	7.5	1.7	底部ナデ　口縁部および内外面回転ナデ　口縁端部に弱い沈線	
北　山	177	66	土師器	竈？	ＳＤ29	－	－	－	内面ヨコナデ	
北　山	178	66	須恵器	鉢	ＳＤ157	－	10.5	－	底部回転糸切り　外面回転ナデ　見込み部ナデ	
北　山	179	68	土師器	杯	ＳＲ	15.0	－	3.6	内外面回転ナデ	
北　山	180	68	土師器	柱状高台	ＳＲ	－	6.0	－	底部ナデ　内外面回転ナデ	上部形態は不明
北　山	181	68	土師器	柱状高台	包含層	－	7.0	－	底部回転糸切り　外面回転ナデ　見込み部ナデ	上部形態は不明
北　山	182	68	土師器	柱状高台	ＳＲ	－	6.6	－	底部に貫通しない1孔　内外面回転ナデ	上部形態は不明
北　山	183	68	土師器	皿	包含層	8.8	7.0	1.9	底部回転ヘラ切り　口縁部内外面回転ナデ　見込み部ナデ	
北　山	184	68	土師器	柱状高台	包含層	－	6.8	－	底部静止糸切り　底部に貫通しない１孔　内外面回転ナデ	
北　山	185	68	須恵器	杯	包含層	10.6	6.0	2.9	内外面回転ナデ	
北　山	186	70	縄文土器	？	地質トレンチ	－	－	－	表面に斜縄文	

第６表　掲載土器観察表（北山遺跡）

石製品

番 号	出土遺跡	遺 構	器 種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備 考
S 1	鳥飼中瀬遺跡 1 区	SB－2 P45／46	砥石	75.0	38.0	13.0	
S 2	鳥飼中瀬遺跡 1 区	SB－1 P43	砥石	227.0	83.5	54.0	砂岩？
S 3	鳥飼中瀬遺跡 1 区	P 139	叩石	129.0	64.0	45.0	砂岩？
S 4	鳥飼中瀬遺跡 1 区	P 367	砥石	227.0	83.5	54.0	砂岩？
S 5	鳥飼中瀬遺跡 1 区	P 390	礎盤石	245.0	194.5	70.5	結晶片岩
S 6	鳥飼中瀬遺跡 1 区	SX－111	砥石	159.0	115.0	69.0	細砂岩
S 7	北　山　遺　跡	旧河道	石棒	107.5	25.0	12.0	結晶片岩

鉄製品

番 号	出土遺跡	遺 構	器 種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備 考
F 1	鳥飼中瀬遺跡 1 区	SB－3 P59	釘	30.0	5.5	5.0	
F 2	鳥飼中瀬遺跡 1 区	SB－16 P381	刀子	92.0	24.0	5.0	
F 3	鳥飼中瀬遺跡 1 区	P 142	釘	56.0	7.0	7.0	
F 4	鳥飼中瀬遺跡 1 区	P 485	釘	19.0	7.0	6.0	
F 5	鳥飼中瀬遺跡 1 区	SD－2	不明	54.0	23.0	10.0	取手状のものか？
F 6	鳥飼中瀬遺跡 1 区	SD－286	釘	48.5	11.0	10.0	
F 7	鳥飼中瀬遺跡 1 区	包含層	鑿？	40.0	12.5	11.0	
F 8	鳥飼中瀬遺跡 1 区	包含層	不明	49.0	32.5	7.0	円盤状鉄製品
F 9	北　山　遺　跡	SB－1 P42	釘	19.5	4.5	3.5	
F 10	北　山　遺　跡	包含層	不明	42.5	7.5	4.5	二股状の先端

第 7 表　金属器・石製遺物計測表

Ⅳ　自 然 科 学 的 分 析

１．鳥飼中瀬遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）

㈱加速器分析研究所

２．北山遺跡および鳥飼中瀬遺跡の地形環境

青木　哲哉（立命館大学非常勤講師）

1．鳥飼中瀬遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

㈱ 加速器分析研究所

1　測定対象試料

鳥飼中瀬遺跡は、兵庫県洲本市五色町鳥飼（北緯34°22′36″、東経134°45′39″）に所在する。測定対象試料は、地質トレンチより採取された土壌と炭化物の合計３点（IAAA－101162～101164）である（第８表）。

2　測定の意義

鳥飼中瀬遺跡が立地する地形面の形成過程とその時期を決定する。

3　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol／ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

(6) グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

３MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH－２）をベースとした^{14}C－AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C／^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C／^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1) δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C／^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第８表に、補正していない値を参考値として第９表に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年

代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も δ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を第8表に、補正していない値を参考値として第9表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1 σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2 σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第9表に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC／AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

地質トレンチ採取試料の^{14}C年代は、第8層の土壌No. 1が5500±30yrBP、第15層の土壌No. 2が5940±30yrBP、第22層の炭化物No. 3が5870±30yrBPである。No. 2とNo. 3は誤差（±1 σ）の範囲でわずかに重ならない程度の近接した値を示す。暦年較正年代（1 σ）はNo. 1が4436～4330cal BCの間に2つの範囲、No. 2が4848～4747cal BCの間に2つの範囲、No. 3が4778～4711cal BCの範囲で示され、層位の上下関係に対して大きな矛盾はない。考古学上の時期区分ではいずれも縄文時代前期に属する。

試料の炭素含有率は、No. 1とNo. 2が1%前後、No. 3が60%を超える値で、試料の種類ごとに適正な値と言える。化学処理、測定上の問題は認められない。

第8表　試料および測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰)(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA－101162	No. 1	層位：地質トレンチ第8層	土壌	HCl	-23.82±0.59	5,500±30	50.4±0.2
IAAA－101163	No. 2	層位：地質トレンチ第15層	土壌	HCl	-21.66±0.52	5,940±30	47.74±0.19
IAAA－101164	No. 3	層位：地質トレンチ第22層	炭化物	AaA	-22.35±0.45	5,870±30	48.18±0.19

第９表　暦年較正年代

測定番号	δ13C補正あり		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-101162	5,490±30	50.52±0.19	5,504±32	4436calBC－4427calBC（5.0%） 4369calBC－4330calBC（63.2%）	4449calBC－4416calBC（13.7%） 4404calBC－4324calBC（76.0%） 4287calBC－4268calBC（ 5.7%）
IAAA-101163	5,880±30	48.07±0.18	5,939±32	4848calBC－4771calBC（66.0%） 4752calBC－4747calBC（2.2%）	4906calBC－4863calBC（13.4%） 4856calBC－4723calBC（82.0%）
IAAA-101164	5,820±30	48.44±0.19	5,866±31	4778calBC－4711calBC（68.2%）	4828calBC－4815calBC（1.6%） 4803calBC－4683calBC（92.7%） 4633calBC－4623calBC（1.1%）

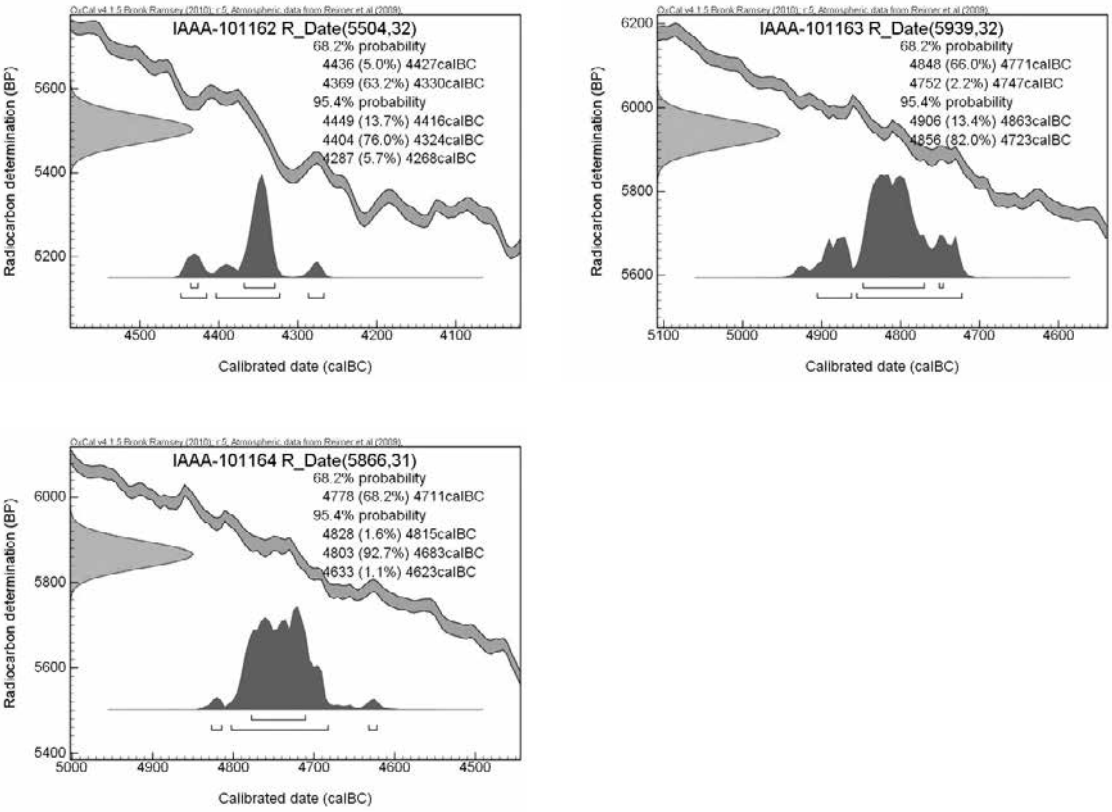
［参考値］

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355－363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337－360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0－50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111－1150



第71図　［参考］暦年較正年代グラフ

2．北山遺跡および鳥飼中瀬遺跡の地形環境

青木　哲哉（立命館大学非常勤講師）

1　はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀にも変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、鳥飼川下流部の平野に位置する北山遺跡と鳥飼中瀬遺跡の地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、各遺跡の調査区で堆積物の観察を実施した。地形分類は5,000分の１空中写真を用いて行った。また、堆積物に関しては、遺構検出面より上位のものだけでなく、そこから掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深の堆積物を観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に発掘調査の成果を加えて、調査区付近における地形環境の考察を行った。

2　調査区周辺の地形分布

(1) 鳥飼川下流部の地形

北山遺跡の調査区および鳥飼中瀬遺跡１区と２区は淡路島の西部にみられる鳥飼川下流部の平野に位置する。この平野は、500～600mの幅で東北東－西南西方向に延び、その北と南には主に丘陵が広がる。平野を流れる鳥飼川は、やや蛇行しながら途中で堺川や奥所川などを合わせて播磨灘に注ぐ。

こうした鳥飼川下流部の平野には、更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、ならびに支流性扇状地などが認められる（第72図）。完新世段丘は２面存在し、本稿では高位のものを完新世段丘Ⅰ、低位のそれを完新世段丘Ⅱと呼ぶ。また、支流性扇状地は３種類認められ、形成時期の古いものから支流性扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと名付ける。これらのうち、北山遺跡と鳥飼中瀬遺跡１・２区は完新世段丘Ⅰに位置する。

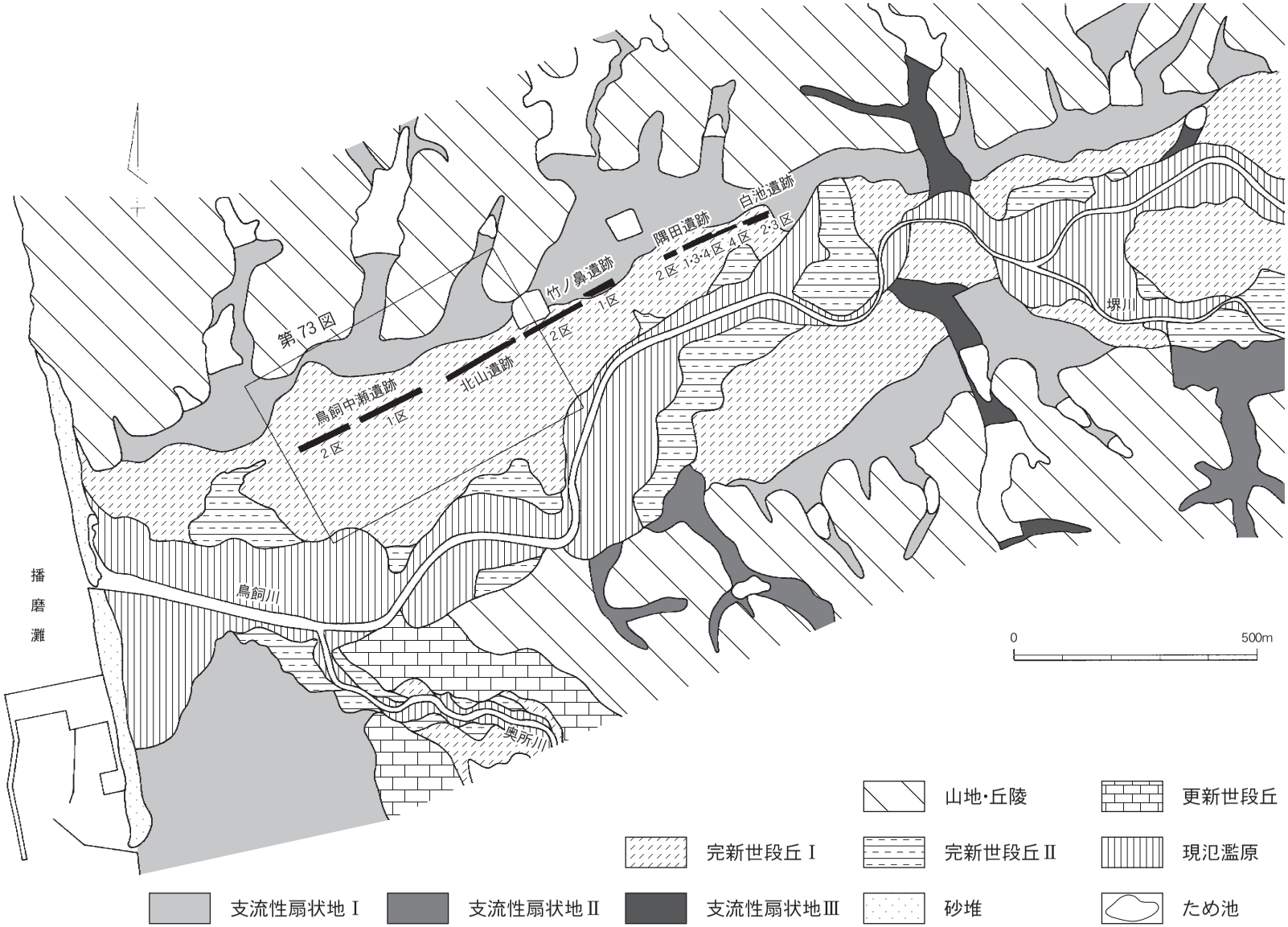
鳥飼川下流部の平野でみられる各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘〕　これは奥所川の流域にだけ認められる。段丘面は奥所川の河床勾配と同様に下流へ比較的急傾斜し、完新世段丘Ⅰと比高およそ１～２ｍの段丘崖で接している。

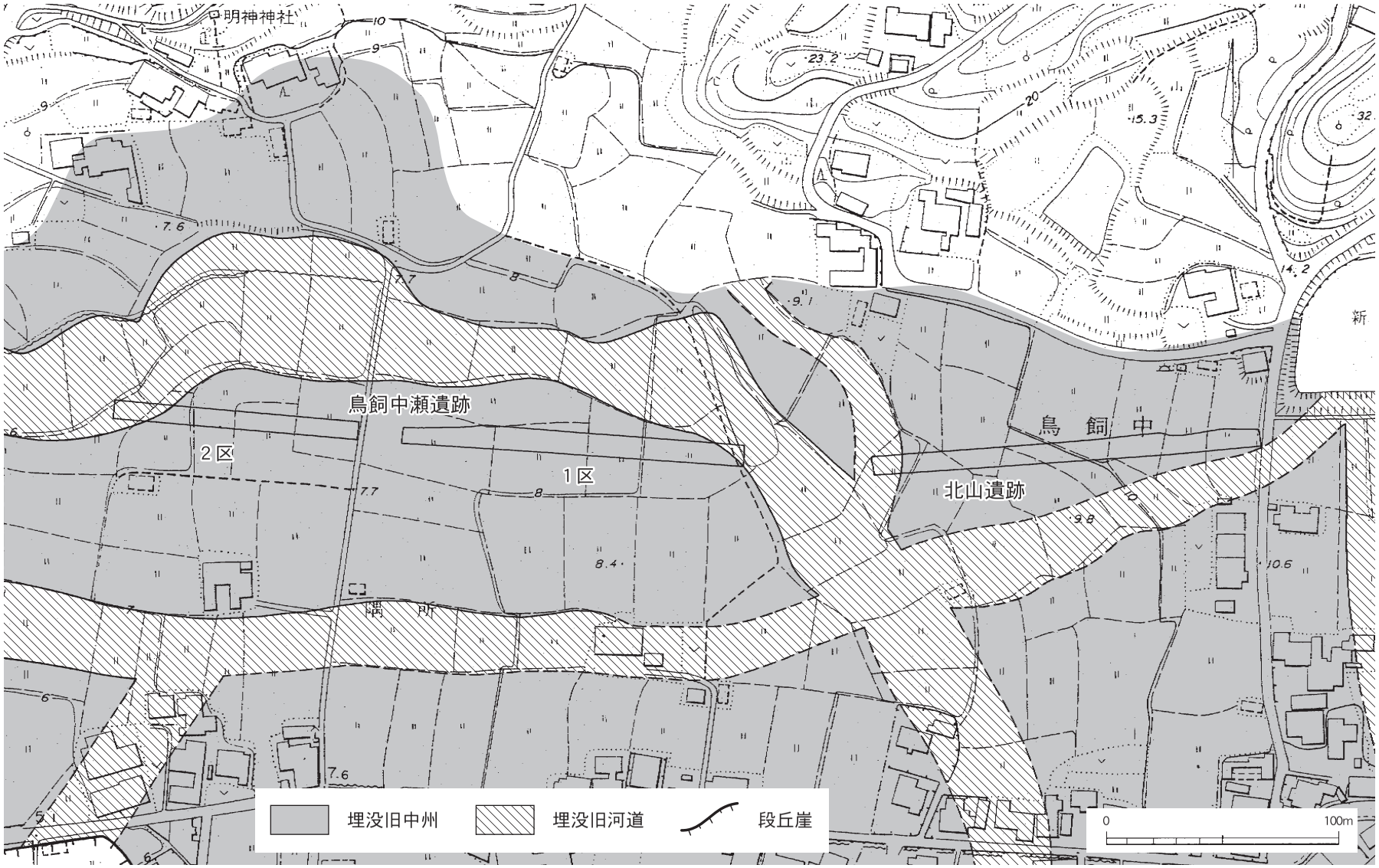
〔完新世段丘〕　完新世段丘Ⅰはこの平野で最もよく発達する。これは鳥飼川や奥所川などの両岸にやや断続的ながら大きい面積で広がる。段丘面は完新世段丘Ⅱより約１ｍ高い。完新世段丘Ⅱも鳥飼川とその支流沿いにみられる。発達はあまりよくなく、断続的に分布する。段丘崖の比高は50cm～１ｍである。

〔現氾濫原〕　これは、鳥飼川やその支流に沿って細長くみられ、比較的連続する。地表は最も低く、鳥飼川や奥所川などの氾濫時には冠水する危険性が高い。

〔支流性扇状地〕　支流性扇状地は、背後の丘陵から堆積物が供給されてできたもので、丘陵を刻む谷の



第72図　鳥飼川下流部の地形分類図



第73図　調査区付近における完新世段丘Ⅰの微地形

中から麓にかけて認められる。地表傾斜は4.8〜7.3％と急で、支流性扇状地Ⅰは完新世段丘Ⅰに、また支流性扇状地Ⅱは完新世段丘Ⅱに、さらに支流性扇状地Ⅲは現氾濫原に傾斜変換線で接する。これらのうち支流性扇状地Ⅰが最も多く分布し、複合扇状地をなすことが多い。

(2) 調査区付近の微地形

北山遺跡の調査区と鳥飼中瀬遺跡１・２区は、完新世段丘Ⅰに位置し、現海岸線より５〜10km上流に認められる。完新世段丘Ⅰは下流へ緩やかに傾斜し、調査区の30〜150m北方には支流性扇状地Ⅰが存在する。200〜300m南方には完新世段丘Ⅰの段丘崖が分布し、崖下には断続的に分布する完新世段丘Ⅱと最大約200mの幅で広がる現氾濫原がみられる。

完新世段丘Ⅰは埋没扇状地が段丘化したもので、そこには埋没した旧中州と旧河道が認められる（第73図)。埋没旧中州上には、北山遺跡の西端を除く調査区、ならびに東端を除く鳥飼中瀬遺跡１区と西端を除く２区が位置する。これらの埋没旧中州上では、主に掘立柱建物跡が検出されており、とくに鳥飼中瀬遺跡１区では数が多い。その時期は北山遺跡の調査区で13世紀、また鳥飼中瀬遺跡１区で12世紀後半〜14世紀初頭、２区で13世紀と考えられている。

他方、埋没旧河道は北山遺跡の調査区西端、鳥飼中瀬遺跡１区の東端と２区の西端に分布する。これらのうち、鳥飼中瀬遺跡１区の東端と２区の西端の埋没旧河道は鳥飼川の流路跡で、北山遺跡の調査区西端のものは北側の丘陵から流下する支流の流路跡にあたる。各調査区の埋没旧河道上では、掘立柱建物跡と同時期の溝跡が検出されている。

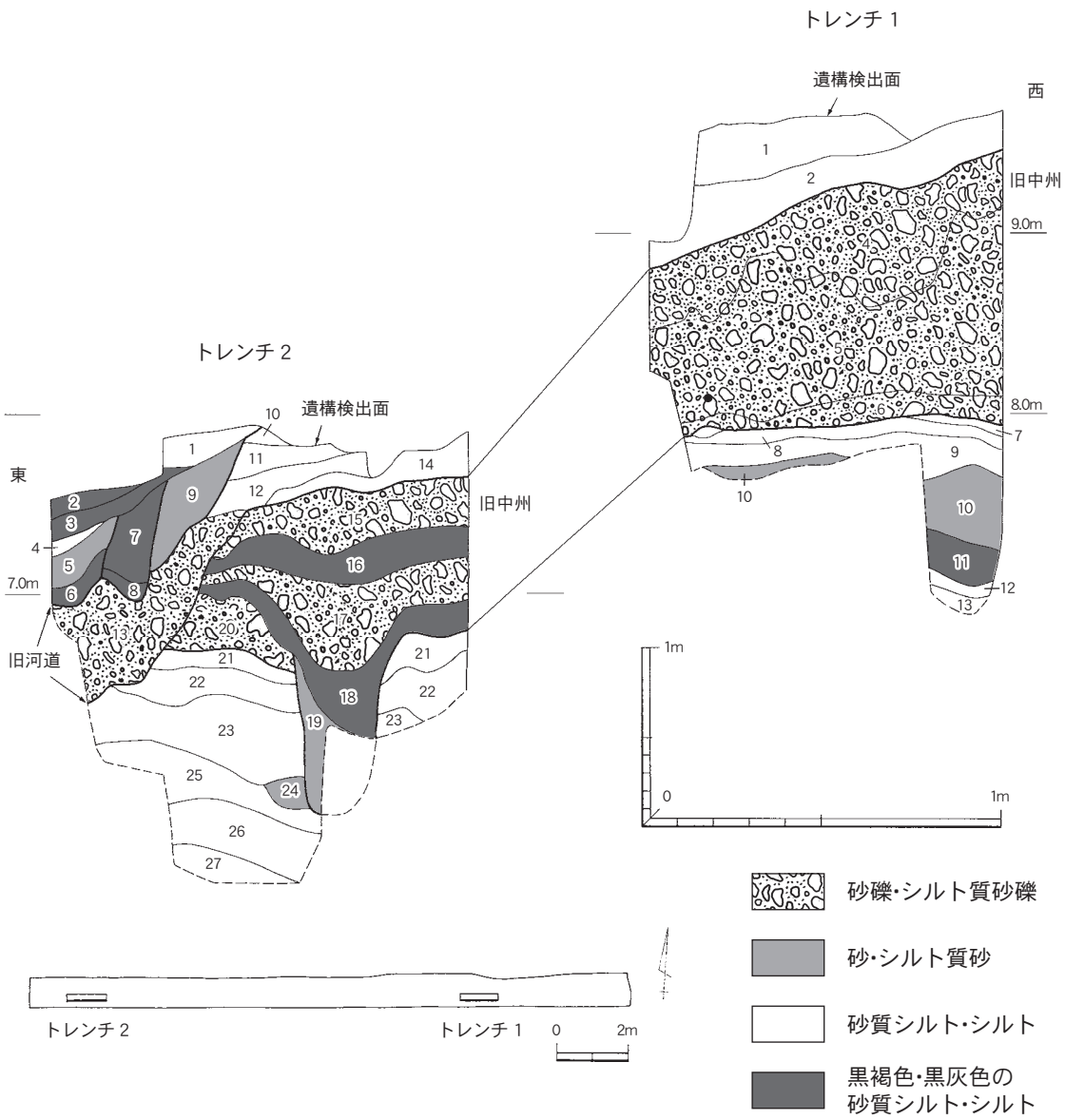
３　調査区における堆積物の特徴

(1) 北山遺跡調査区の堆積物

この調査区における遺構検出面以深には、大きくみて下位から洪水に伴う細粒堆積物、砂礫、およびそれを被覆する細粒堆積物が認められる（第74図)。下位の細粒堆積物（トレンチ１の堆積物７〜13とトレンチ２の堆積物21〜27）は、1.4m以上の厚さをもち、黄灰色や青灰色のシルト質砂、砂質シルト、およびシルトに細分される。中には黒灰色のシルト（トレンチ１の堆積物11）がはさまれ、低湿な環境が現出したことを伺わせる。

その上位にみられる砂礫（トレンチ１の堆積物４〜６とトレンチ２の堆積物15・17・20）は扇状地の旧中州を構成する堆積物に相当し、厚さが90cm〜1.5mである。これは、暗黄灰色と褐灰色の砂礫とシルト質砂礫からなり、３つに細分される。いずれも花崗岩が風化したマサ土に該当し、礫は径２cmまたは0.5cm以下の細かい亜角〜亜円礫を主体とする。これらの上部と下部には、黒色または黒灰色のシルト（トレンチ２の堆積物16・18）が局所的にはさまれる。砂礫を覆う細粒堆積物（トレンチ１の堆積物１・２とトレンチ２の堆積物10〜12・14）は、20〜80cmの厚さでみられ、暗黄灰色や灰色の砂質シルトとシルトに分けられる。これらも洪水堆積物である。

調査区の西端では、旧河道が３つ認められ、それぞれ切り込まれる層位が異なる。すなわち、それは砂礫の間にはさまれる黒灰色シルト（トレンチ２の堆積物18）の上面、砂礫の最上位にみられる暗黄灰色砂礫（トレンチ２の堆積物16）の上面、ならびに遺構検出面にあたる暗黄灰色シルト（トレンチ２の堆積物10）の上面である。とくに、黄灰色シルトの上面から切り込まれる旧河道では、旧河道堆積物を切る複数の流路跡が観察され、流路の形成と埋積が少なくとも３度繰り返された様子が知られる。いずれの旧河道も調査区の北から流下する支流の流路跡に相当する。



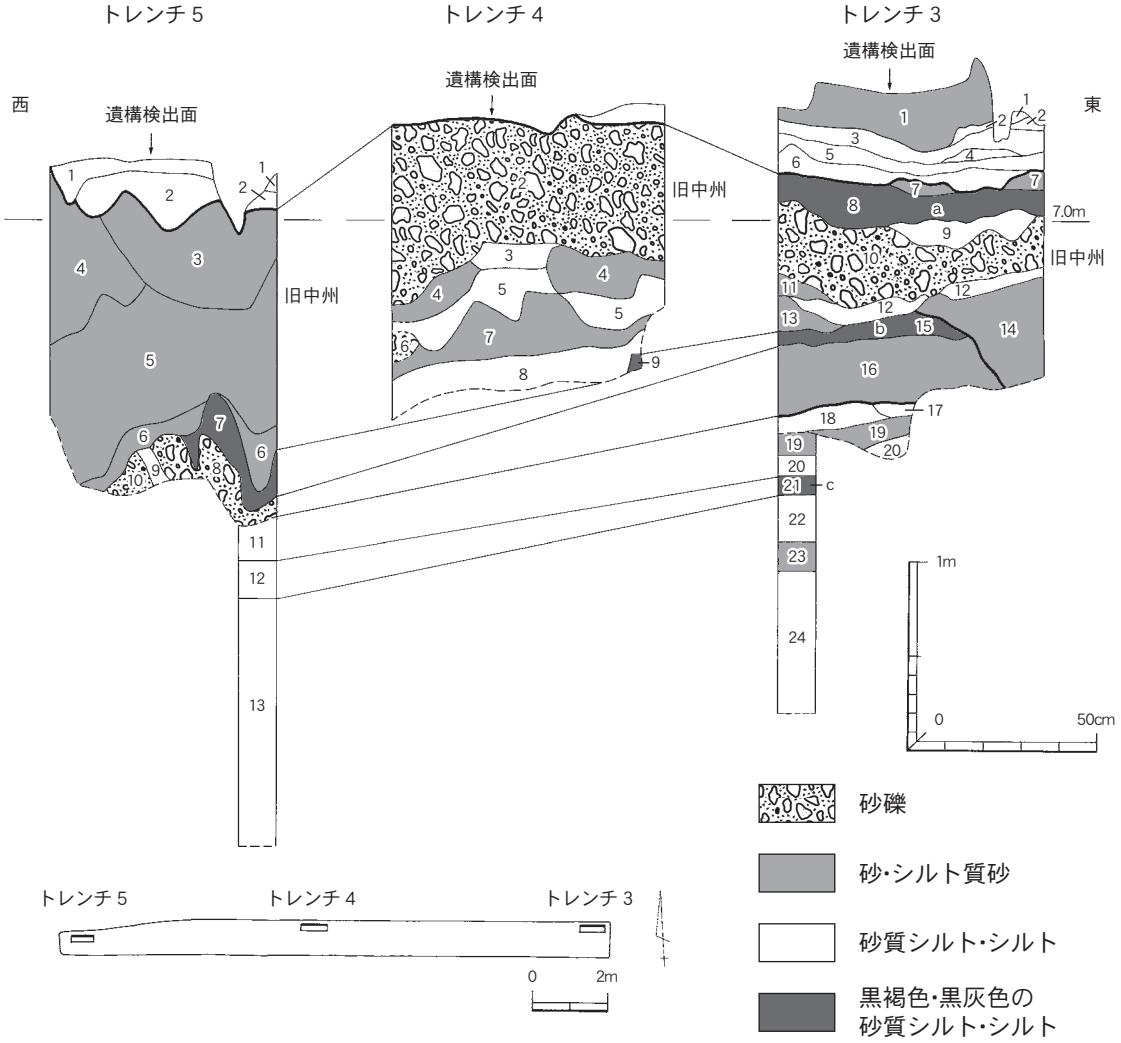
トレンチ 2

1. 暗黄灰色 砂質シルト
2. 黒褐色 シルト
3. 黒褐色 砂質シルト
4. 黒褐色 シルト
5. 黒褐色 シルト質砂
6. 黒色 シルト
7. 黒褐色 砂質シルト
8. 黒色 シルト
9. 暗褐灰色 シルト質砂
10. 暗黄灰色 シルト
11. 暗黄灰色 砂質シルト
12. 暗黄灰色 シルト
13. 黒褐色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
14. 灰色 シルト
15. 暗黄灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
16. 黒色 シルト
17. 暗黄灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
18. 黒灰色 シルト
19. 褐灰色 砂
20. 褐灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
21. 黄灰色 シルト
22. 青灰色 砂質シルト
23. 青灰色 シルト
24. 黄灰色 シルト質砂
25. 青灰色 砂質シルト
26. 青灰色 シルト
27. 青灰色 砂質シルト

トレンチ 1

1. 黄灰色 シルト
2. 暗黄灰色 砂質シルト
3. 灰黄色 シルト
4. 灰黄色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
5. 褐灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
6. 褐灰色 砂礫：径２㎝以下の亜角～亜円礫主体
7. 灰白色 シルト
8. 暗灰色 シルト
9. 青灰色 シルト
10. 青灰色 シルト質砂
11. 黒灰色 シルト
12. 青灰色 シルト
13. 青灰色 砂質シルト

第74図　北山遺跡の調査区におけるトレンチ断面図



トレンチ３

1. 暗褐灰色 シルト質砂
2. 灰黄色 シルト
3. 灰色 シルト
4. 黄灰色 シルト
5. 暗灰色 シルト
6. 黄灰色 シルト
7. 暗褐灰色 シルト質砂
8. 黒褐色 シルト
9. 灰色 砂質シルト
10. 灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
11. 黒褐色 シルト質砂
12. 灰色 砂質シルト
13. 灰色 シルト質砂
14. 灰色 砂
15. 黒灰色 シルト
16. 青灰白色 シルト質砂
17. 青灰白色 シルト
18. 青灰白色 砂質シルト
19. 褐灰色 砂
20. 青灰白色 砂質シルト
21. 黒色 シルト
22. 灰白色 シルト
23. 灰色 砂
24. 暗灰色 シルト

a. 5,500±30yrBP/4404-4324calBC(76.0%)〔IAAA-101162〕
b. 5,940±30yrBP/4856-4723calBC(82.0%)〔IAAA-101163〕
c. 5,870±30yrBP/4803-4683calBC(92.7%)〔IAAA-101164〕

トレンチ４

1. 暗褐灰色 砂質シルト
2. 灰褐色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
3. 黄灰色 シルト
4. 灰褐色 砂
5. 暗灰色 シルト
6. 暗褐色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
7. 黄灰色 シルト質砂
8. 暗灰色 シルト
9. 黒灰色 シルト

トレンチ５

1. 暗灰色 シルト
2. 黄灰色 砂質シルト
3. 黄灰白色 シルト質砂
4. 褐色 砂
5. 黄灰白色 シルト質砂
6. 暗灰色 シルト質砂
7. 黒灰色 シルト
8. 灰褐色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
9. 暗灰色 シルト
10. 灰褐色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
11. 青灰色 シルト
12. 黒灰色 シルト
13. 青灰色 シルト

第75図　鳥飼中瀬遺跡１区におけるトレンチ断面図

遺構検出面より上位の堆積物は、下位から暗灰黄色の砂質シルト、黄褐色のシルト（旧耕土）、および現耕土である。暗灰黄色の砂質シルトは13世紀を中心とする時期の遺物を含み、その下面からは13世紀の掘立柱建物跡、土坑、ならびに溝跡などが検出されている。

(2)鳥飼中瀬遺跡１区の堆積物

ここでの遺構検出面以深には、大きくみて下位から細粒堆積物、砂礫と砂、およびそれを被覆する細粒堆積物が観察される（第75図）。これらは北山遺跡の調査区における遺構検出面以深の堆積物に連続する。下位の細粒堆積物（トレンチ３の堆積物17～24、トレンチ４の堆積物10・11、ならびにトレンチ５の堆積物11～13）は青灰色や暗灰色などを呈する砂質シルトとシルトに細分される。全体の厚さは1.7m以上で、褐灰色や灰色の砂（トレンチ３の堆積物19・23）と黒色のシルト（トレンチ３の堆積物21とトレンチ５の堆積物12）が部分的にはさまれる。これらのうち、黒色のシルトは細粒堆積物の上部にみられ、それからは5,870±30yrBP（IAAA－101164）の放射性炭素年代測定値が得られている[1)]。

その上位に位置する砂礫と砂は、扇状地の旧中州堆積物に該当する。これは、マサ土であり、1.2～1.7mの厚さをもつ。中でも砂礫（トレンチ３の堆積物10、トレンチ４の堆積物２・６、およびトレンチ５の堆積物８・10）は、灰褐色や灰色を呈し、径0.5cm以下の亜角～亜円礫を主体とする。また、砂（トレンチ３の堆積物７・11・13・16、トレンチ４の堆積物３・７、ならびにトレンチ５の堆積物３～６）は青灰白色や黄灰白色の砂とシルト質砂に分けられ、極粗砂や粗砂を多く含む。１区でみられる扇状地の旧中州堆積物は西へ細粒化しており、これは西ほど下流になるためと考えられる。

砂礫と砂には、灰色や暗灰色の砂質シルトとシルト（トレンチ３の堆積物９・12、トレンチ４の堆積物３・５、およびトレンチ５の堆積物９）が局部的にはさまれる。また、上部と下部にはそれぞれ黒褐色と黒灰色のシルト（トレンチ３の堆積物８・15とトレンチ５の堆積物７）がみられ、これは北山遺跡の調査区で観察される状況と同様である。これらのうち、下位の黒灰色シルトは5,940±30yrBP（IAAA－101163)、上位の黒褐色シルトは5,500±30yrBP（IAAA－101162）の放射性炭素年代測定値を示す[2)]。１区の東端では、このような下位の黒灰色シルトを切る旧河道が認められる。これは鳥飼川の流路跡と考えられる。

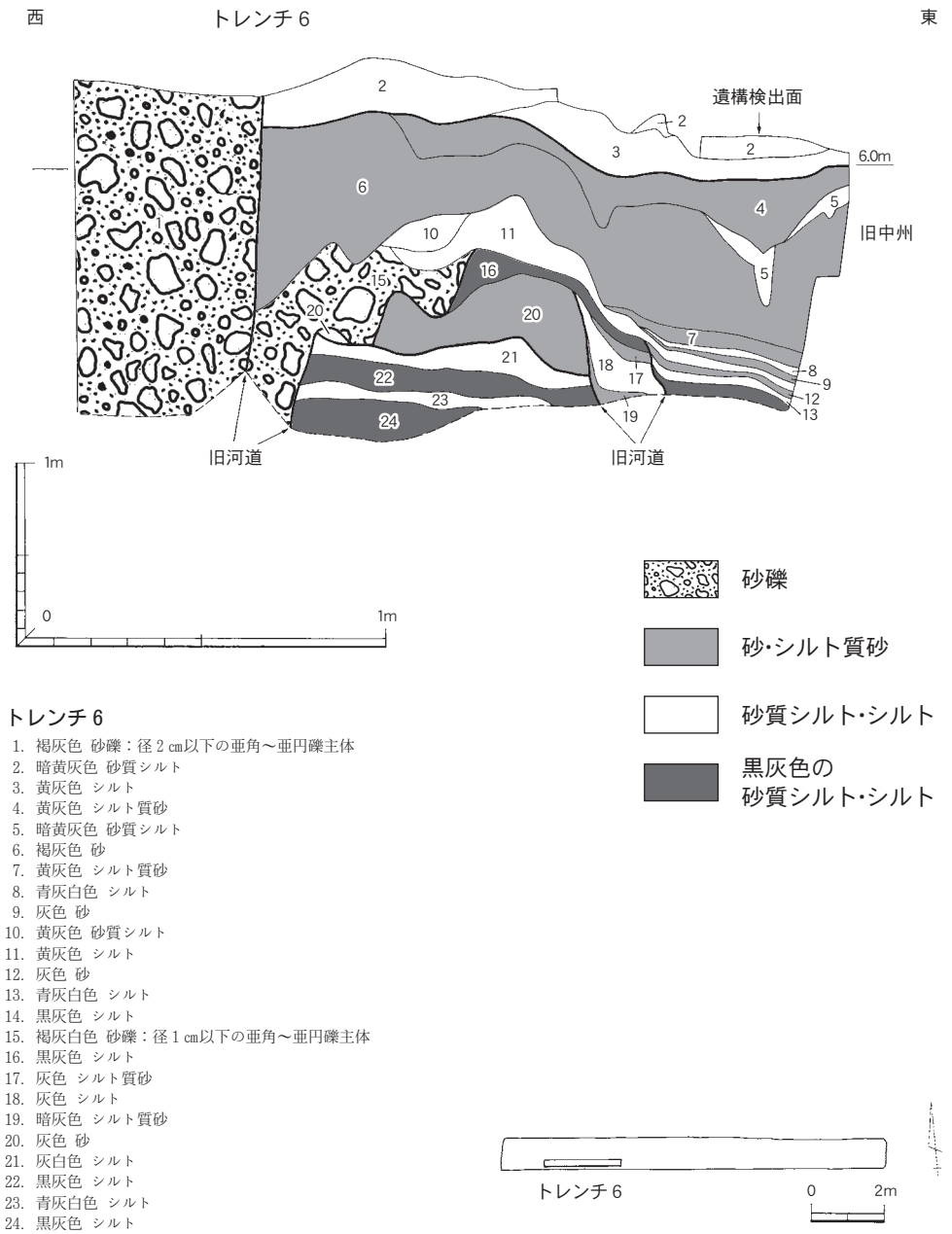
砂礫と砂を被覆する細粒堆積物（トレンチ３の堆積物１～６、トレンチ４の堆積物１、およびトレンチ５の堆積物１・２）は暗褐灰色のシルト質砂と暗灰色や黄灰色のシルトに細分される。厚さは最大で60cmで、分布しないところがある。

遺構検出面より上位には、下位から黄灰色の砂質シルト、灰オリーブ色のシルト（旧耕土)、ならびに現耕土が認められる。黄灰色の砂質シルトには12世紀後半～14世紀初頭ころの遺物が混入し、その下面では同時期の掘立柱建物跡や土坑、溝跡などが検出されている。

(3) 鳥飼中瀬遺跡２区の堆積物

この調査区では、遺構検出面以深に下位から細粒堆積物、砂、ならびにそれを覆う細粒堆積物が認められる（第76図)。この層序は北山遺跡の調査区や鳥飼中瀬遺跡１区とほぼ同じである。下位の細粒堆積物（トレンチ６の堆積物21～24）は灰白色や青灰白色のシルトと黒灰色のシルトに細分される。黒灰色のシルトは、細粒堆積物の上部に２つみられ、低湿な環境が２度存在したことを示す。こうした黒灰色のシルトは北山遺跡の調査区と鳥飼中瀬遺跡１区でも確認される。

その上位に位置する砂は、マサ土であり、扇状地の旧中州堆積物にあたる。全体の厚さは約1.3mあ



第76図　鳥飼中瀬遺跡２区におけるトレンチ断面図

り、これは褐灰色や灰色の砂と黄灰色のシルト質砂（トレンチ６の堆積物４・６・７・９・20）などに分けられる。いずれも極粗砂や粗砂を主体とする。これらの堆積物には、灰色や黄灰色の砂質シルトとシルト（トレンチ６の堆積物５・10・11）が部分的にはさまれ、下部には黒灰色のシルト（トレンチ６の堆積物16）が認められる。北山遺跡の調査区や鳥飼中瀬遺跡１区では、黒灰色のシルトが旧中州堆積物の上部と下部で観察され、それらのうち下部のものは３つの調査区でほぼ同じ時期に生成された可能性が高い。

さらに上位の細粒堆積物（トレンチ６の堆積物２・３）は黄灰色のシルトと暗黄灰色の砂質シルトに細分される。これらは20～30cmの厚さで旧中州を被覆する。２区の西端では、鳥飼川の旧河道が少なくとも４つ観察される。これらのうち、１つは旧中州堆積物の下部にみられる黒灰色シルトの下面から

切り込まれ、２つはそのシルトを切るものである。いずれも扇状地が形成されはじめたころの流路跡にあたる。他の１つは旧中州堆積物を覆う細粒堆積物を切って認められ、扇状地の埋没後に形成されたものである。

なお、遺構検出面より上位の堆積物は鳥飼中瀬遺跡１区と基本的に同じであり、遺構検出面からは13世紀の掘立柱建物跡、土坑、および溝跡など確認されている。

４　調査区付近における地形環境の変遷

北山遺跡の調査区と鳥飼中瀬遺跡１・２区付近の地形環境は、これまで述べた事柄から次のように考察される。

〔ステージ１〕　調査区付近には、砂質シルトやシルトなどの細粒堆積物が洪水の度にもたらされた。これは縄文海進期に起こった現象と考えられる。こうした堆積の末期にあたる約5,900年前には、北山遺跡の調査区や鳥飼中瀬遺跡１区と２区で低湿な環境が局所的に現出し、そこでは黒灰色のシルトが生成された。

〔ステージ２〕　縄文海進頂期を過ぎると、鳥飼川による砂礫やシルト質砂礫の堆積がはじまった。これに伴って扇状地が発達し、北山遺跡の西端を除く調査区、および東端を除く鳥飼中瀬遺跡１区と西端を除く２区に中州が形成された。扇状地が形成されはじめたころには、低湿な環境下で黒灰色シルトの生成が局地的に行われ、その前後には鳥飼中瀬遺跡１区の東端と２区の西端を鳥飼川が流れた。また、扇状地の形成末期である約5,500年前にも、低湿な環境が扇状地上に局所的に現出した。

〔ステージ３〕　扇状地の形成後、砂質シルトやシルトなどが次々と堆積し、扇状地を覆っていった。これによって扇状地は地下浅所に埋没した。さらに、北山遺跡の調査区西端には北からの支流が、また鳥飼中瀬遺跡２区の西端では鳥飼川が流下し、埋没扇状地上に流路が形成された。

〔ステージ４〕　その後海退が著しく進んだ時期に、鳥飼川による下刻がみられ、調査区付近に広がる埋没扇状地が段丘化した。こうして形成された完新世段丘Ｉの段丘面では、その後洪水のほとんど発生しない安定した環境が続いた。

〔ステージ５〕　このような環境下にあった調査区付近の完新世段丘Ｉでは、顕著な人間生活が12世紀後半ごろからみられるようになった。鳥飼中瀬遺跡１区の埋没旧中州上では12世紀後半～14世紀初頭に、また北山遺跡の調査区と鳥飼中瀬遺跡２区のそれでは13世紀に掘立柱建物が建てられ、この付近における埋没旧中州上は主に居住域として利用された。一方、各調査区の埋没旧河道上では、同じころに溝がつくられるにすぎなかった。

５．おわりに

北山遺跡の調査区と鳥飼中瀬遺跡１・２区は鳥飼川下流部の平野に位置する。これらはその平野で最もよく発達する完新世段丘Ｉにみられる。そこでは、約5,900年前までに細粒堆積物が洪水によってもたらされ、さらに縄文海進頂期直後には主に砂礫の堆積に伴って扇状地が形成された。扇状地は5,500年前を少し下る時期まで発達し続け、やがて細粒堆積物の被覆によって埋没した。完新世段丘Ｉはこうした埋没扇状地がその後の著しい海退期に段丘化したものである。

このようにして形成された完新世段丘Ｉには、埋没した旧中州と旧河道が認められる。これらのうち、鳥飼中瀬遺跡１区の東端と２区の西端にみられる埋没旧河道は鳥飼川の流路跡、また北山遺跡の調査区東端に分布するものは北から流下する支流の旧河道にあたる。他方、埋没旧中州はそれら以外の範囲に

広がり、北山遺跡の調査区と鳥飼中瀬遺跡１・２区のほとんどは異なる埋没旧中州上に位置する。

完新世段丘Ｉでは、段丘化の後洪水のほとんど及ばない安定した環境が続いた。このような環境の下、調査区では人間の顕著な生活が12世紀後半ごろからみられるようになった。12世紀後半～14世紀初頭には、鳥飼中瀬遺跡１区で掘立柱建物からなる集落がつくられ、北山遺跡の調査区と鳥飼中瀬遺跡２区では13世紀に掘立柱建物が建てられた。いずれも埋没旧中州上に立地したもので、各調査区の埋没旧河道上ではそれと同時期の溝がつくられたにすぎない。

このように安定した環境の段丘上でも、周囲よりわずかに高い埋没旧中州上に居住域が形成され、それよりやや低い埋没旧河道上では人間の居住がみられなかった。これは埋没旧中州上が排水されやすく比較的高燥であるためと考えられる。北山遺跡と鳥飼中瀬遺跡の調査区では、以上のように人間生活と地形環境が密接に係わったのである。

注

１．この放射性炭素年代測定は㈱加速器分析研究所によるものである。
２．前掲１

V　結　語

鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡の成立とその背景

遺跡が所在する鳥飼地区は、石清水八幡宮領鳥飼荘の推定地でもある。鳥飼荘の成立年代については、文献等に欠けており明確ではないが、元暦元年（1184）に、源頼朝が、石清水八幡宮領に対する武士の年貢押領停止を命じた荘園の一つとして挙げられている。また、貞応二年（1223）の『淡路国大田文』によると、田三十町、畑、浦一所から成るという。鳥飼荘は、『兵庫北関入船納帳』（文安二年：1445）にも記載があり、室町時代中期まで継続していたとされている（阿部　猛・佐藤和彦編　1997）。

鳥飼荘の具体的な領域については不明であるが、今回の調査地の南に隣接する鳥飼八幡神社は、社伝によれば、9世紀後半に石清水八幡宮より勧請されたという。17世紀後半に成立した『淡国通記』でも、鳥飼八幡宮は石清水別宮とされており（神戸新聞出版センター　1983）、石清水八幡宮領としての鳥飼荘は、鳥飼八幡宮を中心に広がっていたものと考えてよかろう。

事実、津名郡（現淡路市）教育委員会による調査では、鳥飼八幡宮北側の調査で、平安時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物が多数出土しているという[1]。

今回の調査で、鳥飼中瀬遺跡および北山遺跡より検出された遺構群は、平安時代末～鎌倉時代（12世紀後半～13世紀初頭）に始まり、13世紀代を通じて集落の形成、あるいは耕地化が展開していたもので、集落形成の一部は14世紀代にも及ぶ可能性がある。この年代は、鳥飼荘の継続期間に含まれており、これらの遺構群が荘園に関連することは、ほぼ確実と言ってよかろう。ただ、今回の調査では、荘園の中枢機能を示すような文字資料等が出土していないことから、調査対象地は、荘園に関連する集落の一部に相当する場所であったと推定される。

瓦器椀について

今回の調査で出土した瓦器椀は、和泉型と呼ばれるものが中心であったが、明らかにこれとは異なる形態・技術を見せるものが含まれていた。その特徴としては、①口縁端部内面に沈線を巡らせる、②堅緻な胎土と焼成、③ヘラミガキの単位（原体）の相対的な細かさ等が挙げられ、これらの特徴から楠葉型瓦器椀と判断し、本文中の記載でもこの用語を用いた。

和泉型と楠葉型の比率については、全体の出土量が多くないため敢えて算出していないが、ここで注目すべきは、この地域に、産地の異なる瓦器椀が移入されているということであろう。特に楠葉型瓦器椀の移入については、鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡を含む地域が、南山城に位置する石清水八幡宮の荘園であったことと符合するものとして注目される。

今回出土した和泉型の瓦器椀は、尾上実氏の編年によるⅡ－2期頃の資料に始まり、Ⅲ期のものを中心に認められ、楠葉型の資料についても、概ねこの時期の中におさまるようである。

本報告書に掲載した瓦器椀の一部については、和泉型・楠葉型を含めて、大手前大学の中井　淳氏らによる胎土分析が行われており、その報告が待たれるところである。

柱状高台をもつ土師器について

今回の調査で出土した遺物では、柱状高台をもつ土師器が注目される。このような土師器は、平安時代後期に出現し、中世前半期にかけて見られるものであるが（八峠　興　2001）、一般には出土数が少ないものであり、今回の調査で出土した数量は例外的に多いと言える。

柱状高台の機能としては、器台・器の下皿・托といった用途が推定されており（羽柴直人　2001)、多分に儀礼的要素の強い器種と理解されているようである。鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡の調査地は、鳥飼八幡神社に近い位置にあり、想像をたくましくするならば、神社に隣接した遺跡空間に、このような儀礼的行為が行われる場が存在したのではないかと思われる。

縄文時代の遺跡

北山遺跡では、少量ではあるが縄文時代の遺物が出土している。いずれも原位置を遊離した資料であるが、遺物器表面の観察からは、遠距離を流されたものではなく、ごく至近の場所から流出したものと判断される。今後近隣の調査にあたっては、この時期の遺構・遺物にも十分に留意すべきであろう。

注

１．淡路市教育委員会　伊藤宏幸氏のご教示による。

引用・参考文献

阿部　猛・佐藤和彦編　1997　『日本荘園大辞典』　東京堂出版
神戸新聞出版センター　1983　『兵庫県大百科事典』
八峠　興　2001　「柱状高台考」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集』
羽柴直人　2001　「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』 第13号

写 真 図 版

鳥飼中瀬遺跡 1 区

鳥飼中瀬遺跡 2 区

北山遺跡

調査地空中写真（東から）

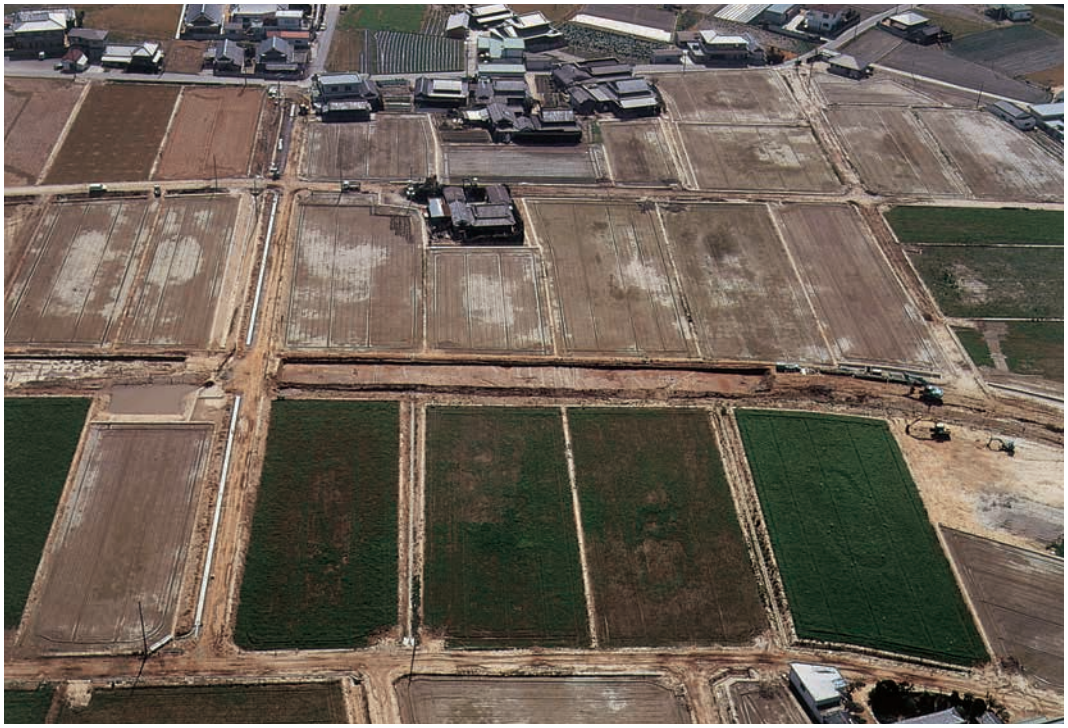
調査地空中写真（西から）

鳥飼中瀬遺跡１区（空中写真・北から）

鳥飼中瀬遺跡１区（空中写真・北から）

鳥飼中瀬遺跡 2 区（空中写真・北から）

北山遺跡（空中写真・南から）

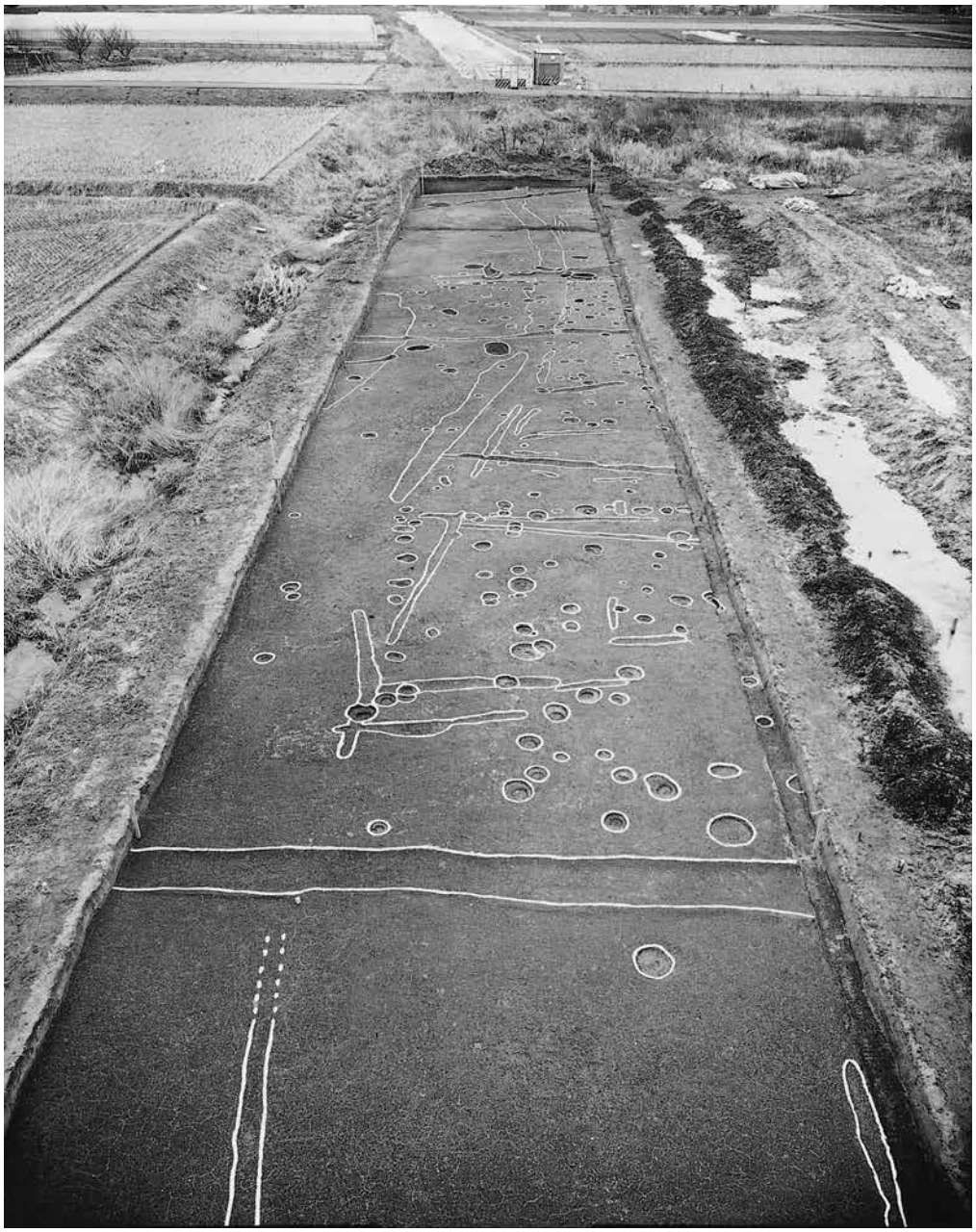


鳥飼中瀬遺跡 2 区（空中写真・南から）

北山遺跡（空中写真・北から）

鳥飼中瀬遺跡 1 区土坑 7

鳥飼中瀬遺跡 1 区
土坑278

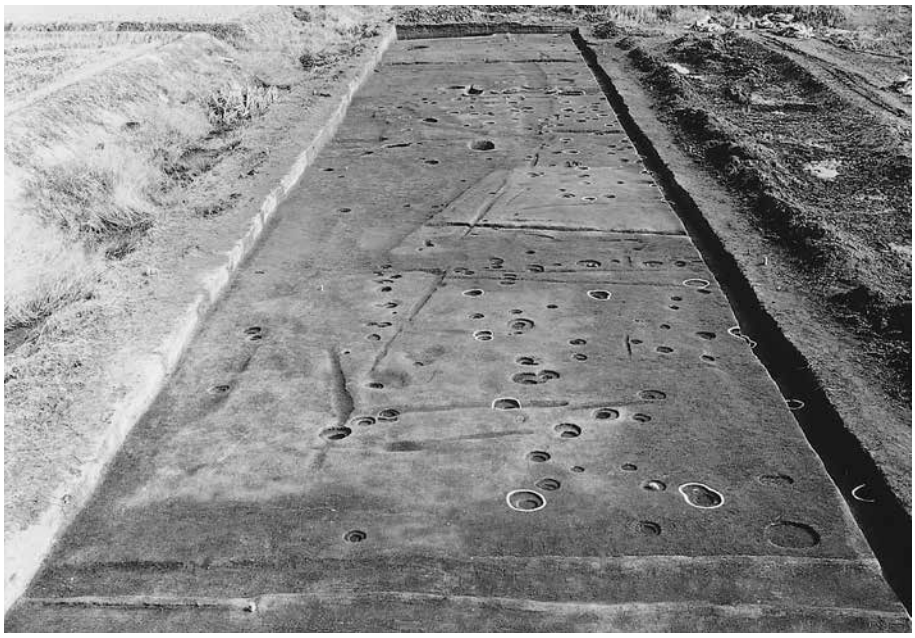


鳥飼中瀬遺跡１区東半
（西から）

鳥飼中瀬遺跡１区全景（西から）

鳥飼中瀬遺跡 1 区
西半　　（東から）

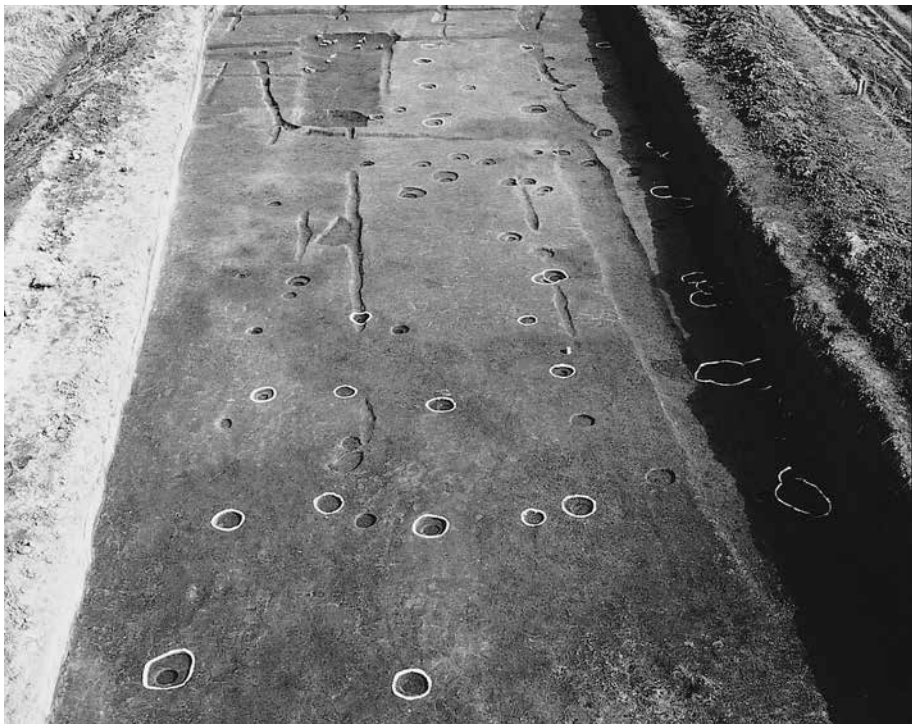
鳥飼中瀬遺跡 1 区
掘立柱建物跡 6
（北東から）



鳥飼中瀬遺跡１区
第1•2群掘立柱建物跡群（西から）

鳥飼中瀬遺跡１区
第１・２群掘立柱建物跡（東から）

鳥飼中瀬遺跡１区
第1•2群掘立柱建物跡群（北西から）



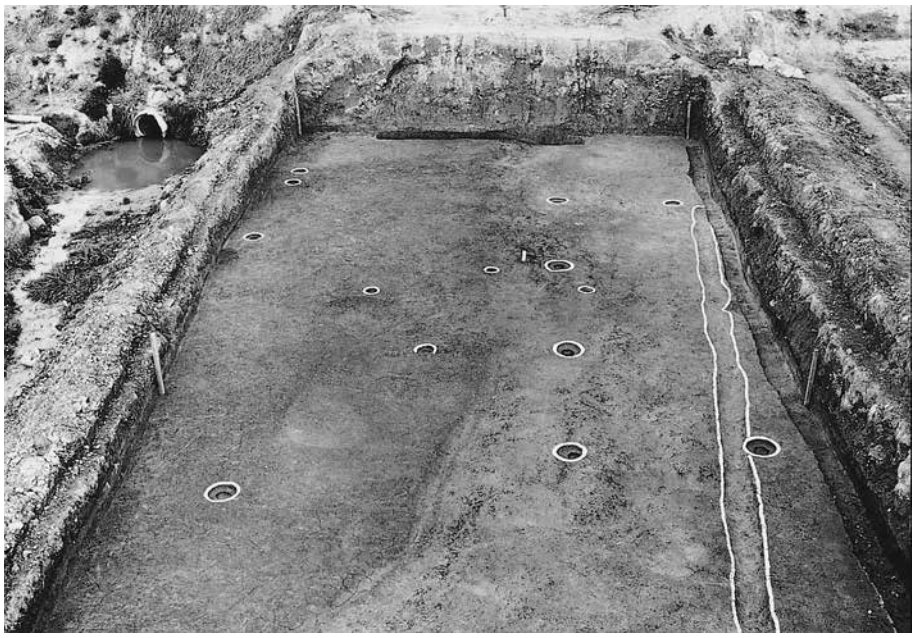
鳥飼中瀬遺跡１区
第４群掘立柱建物跡群
（西から）

鳥飼中瀬遺跡１区
第４群掘立柱建物跡群と
土坑278　　（東から）

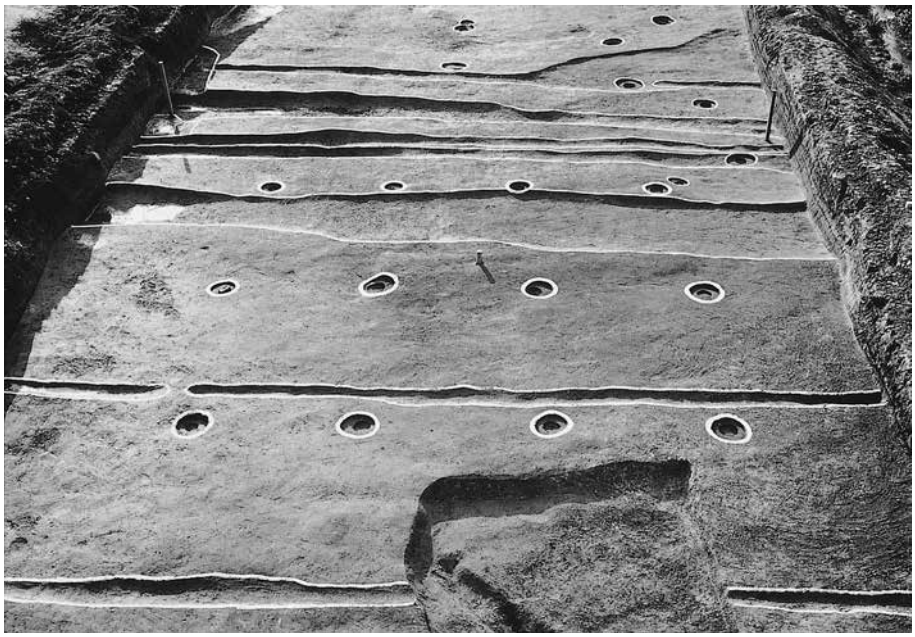
鳥飼中瀬遺跡１区土坑278遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡 2 区全景
（東から）

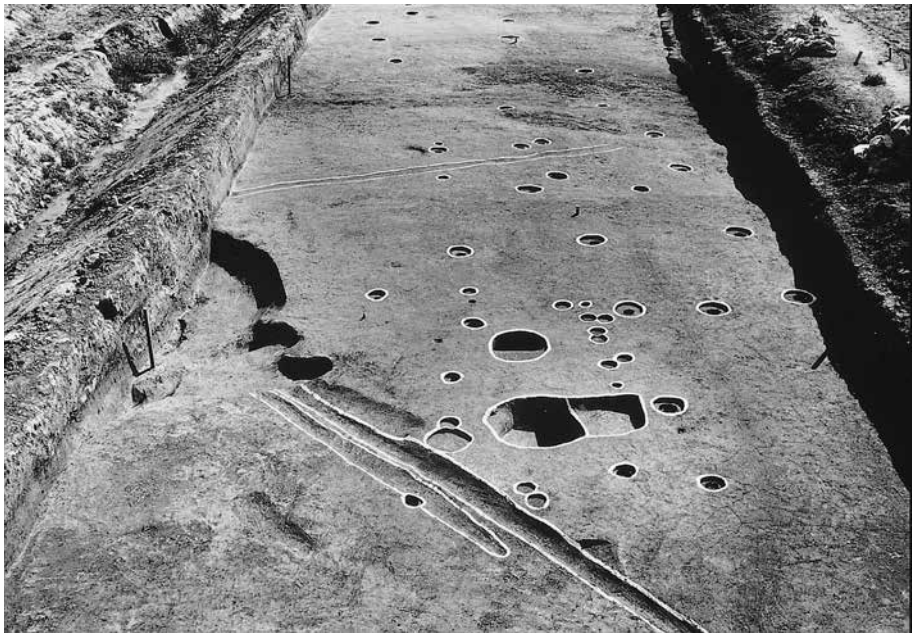
鳥飼中瀬遺跡 2 区全景（西から）



鳥飼中瀬遺跡 2 区
掘立柱建物跡 1

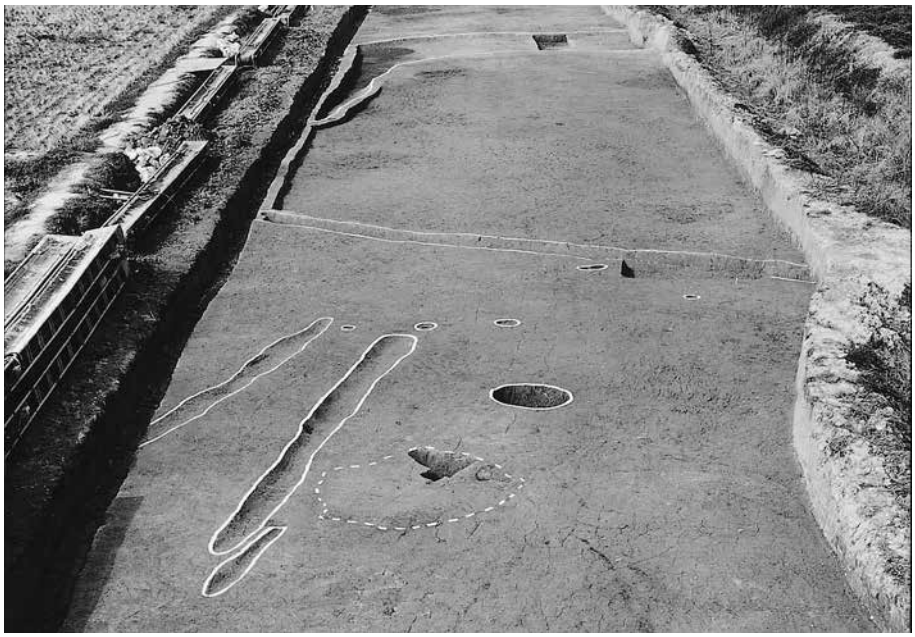


鳥飼中瀬遺跡 2 区
掘立柱建物跡 2



鳥飼中瀬遺跡 2 区
掘立柱建物跡 3

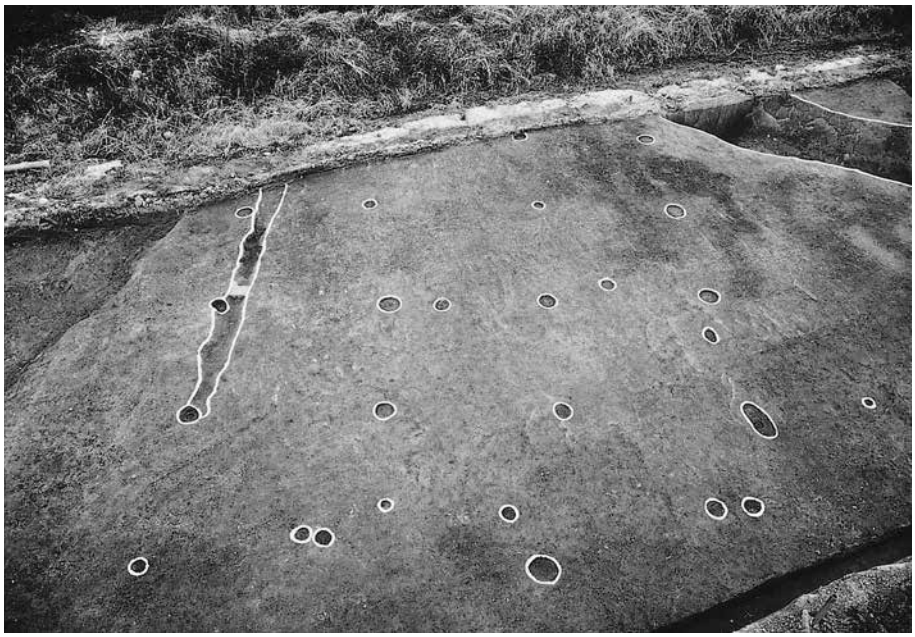
北山遺跡東半（西から）



北山遺跡中央（東から）

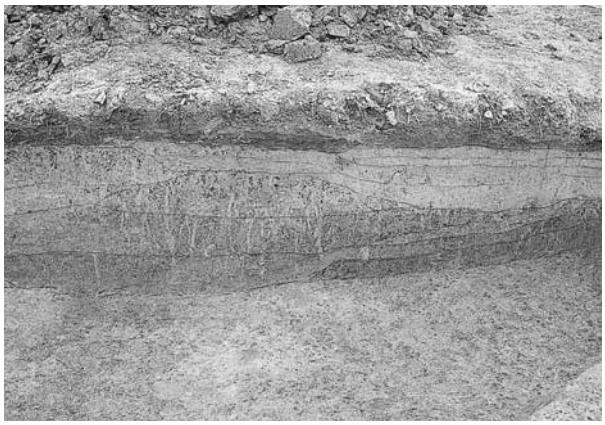
北山遺跡 2 区西半（東から）

北山遺跡掘立柱建物跡１
（西から）



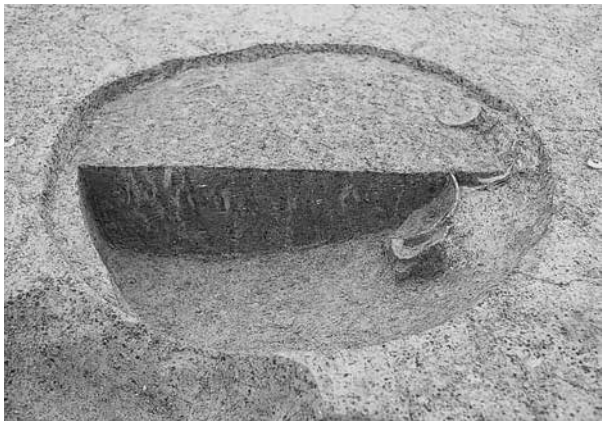
北山遺跡掘立柱建物跡２
（南から）

北山遺跡
掘立柱建物跡３・４
（東から）

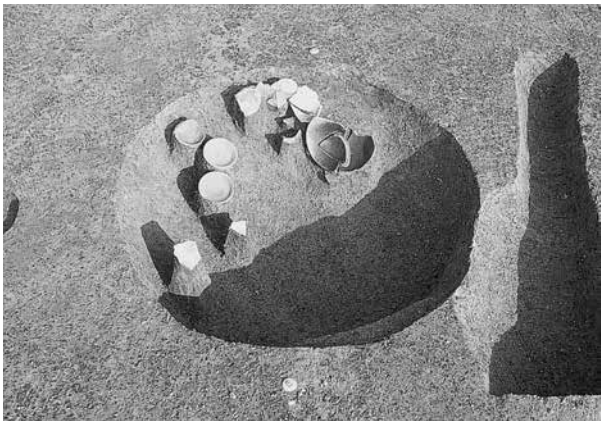


鳥飼中瀬遺跡１区溝１断面（調査区東壁・西から）

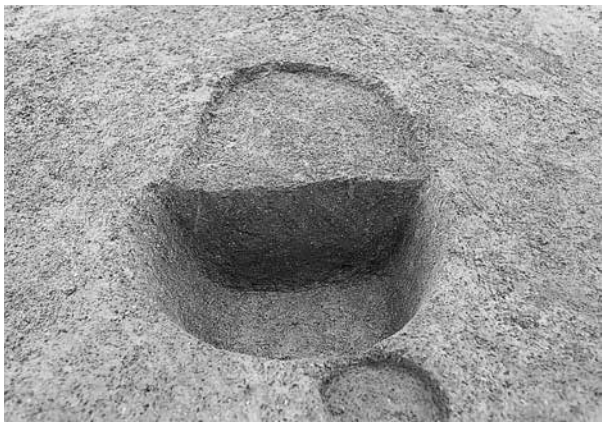
鳥飼中瀬遺跡１区土坑271断面



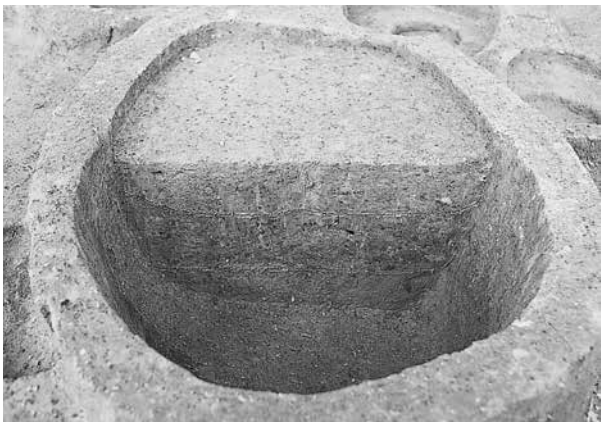
鳥飼中瀬遺跡１区土坑７断面



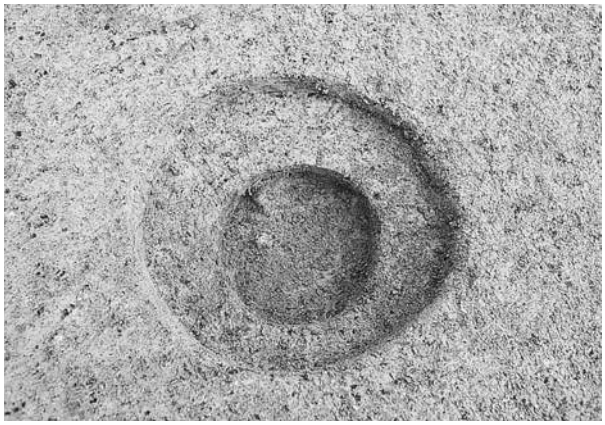
鳥飼中瀬遺跡１区土坑７遺物出土状況



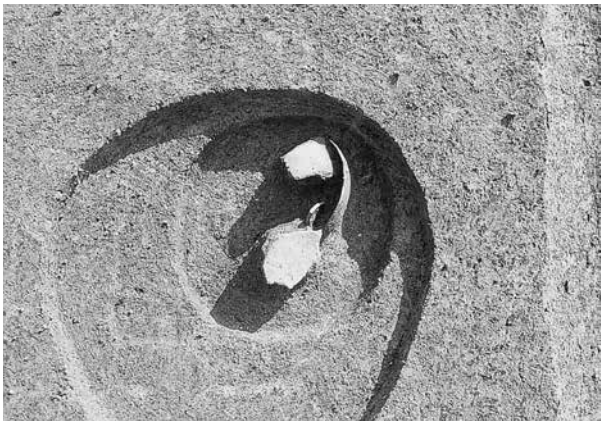
鳥飼中瀬遺跡１区土坑53断面



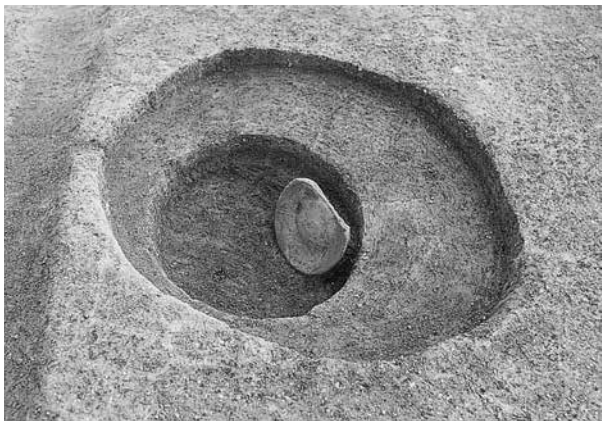
鳥飼中瀬遺跡１区土坑63断面



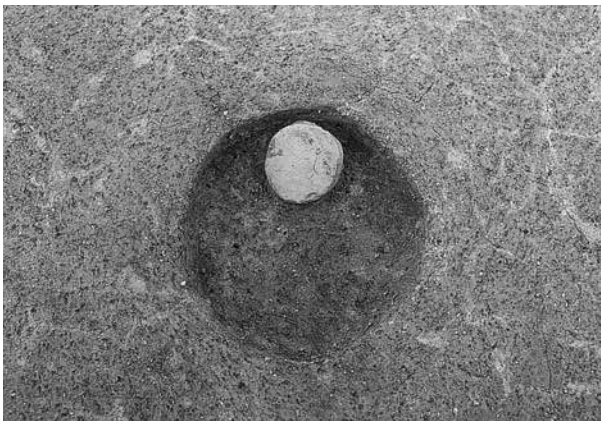
鳥飼中瀬遺跡１区柱穴50遺物出土状況



鳥飼中瀬遺跡１区柱穴54遺物出土状況

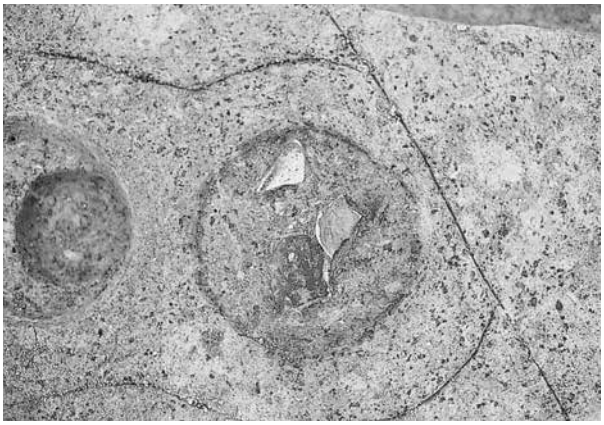


鳥飼中瀬遺跡１区柱穴123遺物出土状況

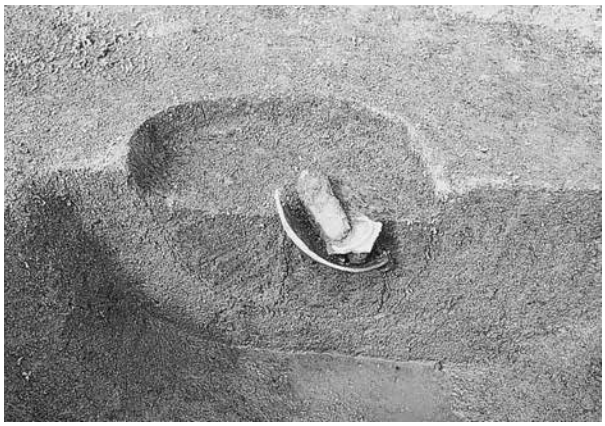


鳥飼中瀬遺跡１区柱穴124遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡１区柱穴125遺物出土状況



鳥飼中瀬遺跡１区柱穴



鳥飼中瀬遺跡１区柱穴381遺物出土状況

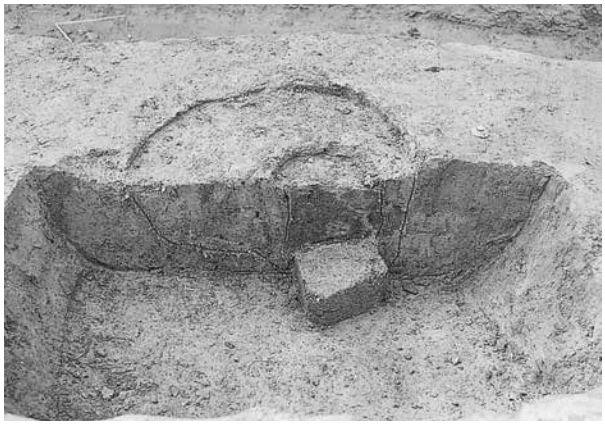
鳥飼中瀬遺跡１区柱穴382遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡１区柱穴429遺物出土状況

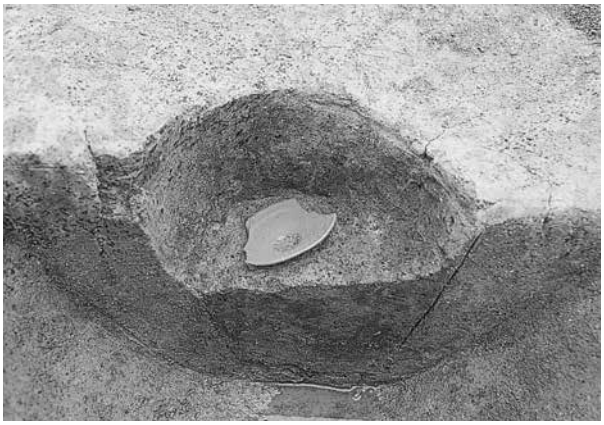
鳥飼中瀬遺跡１区柱穴241遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡１区柱穴445遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡１区柱穴54断面

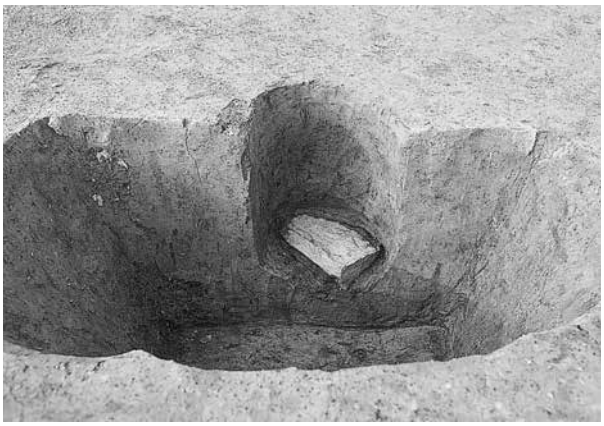


鳥飼中瀬遺跡１区柱穴368断面



鳥飼中瀬遺跡１区柱穴101遺物出土状況

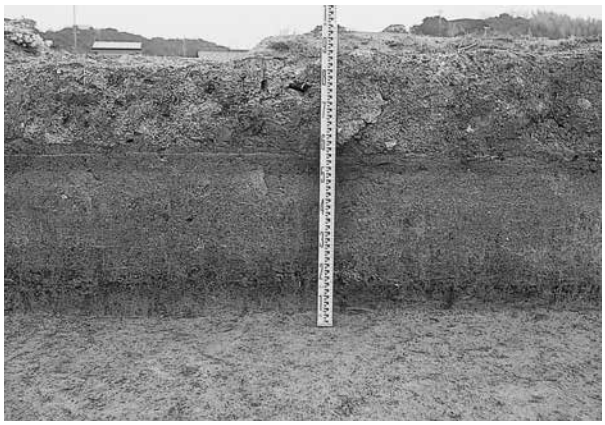
鳥飼中瀬遺跡１区柱穴368礎盤石



鳥飼中瀬遺跡１区柱穴358礎盤石

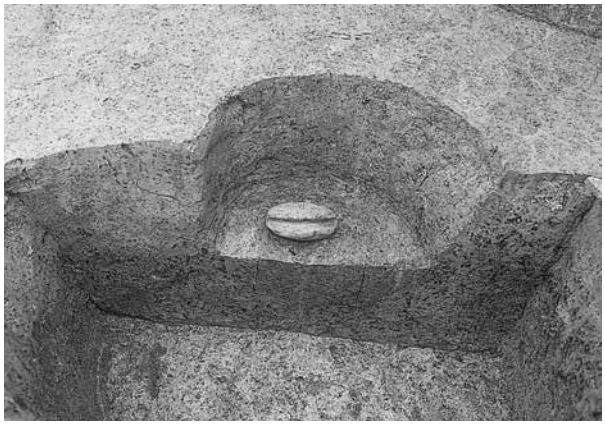
鳥飼中瀬遺跡１区柱穴390礎盤石

鳥飼中瀬遺跡１区柱穴365礎盤石

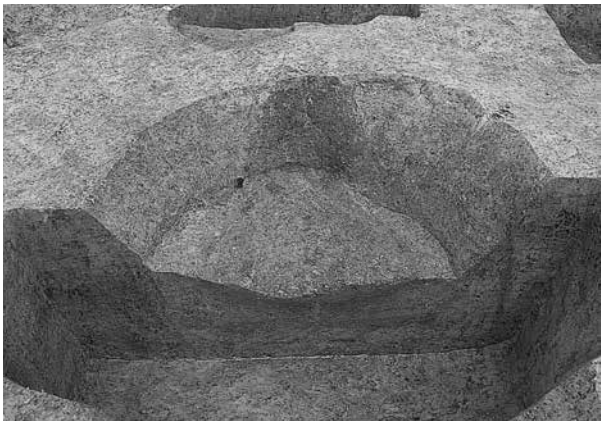


鳥飼中瀬遺跡 2 区調査区南壁断面

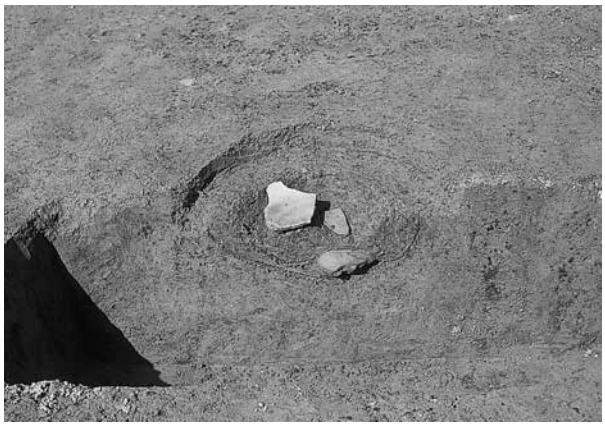
鳥飼中瀬遺跡 2 区土坑1023断面



鳥飼中瀬遺跡 2 区柱穴1075遺物出土状況

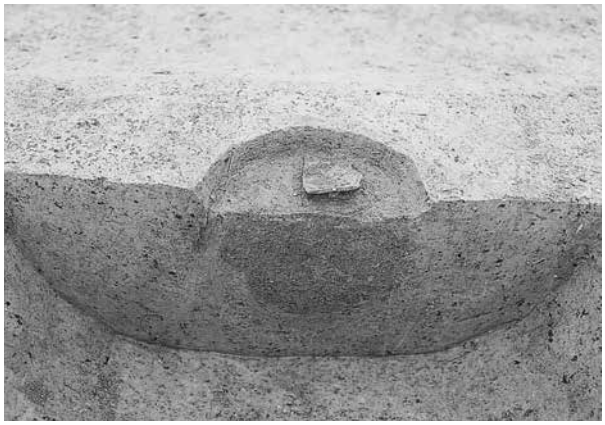


鳥飼中瀬遺跡 2 区土坑1025完掘状況



鳥飼中瀬遺跡 2 区柱穴1020遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡 2 区柱穴1022遺物出土状況



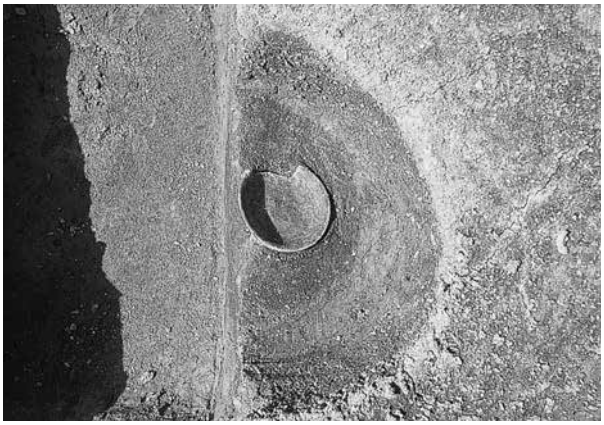
鳥飼中瀬遺跡 2 区柱穴1042遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡 2 区柱穴1047遺物出土状況

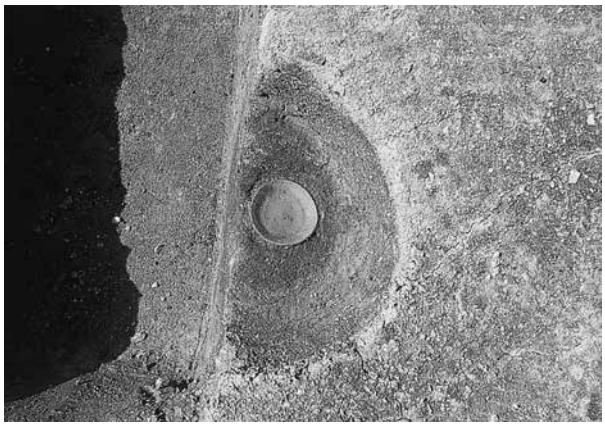
北山遺跡溝27断面

北山遺跡柱穴58断面

北山遺跡柱穴23遺物出土状況(1)

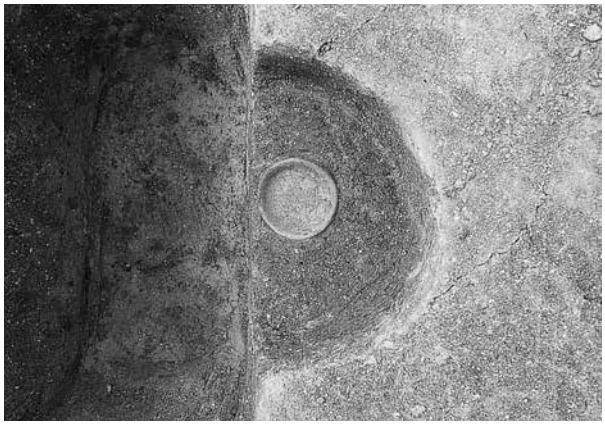


北山遺跡柱穴23遺物出土状況(2)

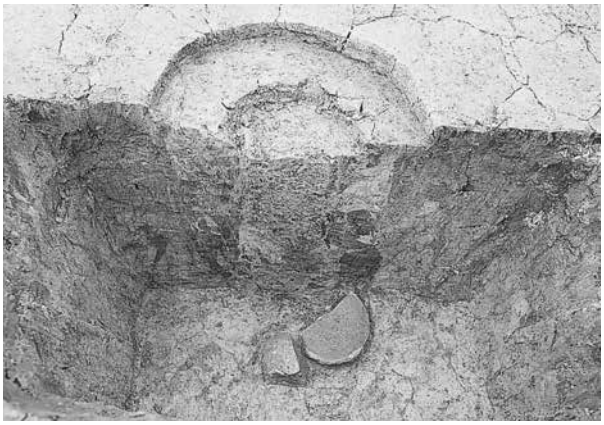


北山遺跡柱穴23遺物出土状況(3)

北山遺跡柱穴26遺物出土状況



北山遺跡柱穴35遺物出土状況



北山遺跡柱穴174遺物出土状況

鳥飼中瀬遺跡１区地質トレンチ１断面（南から）

鳥飼中瀬遺跡１区地質トレンチ２断面（南から）

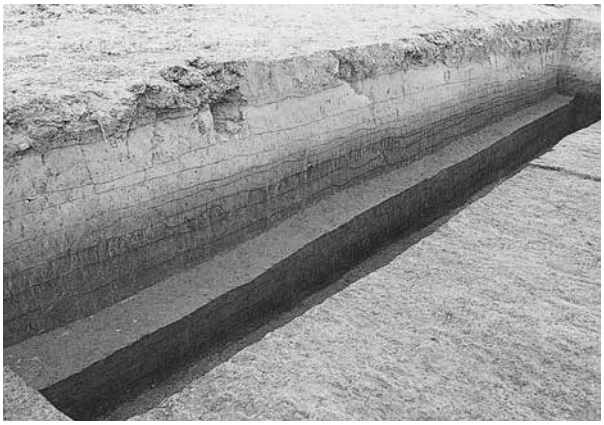
鳥飼中瀬遺跡１区地質トレンチ３断面（南から）

鳥飼中瀬遺跡２区地質トレンチ３断面（南から）

鳥飼中瀬遺跡２区地質トレンチ断面

北山遺跡地質トレンチ２断面（北東から）

北山遺跡地質トレンチ２断面（北西から）



北山遺跡旧河道断面（調査区南壁）

調査地遠景（南から）

調査前の状況

確認調査（機械掘削）

確認調査（人力掘削）

本発掘調査

遺構図化作業

地質トレンチ調査

鳥飼小学校見学

1

5

16

35

18

19

20

22

30

40

41

60

62

73

75

71

82

51

85

鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(1)

87

88

89

90

91

92

93

140

94

95

鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(2)

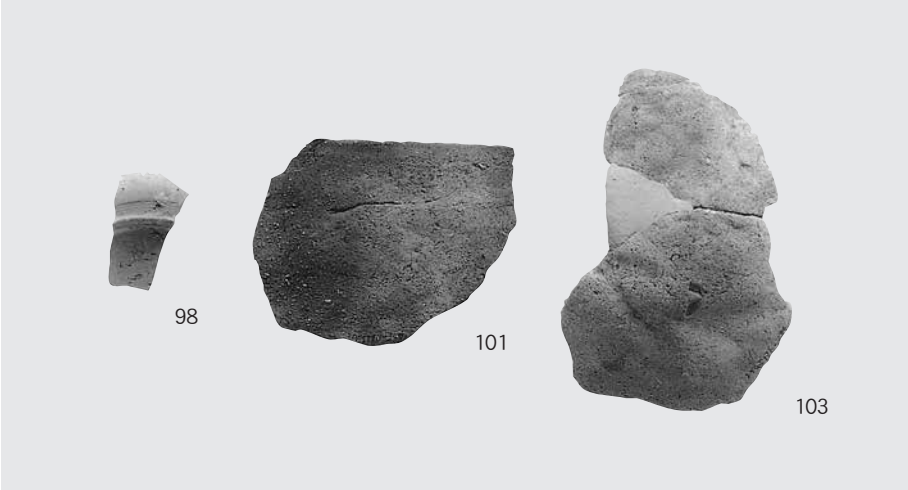
96

97

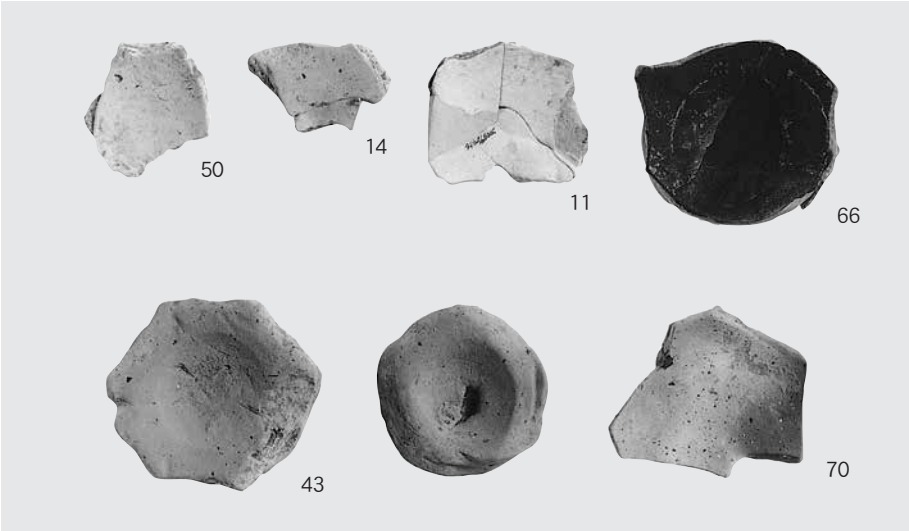
99

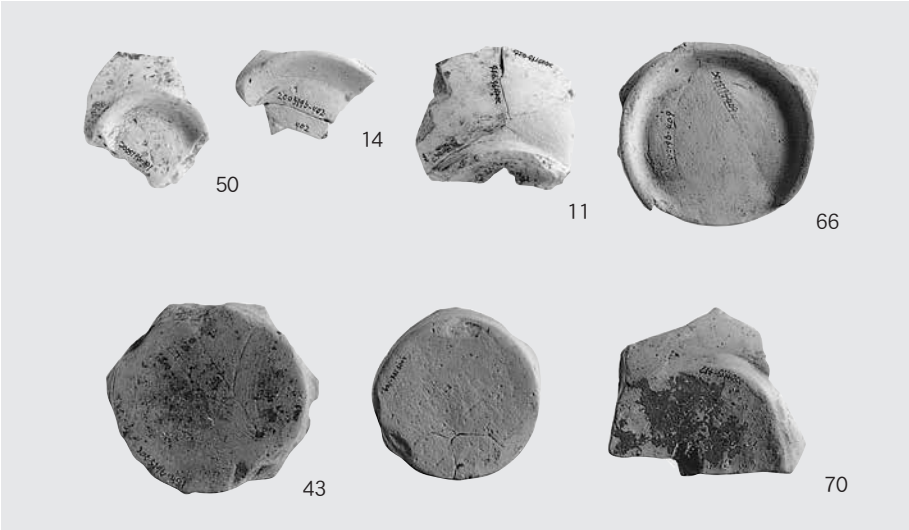
100

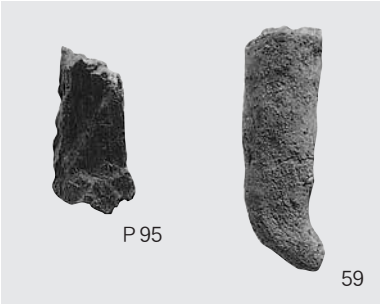
102


98
101
103

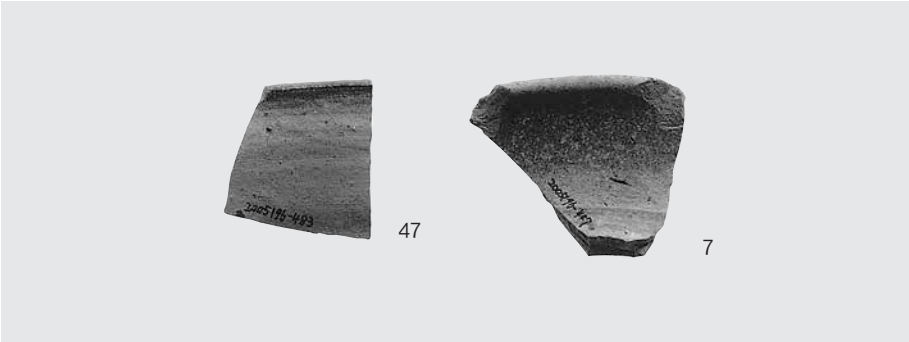
鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(3)

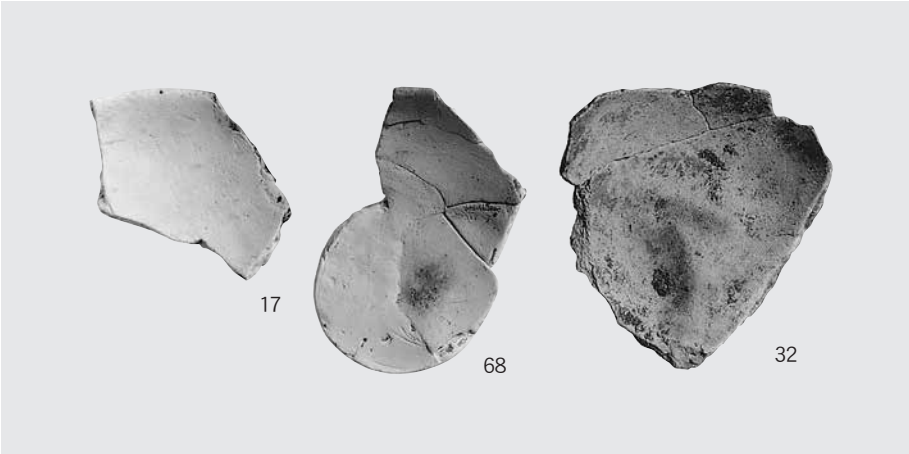


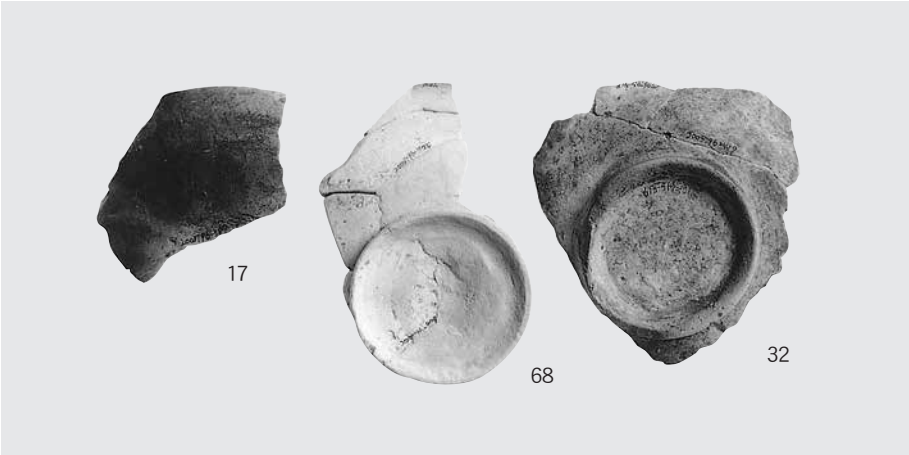


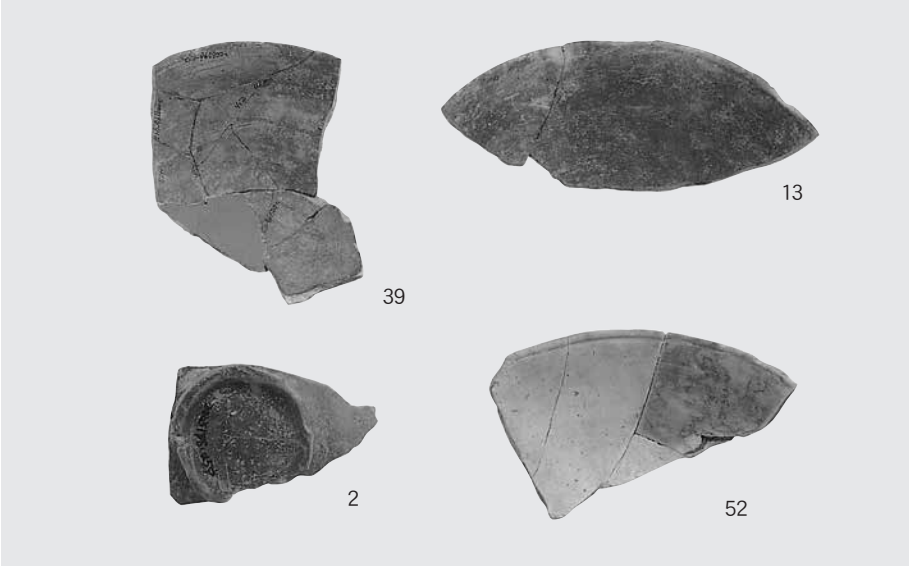


鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(4)

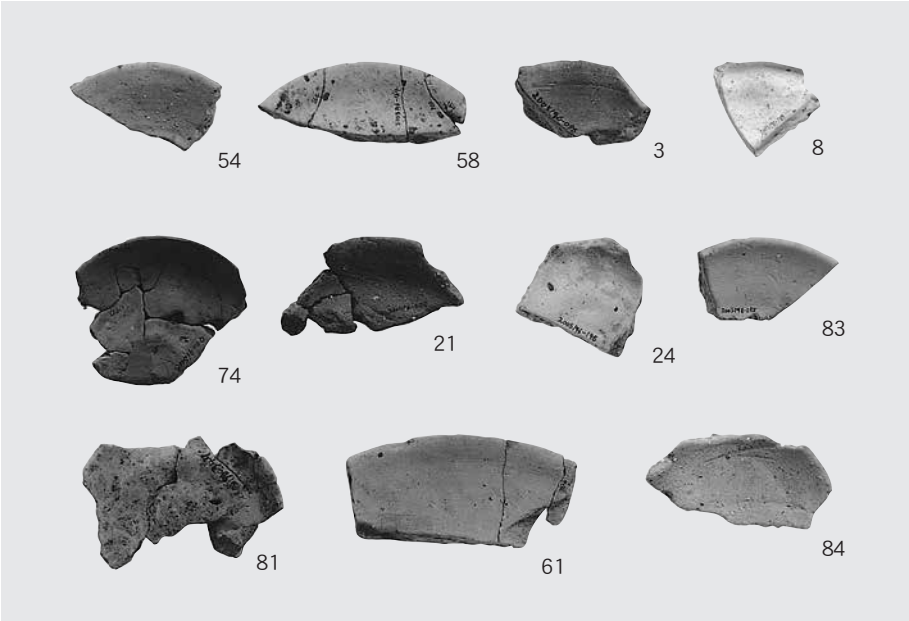


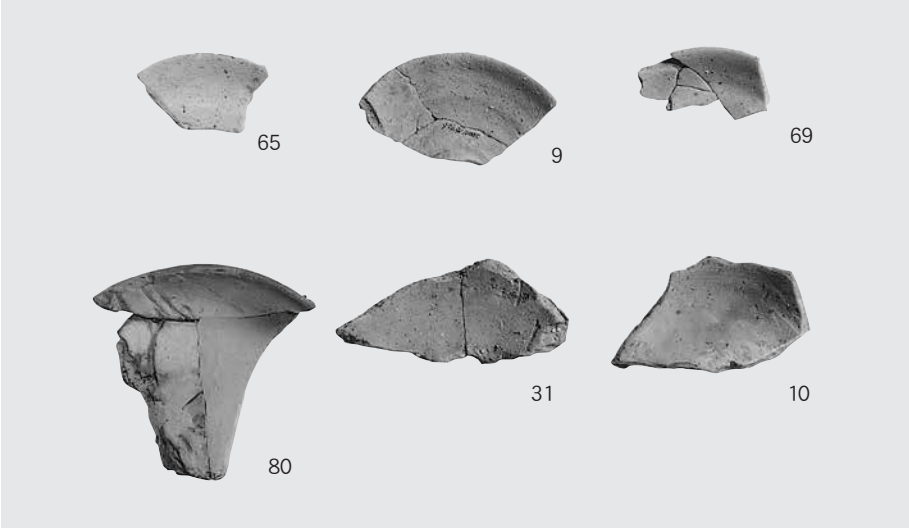




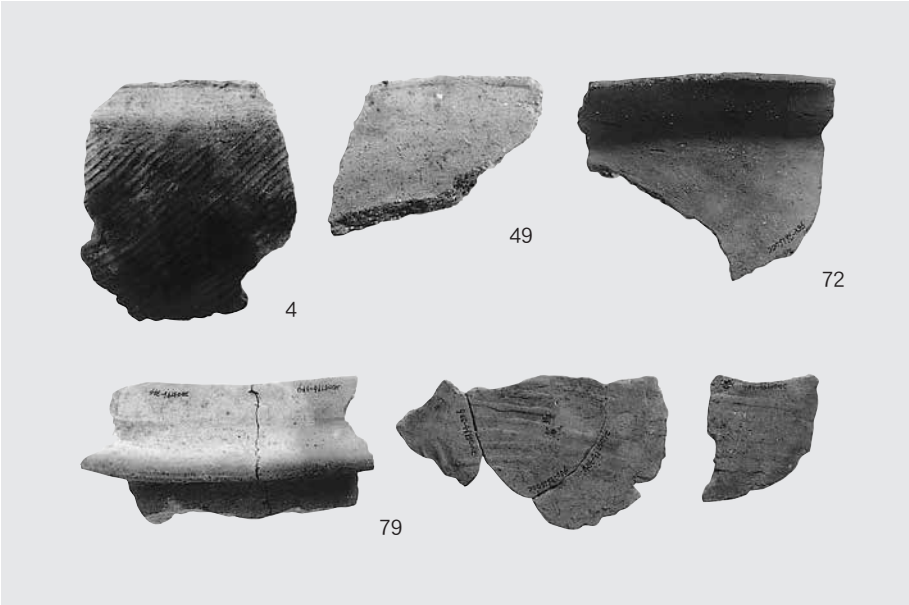


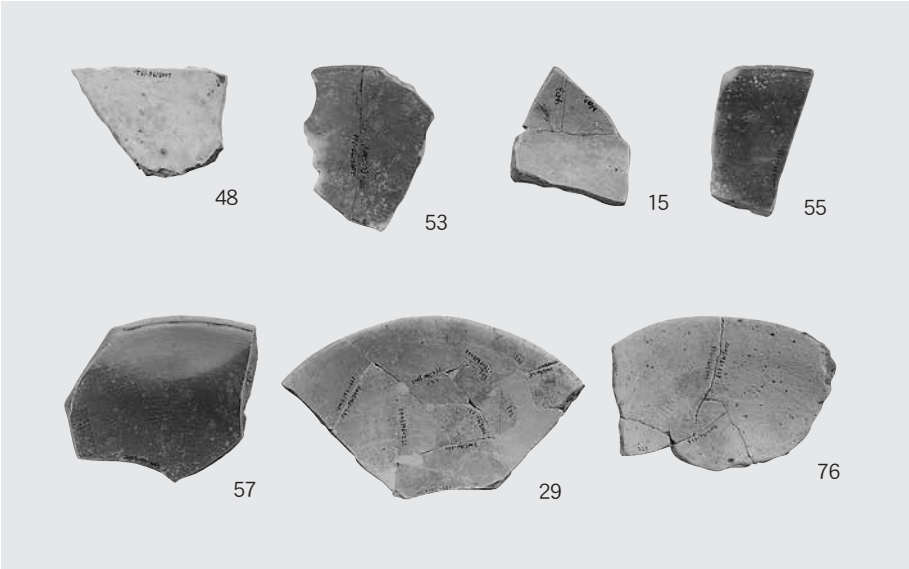
鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(5)

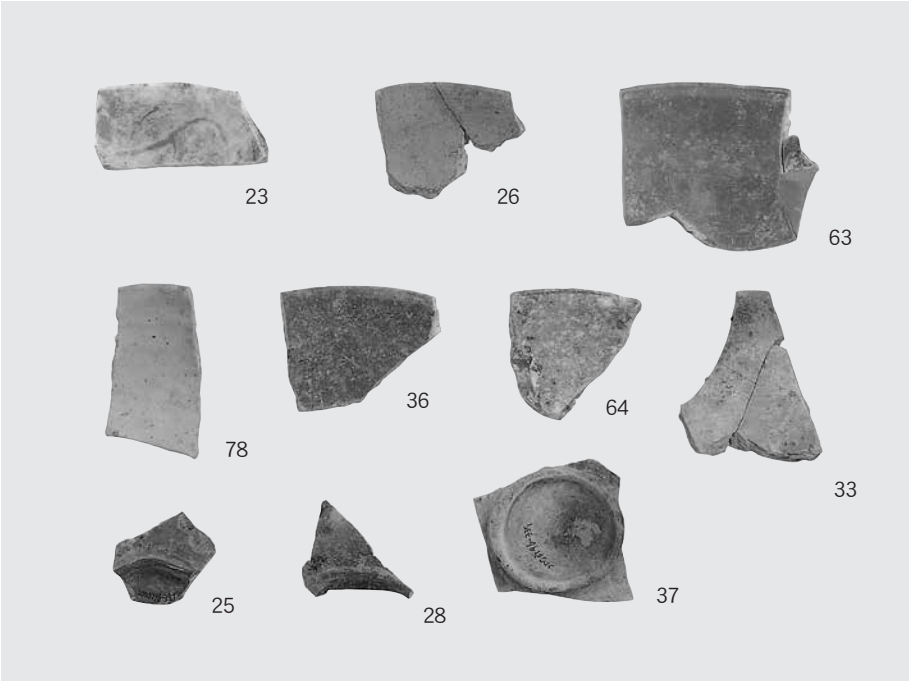




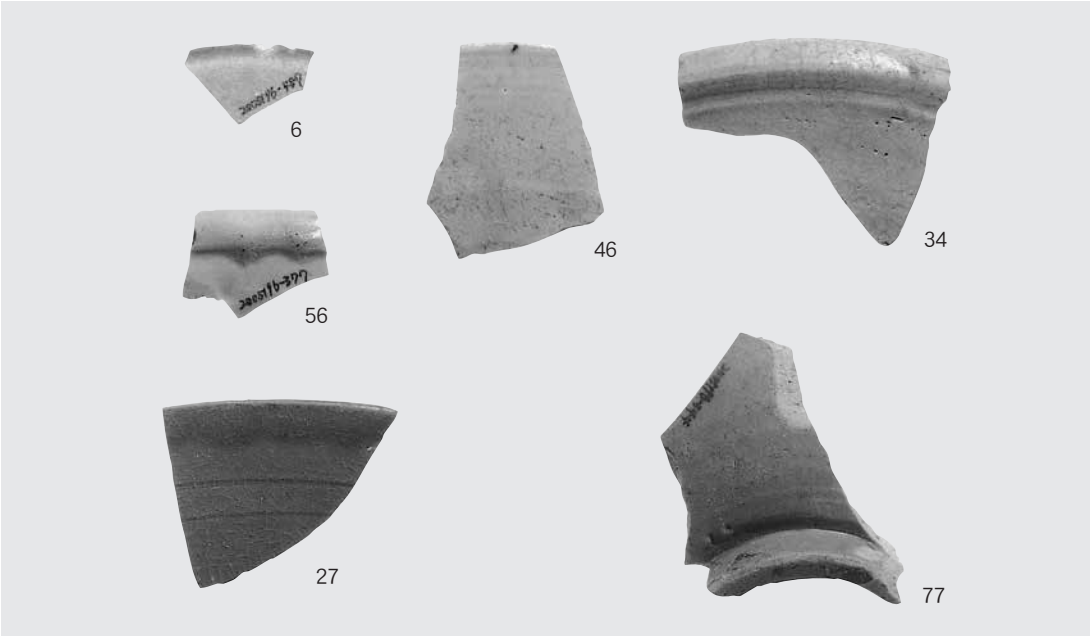
鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(6)

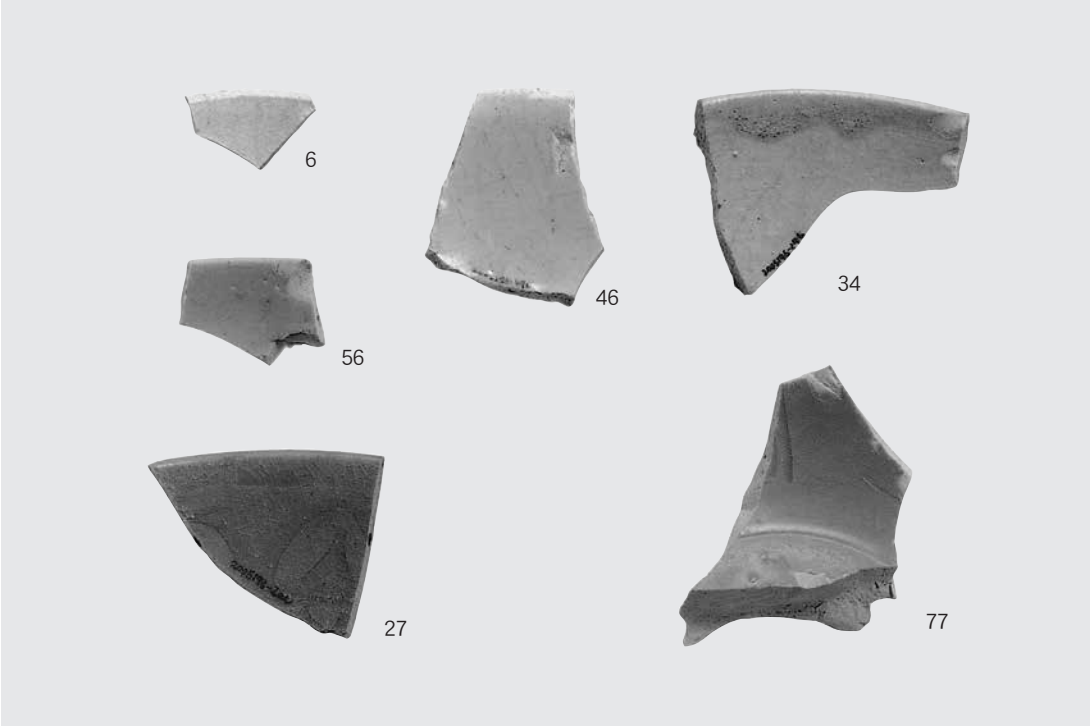




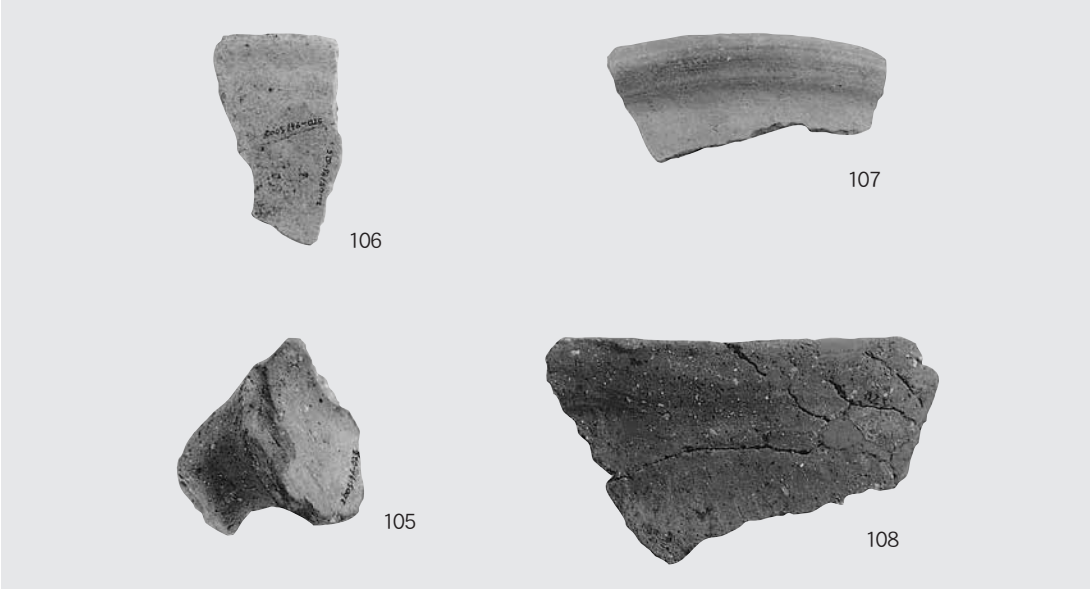


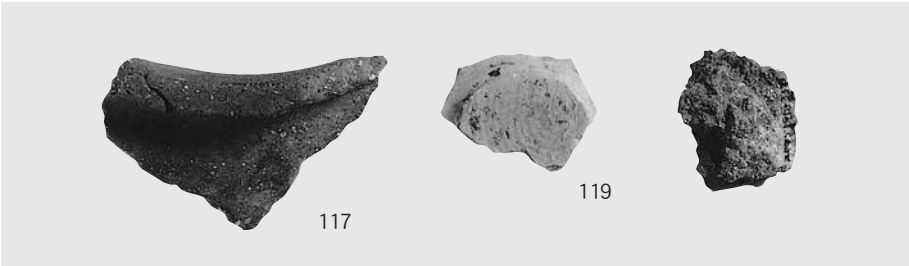
鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(7)



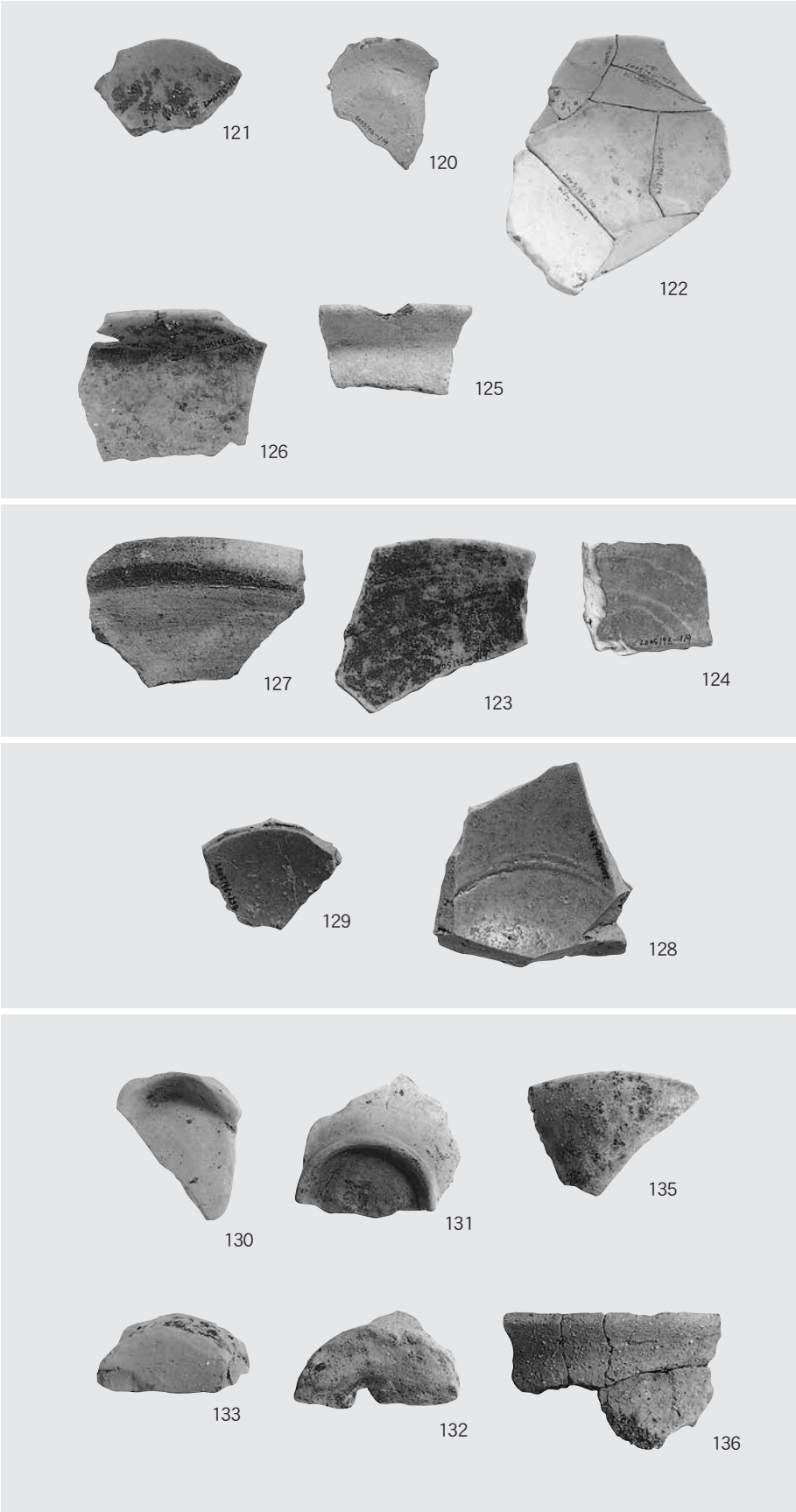


鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(8)



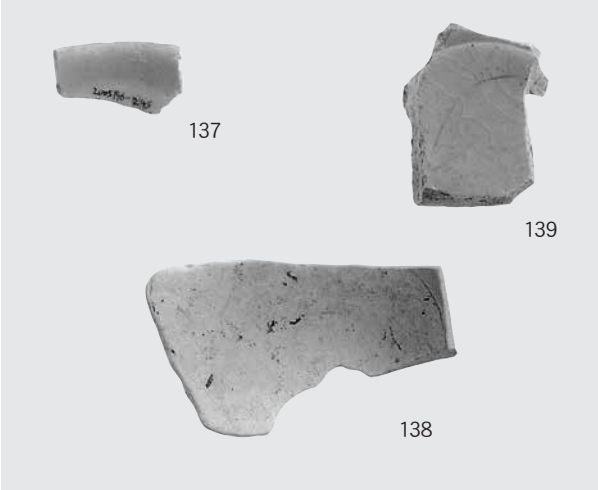


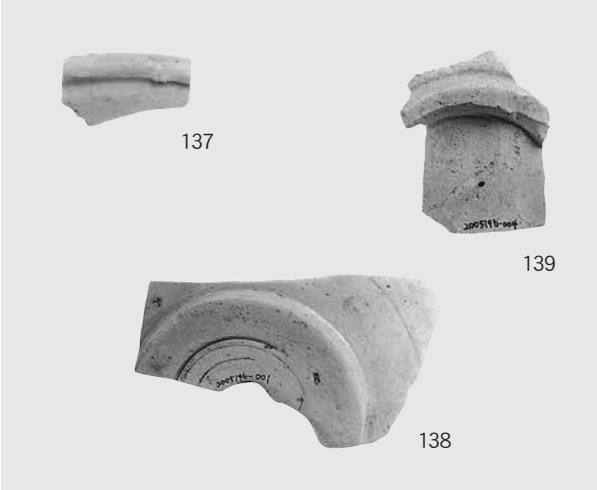
鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(9)

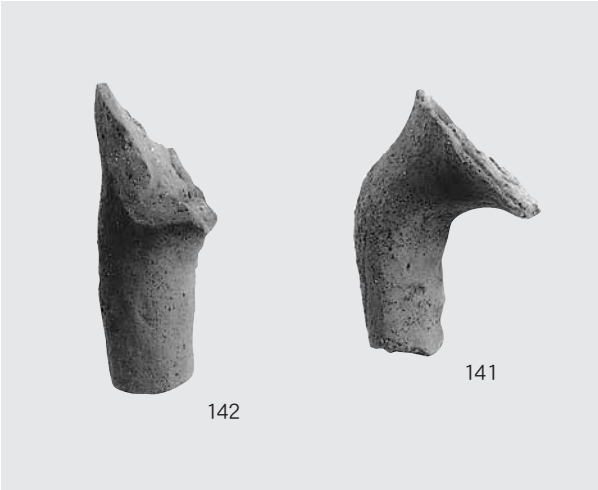


鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(10)

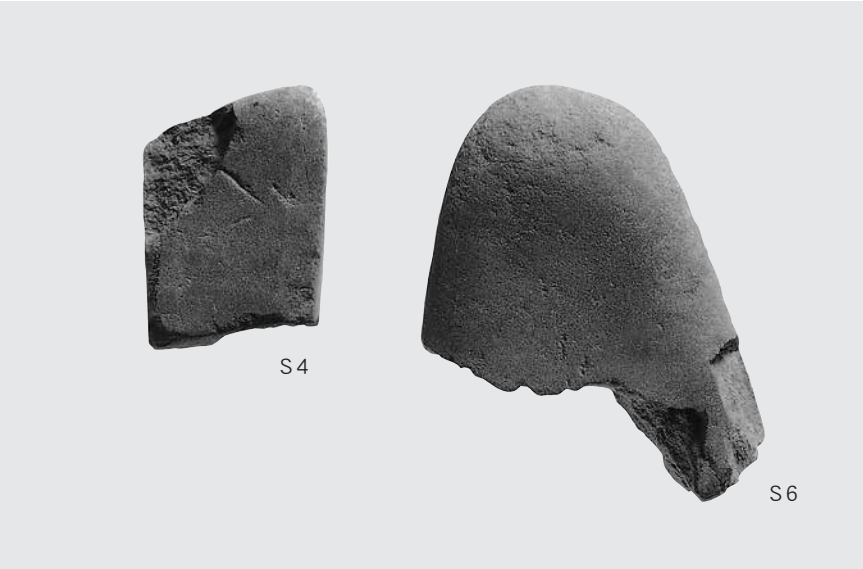
134


137
139
138


137
139
138


142
141

143



鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(12)

F1

F3

F4

F5

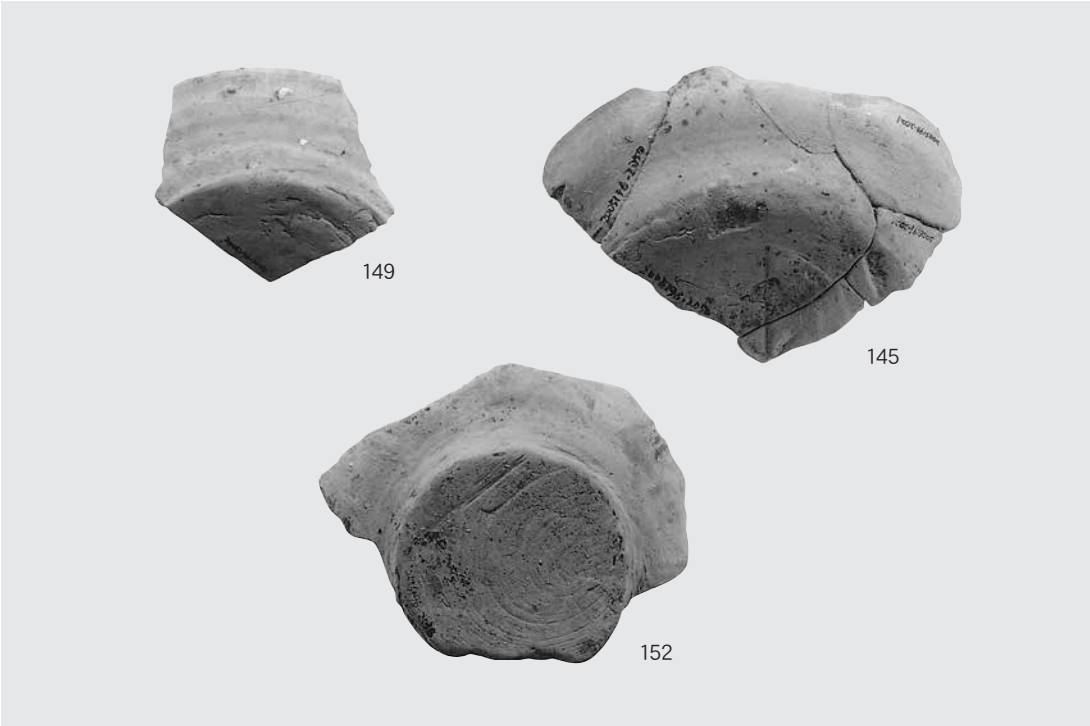
F6

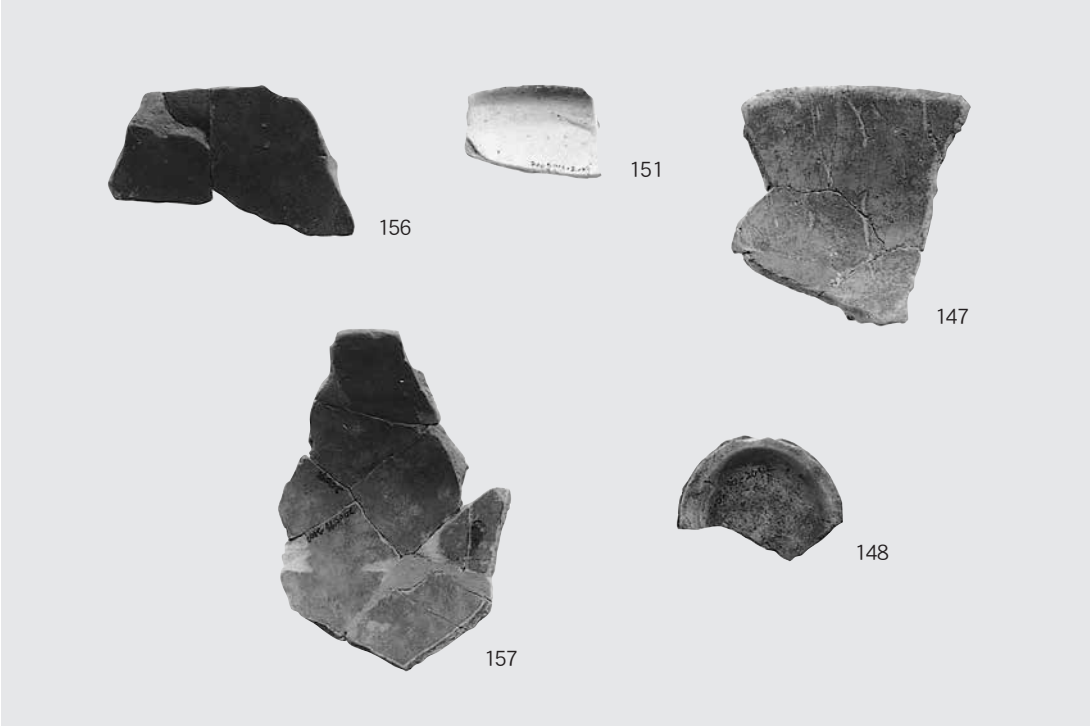
F7

F8

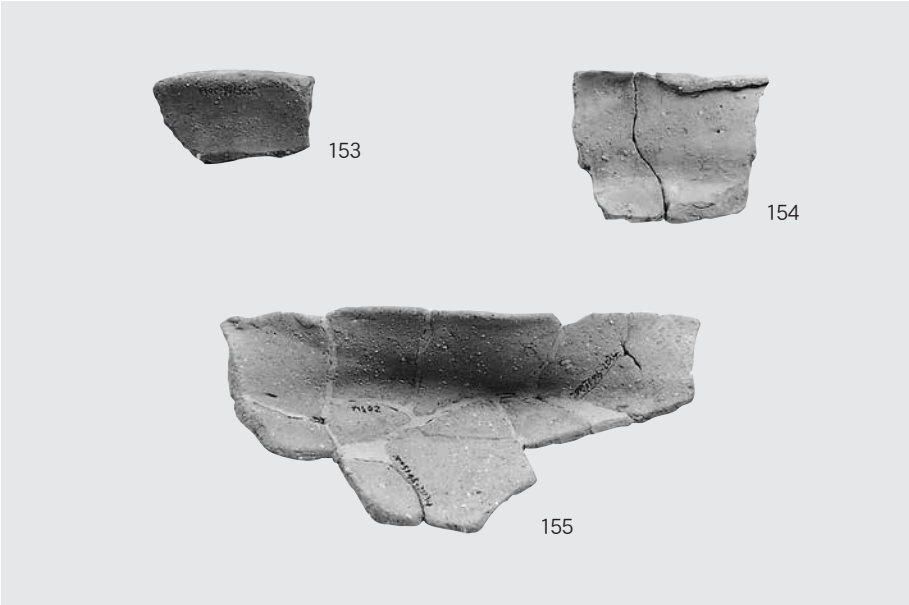
F2

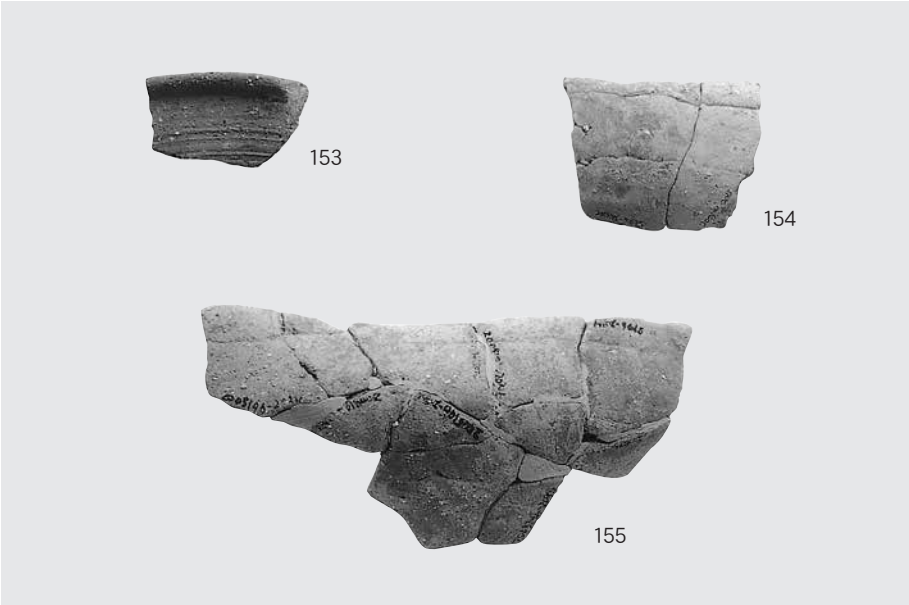
鳥飼中瀬遺跡１区出土遺物(13)



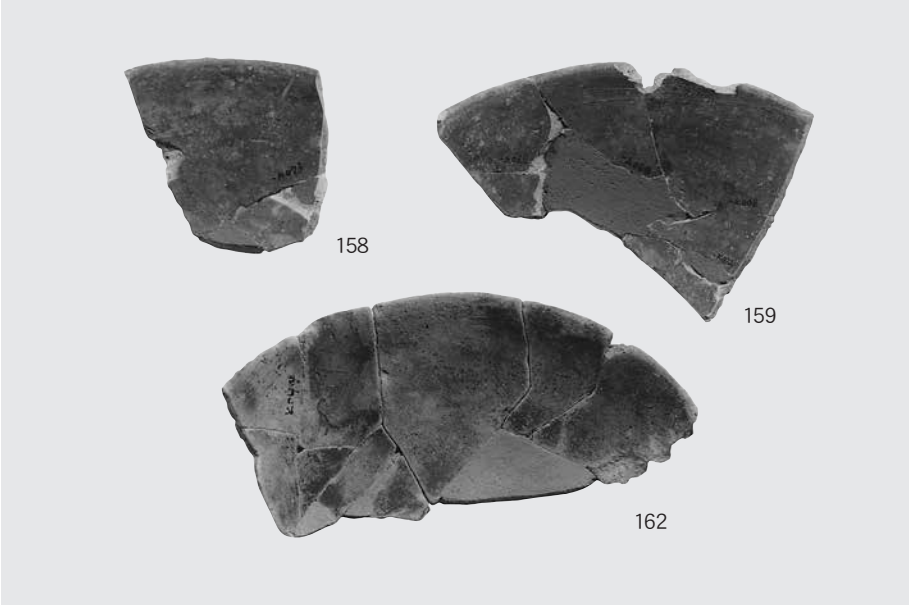


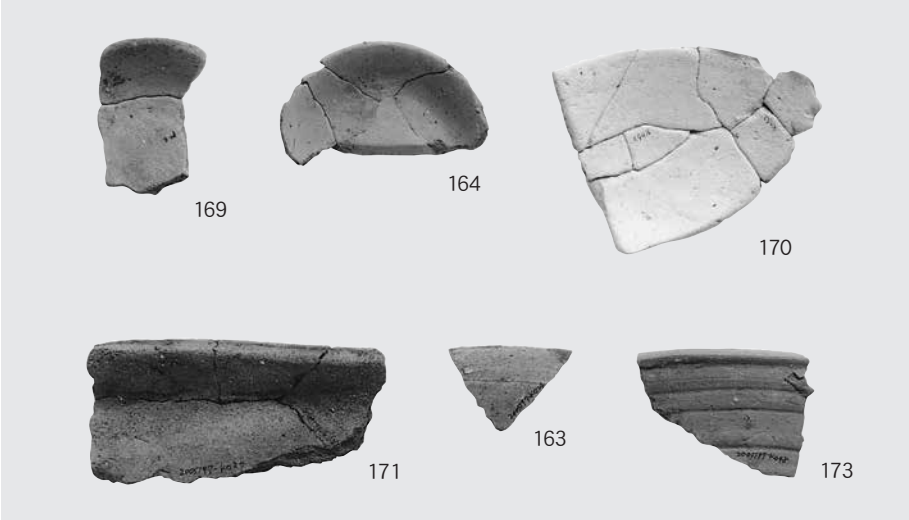
鳥飼中瀬遺跡 2 区出土遺物(1)





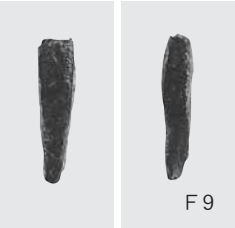
鳥飼中瀬遺跡 2 区出土遺物(2)

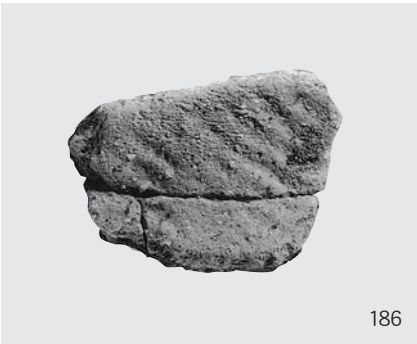




北山遺跡出土遺物(1)

北山遺跡出土遺物(2)





北山遺跡出土遺物(3)

報 告 書 抄 録（Outline of the Report）

ふ り が な	とりかいなかせいせき・きたやまいせき	About the Report
書　　名	鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡	Excavation report of the Torikai-nakase site and Kitayama Site
副 書 名	県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う発掘調査	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告	Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 401
シリーズ番号	第401冊	
編 著 者 名	久保弘幸	The Author/Editor : Hiroyuki Kubo
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館	Hyogo prefectural museum of Archaeology Address : 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan
所　在　地	兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号	
発行年月日	平成23(2011)年３月24日	Publication : March 24, 2011

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経
		市町村	遺跡番号	northern latitude	east longitude
鳥飼中瀬遺跡（とりかいなかせいせき） 北山遺跡（きたやまいせき）	洲本市（すもとし） 五色町鳥飼（ごしきちょうとりかい）	28205	920073 920131	34° 22′ 36″	134° 45′ 39″

遺跡調査番号	調査の種別	調査期間	調査原因
2005196	本発掘調査（鳥飼中瀬遺跡）	2006年１月23日 ～ 2006年３月24日	県道鳥飼浦洲本線道路改良事業
2005197	本発掘調査（北山遺跡）		

遺跡の種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
集落遺跡	平安時代 鎌倉時代	掘立柱建物跡・柱穴 溝・土坑	須恵器・土師器・瓦器 磁器（青磁・白磁）

要　約	鳥飼中瀬遺跡と北山遺跡は、鎌倉時代～室町時代の遺跡で、今回の調査では12世紀末～14世紀初頭にわたる、遺構・遺物が検出された。遺跡が所在する一帯は、石清水八幡宮の荘園である「鳥飼荘」として文献に見え、年代も合致することから、両遺跡は鳥飼荘の一部に相当すると思われる。

Address of the site	Goshiki, Sumoto, Hyogo pref. Japan	Date of the Excavation	23, Jan. ～ 24, Mar. 2006
Category of the site	Settlement	Archaeological Features	
Period o the site	Heian period, Kamakura period	Posthole-type buildings, Postholes, Pits, Gutters,	
Main Rerics	Sue wares, Haji wares, Ga wares, Porcelains		
Summery	The Torikai-nakase site and the Kitayama site belong between kamakura and Muromachi period. On this excavation, we found relicsand archaeological features that belong during 12th ~ 14th century. These archaeological sites were parts of the manor that was managed by Iwashimizu Hachimangu Shrine in this area at that time.		

兵庫県文化財調査報告 第401冊

洲本市五色町

鳥飼中瀬遺跡・北山遺跡

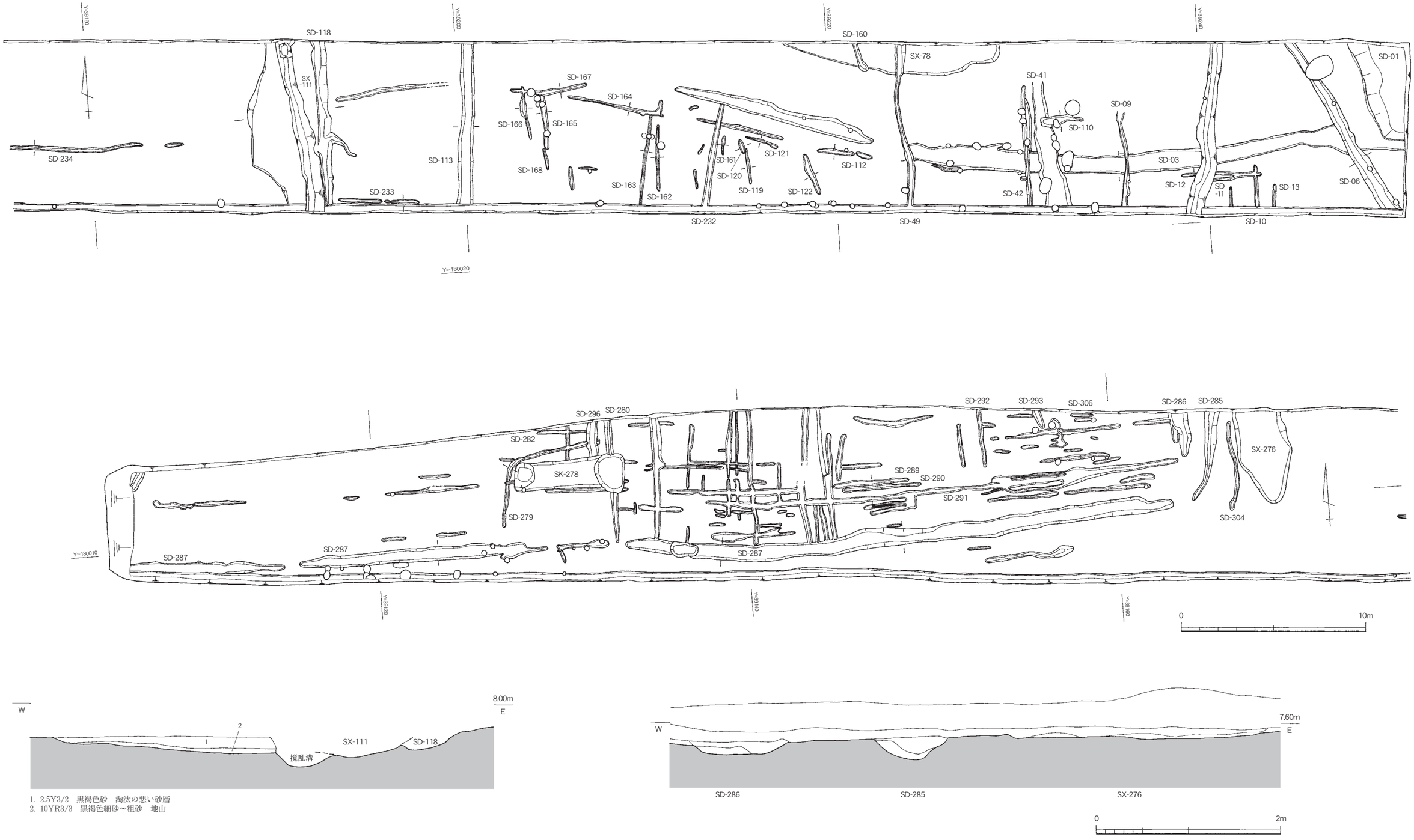
県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う発掘調査

2011(平成23)年３月24日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　加古郡播磨町大中１丁目１番１号

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　株式会社ソーエイ
〒673-0898　明石市樽屋町６－６



1. 2.5Y3/2　黒褐色砂　淘汰の悪い砂層
2. 10YR3/3　黒褐色細砂～粗砂　地山

第36図　1区溝平面